日田市埋蔵文化財調査報告書第 116 集

朝日の遺跡Ⅲ
花ノ木遺跡１次の調査
日田市埋蔵文化財調査報告書第116集
２０１５年
日田市教育委員会

朝日の遺跡Ⅲ

―県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（３）―

花ノ木遺跡１次の調査

附編　「朝日の遺跡」の自然科学分析

２０１５年

日田市教育委員会

花ノ木遺跡１次調査の空中写真（西から）枠内が調査地

花ノ木遺跡 1 次調査の空中写真（西から）

花ノ木遺跡 1 次調査出土土器集合写真

4 号竪穴建物出土土器集合写真

序　　文

この報告書は、日田市教育委員会が平成 23 年度に県営経営体育成基盤整備事業朝日地区の工事実施に伴って発掘調査を行った、花ノ木遺跡 1 次調査の内容をまとめたものです。

花ノ木遺跡では、周辺を流れる二串川左岸に位置する沖積地に弥生時代末から古墳時代前期頃の竪穴建物や古代の溝状遺構などが確認されるなど、集落跡や水田に関する遺構が周辺に広がっていたことが明らかになりました。

これらの発見から、調査地周辺の谷部では、弥生時代末から古墳時代にかけて水田を営む集落がつくられ、それが後の古代まで断続的におこなわれるという土地利用の変遷を追う事が出来ました。これは、この地域の歴史を知る上で貴重な成果となりました。

こうした発掘調査の内容をまとめた本書が、今後、文化財の保護や活用、朝日地区の歴史解明、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、ご協力を賜りました朝日地区圃場整備組合や地元の皆様方、全ての関係者の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成２７年３月

日田市教育委員会

教育長　　三笘　眞治郎

例　言

1．本書は、日田市教育委員会が平成 23 年度に実施した花ノ木遺跡 1 次調査報告書である。

2．調査は、平成 23 年度に県営経営体育成基盤事業朝日地区朝日工区の工事実施に伴い、大分県西部振興局の委託業務として日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり、実施した。

3．調査に当たっては、朝日地区圃場整備組合、市農業振興課にご協力を賜った。

4．発掘調査は、予備調査を若杉が担当し、本調査は上原が担当した。

5．花ノ木遺跡 1 次調査の発掘調査は、地形測量、メッシュ杭設置、平面遺構実測、個別遺構実測、土層実測、空中写真撮影を調査補助業務として株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託して実施した。

6．遺構の写真撮影は上原が行った。

7．遺物実測・製図・写真撮影・遺構製図は、有限会社九州文化財リサーチ及び雅企画有限会社に委託し、その成果品を使用した。また、遺物図の割付・観察表・写真図版割付は雅企画株式会社に委託し、その成果品を使用した。

8．第 4 章は、株式会社パレオ・ラボに委託した成果品を編集し使用した。

9．附編の平田遺跡・本村遺跡 5 次の自然科学分析は、平成 24・25 年に報告した「朝日の遺跡Ⅰ・Ⅱ」の追加報告である。

１０．附編は、株式会社パレオ・ラボ及び株式会社古環境研究所に委託した成果品を編集し使用した。

１１．挿図中の方位・文中の方位角は、真北を示す。

１２．出土遺物、図面及び写真類は
日田市埋蔵文化財センターに保管している。

１３．本書の執筆は第 1 章を若杉が行い、
第 4 章・附編以外の執筆及び全体の
編集は上原が行った。

日田市の位置

本　文　目　次

第１章　調査の経緯

（１）調査に至る経緯 …… 1

（２）調査の組織 …… 2

（３）発掘調査の経過 …… 3

（４）整理作業の経過 …… 4

第２章　遺跡の位置と環境…… 5

第３章　調査の内容

（１）調査の概要 …… 7

（２）遺構と遺物

１．竪穴建物……7

２．掘立柱建物…… 28

３．溝状遺構…… 32

４．土坑…… 66

５．ピット…… 71

6．その他の遺物…… 78

第４章　自然科学分析

（１）出土木材及び炭化材の樹種同定 …… 81

（２）出土木材の樹種同定 …… 91

（３）大型植物遺体同定 …… 97

（４）出土種実年代測定 …… 101

第５章　総括…… 104

附編　「朝日の遺跡」の自然科学分析

（１）平田遺跡出土木材の樹種同定 …… 161

（２）本村遺跡５次調査出土木材の樹種同定及び年代測定 …… 164

挿　図　目　次

第１図　工事実施区域と調査区位置図（1/10,000）…… 3

第２図　花ノ木遺跡調査地周辺遺跡分布図（1/25,000）…… 6

第３図　１号竪穴建物実測図（1/60）…… 8

第４図　１号竪穴建物実測図出土遺物実測図（1/4）…… 8

第５図　２号竪穴建物実測図（1/60）…… 9

第６図　２号竪穴建物出土遺物実測図（1/4）…… 10

第７図　３号竪穴建物実測図（1/60）…… 11

第８図　３号竪穴建物出土遺物実測図１（1/4）…… 12

第９図　３号竪穴建物出土遺物実測図２（1/2,1/4）…… 13

第１０図　４号竪穴建物実測図（1/60）…… 14

第１１図　４号竪穴建物出土遺物実測図１（1/4）…… 15

第１２図　４号竪穴建物出土遺物実測図２（1/4）…… 16

第１３図　４号竪穴建物出土遺物実測図３（1/4）…… 17

第１４図　５号竪穴建物実測図（1/60）…… 18

第１５図　５号竪穴建物出土遺物実測図（1/4）…… 18

第１６図　６号竪穴建物実測図（1/60）…… 19

第１７図　６号竪穴建物出土遺物実測図（1/4）…… 20
第１８図　７号竪穴建物実測図（1/60）…… 21
第１９図　７号竪穴建物跡出土遺物実測図（1/2・1/4）…… 22
第２０図　８号竪穴建物実測図（1/60）…… 23
第２１図　８号竪穴建物出土遺物実測図（1/4）…… 23
第２２図　９号竪穴建物実測図（1/60）…… 24
第２３図　９号竪穴建物出土遺物実測図（1/4）…… 24
第２４図　11 号竪穴建物実測図（1/60）…… 25
第２５図　10 号竪穴建物実測図（1/60）、
カマド個別実測図（1/30）…… 25
第２６図　11 号竪穴建物出土遺物実測図（1/4）…… 25
第２７図　１号掘立柱建物跡実測図（1/60）…… 26
第２８図　１号掘立柱建物出土遺物実測図（1/2）…… 26
第２９図　２号掘立柱建物実測図（1/60）…… 27
第３０図　３号掘立柱建物実測図（1/60）…… 27
第３１図　４号掘立柱建物実測図（1/60）…… 28
第３２図　４号掘立柱建物出土遺物実測図（1/4）…… 28
第３３図　５号掘立柱建物実測図（1/60）…… 29
第３４図　６号掘立柱建物実測図（1/60）…… 29
第３５図　７号掘立柱建物実測図（1/60）…… 30
第３６図　８号掘立柱建物実測図（1/60）…… 31
第３７図　９号掘立柱建物実測図（1/60）…… 32
第３８図　１号溝状遺構・土層実測図１（1/100・1/40）…… 33
第３９図　１号溝状遺構・土層実測図２（1/100・1/40・1/80）34
第４０図　１号溝状遺構出土遺物実測図１（1/4・1/2）…… 35
第４１図　１号溝状遺構出土遺物実測図２（1/4）…… 36
第４２図　１号溝状遺構出土遺物実測図３（1/4）…… 37
第４３図　１号溝状遺構出土遺物実測図４（1/4）…… 38
第４４図　２号溝状遺構実測図・土層断面図（1/100、1/40）… 41
第４５図　２号溝状遺構出土遺物実測図１（1/4）…… 42
第４６図　２号溝状遺構出土遺物実測図２（1/4）…… 43
第４７図　２号溝状遺構出土遺物実測図３（1/4）…… 44
第４８図　２号溝状遺構出土遺物実測図４（1/4）…… 45
第４９図　２号溝状遺構遺物実測図５（1/4）…… 46
第５０図　３号溝状遺構実測図・遺物出土状況・土層断面図
（1/100・1/20・1/40）…… 48
第５１図　３号溝状遺構遺物実測図１（1/4）…… 49
第５２図　３号溝状遺構出土遺物実測図２（1/4）…… 50
第５３図　４号溝状遺構実測図・土層断面図（1/100・1/40）… 51
第５４図　４号溝状遺構出土遺物実測図（1/4）…… 52
第５５図　５号溝状遺構実測図・土層断面図（1/100・1/40）… 52
第５６図　５号溝状遺構出土遺物実測図（1/4）…… 52
第５７図　６号溝状遺構実測図・断面図（1/100・1/40）…… 53
第５８図　６号溝状遺構出土遺物実測図（1/4）…… 54
第５９図　７号溝状遺構実測図・遺物出土状況実測図
・土層断面図（1/100・1/20・1/40）…… 56
第６０図　７号溝状遺構出土遺物実測図１（1/4）…… 57
第６１図　７号溝状遺構出土遺物実測図２（1/4）…… 58
第６２図　８号溝状遺構実測図（1/200）…… 59
第６３図　８号溝状遺構（サブトレンチ１）
実測図及び土層断面図（1/40）…… 59
第６４図　８号溝状遺構（サブトレンチ２）
実測図及び土層断面図（1/40）…… 60
第６５図　８号溝状遺構出土遺物実測図１（1/4）…… 61
第６６図　８号溝状遺構出土遺物実測図２（1/4）…… 62
第６７図　土坑実測図１（1/40）…… 64
第６８図　土坑実測図２（1/40）…… 65
第６９図　土坑実測図３（1/40・1/60）…… 66
第７０図　土坑出土遺物実測図（1/4）…… 67
第７１図　ピット出土遺物実測図（1/4・29 ～ 31 は 1/2）…… 69
第７２図　検出・撹乱出土遺物実測図（1/4・1/2）…… 71
第７３図　出土石製品実測図１（2/3）…… 72
第７４図　出土石製品実測図２（1/4・1/2）…… 73
第７５図　出土石製品実測図３（1/4）…… 74
第７６図　出土石製品実測図４（1/4）…… 75
第７７図　出土石製品実測図５（1/4）…… 76
第７８図　出土石製品実測図６（1/4）…… 77
第７９図　出土石製品実測図７（1/4）…… 78
第８０図　出土木製品実測図（1/4）…… 79
第８１図　暦年較正結果…… 103
第８２図　切り合い関係整理表…… 104
第８３図　時期別遺構図…… 107
附　　図　花ノ木遺跡調査区遺構配置図（1/400）

写　真　図　版　目　次

巻頭写真図版１
花ノ木遺跡１次調査の空中写真（西から）枠内が調査地
巻頭写真図版２
花ノ木遺跡１次調査の空中写真（西から）
巻頭写真図版３
花ノ木遺跡１次調査出土土器集合写真
４号竪穴建物出土土器集合写真
写真図版１
上　調査区空中写真（東から）
下　調査区空中写真（南から）奥が平田遺跡
写真図版２
上　調査区全景（上が北）
下　調査区北側発掘状況（東から）

写真図版３

上　調査区中央発掘状況（西から）

下　調査区北側発掘状況（西から）

写真図版４

①　１号竪穴建物発掘状況（南から）

②　２号竪穴建物発掘状況（南から）

③　３号竪穴建物発掘状況（南から）

④　３号竪穴建物土製模造鏡出土状況

⑤　３号竪穴建物柱木出土状況

⑥　５号竪穴建物発掘状況（南から）

⑦　５号竪穴建物遺物出土状況

⑧　５号竪穴建物炭化物出土状況

写真図版５

①　４号竪穴建物遺物出土状況（南から）

②　４号竪穴建物遺物出土状況

③　６号竪穴建物発掘状況（東から）

④　６号竪穴建物遺物出土状況（北から）

写真図版６

①　７号竪穴建物発掘状況（西から）

②　７号竪穴建物中央炉跡発掘状況（南から）

③　８号竪穴建物発掘状況（南から）

④　９号竪穴建物発掘状況（南から）

⑤　10 号竪穴建物発掘状況（南から）

⑥　10 号竪穴建物カマド発掘状況（西から）

⑦　11 号竪穴建物発掘状況（南から）

⑧　１号掘立柱建物発掘状況（南から）

写真図版７

①　２号掘立柱建物発掘状況（南から）

②　３号掘立柱建物発掘状況（南から）

③　４号掘立柱建物発掘状況（西から）

④　５号掘立柱建物発掘状況（南から）

⑤　６号掘立柱建物発掘状況（南から）

⑥　７号掘立柱建物発掘状況（南から）

⑦　８号掘立柱建物発掘状況（南から）

⑧　９号掘立柱建物木板発掘状況

写真図版８

①　１号溝状遺構土層断面Ａ（東から）

②　１号溝状遺構土層断面Ｂ（東から）

③　１号溝状遺構土層断面Ｃ（南から）

④　１号溝状遺構土層断面Ｃ（近景）

⑤　１号溝状遺構土層断面Ｄ（西から）

⑥　１号溝状遺構土層断面Ｅ（西から）

⑦　１号溝状遺構７区出土遺物発掘状況

⑧　２号溝状遺構遺物出土状況

写真図版９

①　２号溝状遺構土層断面Ａ（東から）

②　２号溝状遺構土層断面Ｂ（東から）

③　３号溝状遺構土層断面（西から）

④　３号溝状遺構遺物出土状況１

⑤　３号溝状遺構遺物出土状況２

⑥　４号溝状遺構土層断面Ａ（西から）

⑦　４号溝状遺構土層断面Ｃ（東から）

⑧　５号溝状遺構土層断面（東から）

写真図版１０

①　６号溝状遺構土層断面（東から）

②　７号溝状遺構土層断面（東から）

③　７号溝状遺構遺物出土状況（東から）

④　８号溝状遺構サブトレンチ周辺発掘状況（北から）

写真図版１１

①　８号溝状遺構サブトレンチ２遺物出土状況（北から）

②　８号溝状遺構サブトレンチ１遺物出土状況（北から）

③　８号溝状遺構サブトレンチ２遺物出土状況（南から）

写真図版１２

①　８号溝状遺構サブトレンチ２遺物出土状況（近景）

②　８号溝状遺構サブトレンチ２土層断面（南から）

③　８号状遺構サブトレンチ１土層断面（南から）

写真図版１３

①　１号土坑発掘状況（東から）

②　18 号土坑発掘状況

③　P7 遺物出土状況

④　P146 遺物出土状況

⑤　P310 遺物出土状況

⑥　P630 完掘状況

写真図版１４～３７　出土遺物

本　文　写　真　目　次

写真１　重機作業風景…… 3
写真２　発掘調査風景…… 4
写真３　整理作業風景…… 4

表　目　次

第１表　県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う調査一覧…… 1
第２表　樹種構成…… 81
第３表　花ノ木遺跡１次調査出土木材の器種別樹種構成 …… 85
第４表　花ノ木遺跡１次調査の樹種同定結果 …… 86
第５表　器種別の樹種同定結果…… 91
第６表　樹種同定結果一覧表…… 96
第７表　花ノ木遺跡１次調査から出土した大型植物遺体（括弧内は破片数）…… 97
第８表　花ノ木遺跡１次調査から出土した大型植物遺体（括弧内は破片数）…… 99
第９表　測定試料および処理……101
第１０表　放射性炭素年代測定及び歴年較正の結果……102
第１１表　花ノ木遺跡１次遺構時期変遷表 ……106
第１２表　出土土器観察表１……109
第１３表　出土土器観察表２……110
第１４表　出土土器観察表３……111
第１５表　出土土器観察表４……112
第１６表　出土土器観察表５……113
第１７表　出土土器観察表６……114
第１８表　出土土器観察表７……115
第１９表　出土土器観察表８……116
第２０表　出土土器観察表９……117
第２１表　出土土器観察表 10 ……118
第２２表　出土土器観察表 11 ……119
第２３表　出土土器観察表 12 ……120
第２４表　出土土器観察表 13 ……121
第２５表　出土土製品・瓦観察表……121
第２６表　出土石製品観察表……122
第２７表　出土木製品観察表……122

附　編　表　目　次

第２８表　樹種構成……161
第２９表　平田遺跡の樹種同定結果……162
第３０表　本村遺跡５次調査における樹種同定結果 ……164
第３１表　測定試料及び処理……165
第３２表　測定結果……166

第１章　調査の経緯

（1）調査に至る経緯

県営経営体育成基盤整備事業（担い手育成型）朝日地区（主管部署：大分県西部振興局農林基盤部、以下、県振興局）の事業の全体概要や埋蔵文化財調査に至る経緯に関しては、『朝日の遺跡Ⅰ』で述べていることから註1)、ここでは、花ノ木遺跡１次調査に至る経緯を記述する。

朝日工区については、その大部分が周知の埋蔵文化財包蔵地外であった。しかし、平成22年度に大分県教育庁文化課（以下、県文化課）が実施した農林業関係事業実施予定地の分布調査の結果、周知外を含むものの全体の予備調査が必要と判断された。

これを受け、日田市教育庁文化財保護課（以下、市文化財保護課）が予備調査を実施することとなり、稲刈り後の平成22年11月15日から12月17日にかけて実施した。工事対象面積177,044㎡のうち、工事により削平を受ける水田を対象にトレンチを設定した。最終的にはトレンチ40本、調査面積約850㎡となり、このうち、３ヶ所９本のトレンチで遺構・遺物が確認された（花ノ木・平田・尾部田遺跡）。何れも工事による削平が及ぶため発掘調査が必要であると考えられ、この段階で、花ノ木遺跡の調査対象面積は16,000㎡であった。なお、今回の報告対象である花ノ木遺跡は、予備調査時は周知遺跡の対象外であったことから、字名を取って、平成23年１月18日に遺跡の新登録を行った。

平成22年12月20日付けで県振興局長へ結果報告を行うとともに、遺構面を保護するための工法変更について協議をおこない、工法変更を行ったものの、遺構を損なう可能性が高い12,000㎡について調査対象とすることとなった。平成23年２月24日付けで、文化財保護法第94条の通知文を大分県教育委員会に提出し、平成23年３月３日付けで発掘調査の実施通知を受けることになった。

以上の経過を経て、平成２３年６月15日付けで花ノ木遺跡の発掘調査について、県振興局と委託契約を締結し、調査に着手した。また、本事業に伴って実施した発掘調査の概要、予備調査および発掘調査は下表の通りである。

註１）若杉竜太編『朝日の遺跡』Ⅰ　平田遺跡・尾部田遺跡２次の調査　日田市埋蔵文化財調査報告書第108集　日田市教育委員会　2012

第１表　県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う調査一覧

工区	開発面積（㎡）	予備調査実施年度	予備調査面積（㎡）	時代	処置	発掘調査等の委託契約					備考
						遺跡名	業務内容	契約履行期間	発掘調査期間	調査面積（㎡）	
朝日1･2工区	177,044	H22	850	弥生～中世	一部、発掘調査	花ノ木	発掘	H23.6.15～H24.3.19	H23.7.4～12.5	10,723	本報告
						平田	発掘整理	H23.6.15～H24.2.29	H23.10.3～12.24	2,749	
						尾部田	発掘整理	H23.6.15～H24.1.23	H23.10.19～11.16	1,055	
小迫1･2工区	213,303	H23	955	弥生～古代	一部、発掘調査	鍛冶屋廻り	発掘整理	H24.6.15～H25.1.15	H24.7.23 ～8.24	560	
						本村	発掘整理	H24.8.1～H25.2.28	H24.8.22 ～11.21	2,498	
						花ノ木	整理報告書	H24.6.15～H25.3.26	－	－	
						平田			－	－	朝日の遺跡Ⅰ
						尾部田			－	－	
君迫工区	76,000	H24	219	中世	一部、発掘調査	君迫	発掘整理	H25.7.1～H26.1.15	H25.8.19～11.12	580	
朝日1･2工区						花ノ木	整理報告書	H25.6.1～H26.3.20	－	－	
小迫1･2工区						鍛冶屋廻り			－	－	朝日の遺跡Ⅱ
						本村			－	－	
二串工区	54,000	H25	870	弥生	一部、発掘調査	山ノ神(二串)	発掘	H26.7.15～H26.12.19	H26.8.20～H26.11.25	1,349	
朝日1･2工区						花ノ木	整理報告書	H26.6.10～H27.3.31	－	－	朝日の遺跡Ⅲ

（2）調査の組織

調査関係者は以下の通りで、職名・氏名は当時のままとしている。

平成 23 年度（2011）／発掘調査

調査主体　日田市教育委員会

調査責任者　合原 多賀雄（日田市教育委員会教育長）

調査統括　財津 隆之（日田市教育庁文化財保護課長）

調査事務　土居 和幸（同課埋蔵文化財係長）、井上 和泉（同課主査）、若杉 竜太（同課主査）

調査担当　上原 翔平（同課主事）

調査員　行時 桂子（同課主査）、若杉 竜太（同課主査・予備調査担当）、渡邉 隆行（同課主査）

発掘作業員

赤尾直盛、赤尾ミチ子、秋吉新六、安心院信治、石井百合子、石谷アサカ、石松高子、伊藤暁子、伊藤武士、伊藤大地、伊藤博之、井上能、宇野正雄、江川洋、江藤キミ子、江藤恵子、小ヶ内カオル、梶原紀二六、加藤寿子、加藤祐一、蒲池妙子、河津定雄、河津博文、河津モリ、川津良成、北澤幾子、黒瀬順次、小暮裕次、合原建国美、五反田静子、坂田次光、坂本利子、坂本由紀子、佐々木誠一郎、佐藤暢子、重松拓也、高倉英明、高村三郎、高村秀一、竹本和則、谷口なつ子、谷口芳江、津村小夜子、長野東吉、楢原理恵、長谷部修一、原田強、深町正博、松尾久美子、宮木博幸、宮崎幸也、宮本栄二、森輝雄、森山順、森山直郁、山中美利、矢幡誠二、矢幡輝明、弥吉直美、横尾辰巳、米村公弘

来訪者　下村智（別府大学文学部教授）、後藤晃一（県文化課）

平成 24 年度（2012）／整理作業

調査主体　日田市教育委員会

調査責任者　合原 多賀雄（日田市教育委員会教育長）

調査統括　財津 俊一（日田市教育庁文化財保護課長）

調査事務　土居 和幸（同課埋蔵文化財係長）、井上 和泉（同課主査）、若杉 竜太（同課主査）

報告書担当　上原 翔平（同課主事）

調査員　行時 桂子（同課主査）、渡邉 隆行（同課主査）

整理作業員　伊藤 一美、黒木 千鶴子、武石 和美、安元 百合

平成 25 年（2013）／整理作業

調査主体　日田市教育委員会

調査責任者　合原 多賀雄（日田市教育委員会教育長）

調査統括　財津 俊一（日田市教育庁文化財保護課）

調査事務　園田 恭一郎（同課埋蔵文化財係長）、武内 貴彦（同課専門員）、華藤善紹（同課副主幹）
若杉 竜太（同課主査）

報告書担当　上原 翔平（同課主任）

調査員　行時 桂子（同課主査）、渡邉 隆行（同課主査）

整理作業員　伊藤 一美、黒木 千鶴子、髙田 美保、武石 和美、安元 百合

平成 26 年（2014）／整理作業・報告書作成

調査主体　　日田市教育委員会

調査責任者　合原 多賀雄　４月～６月／三笘 眞治郎　７月～（日田市教育委員会教育長）

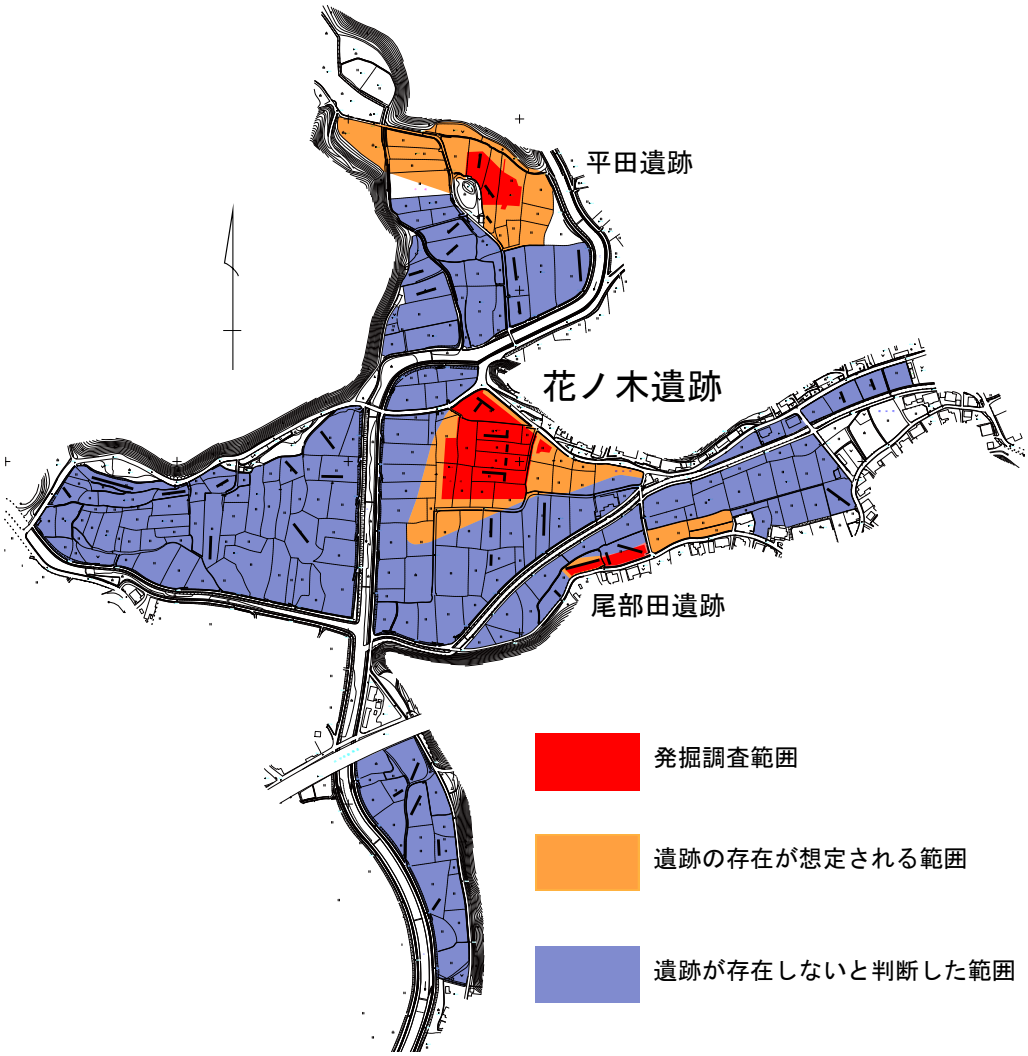
調査統括　　財津 俊一（日田市教育庁文化財保護課）

調査事務　　園田 恭一郎（同課埋蔵文化財係長）、若杉 竜太（同課主査）、諫山温子（同課主事）

報告書担当　上原 翔平（同課主任）

調査員　　行時 桂子（同課主査）、渡邉 隆行（同課主査）

整理作業員　伊藤 一美、黒木 千鶴子、髙田 美保、武石 和美、安元 百合



第１図　工事実施区域と調査区位置図（1/10,000）

（３）発掘調査の経過

発掘調査の経過を以下に述べる。

７月　４日　重機による耕作土除去を開始

７月 25 日　遺構検出を開始

７月 27 日　作業員による遺構検出を開始、器材の搬入を開始

８月　９日　一部遺構の掘り下げを開始

写真１　重機作業風景

9月22日　補助業務を開始（委託先：株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店）
11月11日　後藤副主幹（大分県文化課）が現場を視察
11月14日　下村教授（別府大学文学部）による現場来訪
11月15日　空中写真撮影を行う。
12月　1日　器材の整理及び撤去を開始
12月　5日　現場の器材等の撤収を終えて、現場終了

写真２　発掘調査風景

（4）整理作業の経過

整理作業の経過を以下に述べる。

整理作業は、調査終了の翌年、平成24年7月2日より遺構ごとに出土遺物の水洗･注記･接合作業を開始した。平成24年度は一部、遺物の実測･製図業務委託を行った。平成25年度は、10月～3月まで整理作業を再開し、翌平成26年1月に遺物実測・製図・写真撮影業務と遺構製図業務委託を行った。平成26年度は、6月～8月まで整理作業を実施、7月に遺物実測・製図・写真撮影及び全体図作成業務を委託し(11月14日完了)、9月に出土遺物の年代測定業務を委託した(11月30日完了)。そして､12月に出土遺物写真図版割付業務を委託し（1月３０日完了）1月末に委託業務を含む整理の全ての作業を終了した。

なお、整理の過程で器面の剥落など脆くなっている遺物や接合時に不安定な遺物に関しては、バインダー処理や石膏などで補強を行っている。

写真３　整理作業風景

第２章　遺跡の位置と環境

今回調査をおこなった花ノ木遺跡は日田市大字小迫に所在し、日田盆地の北部、吹上原台地と山田原 (宮原) 台地の谷部に位置している。

遺跡の所在する大字小迫は、日田市の町名区分上では朝日地区に含まれている。朝日地区は大字小迫 (小迫町、朝日町、朝日ヶ丘、清岸寺町) をはじめ、大字二串 (二串町、君迫町、北友田２丁目)、大字山田 (朝日町、山田町) の３地域で構成されている註１)。

この朝日地区は、明治 22 年～昭和 15 年の日田郡の自治体区分である朝日村 [日田盆地の北部、筑後川（三隈川）支流二串川の中・下流域に位置する] の範囲を踏襲したもので註２)、この朝日村は小迫・二串・山田村の３地域が明治 22 年に合併し誕生している。

このように朝日地区の歴史を辿ると古くは豊後国日田郡亘里郷の一部に位置していたと推測されており、古代日田五郷の一つとして『和名類聚抄』に記されている註３)。

以下には、朝日地区に所在する主な遺跡について時代ごとに概観していく。

旧石器・縄文時代の遺跡は、朝日地区内では大分県教育員会が高速道路建設にともない、二串西原遺跡の調査をおこなっており、旧石器時代後期～終末期に属する石器（ナイフ形石器、台形様石器、細石刃など）が 10 数点確認されている註４)。縄文時代の遺跡は、尾部田遺跡の調査で縄文時代の集落が確認され、縄文時代の集落立地を考える上で貴重な例となった註５)。

弥生時代の遺跡は、吹上原台地に所在し、弥生時代を通じて拠点的な集落を営んだと考えられえる吹上遺跡が挙げられる。6 次調査では、銅剣や銅戈・貝輪など豪華な副葬品を有する甕棺墓で構成される特定集団墓が確認され、台地一帯が地域の中心的な位置を占めていたと考えられる註６)。また、本村遺跡では、辻原台地と吹上台地の谷部に位置する沖積地上で、弥生時代後期～終末時期の遺構が検出されている註７)。鍛冶屋廻り遺跡では、小迫の谷部から後期後半頃の土坑が多く検出されている。従来この谷部周辺では弥生時代の遺構が確認されていなかったことから、周辺に同時代の遺跡が展開する可能性が考えられる註８)。

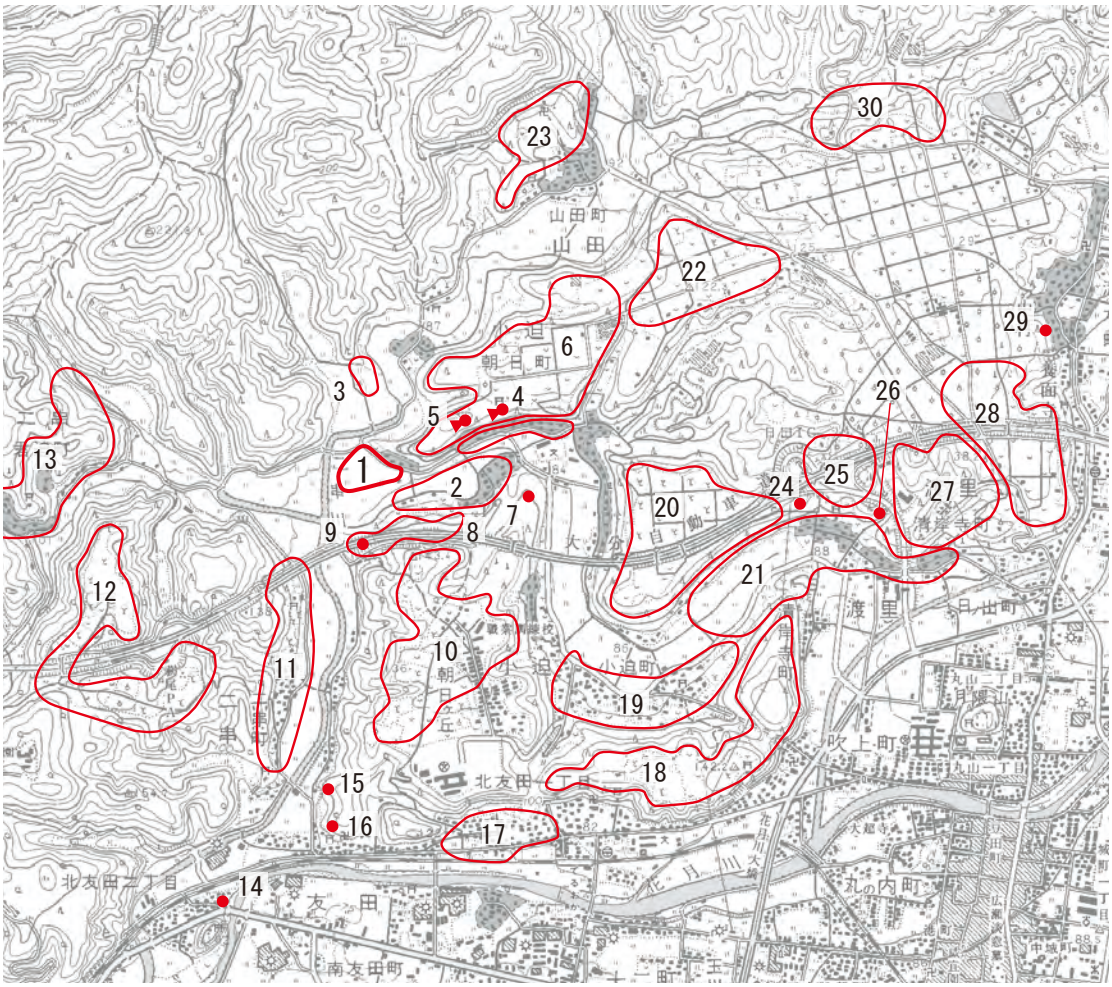
古墳時代に入ると、朝日地区では小迫辻原遺跡や朝日天神山古墳といった日田市を代表する遺跡が登場する。吹上遺跡の所在する吹上原台地の北側、辻原台地上に所在する小迫辻原遺跡では、弥生時代末～古墳時代初頭にかけて営まれた三つの方形環濠建物、三つの環濠集落とこれらを区画するように掘り込まれた溝が２条確認されており、弥生時代末～古墳時代初頭の国家形成期の社会状況を解明する上で重要な集落が所在していたと考えられる註９)。また、尾部田遺跡では、沖積地上でも確認され小迫辻原遺跡と同時期の集落が沖積地上にも展開する様相などが明らかになった。本村遺跡では、古墳時代後期の集落や古代の水田用水路が検出されている註 10)。6 世紀中頃には、宮ノ原台地上にこの時期では県下最大級の前方後円墳である朝日天神山２号墳が築かれる。２号墳からは、埴輪の代わりと考えられる大型平底壺が出土している。その後の６世紀後半には１号墳が築かれる。１号墳からは、大和政権とのつながりを考えることの出来る三輪玉が出土している註 11)。

古代になると小迫辻原遺跡で、大型掘立柱建物や『大領』領墨書土器が出土しており、建物群の規模や規則的な配置から、郡司クラスの人物の居宅と想定されている。そのほか、中世では小迫辻原遺跡で建物群を堀や溝で囲んでいる方形環溝屋敷跡が６ヶ所確認される。また、朝日宮ノ原遺跡Ｂ地区では中世の青磁や湖州鏡や合子などが一括で副葬された土坑墓が発見され註１２)、近世においては、鍛冶屋廻り遺跡で道路や水路などが発見されている註１３)。

このように、朝日地区は数多くの古代の遺跡が所在し、日田市の歴史を知る上で重要な地区であるといえる。

註１）日田市町名に関する告示　平成 13 年３月 13 日　告示第 19 号
註２）「角川日本地名大辞典」編纂委員会 『角川日本地名大辞典４４大分県』 角川書店　1980
註３）日田市 『日田市史』 １９９０
註４）清水宗昭ほか『九州横断自動車道路建設に伴う発掘調査概報』 大分県教育委員会　1984
註５）行時志郎『尾部田遺跡』 日田市埋蔵文化財調査報告書 34 集　日田市教育委員会　2001
註６）渡邉隆行『吹上Ⅳ－吹上遺跡６次調査の記録－』日田市埋蔵文化財調査報告書第 70 集
（日田地区遺跡群発掘調査報告８） 日田市教育委員会　2006
註７）若杉竜太『本村遺跡３次』日田市埋蔵文化財調査報告書第 51 集　日田市教育委員会　2004
註８）上原翔平『朝日の遺跡Ⅱ』日田市埋蔵文化財調査報告書第 111 集　日田市教育委員会　2014
註９）田中裕介・土居和幸・清水宗昭『小迫辻原遺跡Ⅰ』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 10
大分県教育委員会　1999
註１０）註８に同じ
註１１）若杉竜太『朝日天神山古墳群』日田市埋蔵文化財調査報告書第 60 集（日田地区遺跡群発掘調査報告７）日田市教育委員会　2005
註１２）土居和幸 編『朝日宮ノ原遺跡・谷ノ久保遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第 104 集（市内遺跡発掘調査報告書 10）
日田市教育委員会　2012
註１３）若杉竜太『鍛冶屋廻り遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第 92 集　2010

1. 花ノ木遺跡
2. 尾部田遺跡
3. 平田遺跡
4. 朝日天神山１号墳
5. 朝日天神山２号墳
6. 朝日宮ノ原遺跡
7. 城ノ越古墳
8. 小迫横穴墓群
9. 小迫古墳
10. 朝日ヶ丘遺跡
11. 山ノ神（二串）遺跡
12. 二串西原遺跡
13. 君迫遺跡
14. 三郎丸古墳
15. 鳥越古墳
16. 片山石棺
17. 今泉遺跡
18. 吹上遺跡
19. 鍛冶屋廻り遺跡
20. 小迫辻原遺跡



21. 本村遺跡
22. 山田原遺跡
23. 山ノ口遺跡
24. 草場原古墳
25. 草場第２遺跡
26. 草場古墳
27. 草場第１遺跡
28. 後迫遺跡
29. 用松中村古墳
30. 谷ノ久保遺跡

第２図　花ノ木遺跡調査地周辺遺跡分布図（1/25,000）

第３章　調査の内容

（１）調査の概要

調査は、朝日工区の中央に位置する区画の内、当初 12,000㎡を対象に行った。調査区は北側から南側に向かって緩やかに傾斜している。遺構検出面までは、重機を用いて耕作土除去作業を行った。遺構は、現地表面より約 20cm 下（標高約 78.5 m前後）で検出され、検出面直上には現況水田基盤層が堆積しているのみであった。その後、人力による遺構検出を行った後に、遺構を掘り下げ、記録作成を行った。なお、調査地東側の飛び地は間に水路が通っており、調査後も利用する計画であったため、水路部分を調査範囲から外して東側に飛び地を設ける形で遺構検出ををおこなった。最終的な調査面積は 10,723㎡となった。

遺構の埋土は、大きく黒褐色土・暗褐色土・灰色土に分かれ、黒褐色土は主に古墳時代頃、暗褐色土は古代頃の埋土で灰色土は中世以降と考えられ、色が明るくなるにつれて時期が新しくなる傾向が見られた。地山は主に黄褐色土が見られるが、調査区南側においては、灰褐色土になる部分が見られ、一部に遺物の出土が見られた事から、南側は包含層であった可能性がある。調査地の地形は南に向かって緩やかに傾斜している為、北側部分は削平を受けていた可能性が考えられる。

調査において検出された遺構は竪穴建物 11 軒、掘立柱建物 9 棟、溝状遺構 8 条、土坑 18 基、ピット 700 基以上である。遺構密度は調査区北側で濃く、南側に向かうに従って薄くなるという状況が見られた。先に述べた竪穴建物や掘立柱建物のほとんどが調査区北側で検出されている。また、8 号溝状遺構については、工事によって掘削が及ばないことから遺構検出に留め、トレンチを 2 本設定して遺構の状況を確認した。

なお、遺構配置図は附図を参照されたい。

（２）遺構と遺物

１．竪穴建物

竪穴建物は 11 軒検出されているが、そのほとんどが調査区の北側で検出されている。一部に切り合い関係が見られるものの、ほとんどが単独で検出されている。時期は弥生時代後期から古墳時代中期頃と考えられる。またその内の 1 軒からは日田における導入期のものと考えられるカマドが附される建物が検出されている。

1 号竪穴建物（第３図、写真図版４）

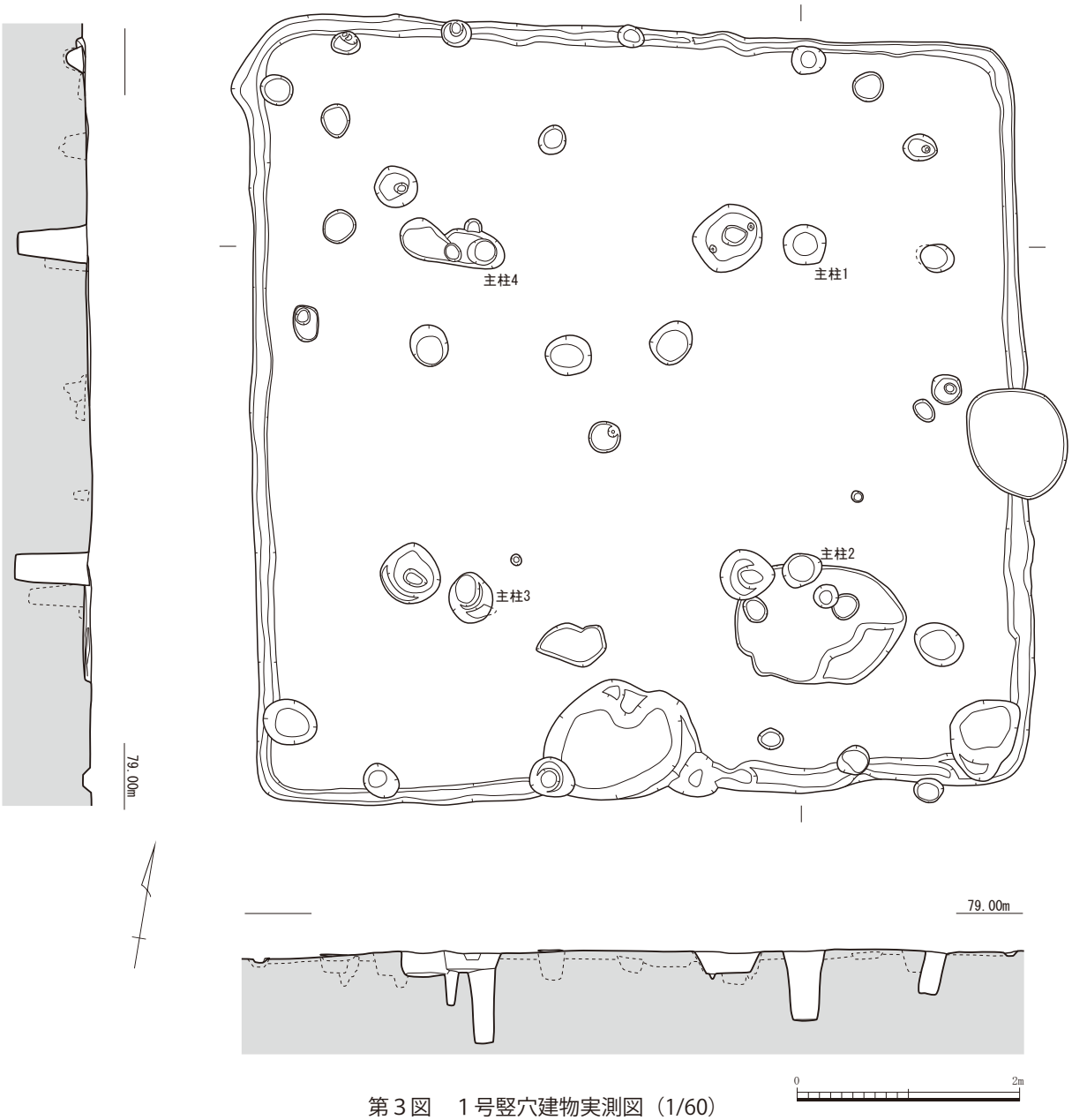
調査区北側で 4 号溝状遺構を切る形で検出された。床面は削平を受けておりほとんど残っておらず、周溝は 5cm 前後残るのみであった。平面・規模は、残った周溝から東西、南北ともに約 6.8m の正方形を呈すると考えられる。建物内に残る柱穴の位置と深さから 4 本の主柱穴を持ち、図中に示していないが、中央付近に少量の焼土が検出されていることから炉を持つ建物であったと考えられる。また、南壁側には屋内土坑を持つ。主柱穴の規模は直径約 40㎝で深さは 60cm 前後を測る。主柱穴間の距離は東西・南北ともに約 3.0m を測る。

出土遺物（第４図、写真図版１４）

1 は土師器の甕である。口縁部はやや外側に向かって立ち上がる。内外面ともにケズリが施され、一部に指オサエも見られる。

2 号竪穴建物（第５図、写真図版１）

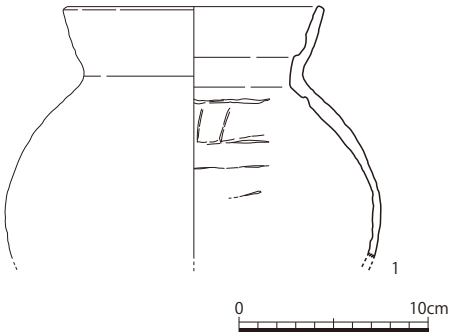
調査区北側で 1 号竪穴建物の東側で検出された。南東の一部を 4 号掘立柱建物に切られ、北東隅は 3 号土坑



第３図　１号竪穴建物実測図（1/60）

に切られており、南西隅は１号土坑に切られ、４号溝状遺構を切っている。建物内の柱穴の位置、２条の周溝 (内側の深さ約 6㎝前後、外側の深さ 20㎝前後) から主柱穴は４本と考えられる。この２条の周溝に対応する主柱穴が他にないことから、この建物は位置を維持したまま拡張または縮小したものか、あるいは四方にベッドを持つ建物と考えられる。床面は削平を受けておりほとんど残っていなかった。その他に、南壁側に屋内土坑があり、建物中央には炉が検出された。

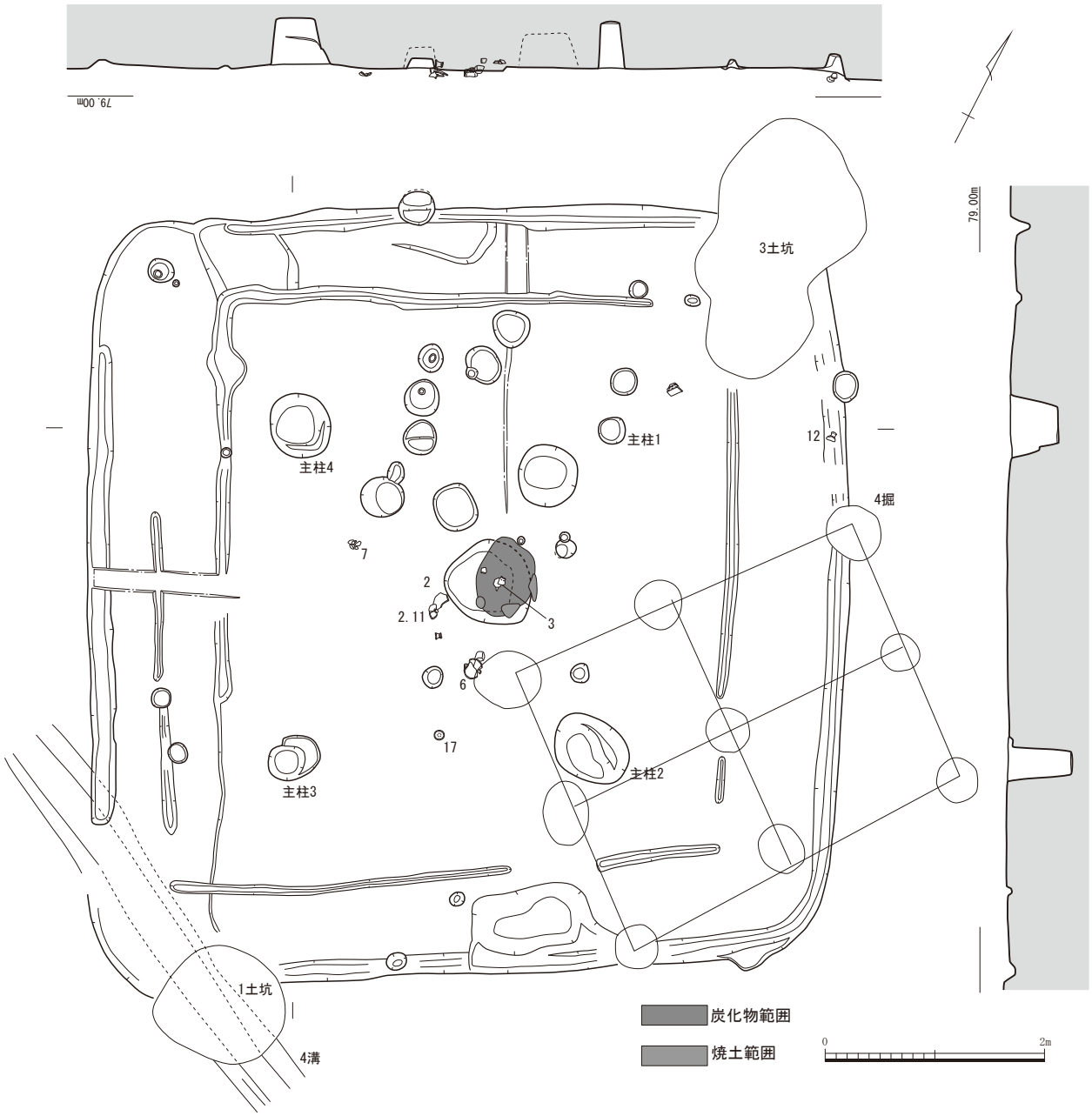
平面・規模は、内側の周溝では南北 4.8m ×東西 5.6m の方形を呈する。外側の周溝では南北 7.0m ×東西 7.0m の正方形を呈する。主柱穴間は南北 2.8 m、東西 3.0 mで、主柱穴の深さは 40cm ～ 60cm を測る。



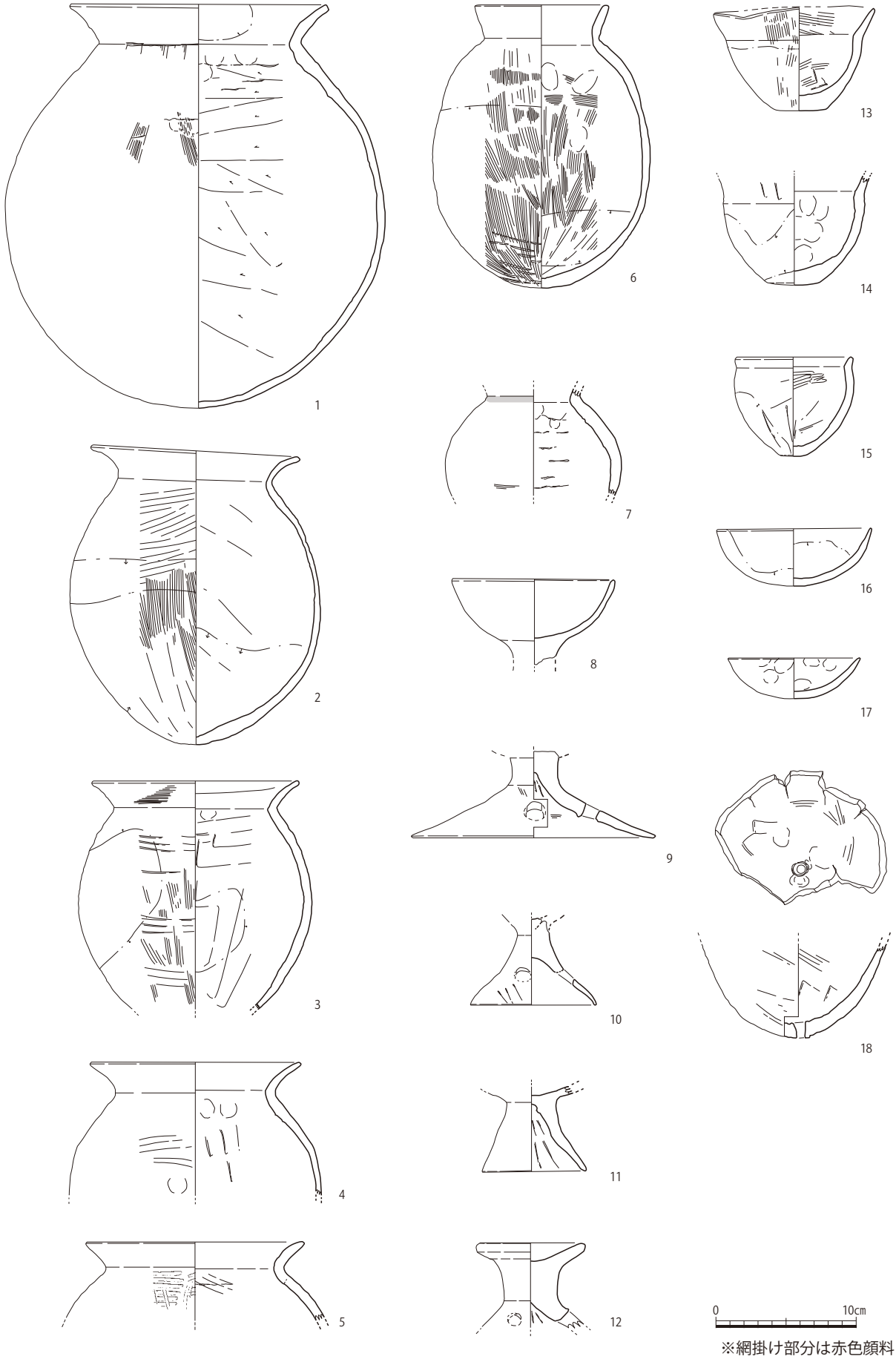
第４図　１号竪穴建物実測図出土遺物実測図 (1/4)

出土遺物（第６図、写真図版１４～１５）

１～６は土師器の甕である。１～５は口縁が外反しながら立ち上がる。１の内面頸部付近では指オサエが施される。外面にはススが付着する。２・３の内外面にはススが付着する。５の外面肩部付近にはタタキが施される。６の口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、外面底部付近にタタキが施されている。７は土師器壷の胴部である。外面頸部付近に赤色顔料が施されている。８～11は土師器の高坏である。８は坏部で口縁部にむかって内湾しながら立ち上がる。９～11は脚部である。９は短脚で裾に向かって大きく外側に開く。内面にはススが付着している。また、脚部には穿孔が４個確認される。10～11はスカート状に開き、10は端部で内湾している。脚部には穿孔が３個確認される。12は土師器の支脚か。脚部には穿孔が３個確認される。13～15は土師器の鉢である。13の口縁部には歪みがみられる。14の外面は被熱により赤化している。16、17は土師器の坏で16の口縁はほぼ垂直に立ち上がる。17は緩やかに外側に向かって立ち上がる。18は単孔深鉢型の甑である。



第５図　２号竪穴建物実測図（1/60）



第６図　２号竪穴建物出土遺物実測図（1/4）

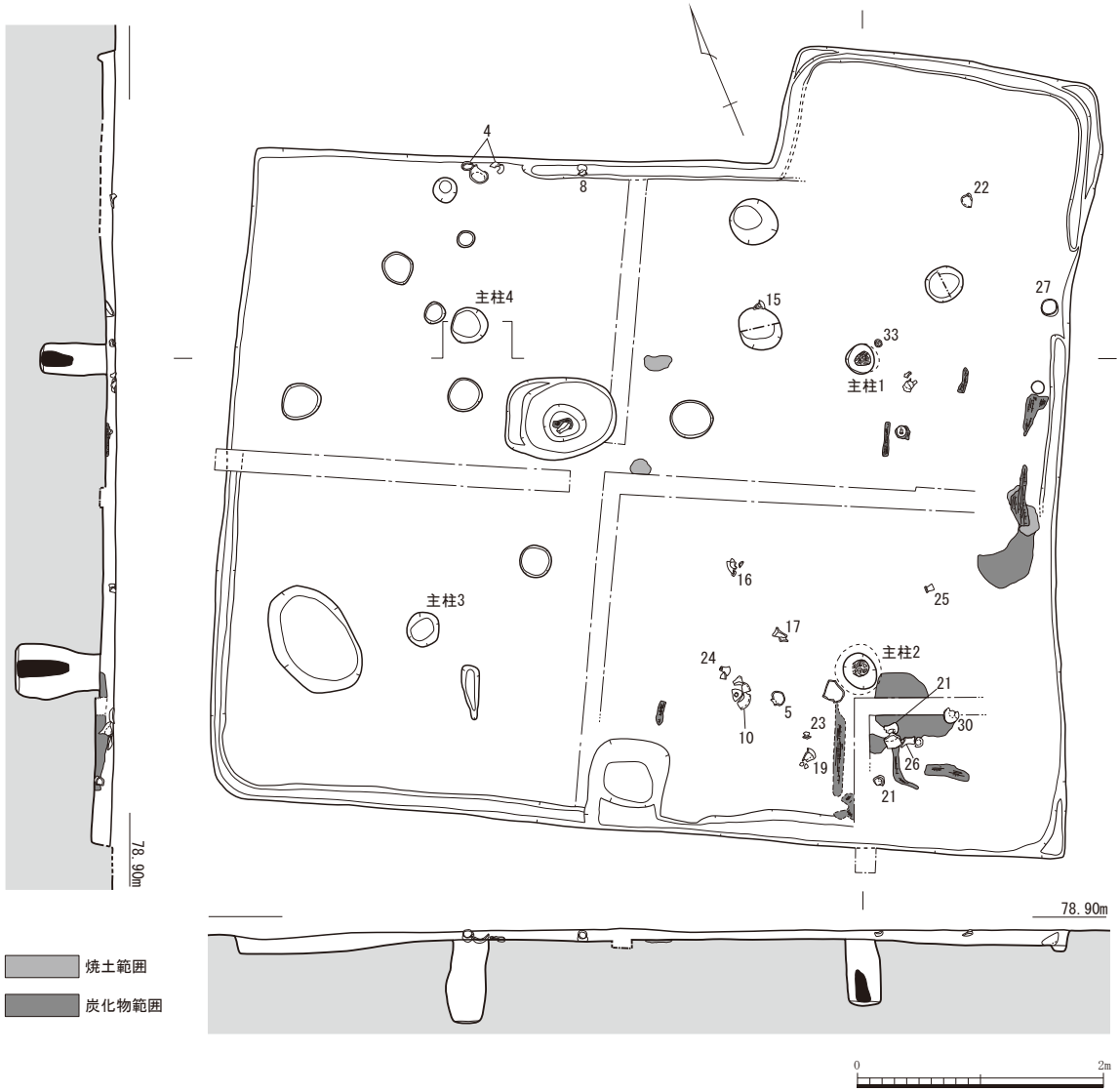
3 号竪穴建物（第 7 図、写真図版 1）

調査区の北東で検出された。竪穴建物の中では南側に位置する。建物の中で検出された柱穴の位置から 4 本の主柱穴を持つ竪穴建物と考えられる。北東隅では北側に約 1m の張出がある。建物南壁側では屋内土坑を検出し、中央では炉跡が確認された。周溝が部分的に残っており、深さは約 5cm 程である。また、主柱 2 周辺の南東隅と東壁付近では多くの炭化物が出土している。

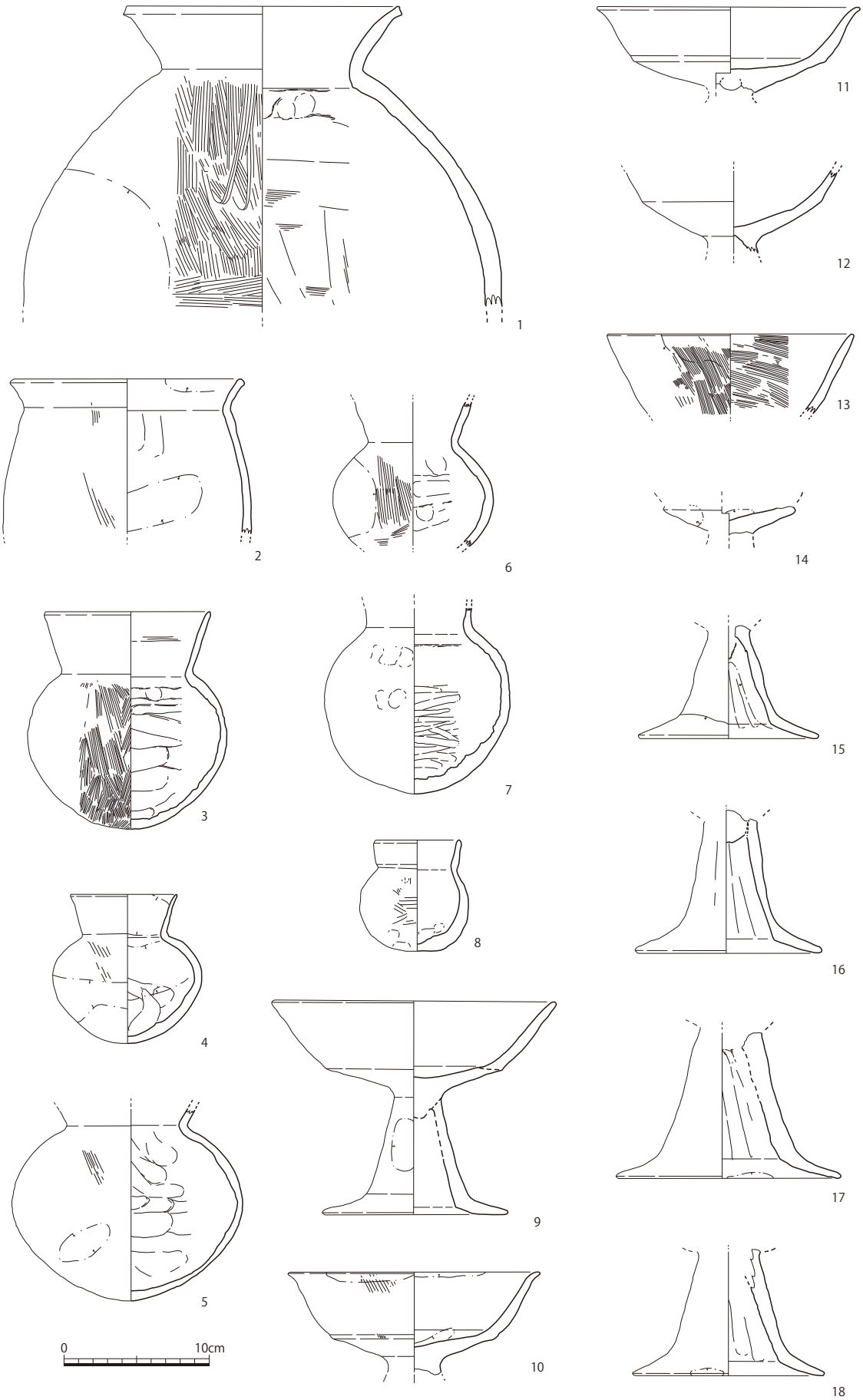
平面・規模は、東西 6.8m ×南北 5 .6m（張出部を含めると 6.6m）の方形を呈す。床面までの深さは約 10cm、主柱穴間の距離は東西 3.1 m、南北 2.8m で主柱穴の深さは 50 ～ 60cm を測る。また、東側の 2 本の主柱穴では柱木が残っており、柱材はクリとニレ属であった。これらはともに重硬で靭性の材質を持っており、柱材として有用とされる。

出土遺物（第８・９図、写真図版１５～１６）

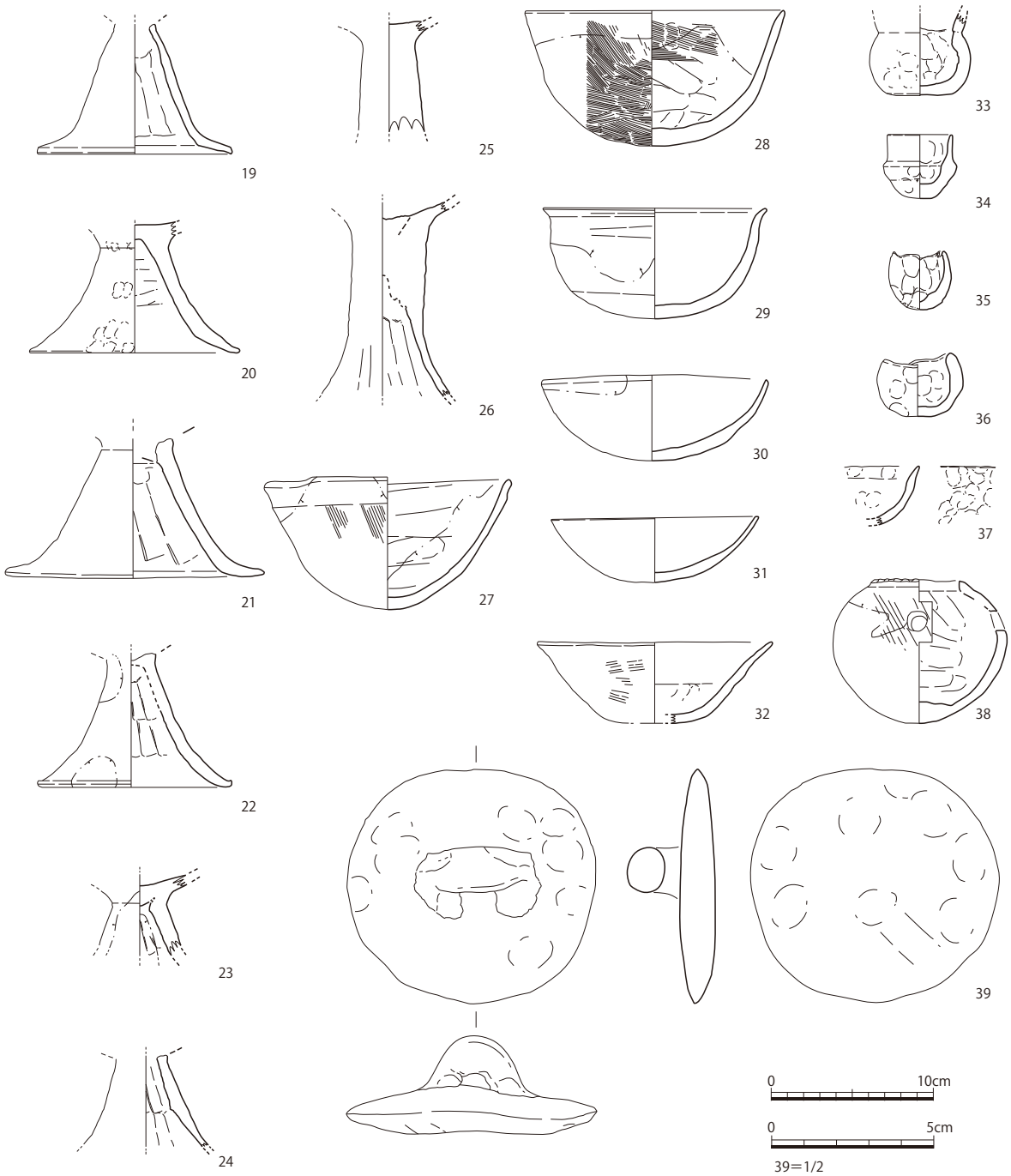
1・2 は土師器の甕である。1 は口縁が外反しながら立ち上がる。外面の頚部から胴部にかけて全体にハケ目が施される。2 の口縁は短く外反する。1・2 の外面にはススが付着する。3 ～ 8 は土師器の壷である。3 ～ 7 は小型丸底壷で、4 の内面にはススが付着している。7 の内面は強い工具ナデが施される。8 は外面に打ち欠き



第 7 図　3 号竪穴建物実測図（1/60）



第８図　３号竪穴建物出土遺物実測図１（1/4）



第９図　３号竪穴建物出土遺物実測図２（1/2・1/4）

によるものと考えられる剥離面がある。9 ～ 26 は土師器の高坏である。また、10 ～ 14 はその坏部である。9 の坏部は口縁部に向かって一度屈曲したのち、緩やかに外傾しながら立ち上がる。脚部は裾端部で屈曲して外反する。10、11 の坏部は口縁部に向かって一度屈曲し緩やかに外傾しながら、口縁端部で外反する。11 の接合部には粘土充填痕が残る。12 は口縁部にむかって一度屈曲し外傾しながら立ち上がる。15 ～ 26 は脚部で 15 ～ 19 は脚裾付近で、屈曲して外反する。16 は接合部に粘土充填痕が残る。19 は裾端部で内側に短く折り込まれる。20 ～ 22 の脚部は端部に向かってスカート状に開く。22 は端部をわずかに外反させる。27 ～ 30 は鉢である。27・28 は口縁に向かってほぼ垂直に立ち上がる。また、27 の内外面にはススが付着する。29 は口縁に向かって垂直に立ち上がり、口縁端部で外反する。また、外面にはススが付着する。また、31 ～ 32 は土師器の坏である。32 は口縁に向かって外傾しながら立ち上がる。33 ～ 37 はミニチュア土器の壷・鉢である。33・36 は主柱穴付近で出土している。38 は土師器の甑である。口縁付近は意図的に打ち欠いたとものと考えられる。

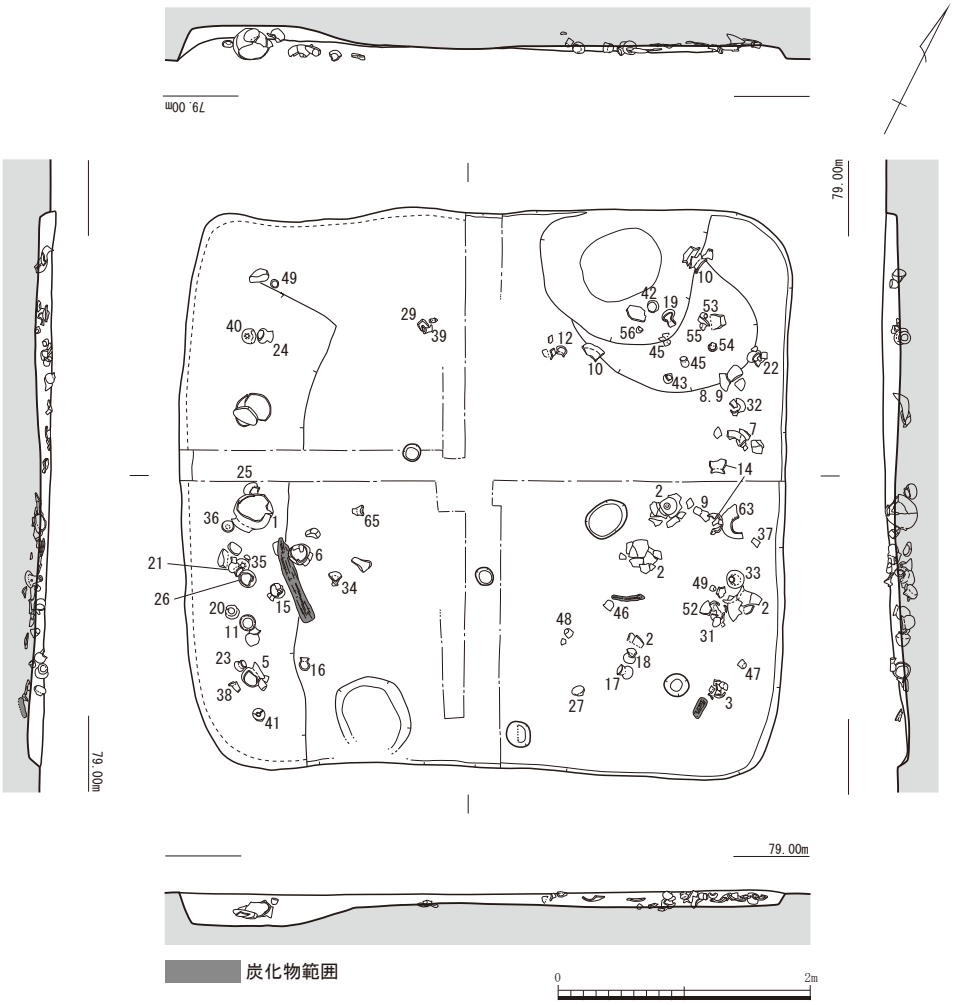
胴部に穿孔が 1 個確認される。内外面にはススが付着する。39 は土製模造鏡で床部付近の炭化物に混じって出土した。ほぼ完形で残っており、鏡面は指オサエで調整しており線刻などの装飾は施されていない。

4 号竪穴建物（第１０図、写真図版５）

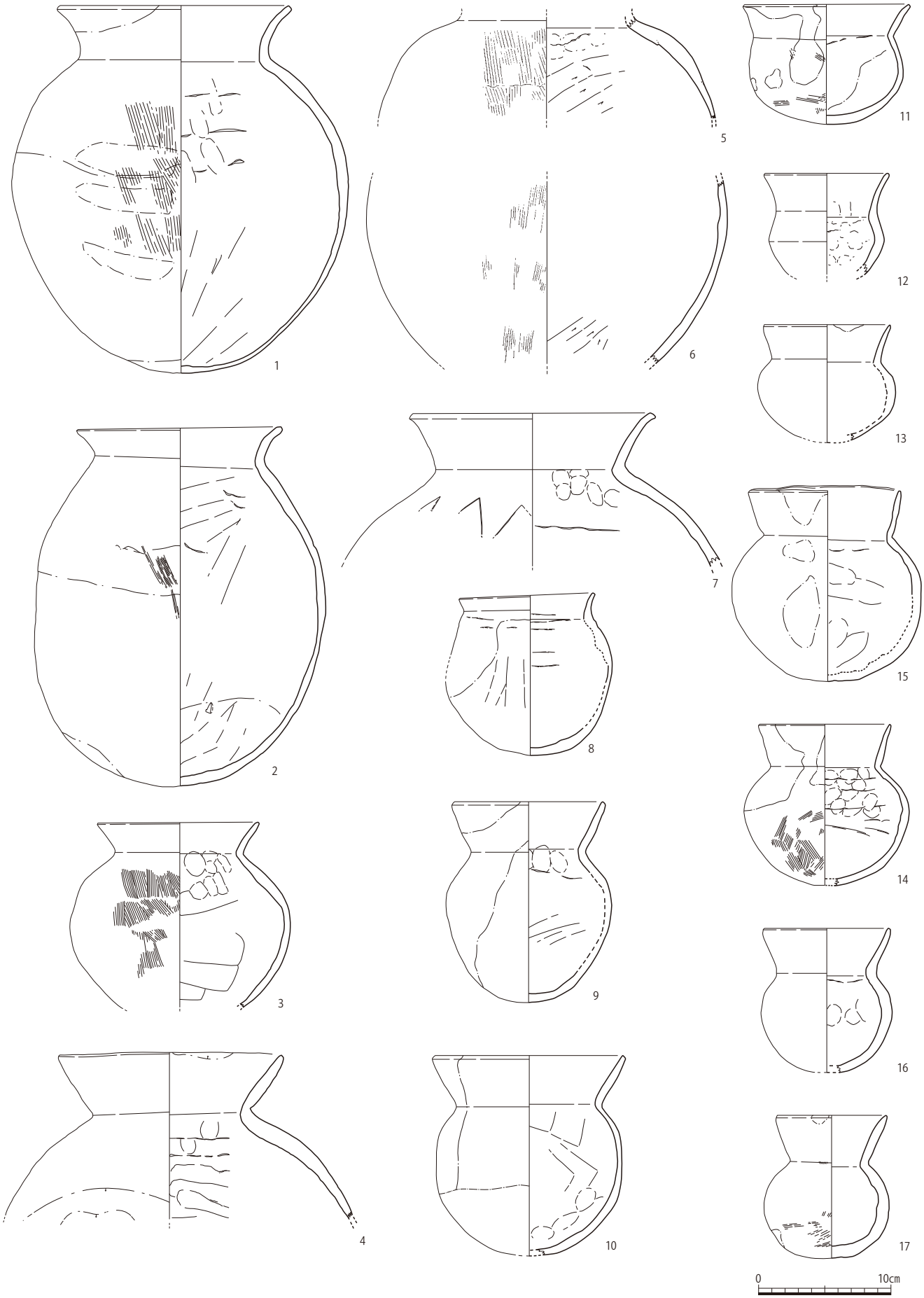
調査区内で検出された竪穴建物のうち、最も南側に位置し、3 号溝と 4 号溝の一部を切っている。平面・規模は、東西 4.8m ×南北 4.2m で方形を呈し、床面までの深さは約 20cm を測る。この建物からは柱跡が検出されず、焼土なども建物内では検出されなかった。また、建物内の東側と西側周辺部で多量の土器、特にミニチュア土器が多量に出土している。遺物が集中する西側は一段下がっており、北東隅は土坑状の落ち込みが見られる。この他に、南西の落ち込み付近と北東側の一部で炭化物が検出されている。この遺構は、調査区で検出されている他の建物から離れている点、区画溝や水田に関連すると考えられる溝状遺構の近くで検出されていることから、住居ではなく、祭祀に関連する建物であった可能性が想定される。

出土遺物（第１１～１３図、写真図版１６～１８）

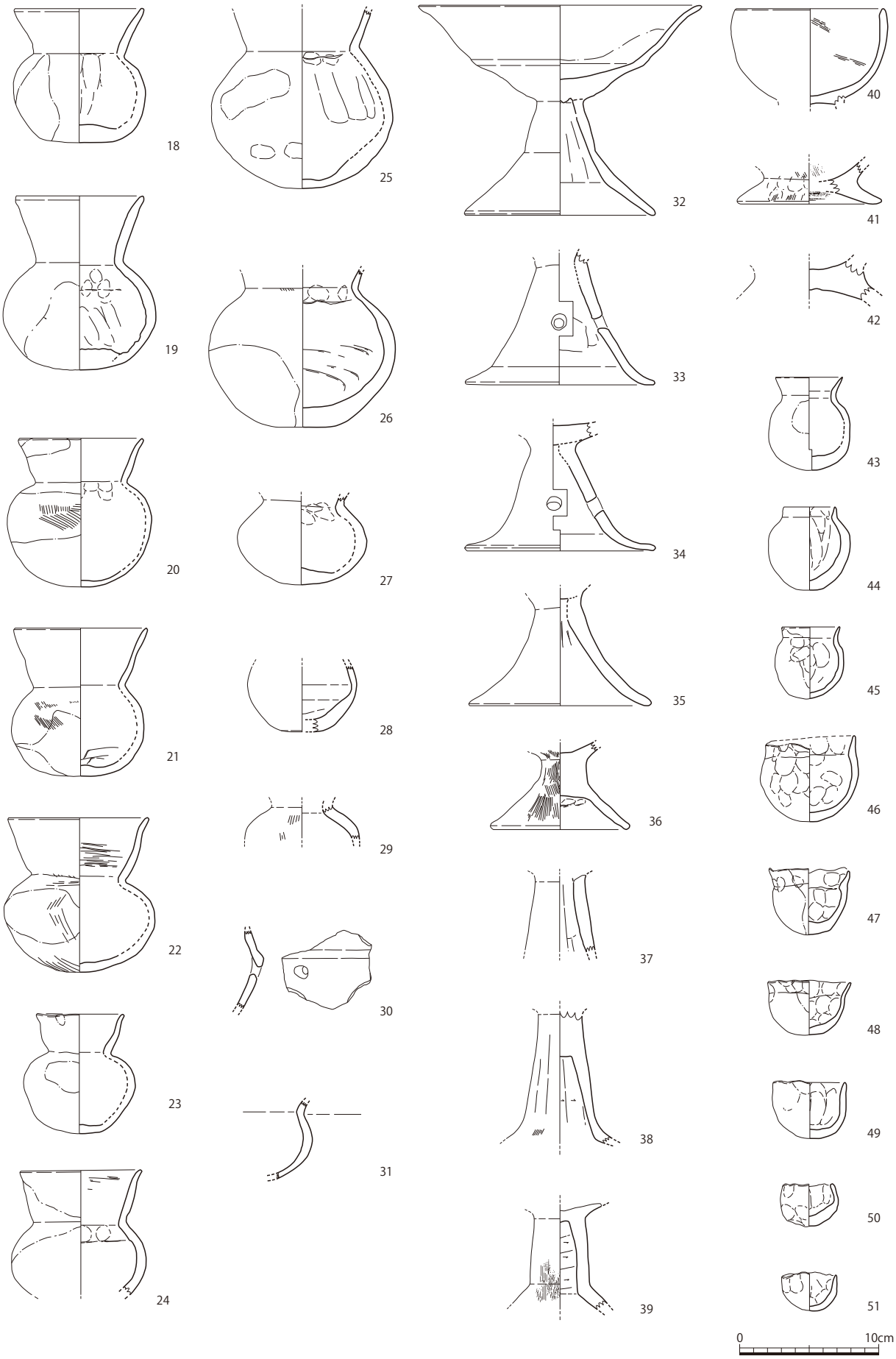
1 ～ 7 は土師器の甕である。1 の口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がる。また、外面にはススが付着する。2 の口縁部も外反するが 1 に比べて口縁部が短い。内外面にススの付着が見られる。このほか内面には籾痕と考えられる小穴がみられる。4 の口縁部は外傾しながら立ち上がる。また、外面にはススが付着している。7 は口縁部で緩やかに外反して立ち上がる。7 の肩部付近にクシ描き文様と考えられる線刻が見られる。8 ～ 31 は土



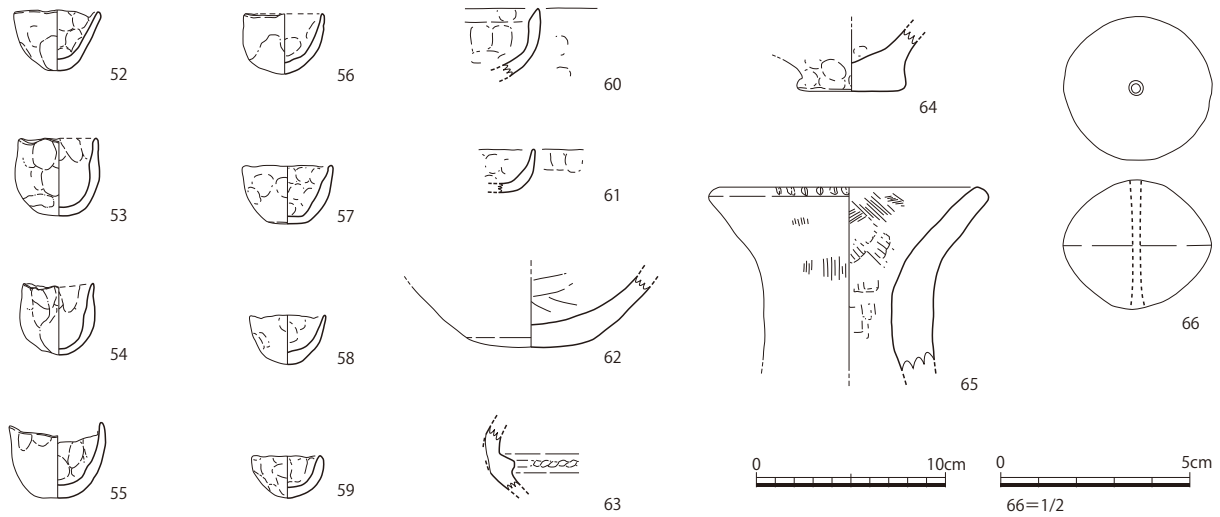
第１０図　４号竪穴建物実測図（1/60）



第１１図　４号竪穴建物出土遺物実測図１（1/4）



第１２図　４号竪穴建物出土遺物実測図２（1/4）



第１３図　４号竪穴建物出土遺物実測図３（1/4）

師器の壷である。8 ～ 16 は小型丸底壷で 10 の外面には 2 次被熱の痕跡が見られる。11 の口縁部は直線的に外傾し立ち上がる。また、外面にススの付着が見られる。12 の口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。13 ～ 15 の口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。16 の口縁部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。17 ～ 31 は小型壷で 17 の口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。18 ～ 21 は外傾しながら直線的に立ち上がる。19 は内面底部に粘土充填が見られる。22･23 の口縁部は緩やかに内湾しながら直線的に立ち上がる。23 の外面口縁部にはススが付着する。30 は胴部と考えられ、穿孔が 1 個確認される。32 ～ 39 は土師器の高坏である。32 の坏部は口縁部に向かって一度屈曲し、外傾しながら直線的に立ち上がり口縁端部で外反する。脚部は裾端部に向かってスカート状に開くが、胴部中段で稜が形成される程度に外反する。33 ～ 39 は脚部で 33 ～ 36 は裾端部に向かってスカート状に開く。33 は穿孔が 1 個、34 は 2 個確認される。40 ～ 42 は台付き鉢である。40 の鉢の口縁部は直口縁で深い。43 ～ 61 はミニチュア土器の甕・鉢である。4 号竪穴からはこれらミニチュア土器が 19 点出土しており、当調査地で最も多く出土している。いずれも指オサエやナデで調整が施される。また、61 の胎土には黒曜石が混入している。62 ～ 65 は弥生土器である。62 は甕の底部である。丸底に近い平底を呈する。63 は壷の頚部片で刻み目突帯が施される。64 は壷の底部である。65 は器台で口縁端部に刻み目が施される。66 は土玉である。中心には 2 ～ 3mm 程度の穿孔が施される。

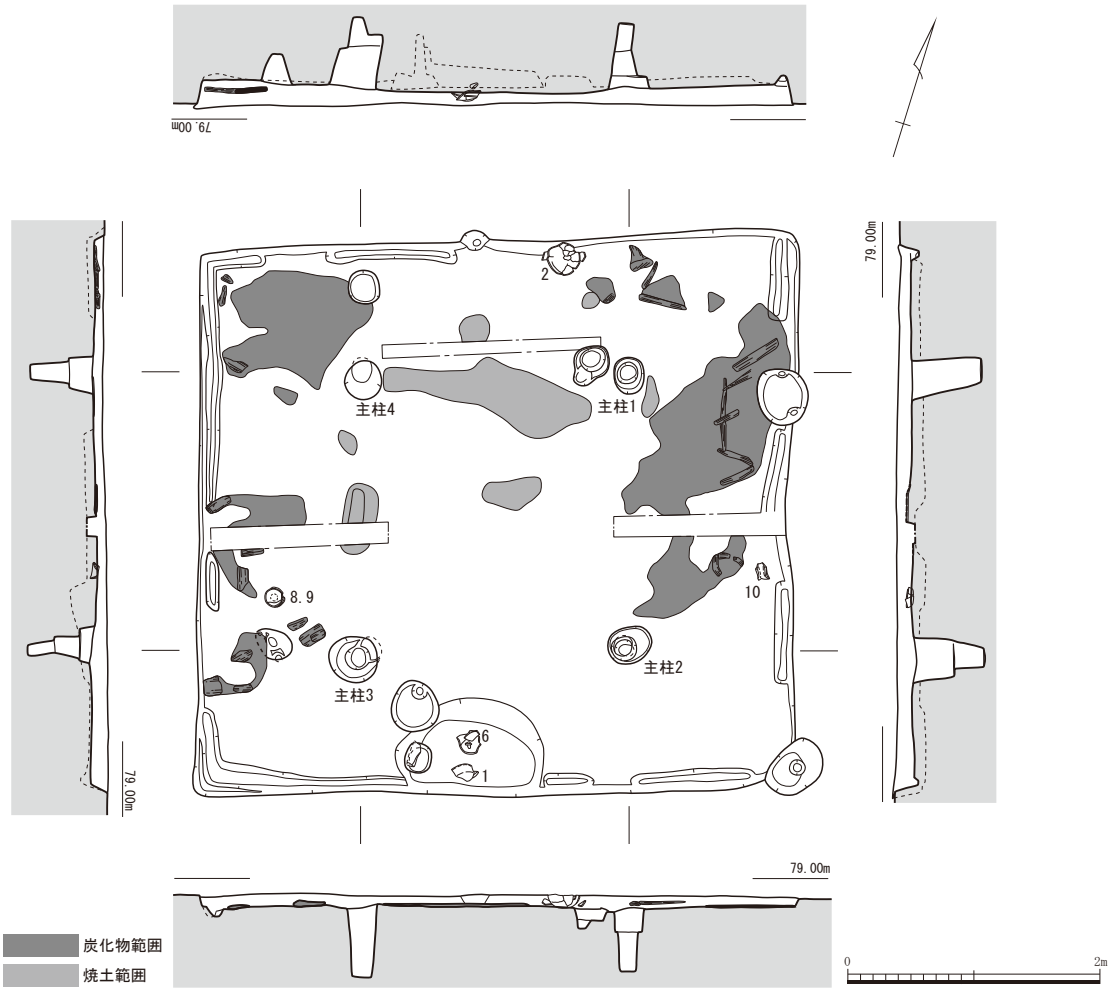
5 号竪穴建物（第１４図、写真図版４）

調査区北側で検出された。建物内の柱穴の位置から 4 本の主柱穴を持つ建物であると考えられる。平面・規模は東西約 4.7m ×南北約 4.4m の方形を呈し、床面までの深さは 10cm 前後、主柱穴間の距離は東西 2.1m、南北 2.2 mで主柱穴の深さは 50cm 前後を測る。カマドは検出されなかったが中央付近に一部焼土が確認された事から炉を持つ建物であった可能性がある。その他に、深さ 5cm 前後の周溝、建物の南端に屋内土坑を有する。

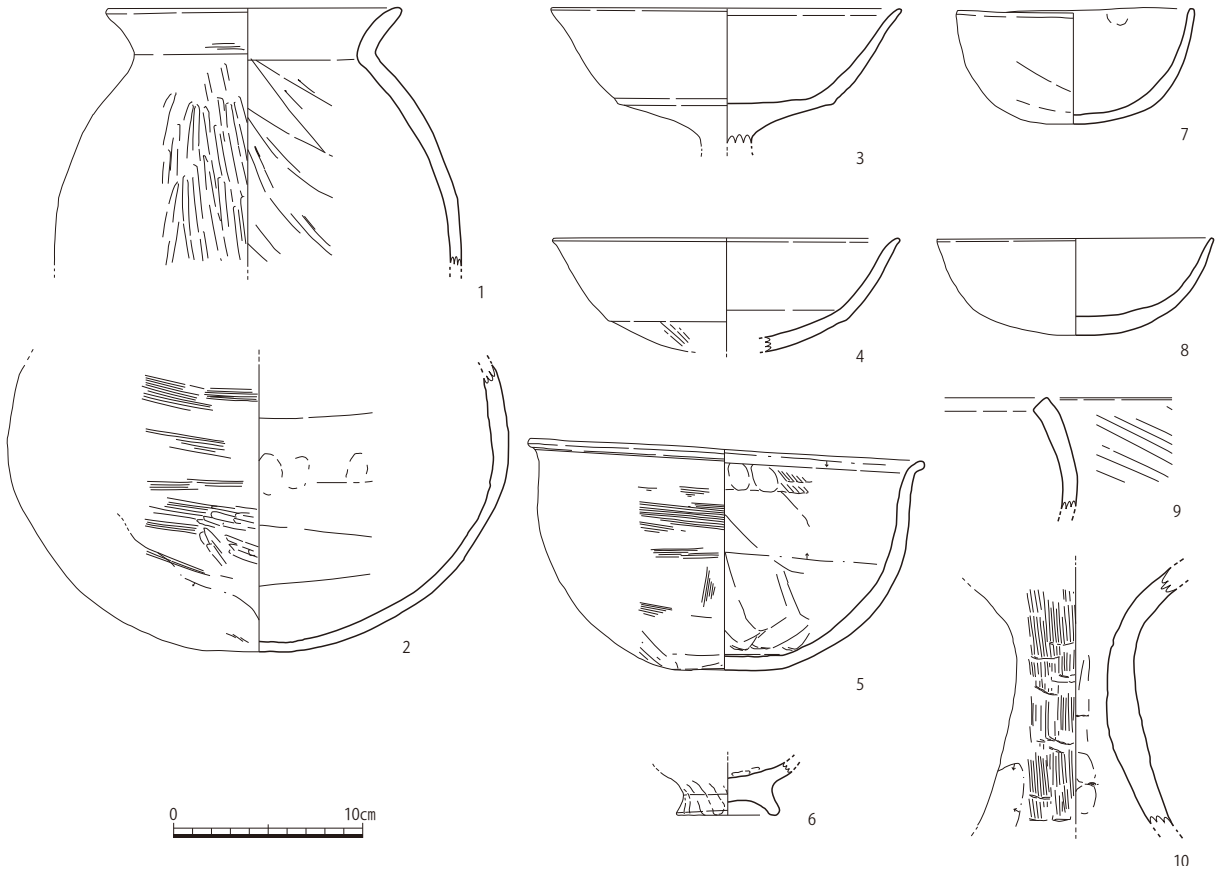
また、この建物跡では炭化物が全体に広がって確認されている事から廃棄時に燃やしたか、火事などで焼失してしまった可能性を考える事ができる。

出土遺物（第１５図、写真図版１８・１９）

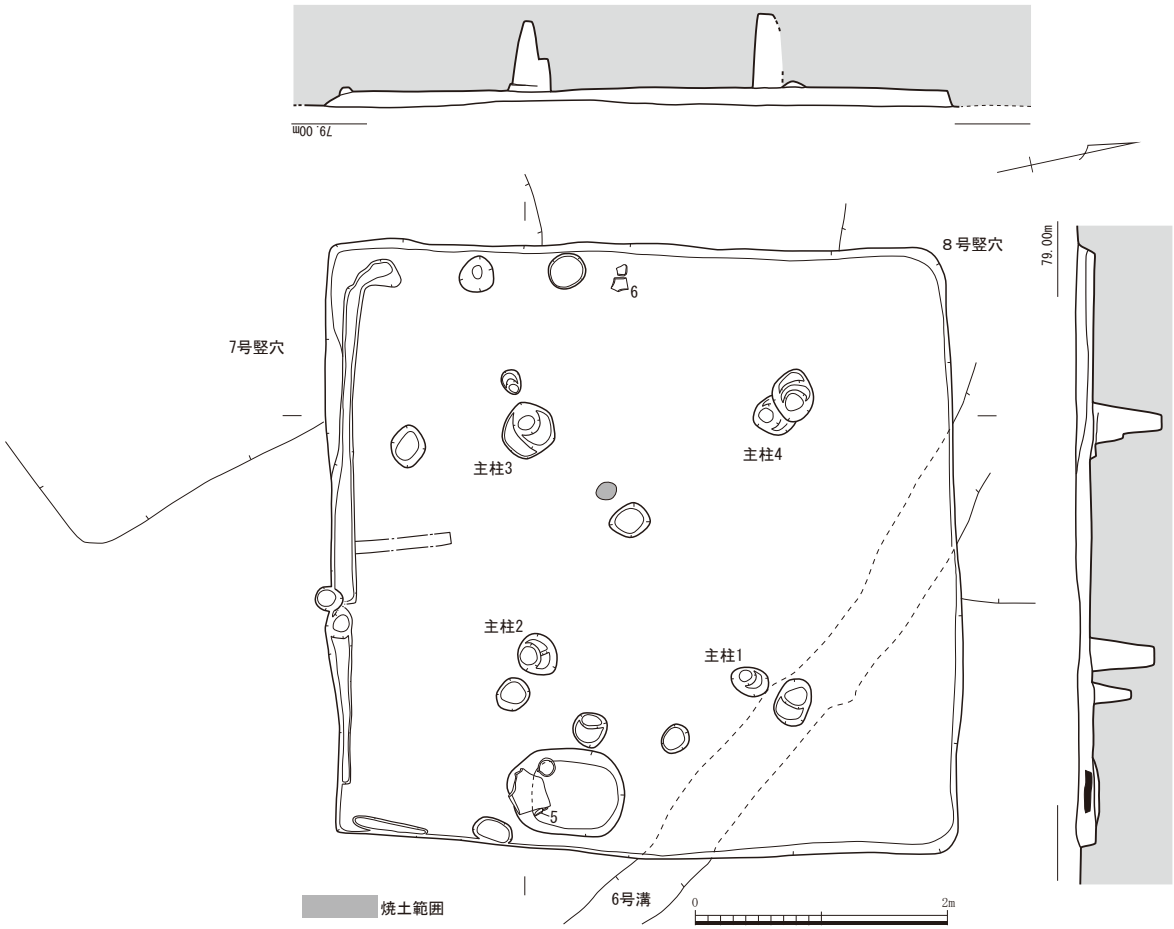
1 は土師器の甕である。外面にススが付着する。2 は土師器の壷である。2 の底部外面にはススが付着する。3･4 は土師器高坏の坏部である。ともに屈曲し、緩やかに内湾しながら口縁部に向かって立ち上がり、口縁端部で



第１４図　５号竪穴建物実測図（1/60）



第１５図　５号竪穴建物出土遺物実測図（1/4）



第１６図　６号竪穴建物実測図（1/60）

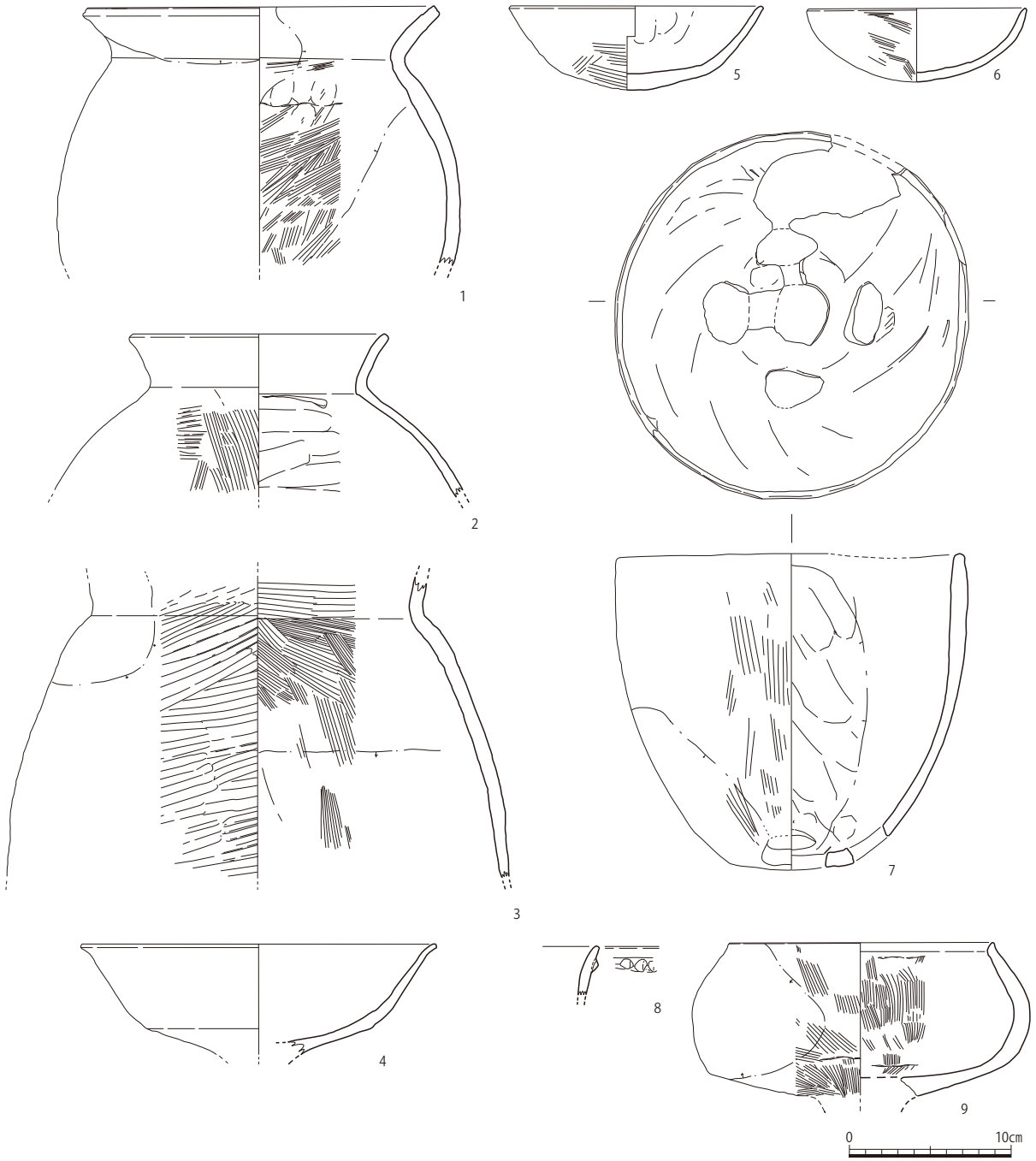
若干外反する。5 は土師器の鉢で直口縁で口縁端部が外反する。6 は土師器の台付き鉢である。7 ～ 9 は土師器の坏である。7 は直口縁で口縁部は直立に立ち上がる。外面にススが付着し、内面は被熱による赤化が見られる。8 は直口縁で緩やかに外傾し直線的に立ち上がる。9 は口縁端部か。10 は弥生土器の器台で内外面にススの付着が見られる。

6 号竪穴建物（第１６図、写真図版５）

調査区北側で検出され、7・8 号竪穴建物及び 6 号溝を切っている。建物内で検出された柱穴から 4 本柱の建物であると考えられる。平面・規模は東西 4.8m ×南北 5.0m の方形を呈し、床面までの深さは約 20cm で主柱穴間の距離は東西、南北ともに約 1.9 mで主柱穴の深さは 60cm 前後を測る。建物中央に一部焼土が確認されている事から炉跡と考えられる。その他に、南側で深さ 5cm 程度の周溝と東側で屋内土坑が検出されている。

出土遺物（第１７図、写真図版１９）

1 ～ 3 は土師器の甕である。1 の口縁部は直線的に外傾し立ち上がる。外面には被熱による剥離が見られる。2 の口縁部は外反して立ち上がる。3 は胴部である。4 は土師器の高坏の坏部で口縁部に向かって一度屈曲し、外傾しながら直線的に立ち上がり、端部付近で外反する。5・6 は土師器坏である。ともに直口縁で 5 は外傾し、直線的に立ち上がる。6 は口縁部付近でほぼ直立する。7 は土師器の甑である。多孔式で、底部に蒸気孔が 5 個ある。取手のつかない甑である。8 は弥生土器の甕で口縁部付近に刻み目が施される。9 は弥生土器の高坏の坏部で、口縁部に向かって内湾しながら立ち上がり口縁端部を摘み上げる。



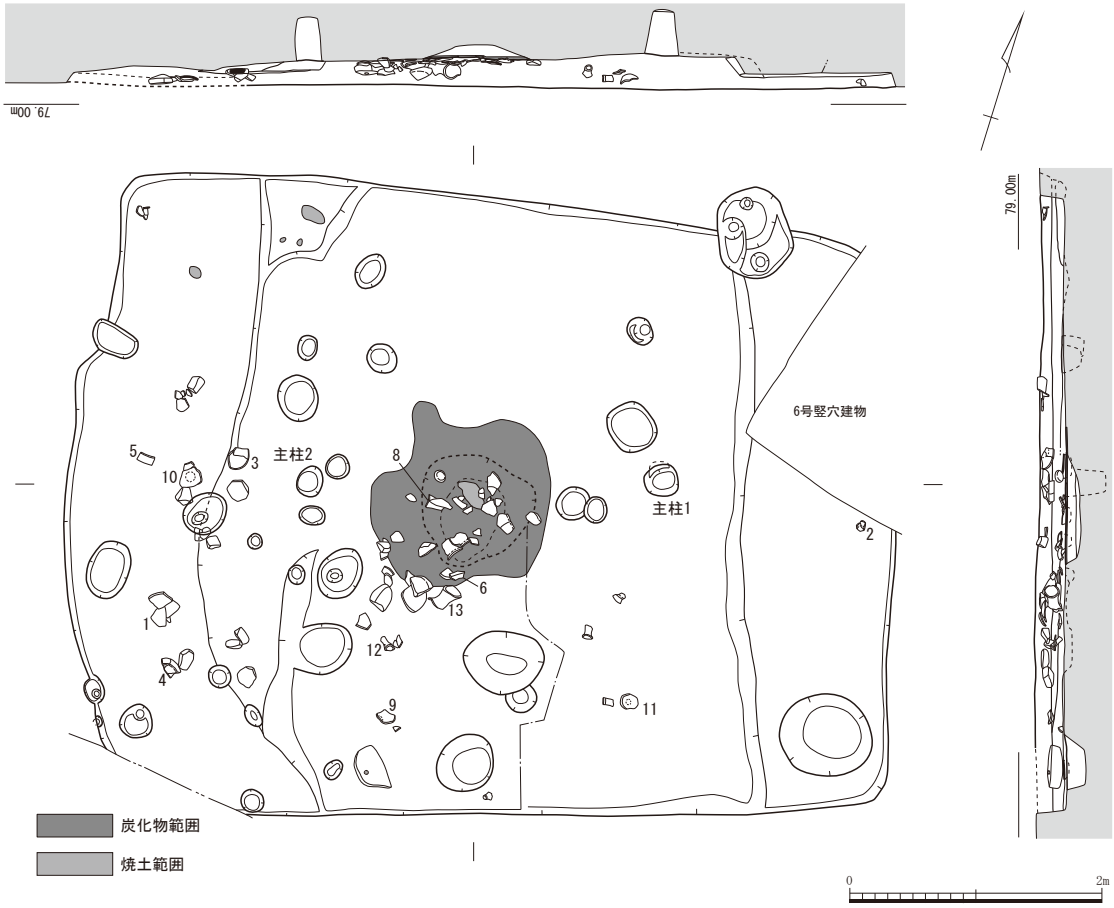
第１７図　６号竪穴建物出土遺物実測図（1/4）

7 号竪穴建物（第１８図、写真図版６）

調査区北側で検出されており、前述したように 6 号竪穴建物に西端の一部を切られている。建物内の柱穴の位置から 2 本柱の建物跡であると考えられる。平面・規模は東西約 6.4m ×南北 4.9m の方形を呈し、床面までの深さは 20cm 前後で主柱穴間の距離は約 2.8 mで主柱穴の深さは 40cm 前後を測る。建物中央に焼土・炭化物が検出されていることから炉を持つ建物であったと考えられる。また、東西に幅 1m 前後のベッド状遺構を有する。

出土遺物（第１９図、写真図版１９・２０）

1 ～ 4 は土師器の鉢である。1・2 は直口縁で口縁に向かってほぼ垂直に立ち上がる。ともに外面にススが付着する。3 は直口縁で外傾しながら直線的に立ち上がる。4 は口縁部が外反しながら外傾する。5 ～ 11 は弥生土器の甕である。5 の口縁部は外反しながらほぼ垂直に立ちあがる。頸部に刻み目突帯文が付く。6 の口縁部は



第１８図　７号竪穴建物実測図（1/60）

短く外反し、頸部に刻み目突帯文が付く。7 は胴部に穿孔が 1 個あり、底部は平底を呈する。外面にはススが付着する。8 ～ 11 は平底を呈する。8 は外面に被熱による赤化が見られる。12 は弥生土器の高坏で脚部に穿孔が 3 個ある。13 は弥生土器の器台である。外面底部付近ではタタキが施される。また、被熱による赤化がみられる。14 は鉄鏃と考えられる。先端部は欠損している。

8 号竪穴建物（第２０図、写真図版６）

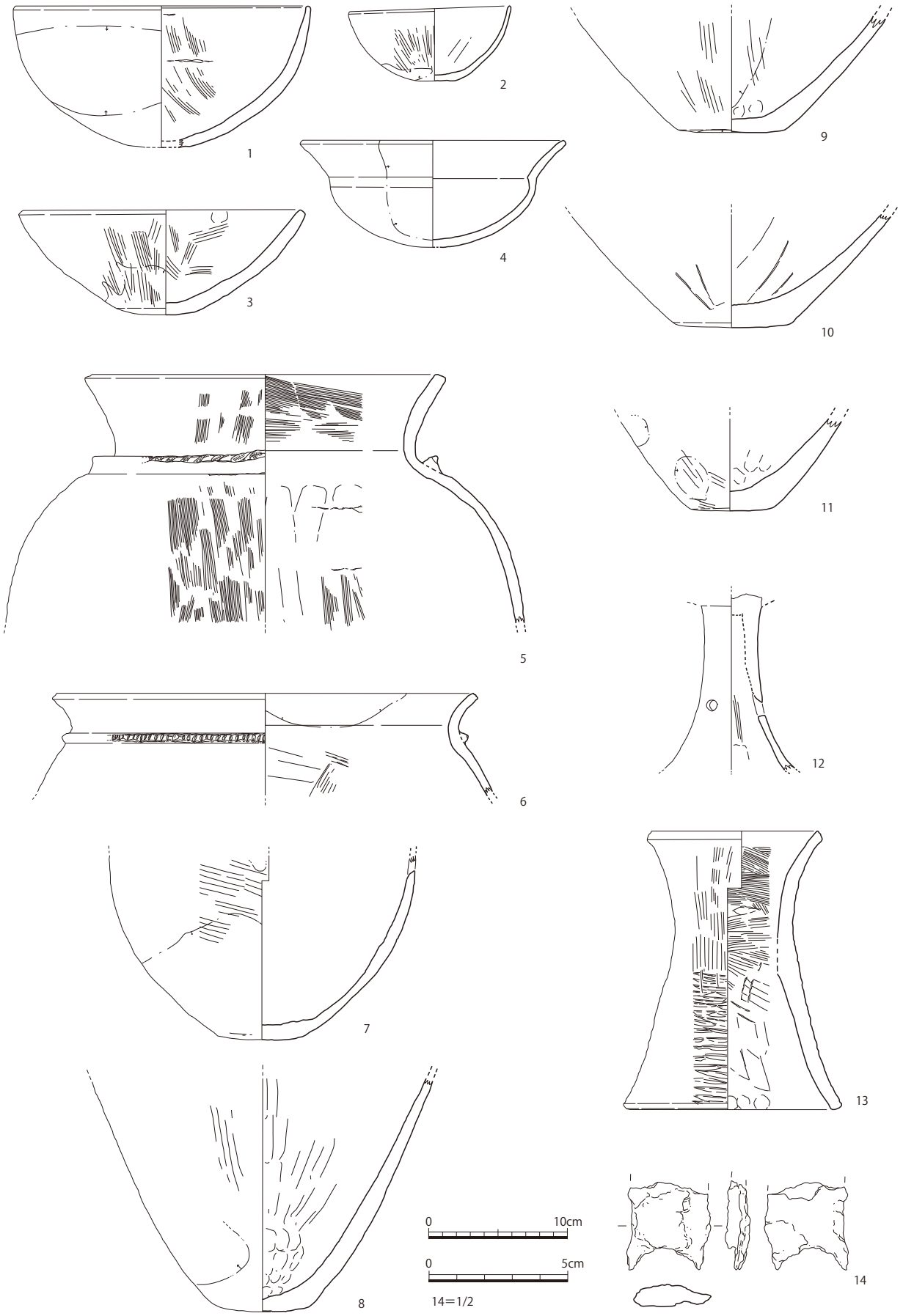
調査区北側で検出された。6 号溝状遺構の一部を切り、6 号竪穴建物によって南東隅を切られている。建物内の柱穴の位置から 2 本柱と考えられる。平面・規模は東西約 5.6m ×南北 4.8m であるが、調査時に西側の一部を掘りすぎてしまった為、平面が不定形を呈しているが、従来は方形に近いものであったと考えられる。床面までの深さは 10cm 未満と非常に浅い。主柱穴間の距離は約 1.9m で主柱穴の深さは約 60cm を測る。建物中央に深さ 10cm 程度の土坑（凹み）が検出されている。焼土等は確認されていないが、中央炉の可能性が考えられる。また、南端には屋内土坑を有し、この土坑内からは少量であるが焼土が検出されている。

出土遺物（第２１図、写真図版２０）

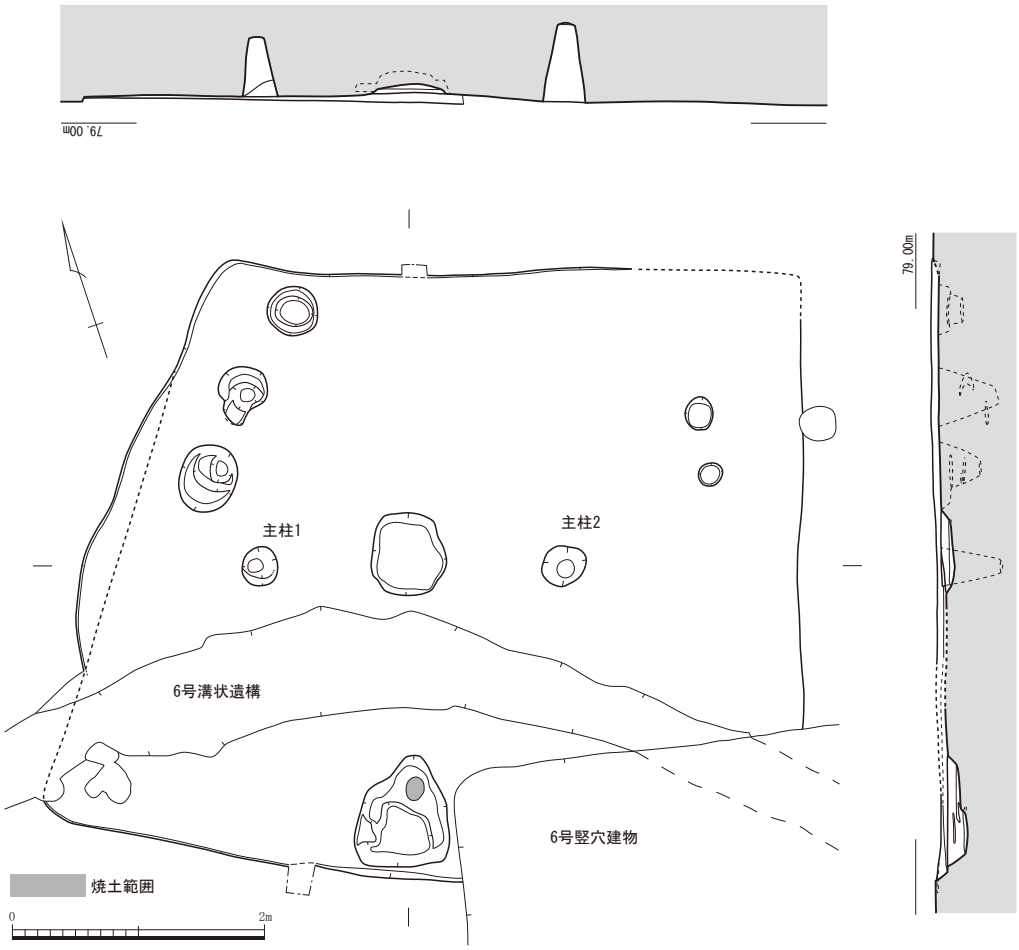
1 は土師器の甕底部で外底部付近にススが付着する。屋内土坑より出土している。2 は土師器の高坏脚部である。内面にススが付着する。

9 号竪穴建物（第２２図、写真図版６）

調査区北側で検出された。大きく削平を受けており、床面はほとんど残っていないが、わずかに残った部分と

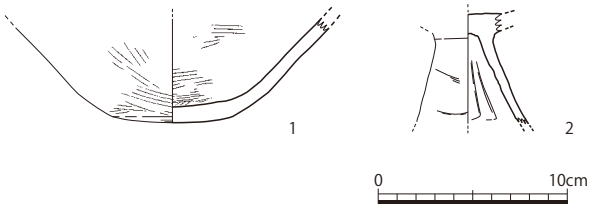


第１９図　７号竪穴建物跡出土遺物実測図（1/2、1/4）



第２０図　８号竪穴建物実測図（1/60）

柱穴から２本柱の建物であったと考えられる。平面・規模は（推定）南西-北東約5.2m×北西-南東約4.2mで床面までの深さは１０cm未満で、建物内中央に一部焼土が確認された事から中央炉の可能性が考えられる。南東端に屋内土坑を有し、土坑内からは甕が出土している。また、南西端では推定のラインより1m内側で若干の段差がある事から、ベッド状遺構を有していた可能性が考えられる。



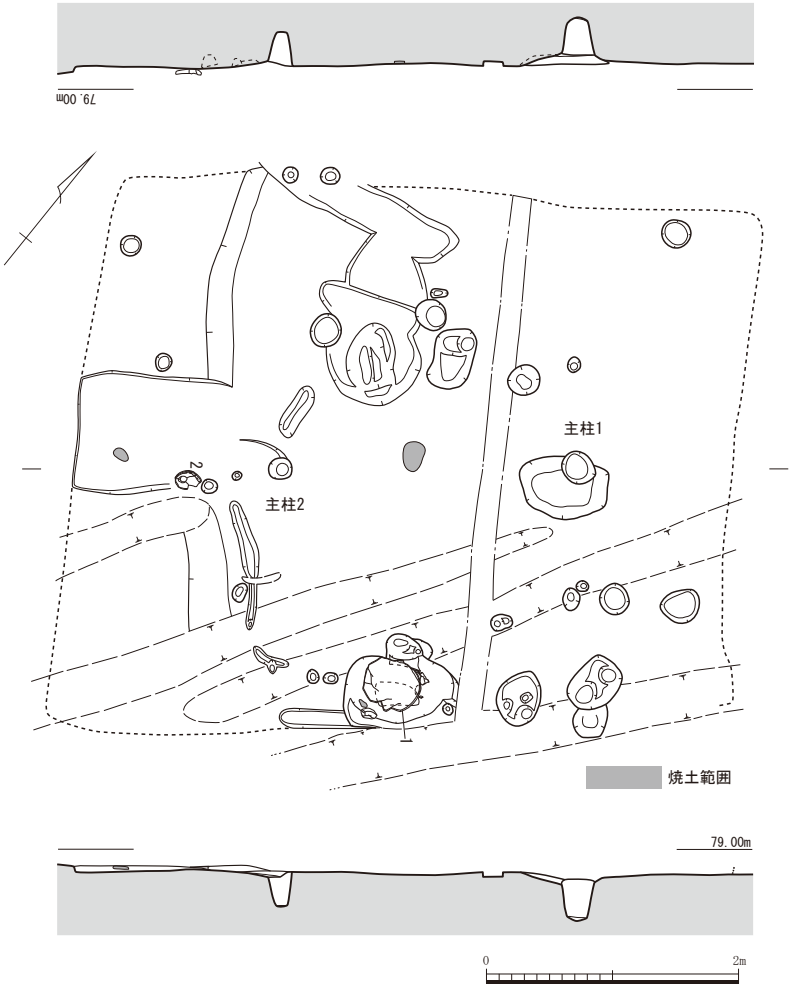
第２１図　８号竪穴建物出土遺物実測図（1/4）

出土遺物（第２３図、写真図版２０）

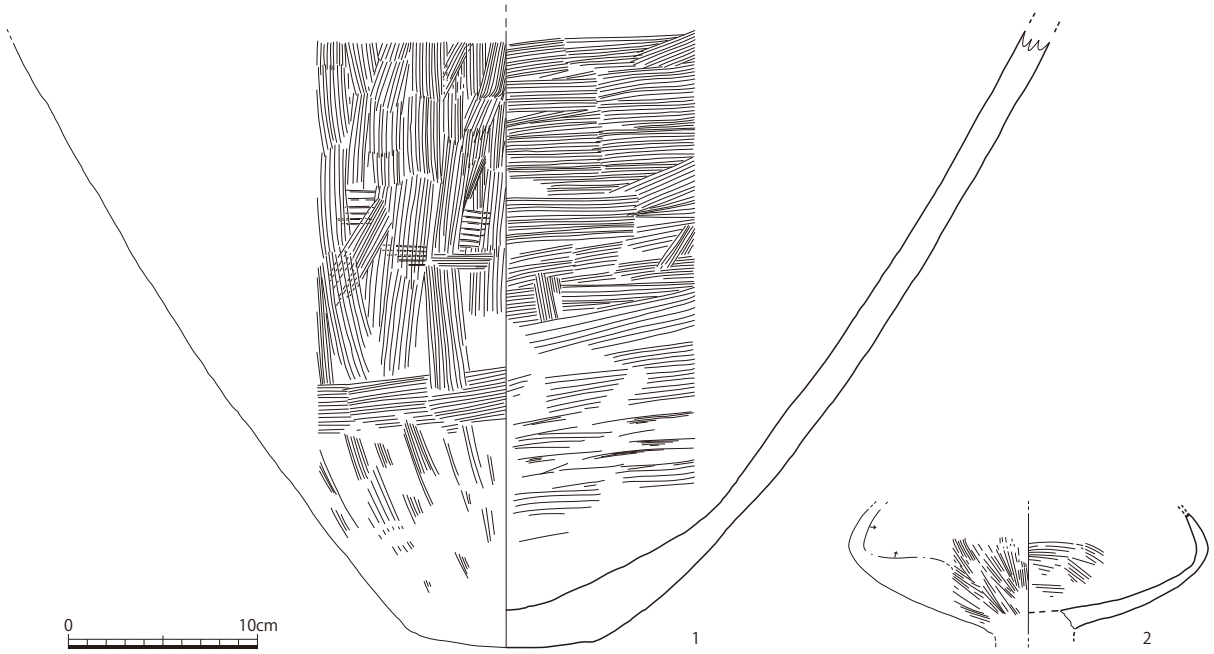
１は弥生土器の甕である。内外面共にハケ目が施されており、ススが付着する。また底部は平底である。２は弥生土器の高坏の坏部である。口縁部に向かって内湾しながら立ち上がる。

10号竪穴建物（第２４図、写真図版６）

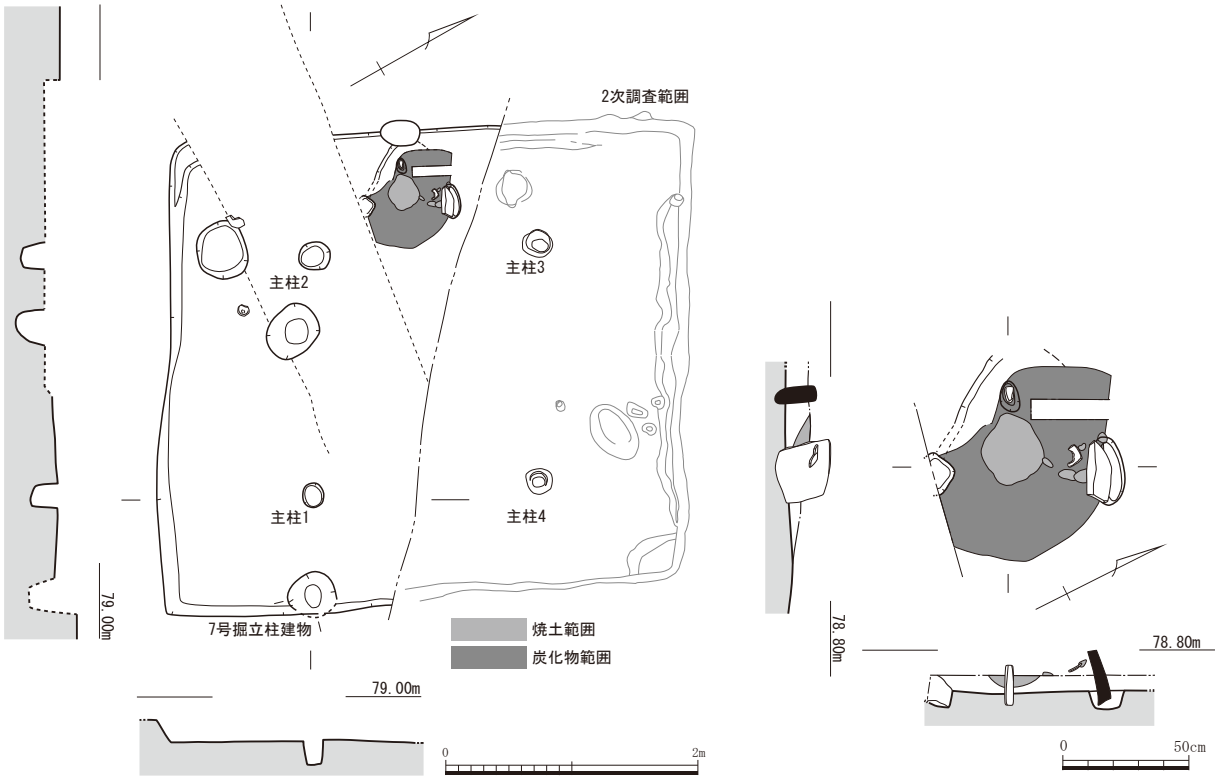
調査区北東側で検出された。北側半分が調査区外に伸びており、この北側半分は花ノ木遺跡２次調査区の１号竪穴建物として報告している。中央部は撹乱を受けている。建物内の柱穴の位置から４本柱と考えられる。平面・規模は前回の２次調査の成果とあわせて南北4.0m×東西3.5mの方形で、床面までの深さは約20cmを測る。北



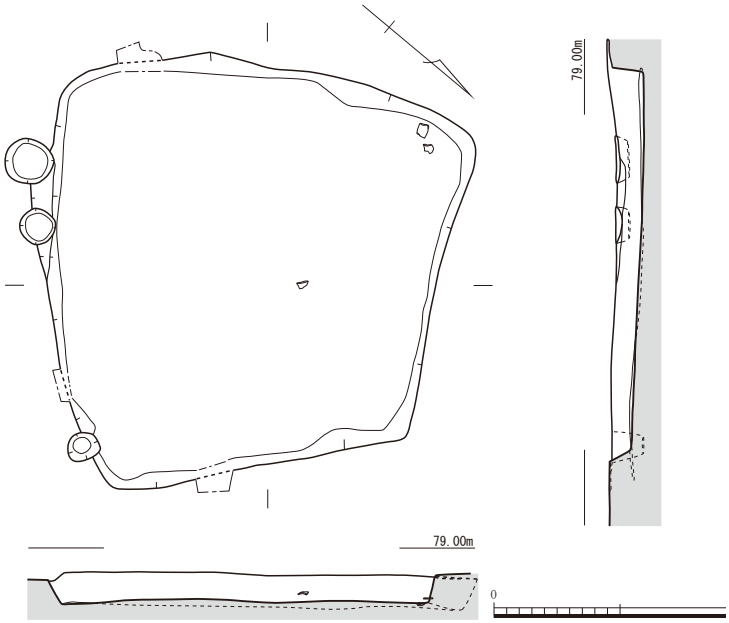
第２２図　９号竪穴建物実測図（1/60）

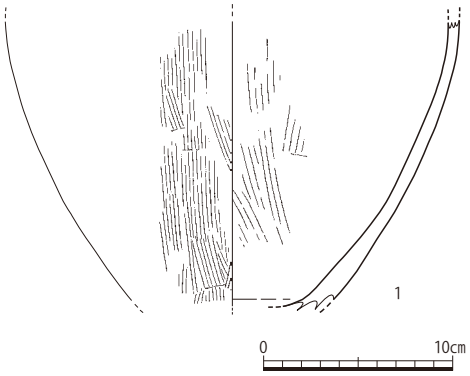


第２３図　９号竪穴建物出土遺物実測図（1/4）



第２４図　10 号竪穴建物実測図（1/60）、カマド個別実測図（1/30）



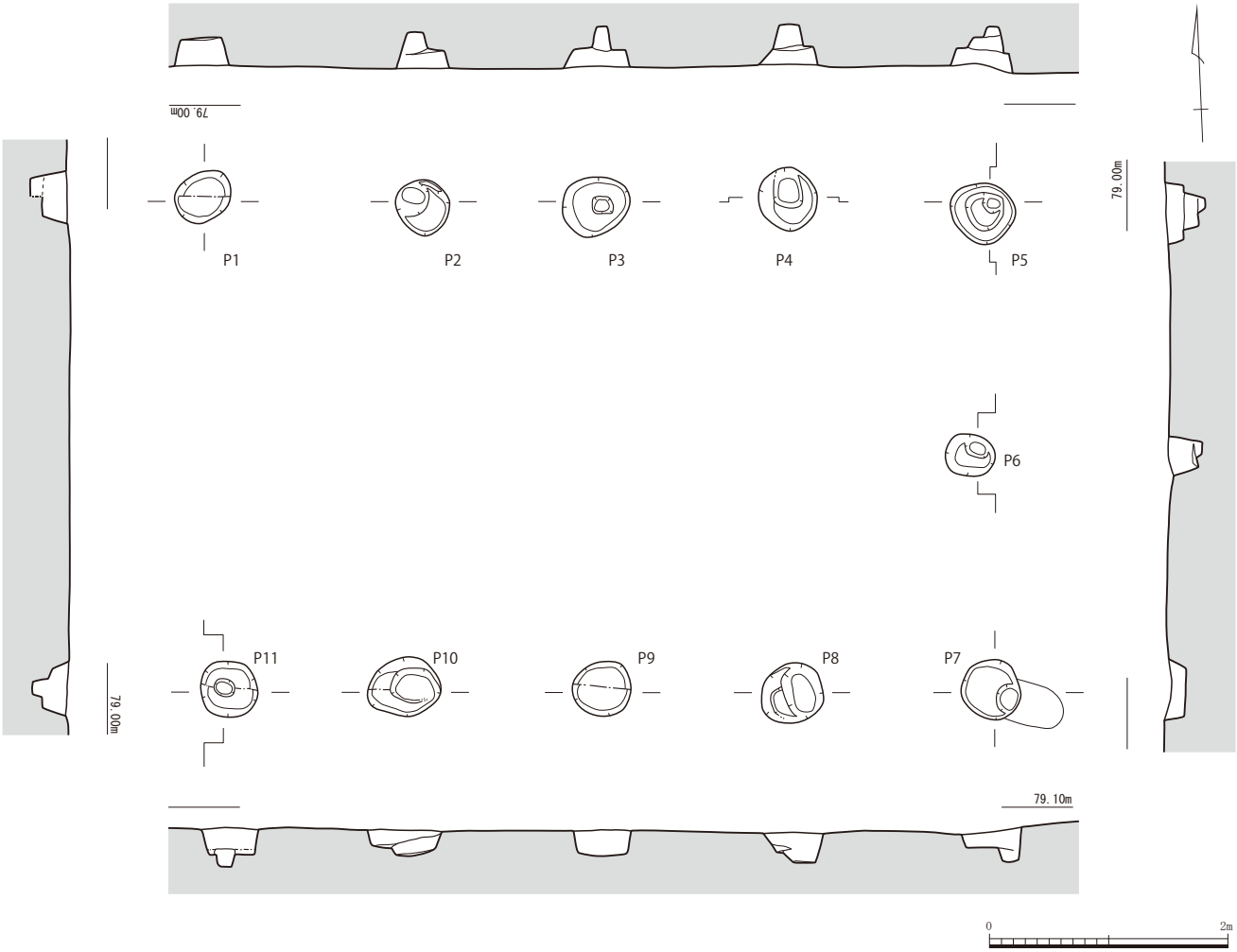


第２５図　11 号竪穴建物実測図（1/60）　　第２６図　11 号竪穴建物出土遺物実測図（1/4）

西端にカマドが敷設される。袖石、支脚が残っており、袖は左側（南側）だけ残っていたが、天井石は残っていなかった。袖の長さは左右とも約 60cm で袖石間は約 80cm を測る。支石手前に焼土が検出されており火床面と考えられる。また、右側の袖が検出されなかった事、焼土を含んだ炭化物が袖を超えて右側に広がっている事から右袖はカマド廃棄時に破壊されたものと考えられる。２次調査区では東壁付近で炭化物が出土している。

出土遺物

少量の土器片が出土しているものの、図示できる遺物はなかった。しかし、２次調査の範囲では概ね古墳時代

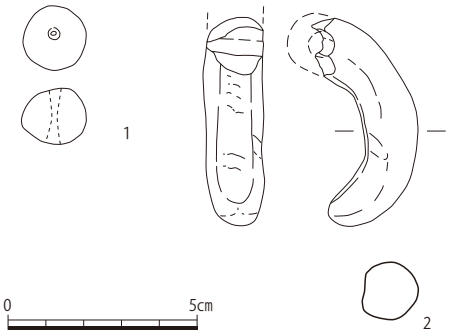


第２７図　１号掘立柱建物跡実測図（1/60）

中期頃の坏や高坏が多く出土している。また、中央を切る撹乱より土製模造鏡が出土しており、10 号竪穴建物の遺物である可能性が考えられる。

11 号竪穴建物（第２５図、写真図版６）

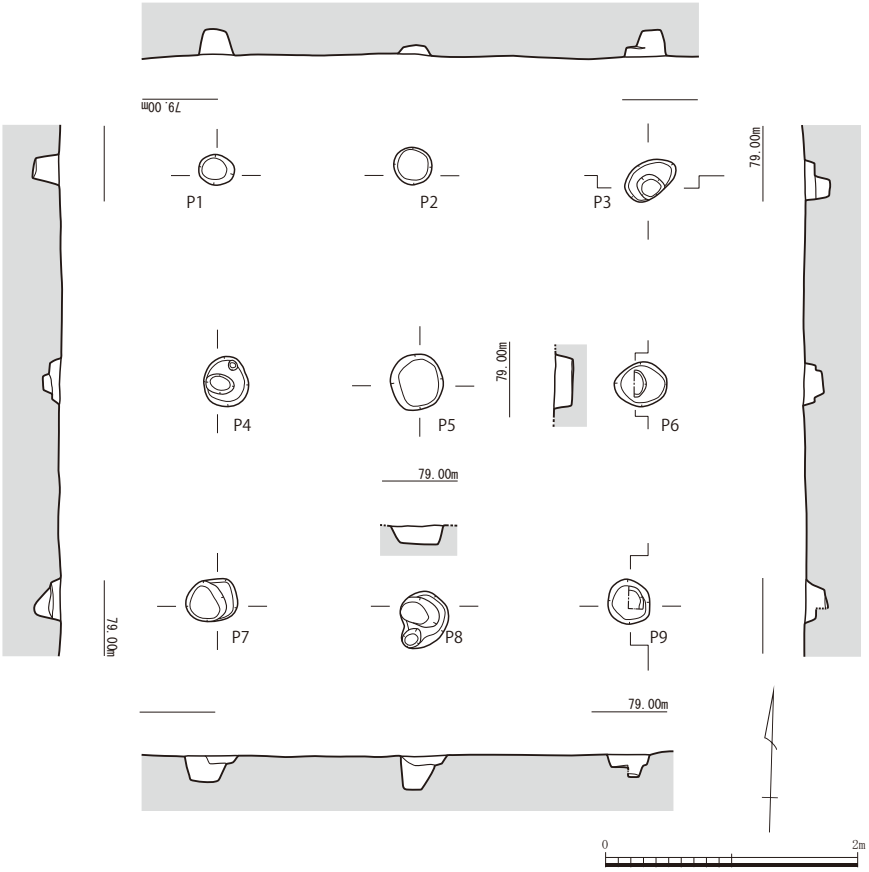
調査区北側で検出された。6 号竪穴建物のすぐ東側に位置し、6 号溝状遺構を一部切っている。平面・規模は北西 - 南東 3.2m ×南西 – 北東 3.0m の方形で床面までの深さは 20cm 前後を測る。主柱穴と考えられるようなピットが周辺を含め確認されず、焼土・炭化物など炉跡を示すようなものは検出されていない。



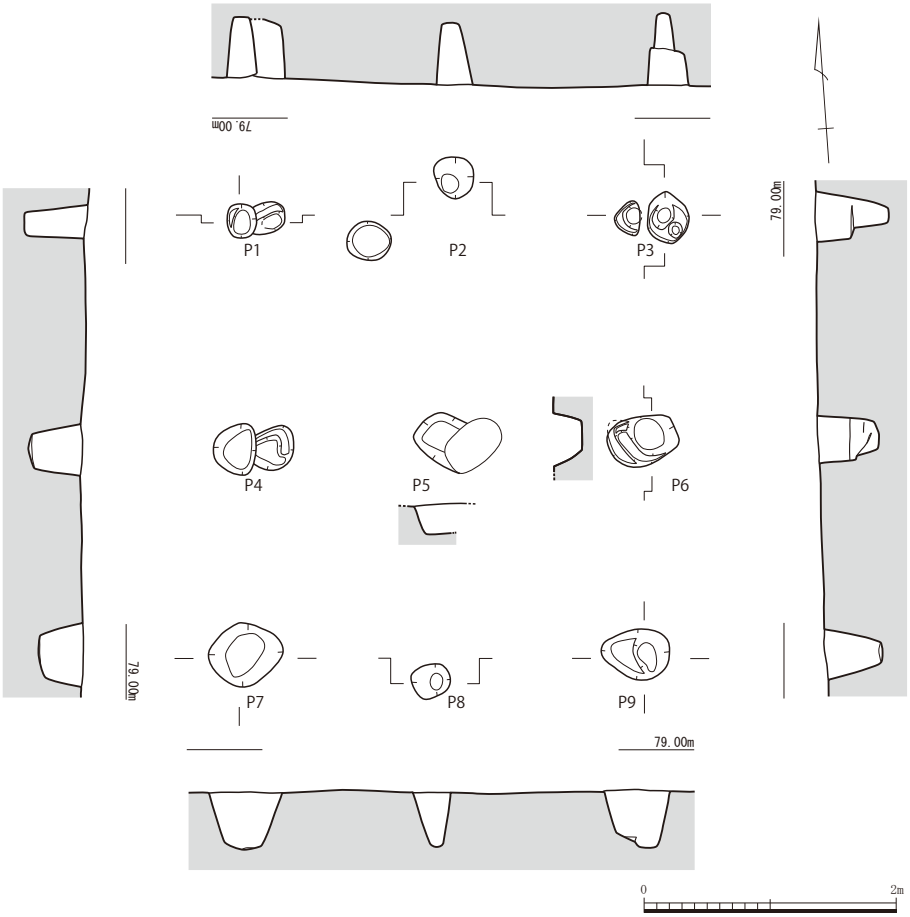
第２８図　１号掘立柱建物
出土遺物実測図（1/2）

出土遺物（第２６図、写真図版２０）

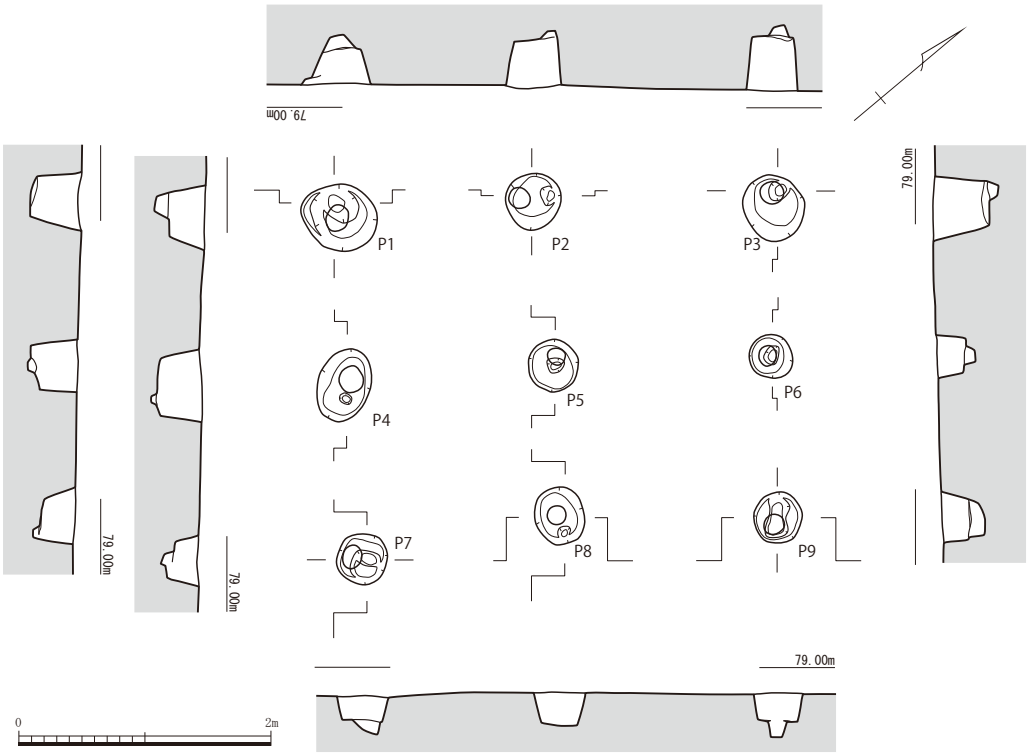
1 は弥生土器の甕である。内外面にハケ目調整が施される。外面には剥離が見られる。



第２９図　２号掘立柱建物実測図（1/60）



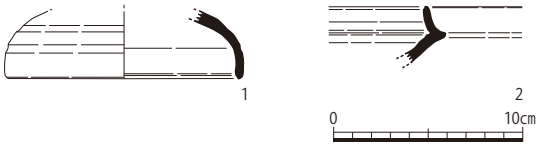
第３０図　３号掘立柱建物実測図（1/60）



第３１図　４号掘立柱建物実測図（1/60）

２．掘立柱建物

調査区全体で掘立柱建物と確認する事ができたのは９棟である。調査区全体で多数のピットが確認されている事から、これ以外に掘立柱建物があった可能性も考えられる。検出された掘立柱建物は、東西に軸を持つ１・９号と南北に軸を持つ２・３・６号（総柱建物）、北東 - 南西に軸を持つ４・５・７（総柱建物）・８号に分かれる。また、１～３号掘立柱建物と５～７号掘立柱建物は比較的に近い位置にあるものの、それぞれに規則的な配置を確認する事はできなかった。出土遺物は総じて少なく、時期比定は難しいが、いずれも古墳時代後期～古代頃と想定される。



第３２図　４号掘立柱建物出土遺物実測図（1/4）

１号掘立柱建物（第２７図、写真図版６）

調査区中央よりやや北側で検出された。東西方向に軸をとる。遺構西側では梁行方向の柱穴が検出できなかったが２間× ４間の掘立柱建物と考えられる。

桁行方向の柱穴間の距離は約 1.6m で梁行方向の柱穴間の距離は約 2.0m を測り、心々距離で東西長軸約 6.6m、南北短軸約 4.2m、柱穴の深さは 40cm 前後を測る。

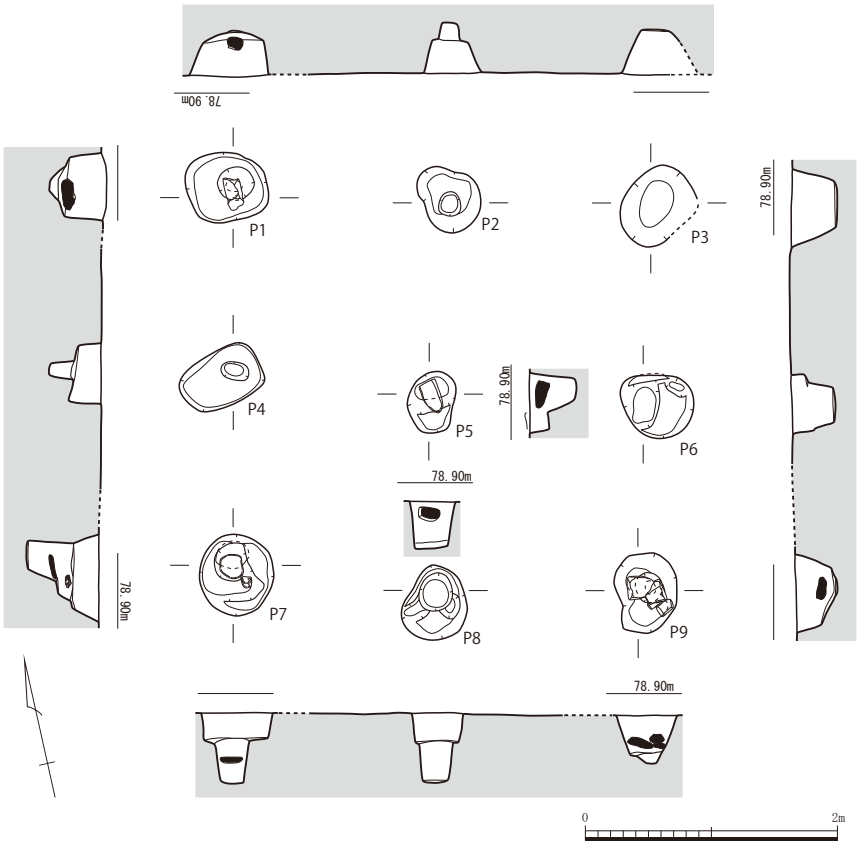
出土遺物（第２８図、写真図版２０）

１は土玉である。両端より穿孔されている。２は土製の勾玉である。端部が欠損しているが、穿孔の一部が確認できる。いずれも P4 で出土している。

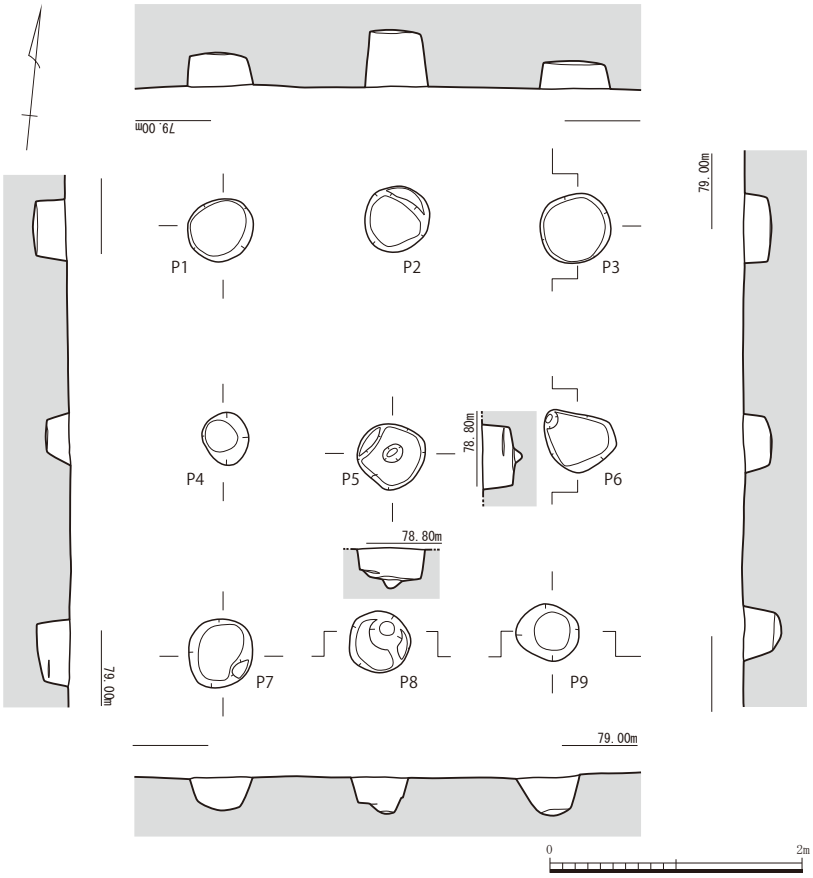
２号掘立柱建物（第２９図、写真図版７）

調査区中央よりやや北側で１号掘立柱建物の西側に隣接して検出された。２間× ２間の総柱建物である。柱穴間の距離は 1.6 ～ 1.8m で、心々距離は東西長軸で約 3.5m、南北短軸約 3.4m、柱穴の深さは 20 ～ 30cm を測る。

少量の土器片が出土しているものの図示できる遺物は出土しなかった。



第３３図　５号掘立柱建物実測図（1/60）



第３４図　６号掘立柱建物実測図（1/60）

3 号掘立柱建物（第３０図、写真図版７）

調査区中央よりやや北側、1 号掘立柱建物より東側で検出された。2 間× 2 間の総柱建物である。柱穴間の距離は約 1.8m で心々距離は南北長軸約 3.5m、東西短軸で約 3.4m で柱穴の深さは 50 ～ 60cm を測る。

少量の土器片が出土するものの図示できる遺物は出土しなかった。

4 号掘立柱建物（第３１図、写真図版７）

調査区北側、2 号竪穴建物の南東隅を切る形で検出された 2 間× 2 間の総柱建物跡である。柱穴間の距離は東北－南西 1.4m、北西－南東 1.9m で心々距離は南北長軸 3.6m、東西短軸 2.6m で柱穴の深さは 30 ～ 50cm を測る。

出土遺物（第３２図、写真図版２１）

1 は須恵器の坏蓋である。口縁部に向かって垂直に降りる。内外面とも調整は不明瞭である。2 は須恵器の坏身である。口縁部は外反しながらほぼ垂直に短く立ち上がる。いずれも P2 より出土している。

5 号掘立柱建物（第３３図、写真図版７）

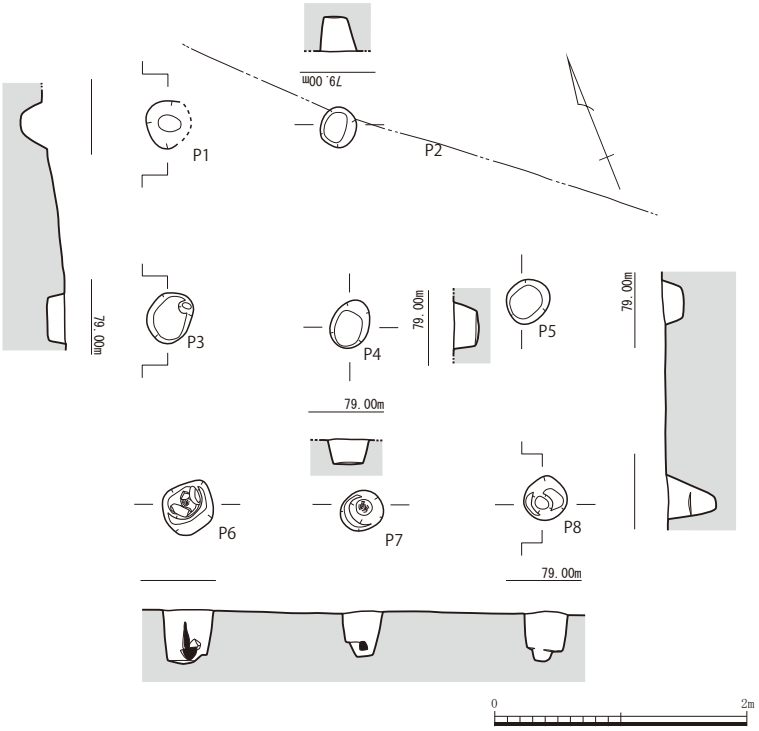
調査区東側で検出された 2 間× 2 間の総柱建物である。一部、6 号掘立柱建物によって切られている。柱穴間の距離は 1.8m で心々距離は長軸・短軸ともに 3.4m で柱穴の深さは 40cm 前後を測る。P1・5・9 からは根締め石と思われる石が出土している。

少量の土器片が出土するものの図示ができる遺物は出土しなかった。

6 号掘立柱建物（第３４図、写真図版７）

調査区東側、5 号掘立柱建物と隣接して検出された 2 間× 2 間の総柱建物である。5 号掘立柱建物の一部を切っている。柱穴間の距離は東西で 1.4m、南北で 1.8m、心々距離は南北長軸で 3.6m、東西短軸で 2.8m で柱穴の深さは 20 ～ 40cm を測る。

少量の土器片が出土するものの、図示できる遺物は出土しなかった。



第３５図　７号掘立柱建物実測図（1/60）

7 号掘立柱建物（第３５図、写真図版７）

調査区東側、10 号竪穴建物の一部を切る形で検出された 2 間× 2 間の総柱建物と考えられる。柱穴の一部が調査区外に伸びるものの同年に調査した花ノ木遺跡 2 次では、この続きを確認する事はできなかった。柱穴間の距離は 1.5m 前後で心々距離は 3.0m 前後、柱穴の深さは 20 ～ 40cm を測る。P6・7 からは根締め石と思われる石と柱木が出土している。

少量の土器片が出土するものの図示できる遺物は出土しなかった。

8 号掘立柱建物（第３６図、写真図版７）

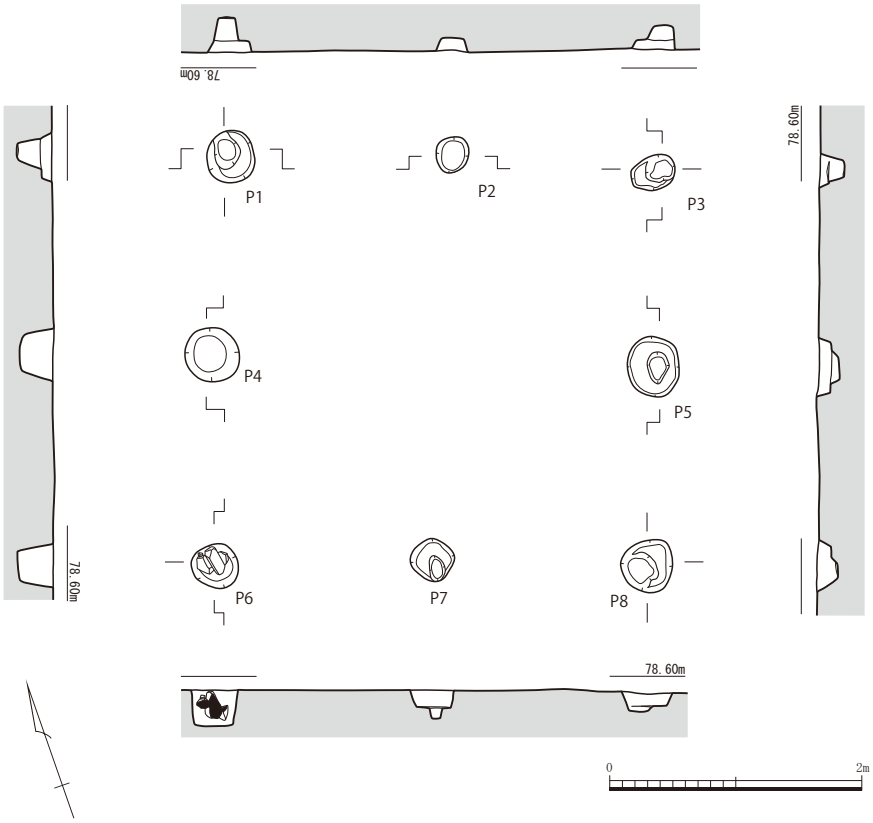
調査区のほぼ中央で検出された 2 間× 2 間の掘立柱建物である。その他の掘立柱建物から離れた位置で検出され、7 号溝状遺構の一部を切っている。調査時に中央の柱穴を検出する事ができなかった事から、総柱建物ではなく、側柱建物と考えられる。柱穴間の距離は南北 1.6m で東西 1.7m、心々距離は南北短軸で 3.2m、東西長軸で 3.4 m、柱穴の深さは 20 ～ 30cm を測る。

少量の土器片が出土するものの図示できる遺物は出土しなかった。

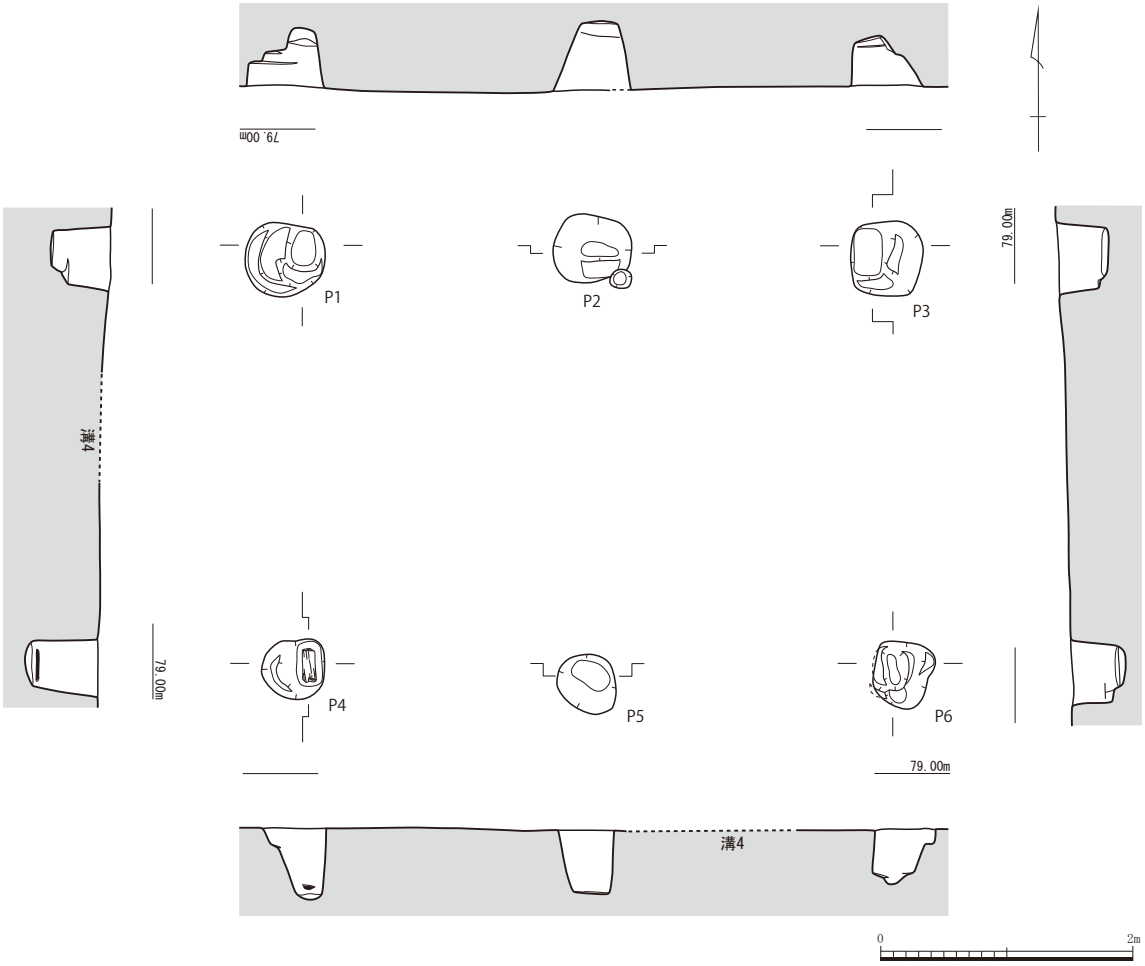
9 号掘立柱建物（第３７図、写真図版７）

調査区東側で検出された 2 間× 1 間の掘立柱建物である。東西方向に軸をとる。柱穴間の距離は東西約 2.2m、南北約 3.4m で心々距離は東西長軸で 4.4m、南北短軸で 3.4m、柱穴の深さは 40 ～ 50cm を測る。P4 からは礎板と考えられる木製の板が出土している。

少量の土器片が出土するものの図示できる遺物は出土しなかった。



第３６図　8 号掘立柱建物実測図（1/60）

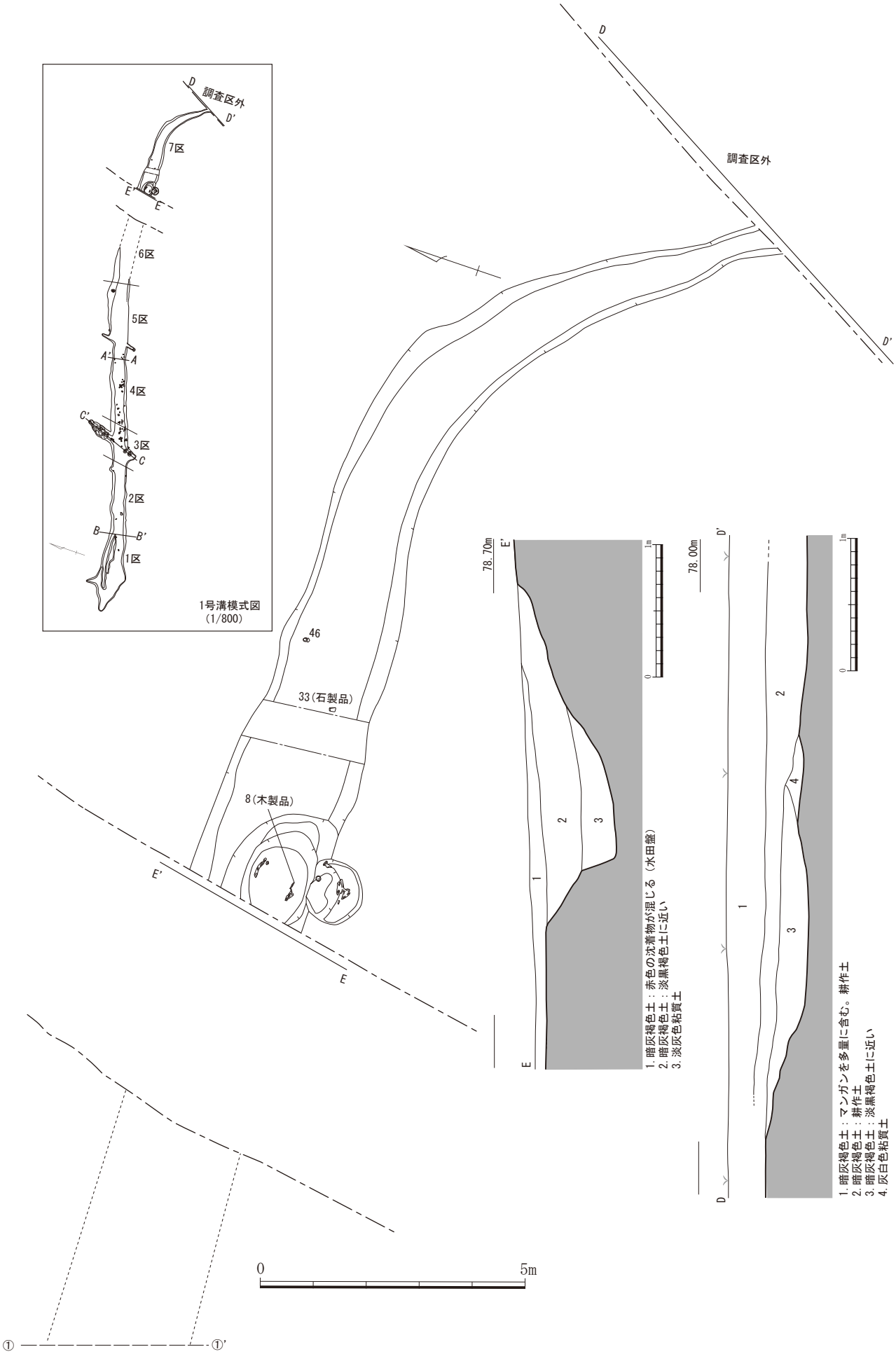


第３７図　９号掘立柱建物実測図（1/60）

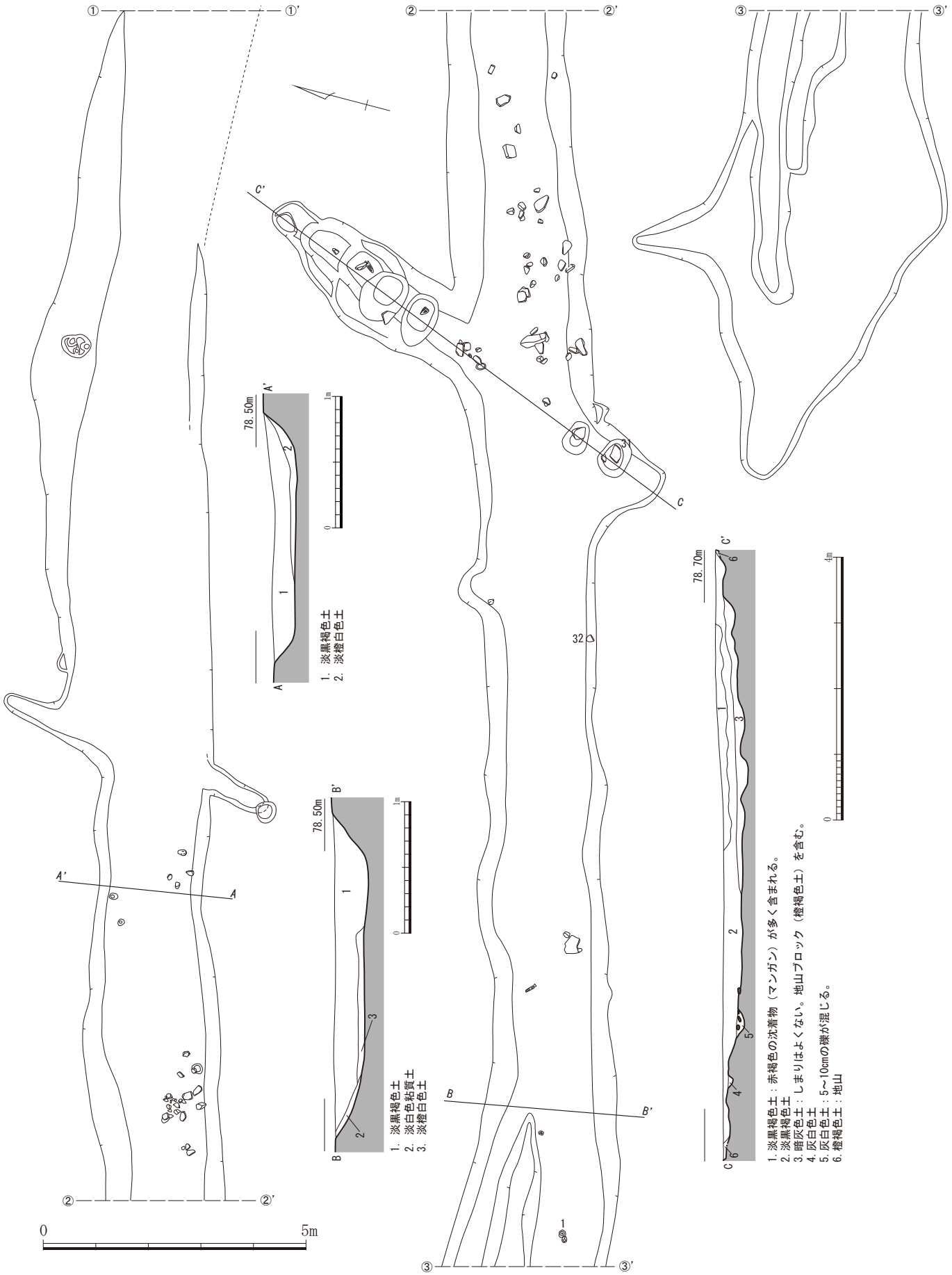
３．溝状遺構

調査区全体で８条確認されている。その内、軸の方向から東西に伸びる１・２・５・７号溝と南東から北西に伸びる３・４号溝、調査区北端で検出され北東から南西方向に伸びると考えられる８号溝、そして７号竪穴建物の周囲を巡る６号溝に分ける事が出来る。また、断面形状では１・２・５・８号溝状遺構の船底形状と３・４・６・７号溝状遺構の逆台形状に分けることが出来る。１・２・５号溝状遺構は溝幅 (1 ～ 2m) に対して深さが 20㎝前後と浅く、３・４・６・７号溝状遺構は溝幅 (約 50㎝前後) に対して深さが 30㎝前後と深い。これら軸方向や断面形状の違いはそれぞれ時期差などを反映している可能性が考えられる。

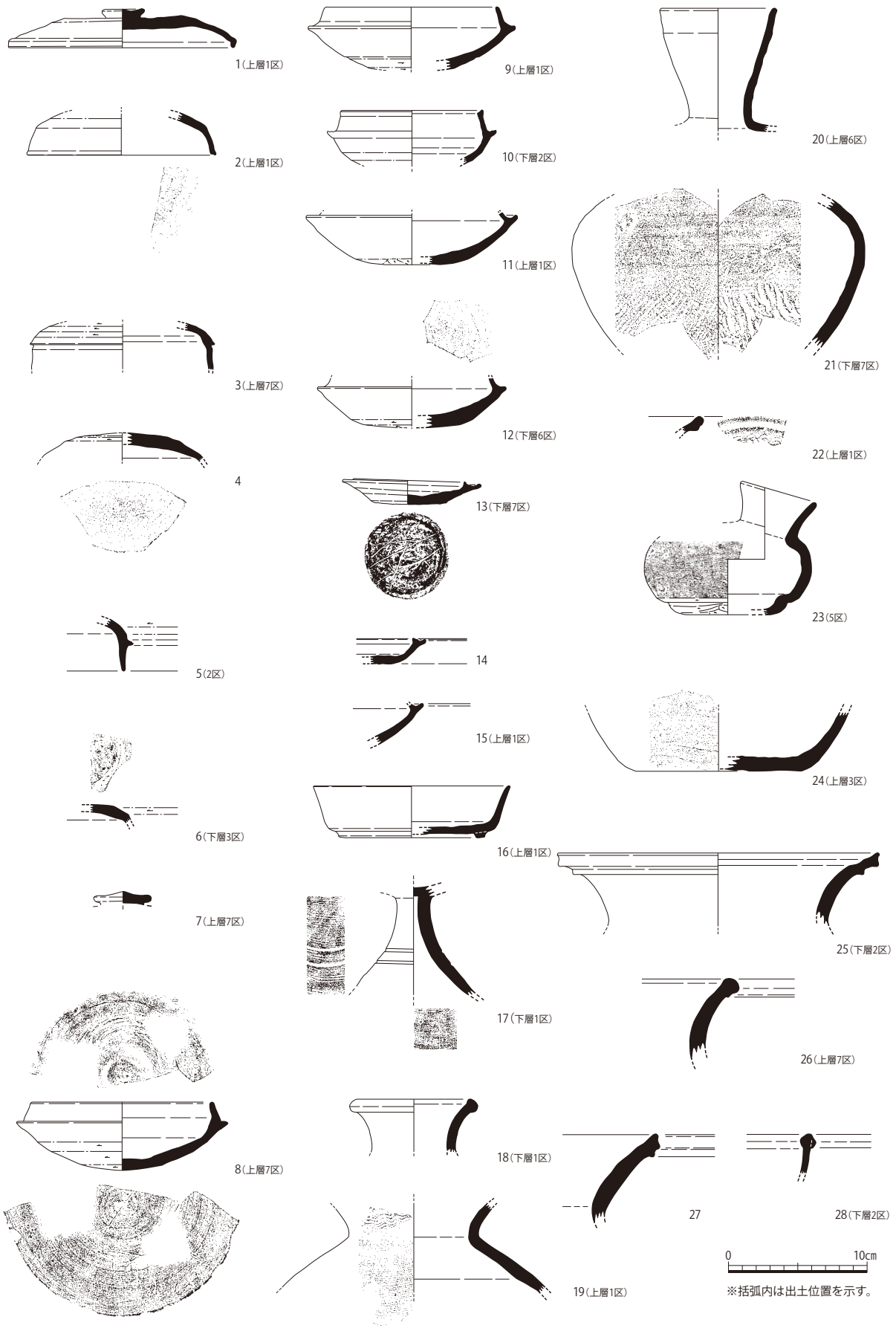
なお、１・２号溝状遺構は調査区東端で切り合っていた可能性があるが、調査時に担当が掘り過ぎてしまったため、切り合い関係などは分からなくなってしまっている。３・６号溝状遺構は途切れているが、幅、断面形状や遺物の時期が近いことから一連の遺構であった可能性が考えられる。５・７号溝状遺構はほぼ平行して検出されており同時期の遺構である可能性がある。全体の規模に関しては、そのほとんとが東側は調査区外へ、西側は近世以降の削平を受けているため、その全容を確認することはできなかった。それぞれの時期に関しては、出土遺物や切り合い関係から弥生時代後期、古墳時代後期～古代の２時期が想定される。



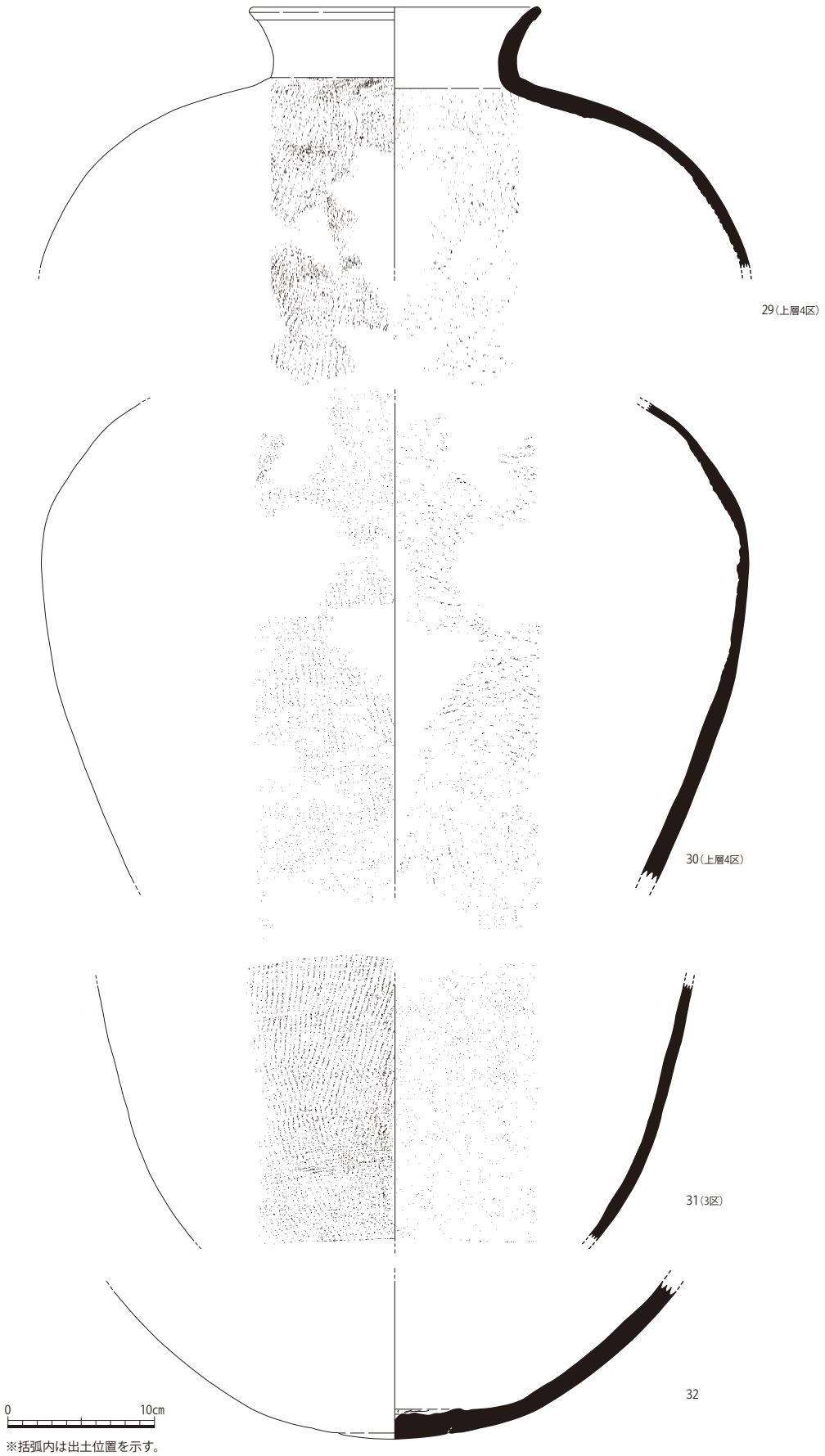
第３８図　１号溝状遺構・土層実測図１（1/100・1/40）



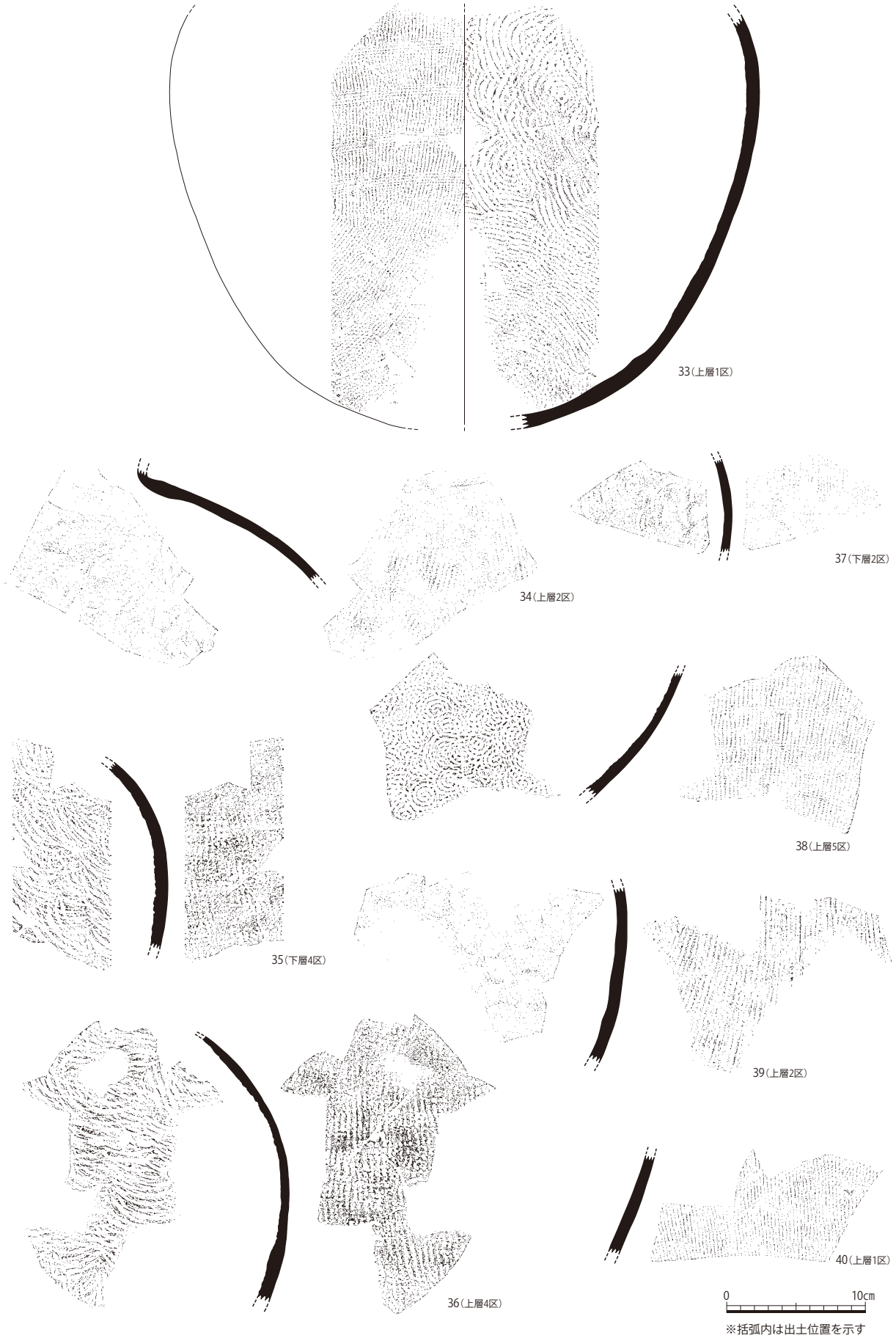
第３９図　１号溝状遺構・土層実測図２（1/100・1/40・1/80）



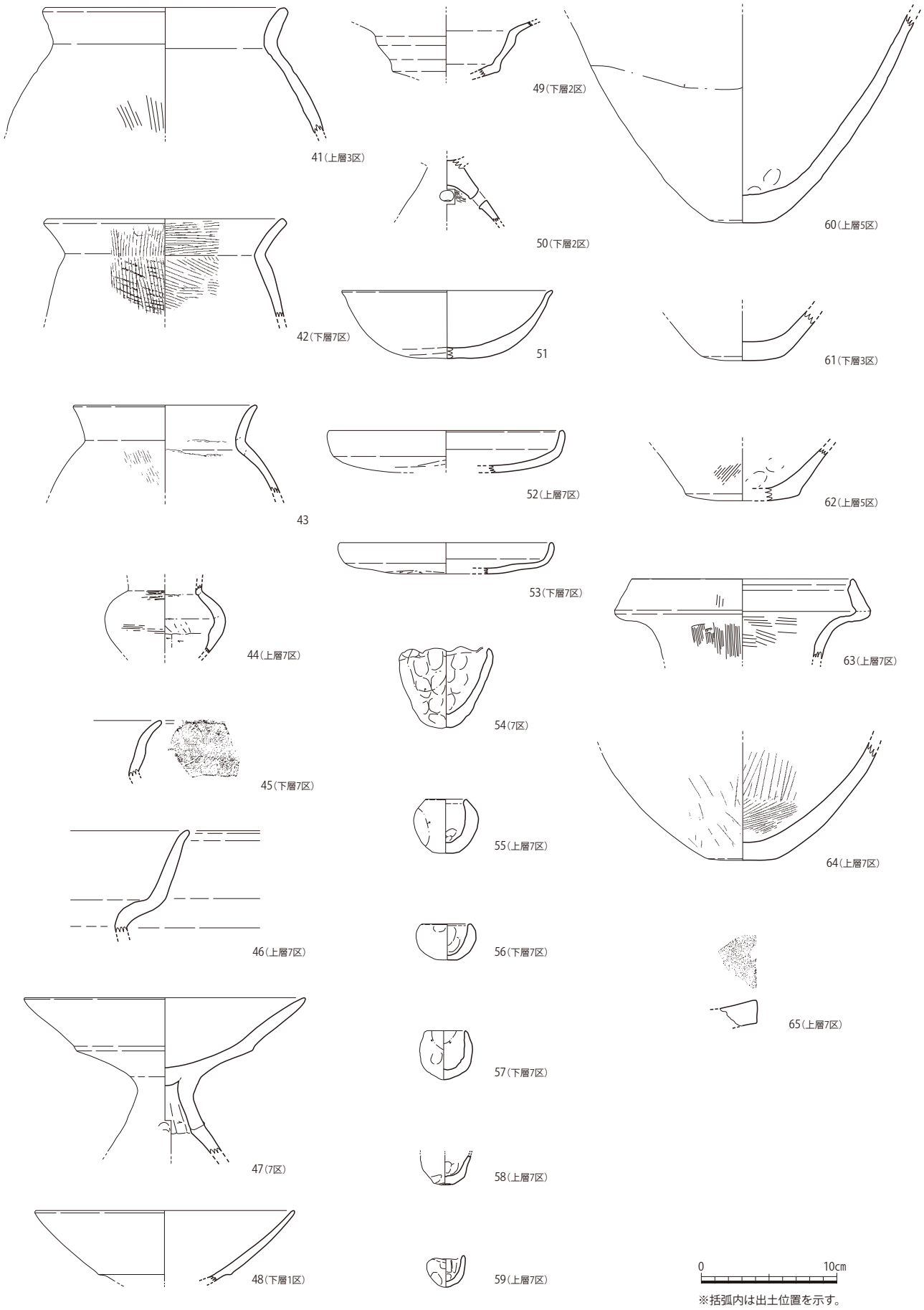
第４０図　１号溝状遺構出土遺物実測図１（1/4・1/2）



第４１図　１号溝状遺構出土遺物実測図２（1/4）



第４２図　１号溝状遺構出土遺物実測図３（1/4）



第４３図　１号溝状遺構出土遺物実測図４（1/4）

1号溝状遺構（第３８・３９図、写真図版８）

調査区中央で検出される。調査区を東から西に向かって横断している溝である。調査区内の長さは 75 m＋α で幅は 2.0 m前後で深さは平均で 20㎝～ 30㎝前後、最も深い所では約 50㎝を測る。水の流れは、東から西に向かって流れていたと考えられる。西に向かうほど後世の削平の影響を強く受け、途中で途切れる為、全体を確認することはできなかった。東端では、大きく南に曲がる状況が見られた。これは、調査区より東が台地の斜面になっているため、地形にそって曲げられたものと考えられる。遺構の西端より約 5 m、25 m、42m の地点でそれぞれ南北に幅 5.5 m、9m、5.5m ほどの張り出し部が見られる。土層の堆積状況より下層から粘質土が出土していること、暗褐色土が厚く堆積していることから流れが緩やかで、長い時間をかけて埋没したものと考えられる。また、３ヶ所の張り出し部は南から北に向かって緩やかに傾斜しており、柱穴など井堰の痕跡は見られないものの、その形状から水田に水を引くための水口であったと想定しておく。張り出し部間の距離は約 16m でこれらを水田に伴う水口と考えると当時の水田規模を想定することができる。また、この張り出し部周辺からは、礫などに混じって多くの土器が出土していることから、張り出し部周辺では水が一時的に溜まるような状況であった可能性がある。この他に、図示した木製品 (第 81 図 8) の周辺から少量であるが種実が出土している。

出土遺物（第４０～４３図、写真図版２１～２３）

出土遺物の位置に関して模式図を用いて説明を行う。上・下層に関しては、層序ごとに定めたものではなく、遺構検出面から底部までを大きく 2 分割したものである。

上層からは 1・2 などの須恵器坏蓋や 8・9・11・13 などの須恵器坏身をはじめ、23 などの提瓶や 31 や 33 などの須恵器甕が出土しているほか、41 や 47 の土師器甕や高坏の他に 52 などの土師器の皿や 55 などのミニチュア土器なども出土している。また、60 などの弥生土器も出土している。

下層からは 10・12 などの須恵器坏身や 17 の高坏や 18 の壷や 25 などの甕が出土している。他、42・45 などの土師器甕や壷、53 の土師器皿や 56・57 などのミニチュア土器も出土している。また、上流側の 5 ～ 7 区からは須恵器坏身や坏蓋のほか、土師器の甕や高坏、弥生土器やミニチュア土器が出土している。下流側の 1 ～ 4 区からも上流側と同様の遺物が出土している。この他、水口のある 3 ・ 4 区周辺では、須恵器の甕が多く出土するのが特徴として挙げられる。一部で弥生土器などが出土しているものの、これらは切り合いが想定される 5・6 区周辺で見られることから、周囲からの流れ込みと考えられる。全体を通して、大きな時期差はないと考えられる。

以下、番号順に説明を行う。

1 ～ 7 は須恵器の坏蓋である。1 は摘みが残り、口縁端部は下方に摘み下げる。2 の内面にはヘラ記号があり、口縁部にはスミが付着する。4 は内面に、6 の外面ヘラ記号が施される。7 は摘み部分のみ残存している。8 ～ 15 は須恵器の坏身である。8 は受け部を持ち、口縁は内傾しながらほぼ垂直に立ち上がる。また、外面底部にヘラ記号が施される。9 の口縁部は屈曲し垂直に立ち上がる。10 の口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部で摘まみ上げている。12 は内面底部にヘラ記号が施される。13 の外面底部にはヘラ記号が施される。口縁部の立ち上がりがほとんど無い。14・15 は坏身片である。16 は須恵器の坏である。高台を持ち、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。17 は須恵器の高坏脚部である。内面に工具痕が残る。18 ～ 21 は須恵器の壷である。18 は口縁部で外反しながら立ち上がり、口縁端部を摘み上げる。19 は頸部から肩部にかけての破片で頸部から口縁部にかけて波状文が施される。20 は長頸壷の口縁部である。21 は胴部で外面底部付近に格子目タタキが施される。また､外面に付着物が残る。22 はハソウ（外字）の口縁部と考えられ､波状文が施される。23 は平瓶である。外面にはカキ目・ヘラケズリが施される。24 は提瓶の底部と考えられる。外面にはカキ目が施される。25 ～ 40 は須恵器の甕である。25 ～ 27 は外反しながら口縁部に向かって立ち上がる。内外面に自然釉が残る。28 は

口縁端部に厚みを持つ。29 の口縁部は外反しながら立ち上がる。外面に格子目タタキが施される。30・31 は胴部で外面に格子目タタキが施される。32 は甕底部で充填痕が残る。33 は胴部から底部で、外面には平行タタキが施される。内面には自然釉が残る。34 は肩部から胴部で外面に自然釉が残る。35 ～ 40 は胴部で 35・36、38・39 の外面には格子目タタキが施される。37 の外面には自然釉が残る。39 は内外面にわずかに自然釉が残る。41 ～ 43 は土師器の甕である。41 の口縁部は緩やかに外傾しながらほぼ垂直に立ち上がる。42 の口縁部は外傾しながら立ち上がる。外面の一部にタタキが施される。43 は緩やかに外反しながらほぼ垂直に立ち上がる。44 ～ 46 は土師器の壷である。45 は口縁部で外面に線刻が施される。47 ～ 50 は土師器の高坏である。47 の坏部は屈曲し大きく外傾しながら口縁部に向かって立ち上がる。内外面は被熱による赤化が見られる。また、脚部に穿孔が 1 個確認される。48 は坏部で屈曲し、外傾しながら口縁部に向かって立ち上がる。49 は複合口縁の高坏口縁部でやや外傾するが、ほぼ垂直に立ち上がる。50 は脚部で穿孔が 4 個確認される。51 は土師器の坏である。口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部で外反する。52・53 は土師器の皿である。口縁部は垂直に短く立ち上がる。54 ～ 59 は土師器の鉢である。これらはミニチュア土器で 55・56 は内面に被熱によるものと考えられる黒斑が見られる。58 は外面底部に板状圧痕が残る。60 ～ 62 は弥生土器の甕である。いずれも底部は平底で 60・62 の内面には指頭圧痕が残る。63・64 は弥生土器の甕で 63 は複合口縁壷で口縁部は内傾し短く立ち上がる。64 は壷の底部か、甕の可能性も考えられる。65 は平瓦の破片である。

2 号溝状遺構（第４４図、写真図版９・１０）

調査区中央よりやや南側で検出され、北東から南西に向かって伸びている溝である。規模は長さ 53 m + α で幅は 1.0 m前後で深さは約 20㎝～ 25㎝を測り、流れの方向は北東から南西に向かっていたと考えられる。土層断面から、1 号溝状遺構と同様に水の流れは緩やかで廃絶時に一気に埋まったものと考えられる。また、北東端は、1 号溝に切られていたと想定され、南西端は 1 号溝状遺構と同様に削平の為か途切れている。この他、土層断面 A ～ B の間にかけて部分的に検出面から 10㎝前後の深さで炭化物が帯状に検出されていることから、水樋状の遺構が敷設され、水を引いていた可能性が考えられるものの、調査時に平面では確認できなかった。出土遺物は上流部の東側を除いて全体的に万遍なく出土しており、炭化物が検出される前後の深さで多く見られる。また、器種は甕・壷が見られるほか、高坏と小型丸底壷が特に多く出土している。

出土遺物（第４５～４９図、写真図版２４～２８）

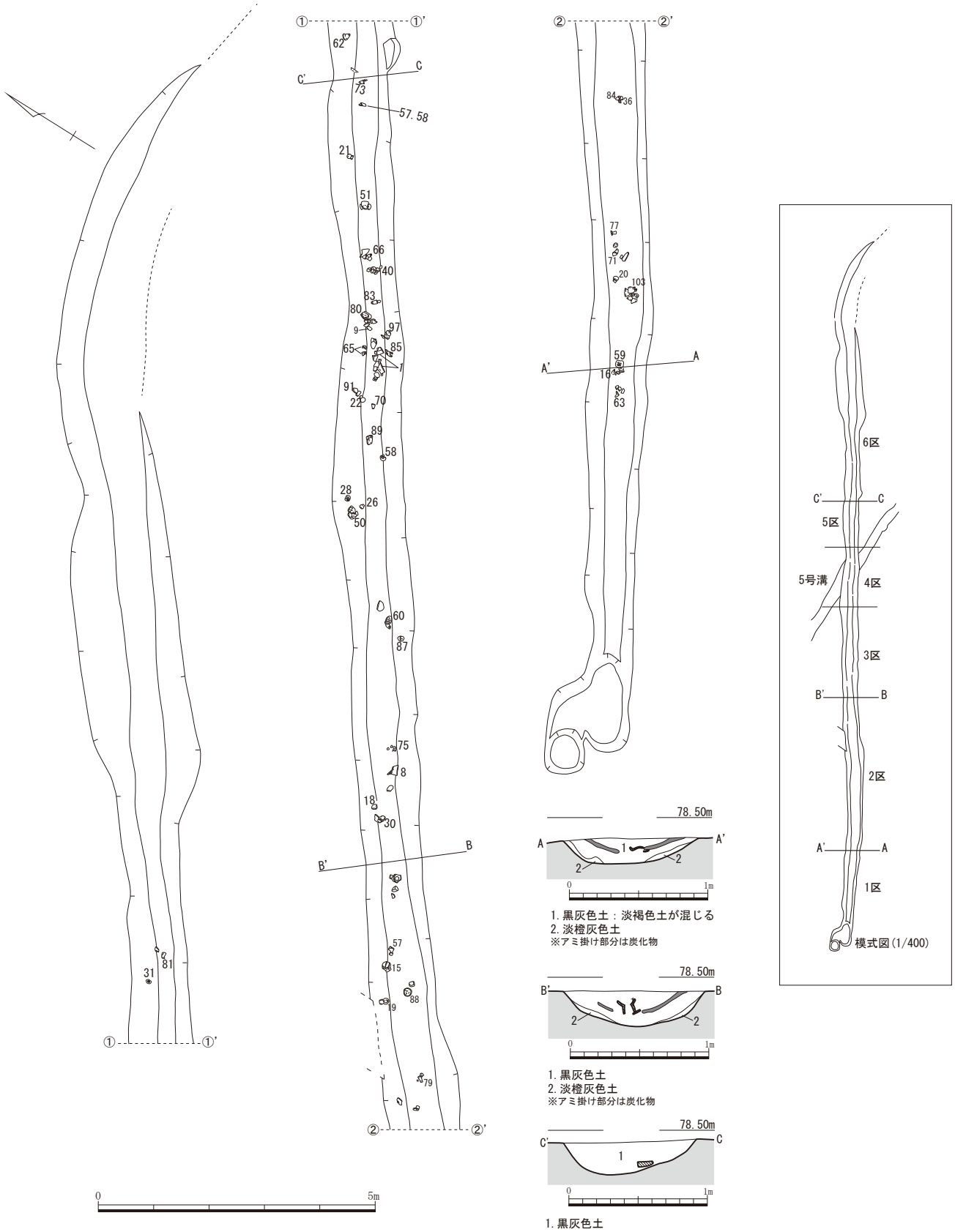
出土遺物の位置に関して模式図を用いて説明をおこなう。上・下層は層序ごとに定めたものではなく、検出面から底部までを大きく分けたものである。

上層からは 5・7・10 などの土師器の甕、17・28・29 などの小型丸底壷、41・47・51 などの高坏、91 などの坏の他、100・101 のミニチュア土器が出土している。

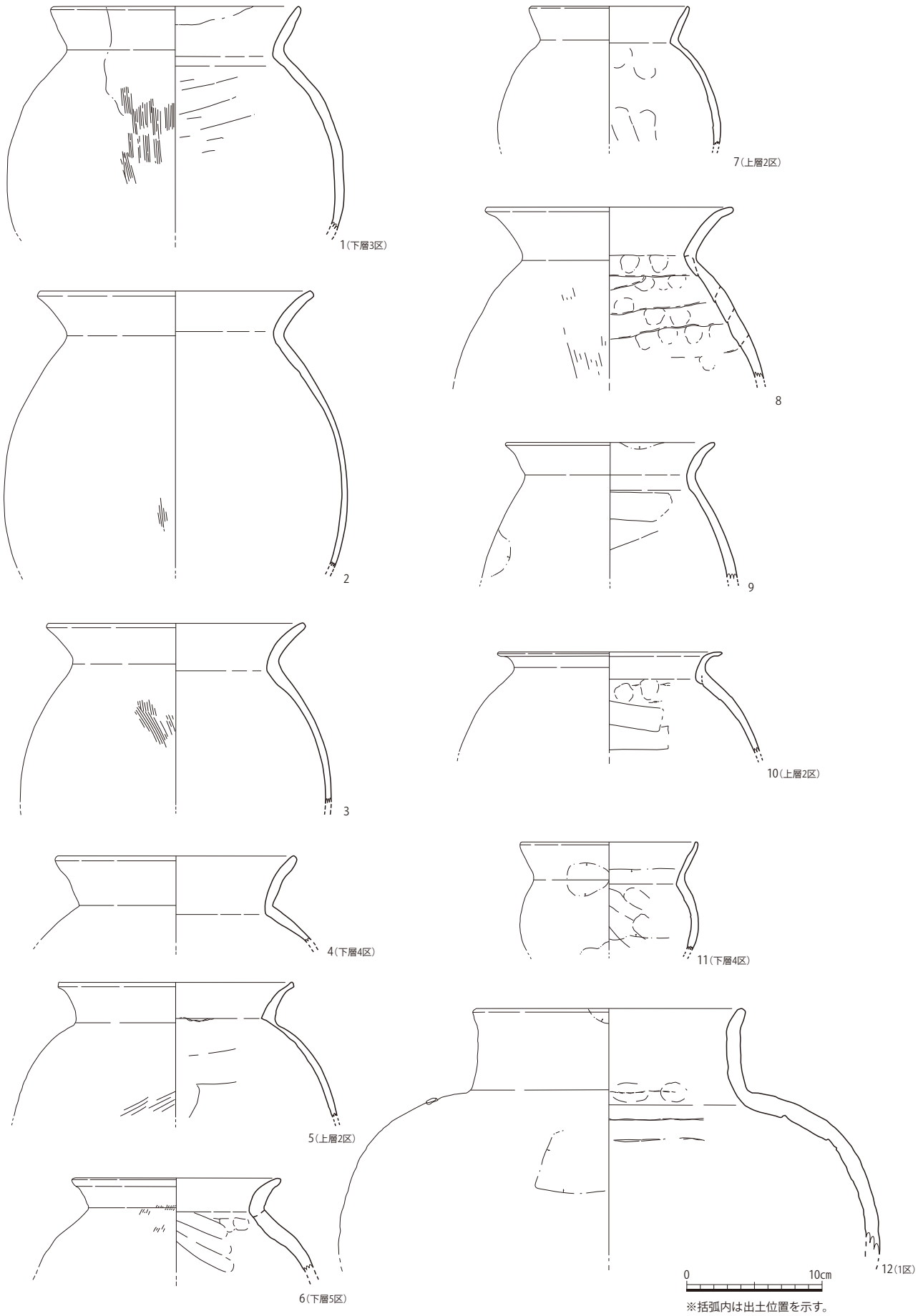
下層からも上層と同様に 1･4 などの土師器の甕､23 や 35･37 の小型丸底壷､40･46 などの高坏､98 のミニチュア土器や甑が出土している。上流部（4･5･6 区）と下流部（1･2･3 区）では出土遺物に大きな差は見られなかった。全体的に上層部分からの出土が多く、上流よりも下流部である 1 ～ 3 区からの出土が多いことが特徴として挙げられる。また、出土遺物の一部に弥生土器が混ざるものの、弥生後期に比定される 7 号溝状遺構との切り合いによる影響と考えられ、全体を通して大きな時期差はないと考えられる。

以下、番号順に説明を行う。

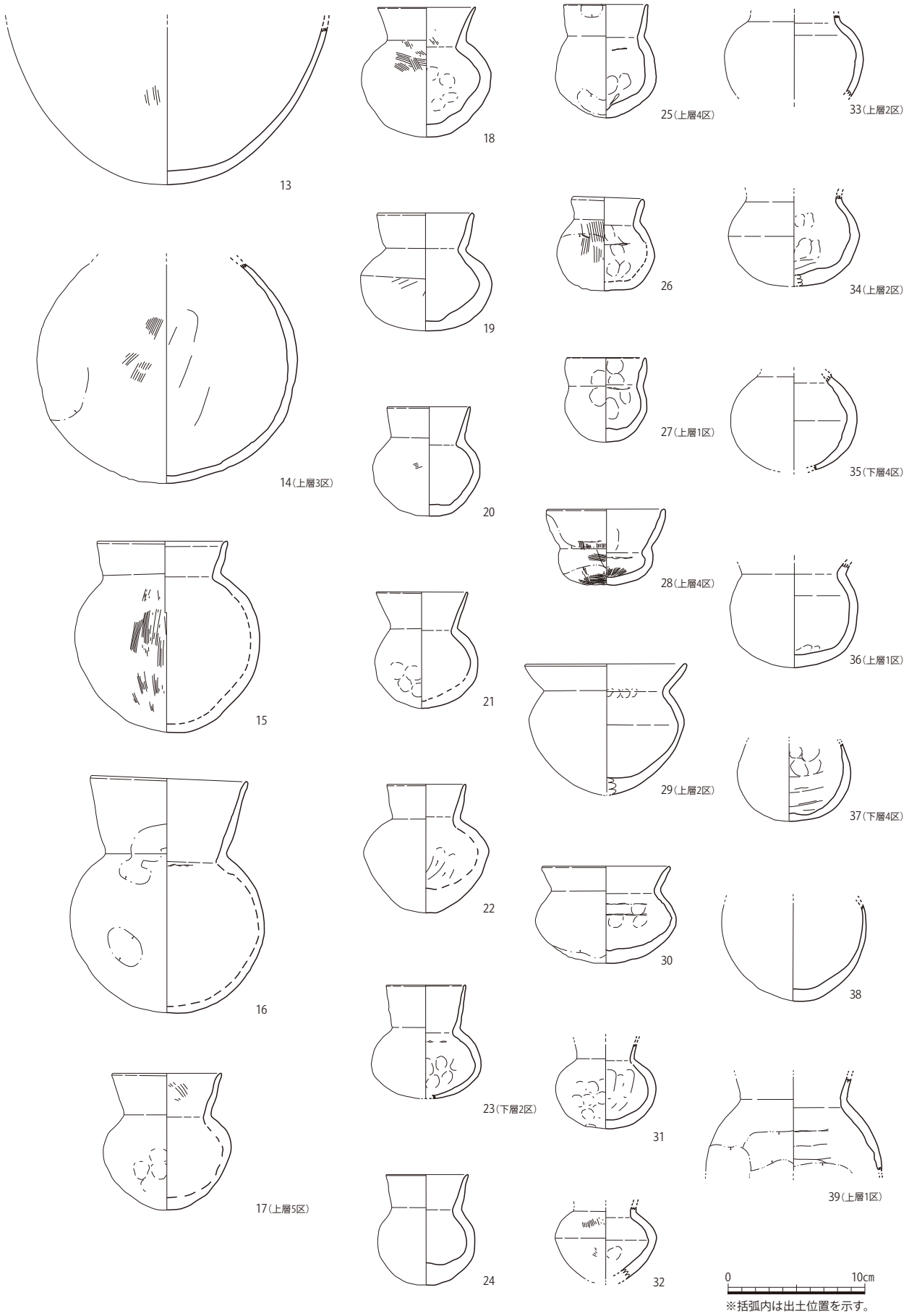
1 ～ 11 は土師器の甕である。1・7 の口縁部は直線的にやや外傾しながらほぼ垂直に立ち上がる。1 の内外面にはススが付着している。7 の内面頸部は明瞭に屈曲する。2 ～ 6 及び 8・9 の口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がる。3 の内外面には被熱による赤化がみられる。4 の口縁部にはススが付着する。5 の内面頸部は明瞭



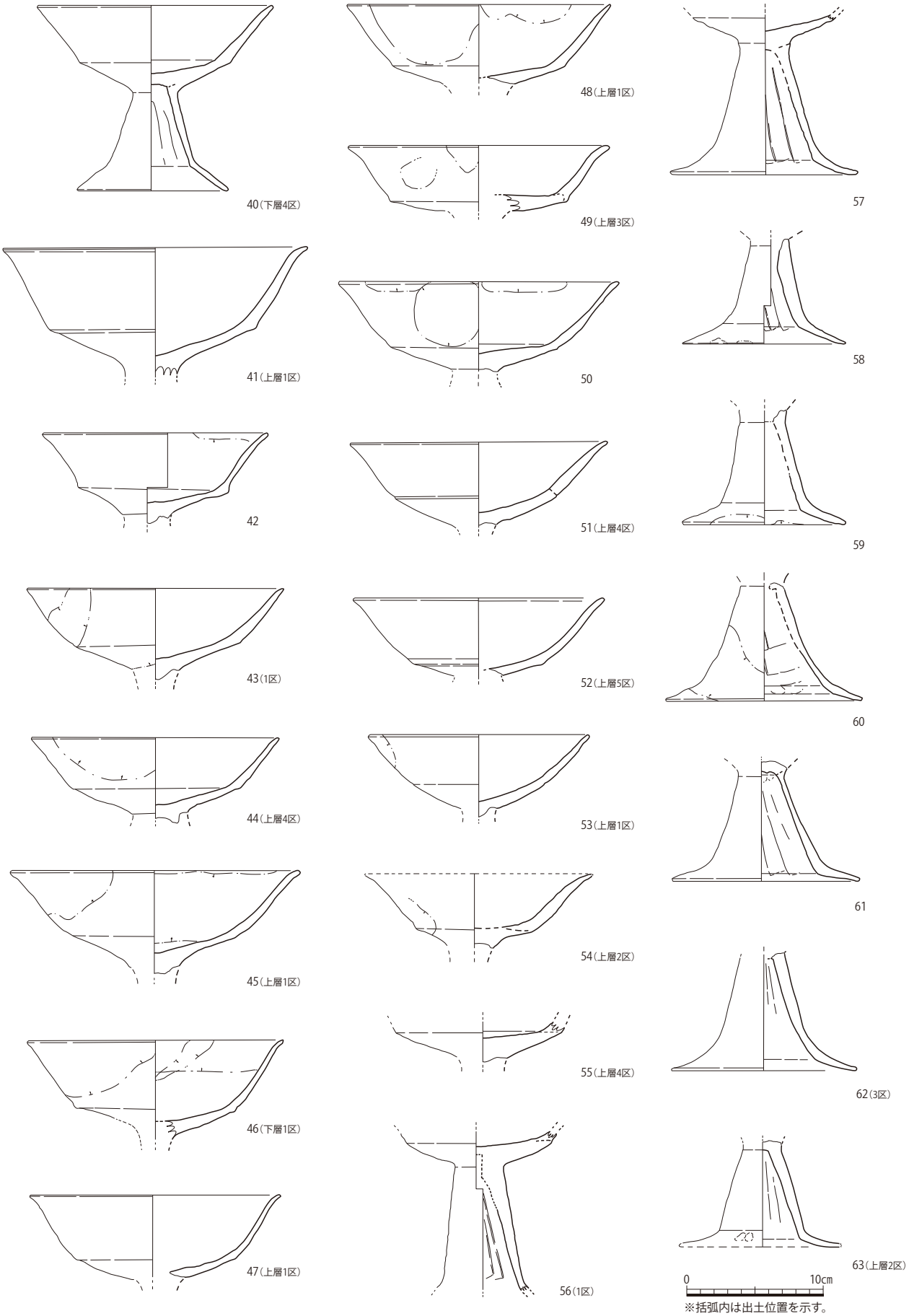
第４４図　２号溝状遺構実測図・土層断面図（1/100・1/40）



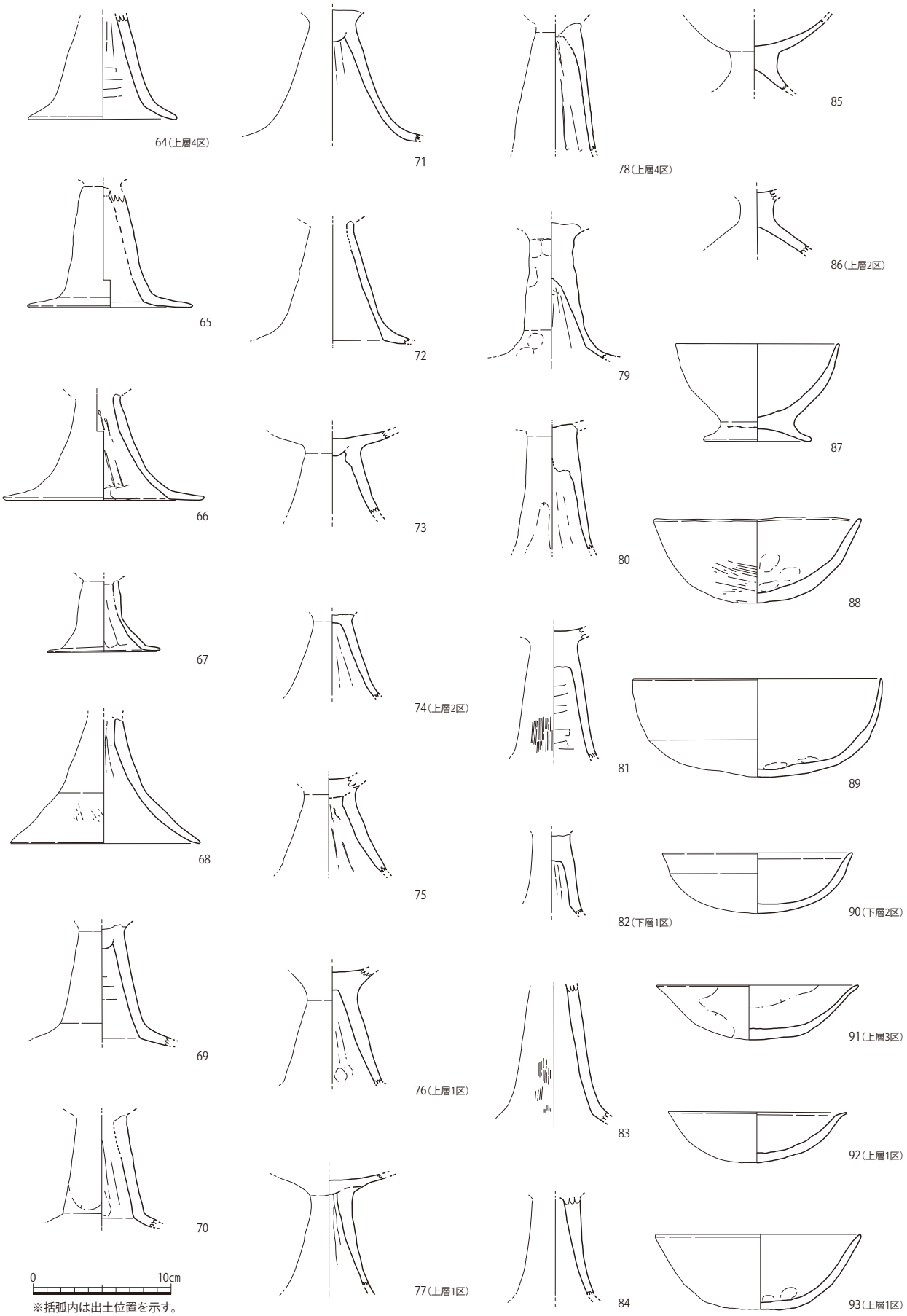
第４５図　２号溝状遺構出土遺物実測図１（1/4）



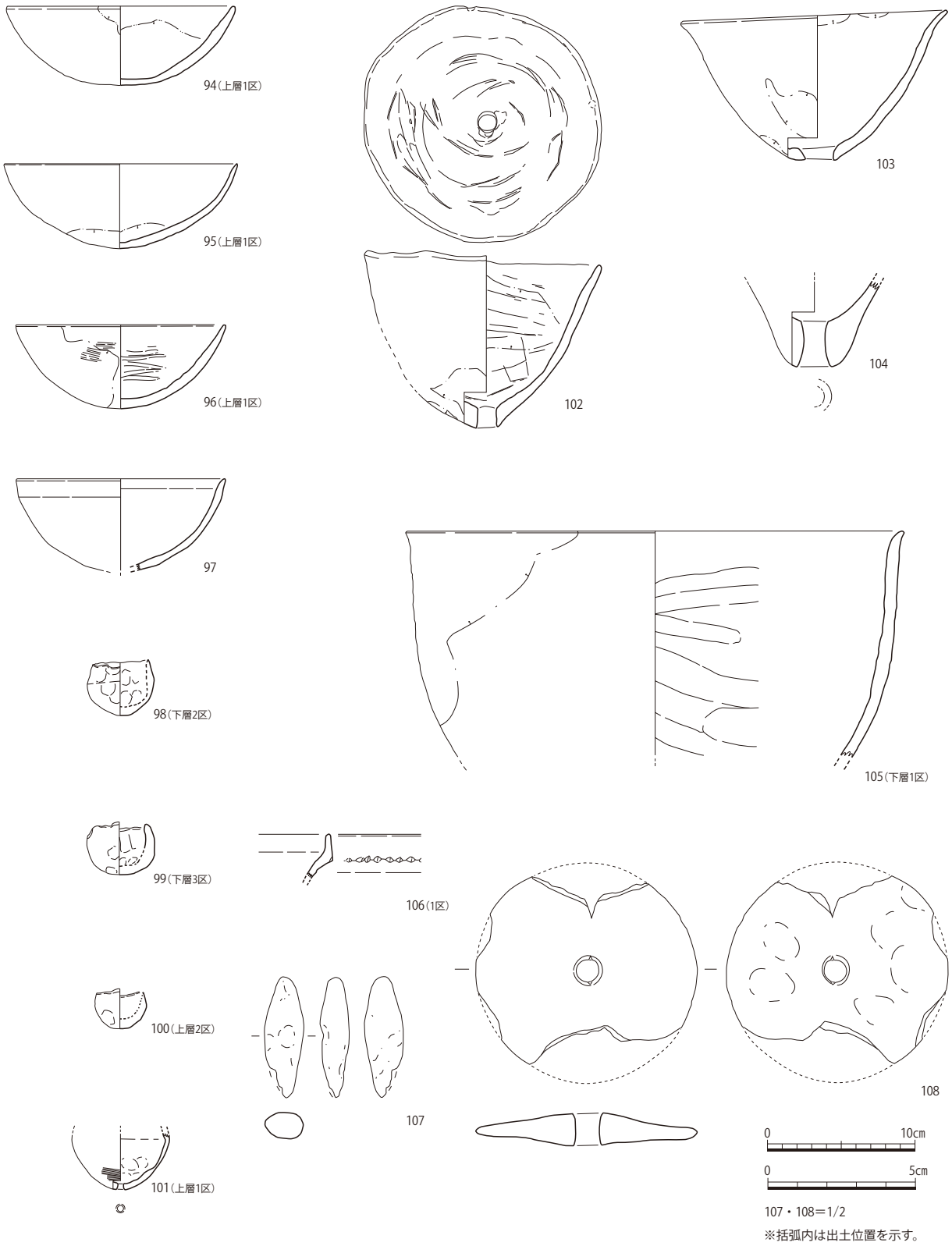
第４６図　２号溝状遺構出土遺物実測図２（1/4）



第４７図　２号溝状遺構出土遺物実測図３（1/4）



第４８図　２号溝状遺構出土遺物実測図４（1/4）

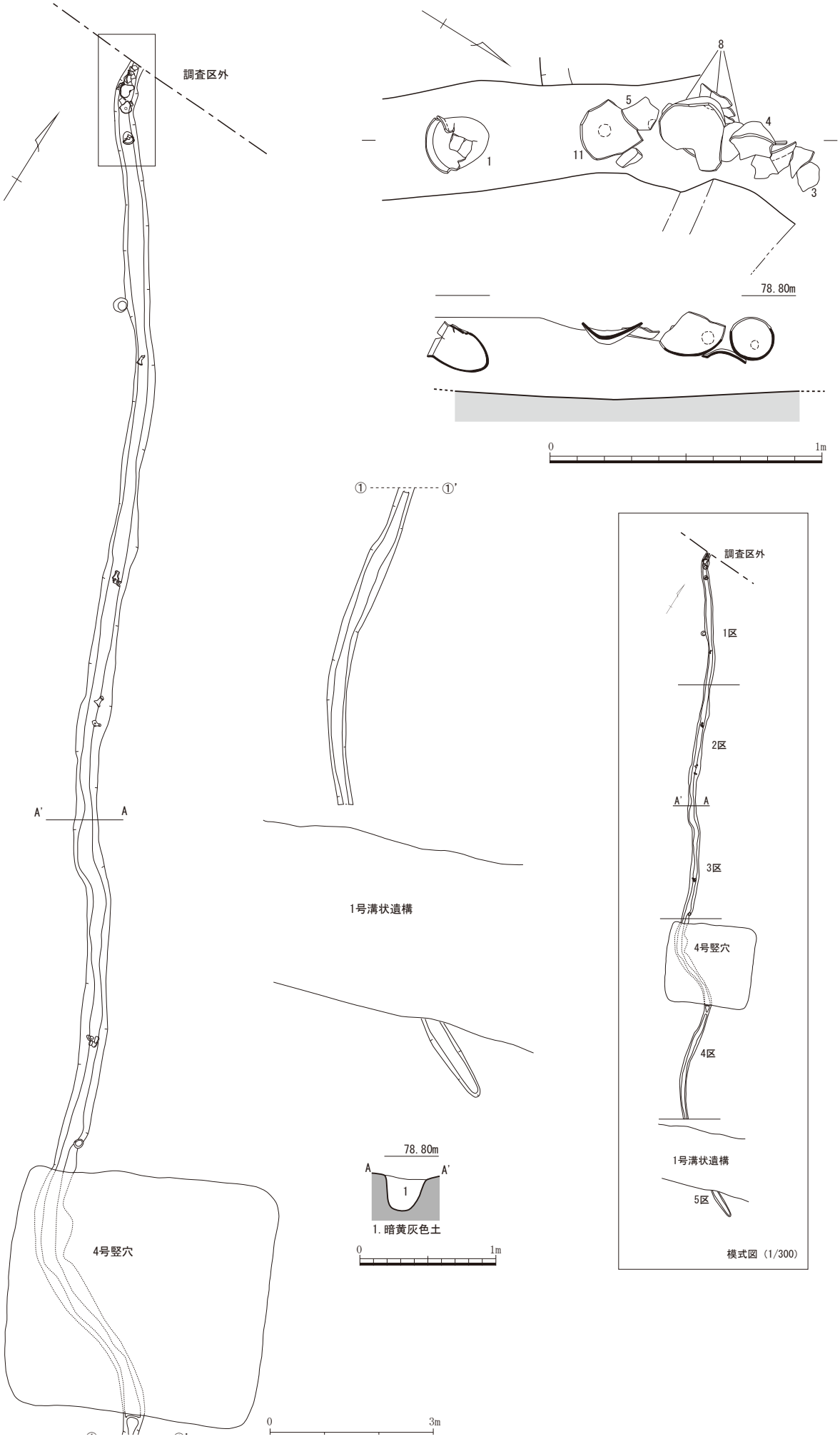


第４９図　２号溝状遺構遺物実測図５（1/4）

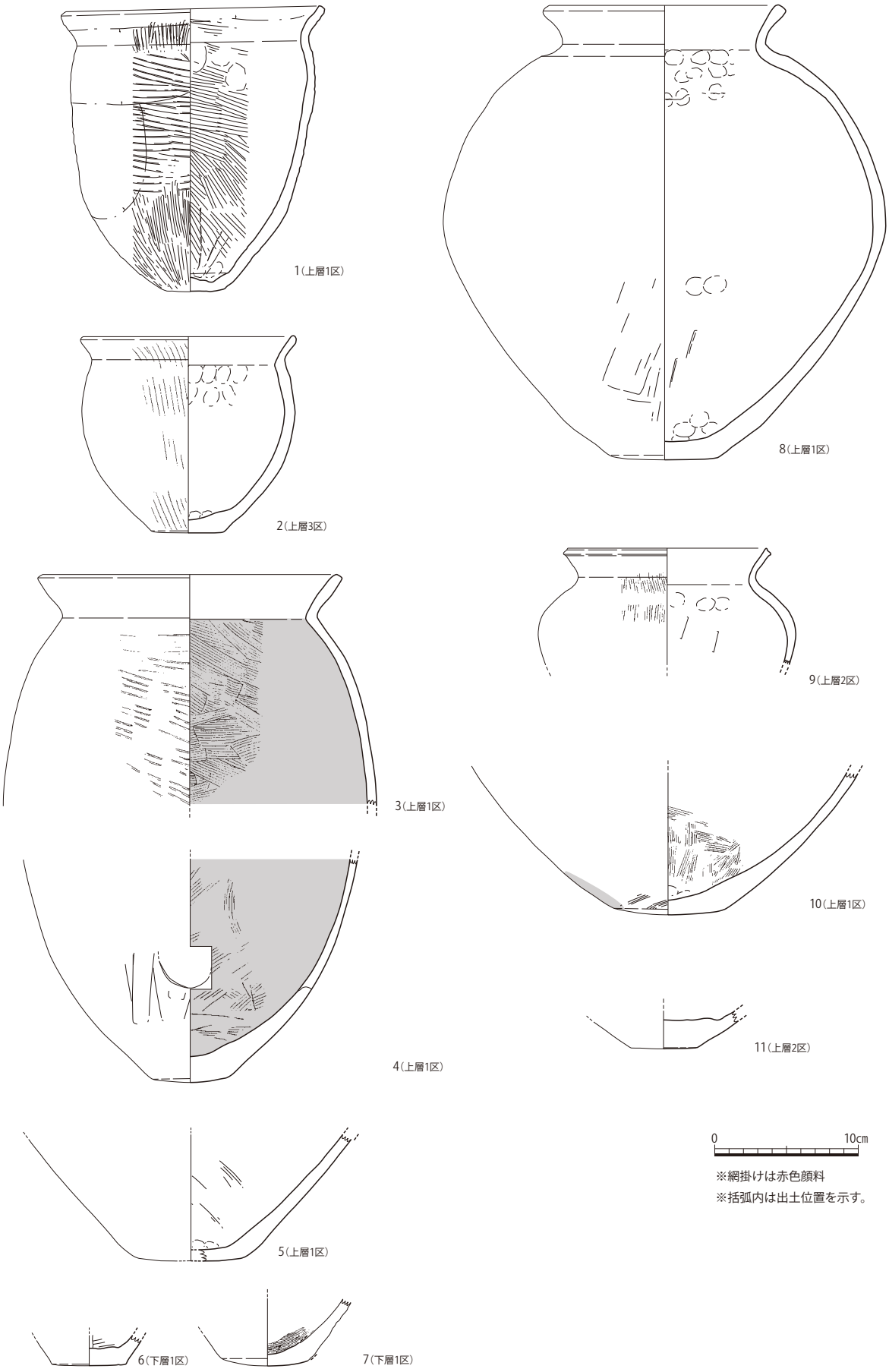
に屈曲し稜が残る。また、内面に鉄分が付着する。8 の内面には粘土痕が残る。9 の外面にはススが付着する。10 の口縁部は強く外反し短く立ち上がる。11 の口縁部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。12 ～ 39 は土師器の壷である。12 の口縁部は垂直に立ち上がる。頸部から肩部にかけて大きく張り出し、肩部には粘土が付着している。また、外面には鉄分が付着している。13・14 は胴部から底部にかけて残存しており、外面にススが付着する。15 ～ 39 の器高は 15㎝前後でいずれも小型丸底壷である。15 ～ 17、19 ～ 26 の口縁部は直線的にほぼ垂直に立ち上がる。15 の底部は被熱による赤化が見られる。16・23 の口縁部は長く立ち上がり、胴部の 2 分の 1 程度の長さを持つ。18 の口縁部は若干外反しながら立ち上がる。19 は被熱による剥離が見られる。20 は内面頸部に明瞭な屈曲を持つ。また外面にススが付着する。26 は丸底と平底の中間的な底部になっている。27 の口縁部は若干内湾しながら短く立ち上がる。28 ～ 30 の口縁部は、胴部径と同等または大きく開く。28 の外面底部にはススが付着し、29・30 の外面にもススが付着している。31 ～ 39 は壷の胴部から底部である。31 は内外面ともに指オサエによる調整が施される。38 の外面には被熱による赤化・黒化が見られるほか、内面には環状にススが付着している。40 ～ 86 は土師器の高坏である。40 の坏部は屈曲し、外傾しながら直線的に立ち上がる。脚部は裾部付近で緩やかに屈曲して開く。41 ～ 55 は坏部である。41 の坏部は深く、口縁部に向かって屈曲し、直線的にほぼ垂直に立ち上がり、端部付近で外反する。42 は口縁部に向かって屈曲し、緩やかに外反しながら立ち上がる。内外面に被熱による赤化がみられる。43 ～ 53 は口縁部に向かって屈曲し、緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部で外反する。43 の内面にススが付着する。46 の外面には被熱による赤化、内面にはススが付着している。47・50 の内外面には被熱による赤化がみられる。51・52 は屈曲部が不明瞭になる。51 の外面には被熱による赤化がみられる。53 は屈曲部がわずかに残る程度で、外傾しながら口縁部に向かって若干内湾しながら立ち上がる。54 は口縁部に向かって外反しながら立ち上がる。56 ～ 86 は脚部である。56 の内面にはケズリがみられる。57 ～ 65 は端部付近で屈曲し大きく外反する。58 の外面にはススが付着する。59 の内外面には被熱による剥離がみられる。60 の外面にはススが付着する。62 ～ 64 及び 68 の内面には絞り痕が残る。65 ～ 67 は端部付近での屈曲が大きく、端部の接地面が広い。67 は坏部との接合面にススが付着しており、廃棄後に被熱を受けた可能性を考えることが出来る。また 68 は屈曲部が不明瞭で端部に向かって緩やかに広がる。また、69 ～ 84 は脚部の柱部のみで形状は不明である。69・71・73 は内面の接合部に粘土の充填がみられる。87 は台付きの鉢である。口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。88 ～ 97 は土師器の坏である。88 は口縁部に向かい若干外傾するものの、ほぼ垂直に立ち上がる。89 は底部付近に稜を形成し、口縁部に向かって垂直に立ち上がる。90 は内湾しながら立ち上がり、口縁付近で稜を形成し口縁部に向かって外反する。91・92 は直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁端部で若干外反する。93 は若干外傾しながら直線的に立ち上がる。いずれも内湾しながら口縁部にむかって立ち上がる。94 は内外面にススが付着する。95 は内外面に被熱による赤化がみられる。97 は口縁端部付近で稜を形成し端部を摘み上げる。98 ～ 101 はミニチュア土器である。98 ～ 100 は鉢で 101 は甑と考えられ、単孔で外面にススが付着する。102 ～ 105 は土師器の甑である。102 ～ 104 は単孔の甑で 102 は外面底面に、103 は内外面にススが付着する。105 は胴部のみで、単孔か多孔かは不明である。106 は弥生土器の壷である。口縁部付近で刻み目文が施される。107 は土玉と考えられる。108 は土製の紡錘車と考えられる。

3 号溝状遺構（第５０図、写真図版９）

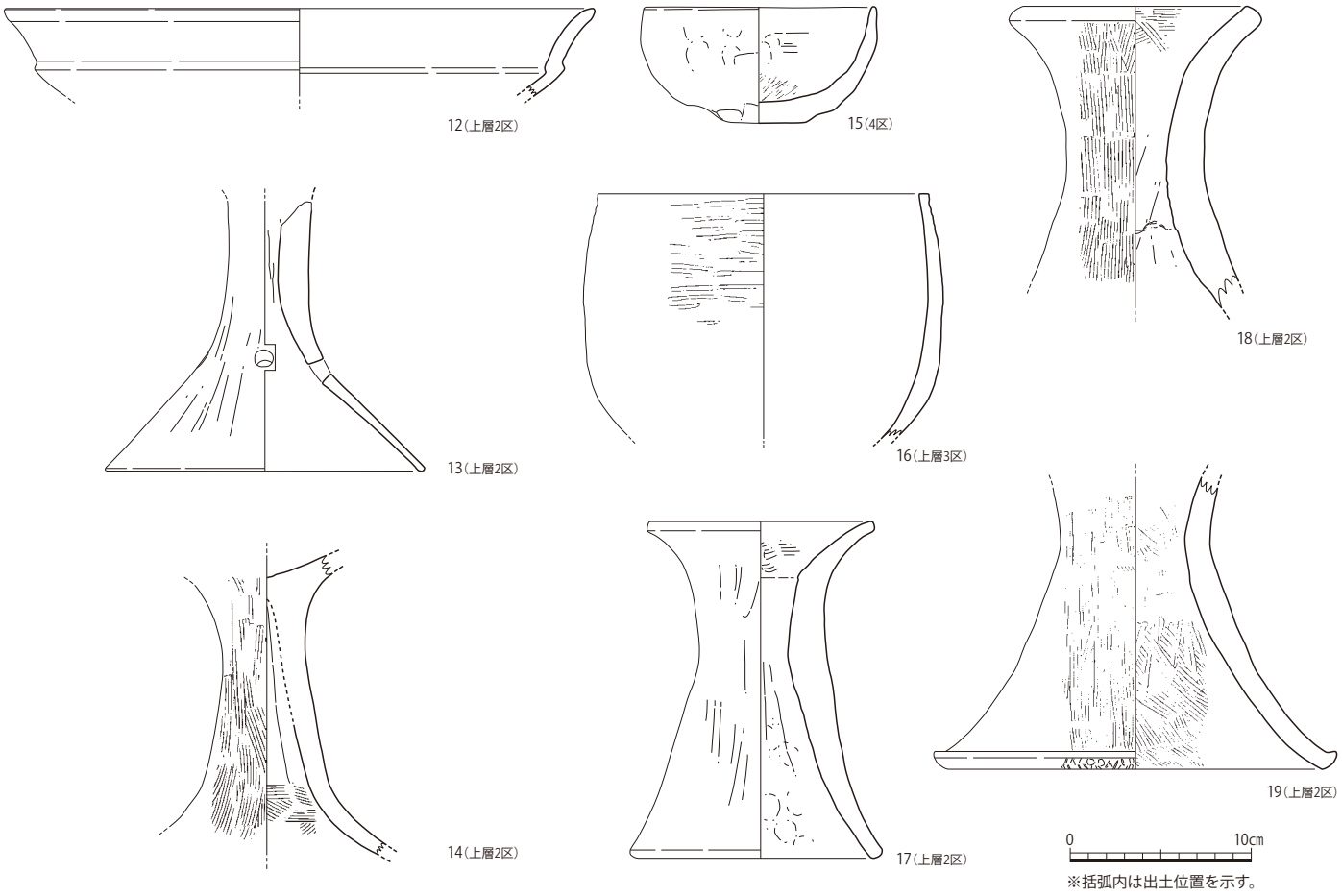
調査区やや東で検出され、調査区を南北に縦断している溝である。規模は長さは 37 m + α で幅は 0.4 m前後、深さは約 25㎝～ 30㎝を測る。北から南に向かって傾斜を持つ溝で、途中 4 号溝状遺構を切り、4 号竪穴建物、1･2 号溝状遺構に切られている。北端は調査区外の畦にぶつかっている為、延長は不明だが、調査区北で検出される 6 号溝状遺構がその延長上にあり、U 字を呈する断面形状が似ていることから接している可能性が考えられ



第５０図　３号溝状遺構実測図・遺物出土状況・土層断面図（1/100・1/20・1/40）



第５１図　３号溝状遺構遺物実測図１（1/4）



第５２図　３号溝状遺構出土遺物実測図２（1/4）

る。また北端付近では甕などがまとまって出土している。南端は、検出時にこの区画を掘り過ぎてしまったため、残存していたかどうかの判断をすることは出来なかった。

出土遺物（第５１・５２図、写真図版２８・２９）

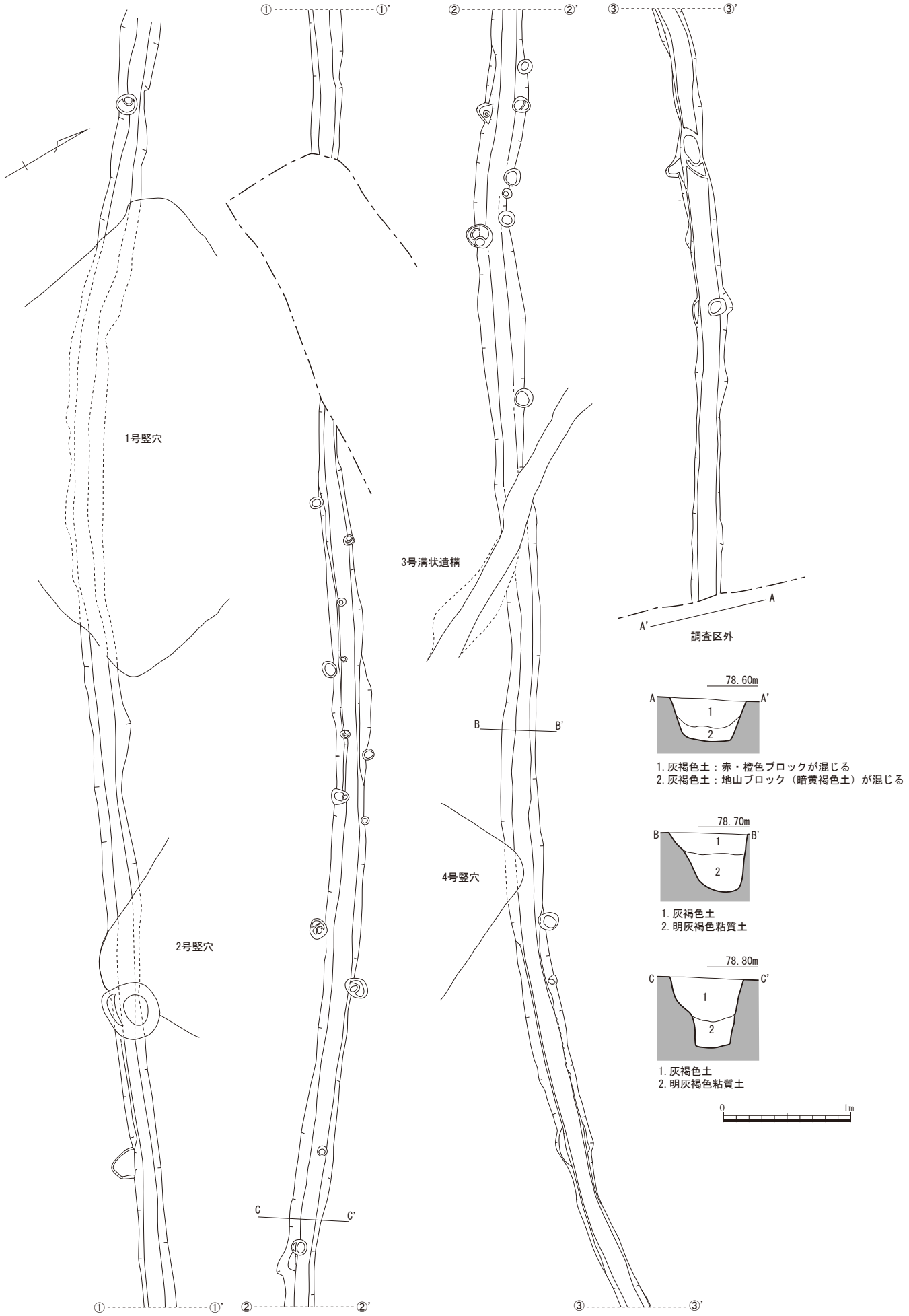
模式図を参考に遺物の出土位置に関して説明をおこなう。

上層からは１～５の弥生土器甕、８・９の壷や12・13の高坏、17などの器台が出土している。

下層からは６・７の弥生土器の底部が出土している。上流部の１～３区からは１・2、４～19が出土しており、下流部の４～５区からは３が出土しているのみであり、出土遺物のほとんどが上流部分に集中しており、下流部ではほとんど見られなかった。また、遺物の時期差は見られなかった。

以下、番号順に説明をおこなう。

１～７は弥生土器の甕である。１～３の口縁部は外傾しながら直線的に短く立ち上がる。1・2の底部は平底で内面に指オサエが施される。1の内外面はハケ目で調整が施されており、ともにススが付着する。また、被熱による黒化も見られる。2は内面頸部付近で指オサエが施される。3の外面はタタキが施される。内面は頸部より胴部にかけて赤色顔料が施される。4の底部はやや凸レンズ状を呈する。胴部やや下位に打ち欠きによる穿孔がある。内面には赤色顔料が施される。3と同一個体の可能性が考えられる。5～7は底部で5・6は平底で7はやや凸レンズ状を呈する。5・7は外面に被熱による赤化がみられる。8～11は弥生土器の壷である。8・9の口縁部は外反しながら短く立ち上がる。8は肩部から胴部中段にかけて大きく張り出し、底部は平底を呈する。内面は頸部と底部付近に指オサエが施され、被熱による赤化がみられる。9の口縁端部は摘み調整が施される。10・11は底部で10はやや凸レンズ状を呈し、外面底部付近に赤色顔料が施される。11は平底である。12～

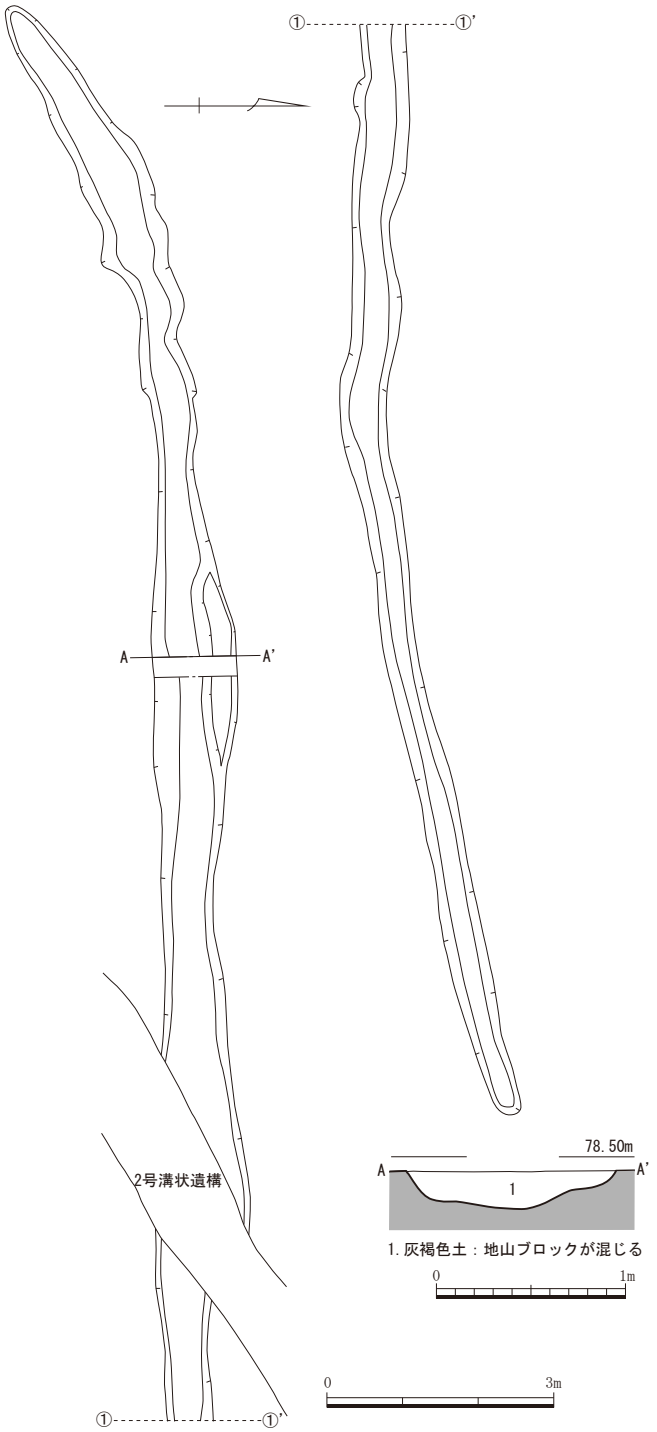


第５３図　４号溝状遺構実測図・土層断面図（1/100・1/40）

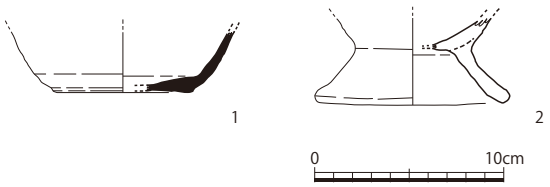
14 は弥生土器の高坏である。12 は坏部で屈曲し外反しながら口縁部に向かって立ち上がる。外面口縁部付近にススが付着する。13 は柱部から端部に向かって緩やかに開く。穿孔が確認される。14 の外面にはススが付着する。15 は弥生土器の鉢である。口縁部に向かって垂直に立ち上がる。底部は平底に近い凸レンズ状を呈する。全体に被熱による赤化がみられる。16 は鉢と考えられる。口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。また外面にはタタキが施される。17 ～ 19 は弥生土器の器台である。しまり部分はいずれも中段よりやや上位に位置する。17 の内面には絞り痕が残る。18・19 の外面にはハケメが施される。また、19 の端部には刻み目文が施されている。

4 号溝状遺構（第５３図、写真図版９）

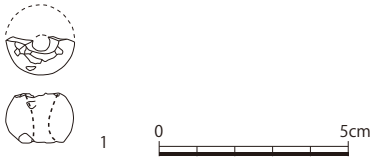
調査区やや北側、南東から北西に向かって横断する溝で、長さは約 87 m + α で幅は 0.5 m前後、深さは 30㎝～ 50㎝を測り、南東から北西に向かって傾斜している。一部で１・４号竪穴建物、3 号溝状遺構に切られている。断面形状は、調査区外と接する A 断面では逆台形状を呈し、B 断面は U 字状を呈し、C 断面は形状を呈し、C 断面の底面は平坦である。また、B・C 断面は北側はほぼ垂直に立ち上がり、南側は傾斜を持ち緩やかに立ち上がる。また、いずれも埋土は灰褐色土が厚く堆積していることから、流れは緩やかであったと考えられる。このほか、2・3 ヶ所で小さな張出部が検出されており、水田に関する水口などの可能性も考えられる。



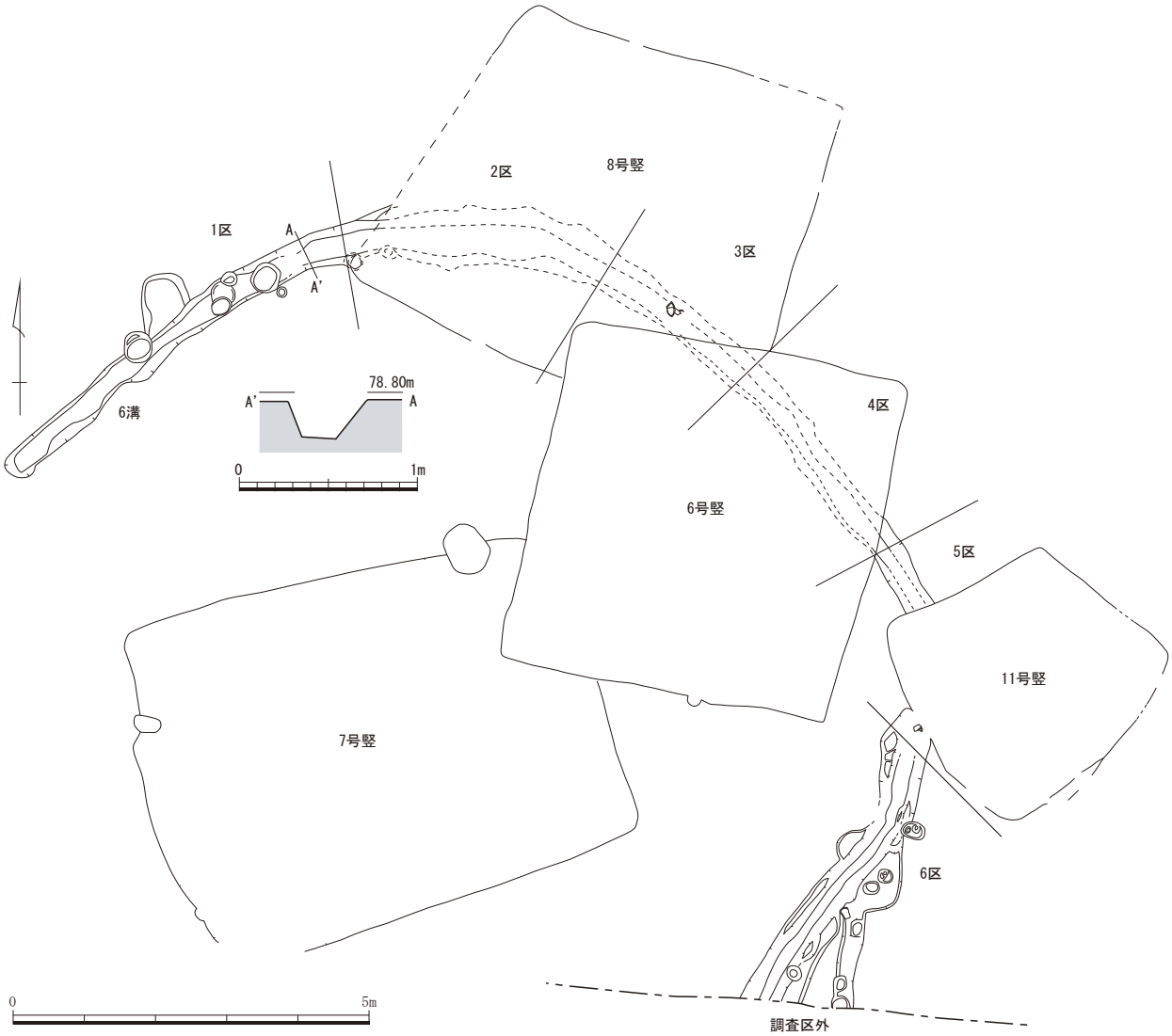
第５５図　5 号溝状遺構実測図・土層断面図（1/100、1/40）



第５４図　4 号溝状遺構出土遺物実測図（1/4）



第５６図　5 号溝状遺構出土遺物実測図（1/4）



第５７図　６号溝状遺構実測図・断面図（1/100・1/40）

南東端は調査区外の畦にぶつかっている為、その延長を判断することができなかった。しかし、溝の方向から１号溝状遺構と合流していた可能性を考えることができる。須恵器などが一部で出土しているものの弥生時代と考えられる３号溝状遺構に切られていることから、それ以前の時期のものと想定しておきたい。

出土遺物（第５４図、写真図版２９）

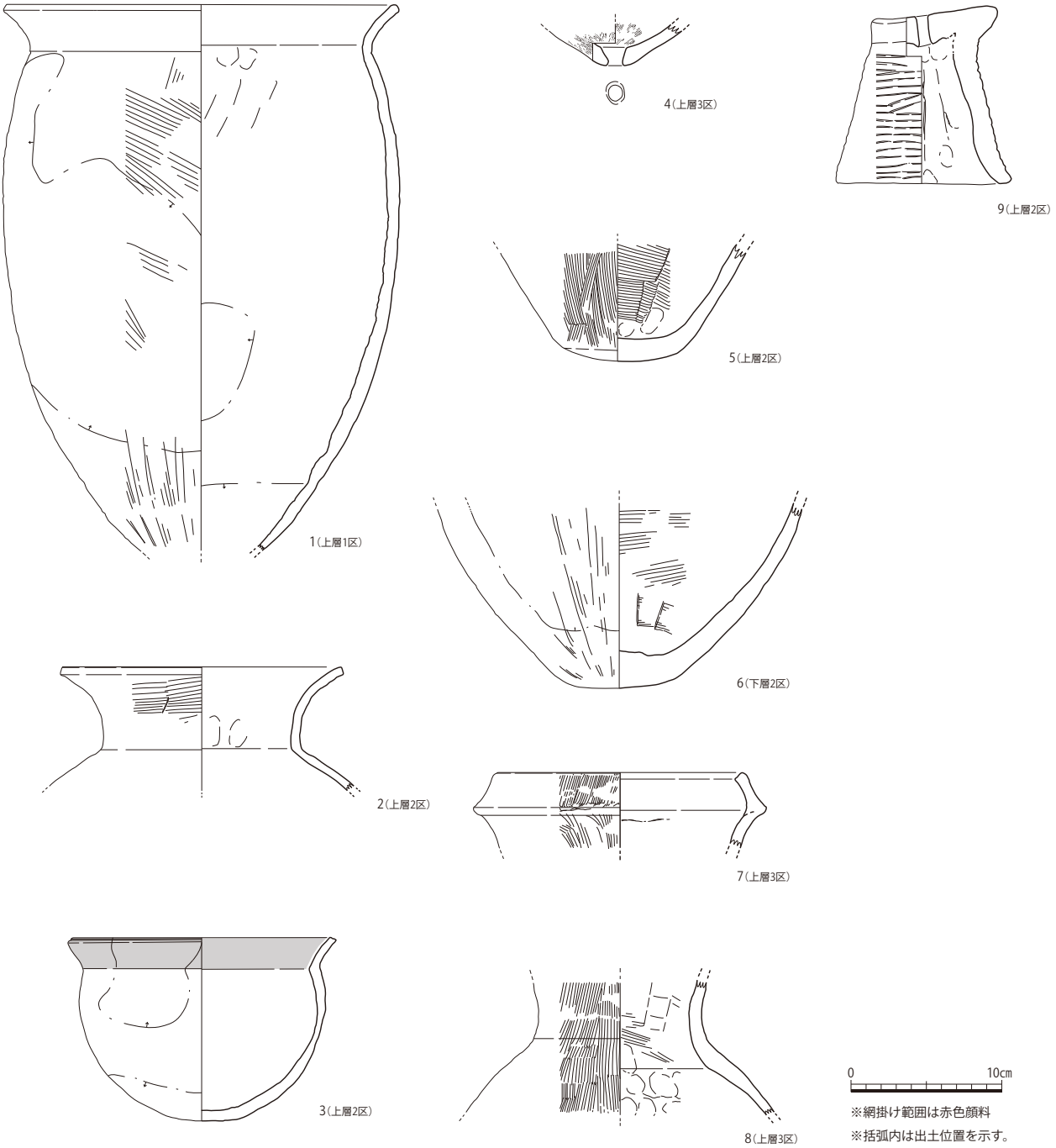
１は須恵器の坏である。底部は回転ヘラ切り離しである。２は弥生土器脚付の甕と考えられる。

５号溝状遺構（第５５図、写真図版９）

調査区中央やや南側で検出され、調査区を東西に横断する溝である。規模は、長さは約33ｍ＋αで幅は1.0ｍ前後、深さは20㎝前後を測る。一部を２号溝状遺構に切られている。このほか、後述する７号溝状遺構とほぼ平行して検出されていることから、７号溝状遺構と一連の遺構の可能性も考えられる。東端は掘りすぎによって、西端は後世の削平によって溝全体の長さを確認することはできなかった。

出土遺物（第５６図、写真図版２９）

１は硬玉製の小玉で両端から穿孔が施されている。その他には図示できる遺物は出土しなかった。



第５８図　６号溝状遺構出土遺物実測図（1/4）

6号溝状遺構（第５７図、写真図版１０）

調査区北側で検出される。6・8・11号竪穴建物に切られている。7号竪穴建物を巡るように配置されている溝である。出土遺物も7号竪穴建物とほぼ同時期と考えられることから、7号竪穴建物に伴う排水施設の可能性を考えておきたい。規模は長さは12 m + αで幅は0.4 m前後、深さは20㎝を測る。7号竪穴建物を中心に半径約7 mの距離で周囲を巡る。断面形状は逆台形上を呈する。前述したように、３号溝状遺構とも時期が近く接する可能性が考えられることから、３号溝状遺構に接合して排水をしていた可能性も考えられる。

出土遺物（第５８図、写真図版２９）

上層からは1～3の弥生土器甕、4の弥生土器甑、7～8の弥生土器壷、9の支脚が出土している。

下層からは6の弥生土器甕と考えられる底部が出土している。また、出土遺物は主に上流部（1～3区）からで弥生時代後期と古墳時代前半の二つの時期に分けられると考えられるが、新しい時期の遺物に関しては、複数切り合っている竪穴建物からの流れ込みの可能性が高いものと考えられる。

以下、番号順に説明をおこなう。

1は土師器の甕である。口縁部は緩やかに外反しながら立ち上がり、長い胴を持つ。2は土師器の壷である。口縁部は外反しながら立ち上がり、端部断面形は方形を呈する。3は土師器の鉢である。口縁部は外傾しながら直線的に短く立ち上がる。外面にはススが、内面口縁部には赤色顔料が付着する。4は土師器の単孔の甑である。5・6は弥生土器の甕である。ともに底部で5は凸レンズ状を呈し、6はやや丸みを持った底部を持つ。7・8は弥生土器の壷である。7は複合口縁を呈する。8は頸部から肩部にかけて残存しており、内面肩部付近に指頭圧痕を残す。また、7と同一個体であると考えられる。9は弥生土器の支脚である。外面にはタタキが施され、内面には絞り痕が残る。外面には被熱による黒化がみられる。上部には穿孔が1個確認される。

7号溝状遺構（第５９図、写真図版１０）

調査区ほぼ中央で検出され、調査区を東西に横断する溝である。1号溝状遺構に切られており、切り合う部分では3号溝状遺構と同様に遺物が一括して出土してる。また、そこから西に向かうと北側2ヶ所で張り出しが見られる。前述したように5号溝状遺構と平行に検出されていることから、合わせて水田に伴う水路の可能性を考えることが出来る。断面形状はU字状を呈する。淡灰色土が厚く堆積していることから、流れは緩やかであり、廃絶時に一気に埋没した可能性を考えることができる。規模は、約54 m + αで幅は0.5 m前後、深さは約25㎝を測る。東端は1号溝状遺構に切られており、中央付近では8号掘立柱建物に切られている。また、西端はその他の遺構と同様に削平により全体を確認することはできなかった。遺構からは弥生土器が多く出土している。

出土遺物（第６０・６１図、写真図版２９・３０）

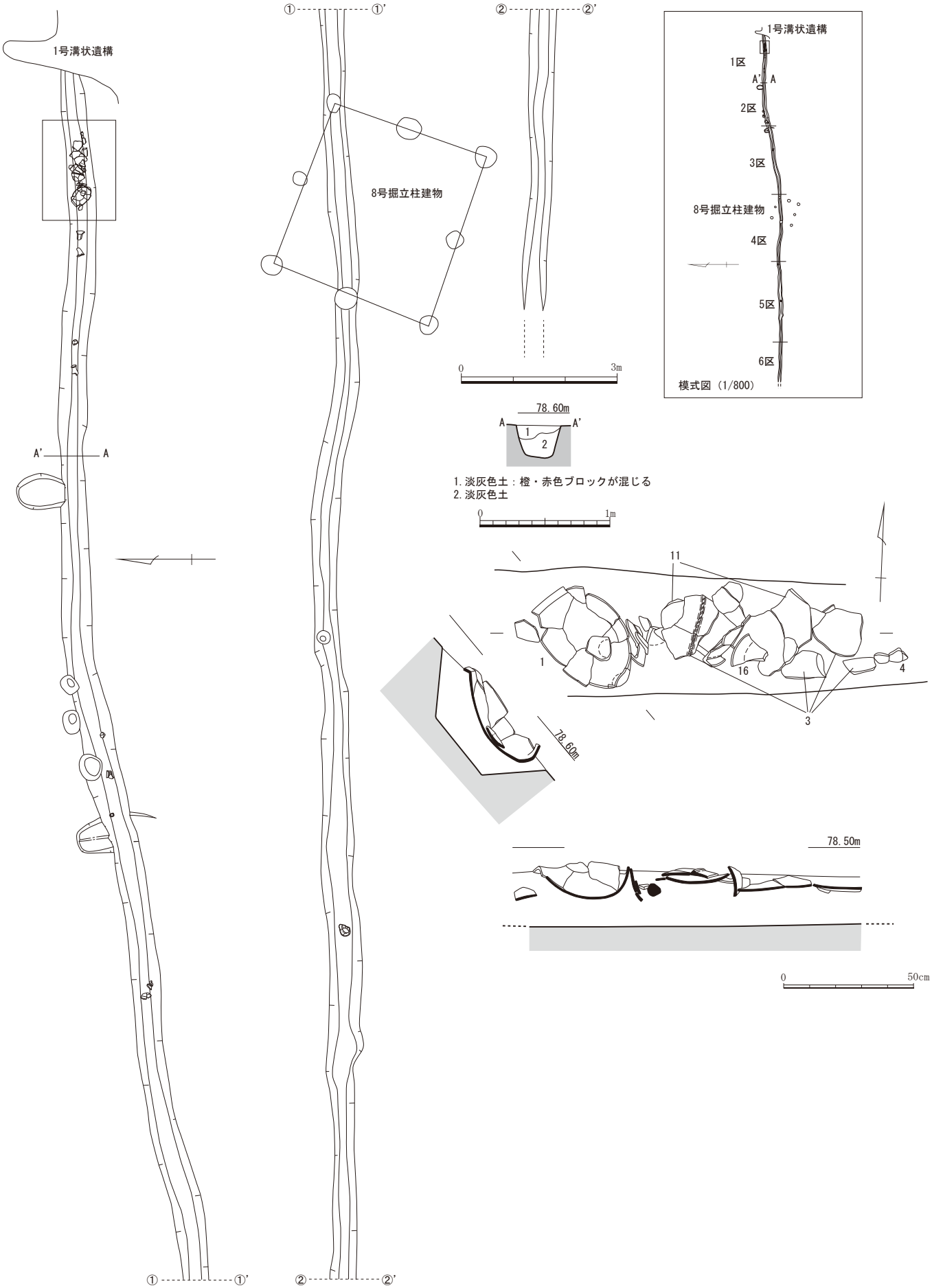
模式図を用いて遺物の出土位置について説明をおこなう。

上層からは2・3などの弥生土器甕、8•9などの高坏、11の壷や16の器台が出土している。

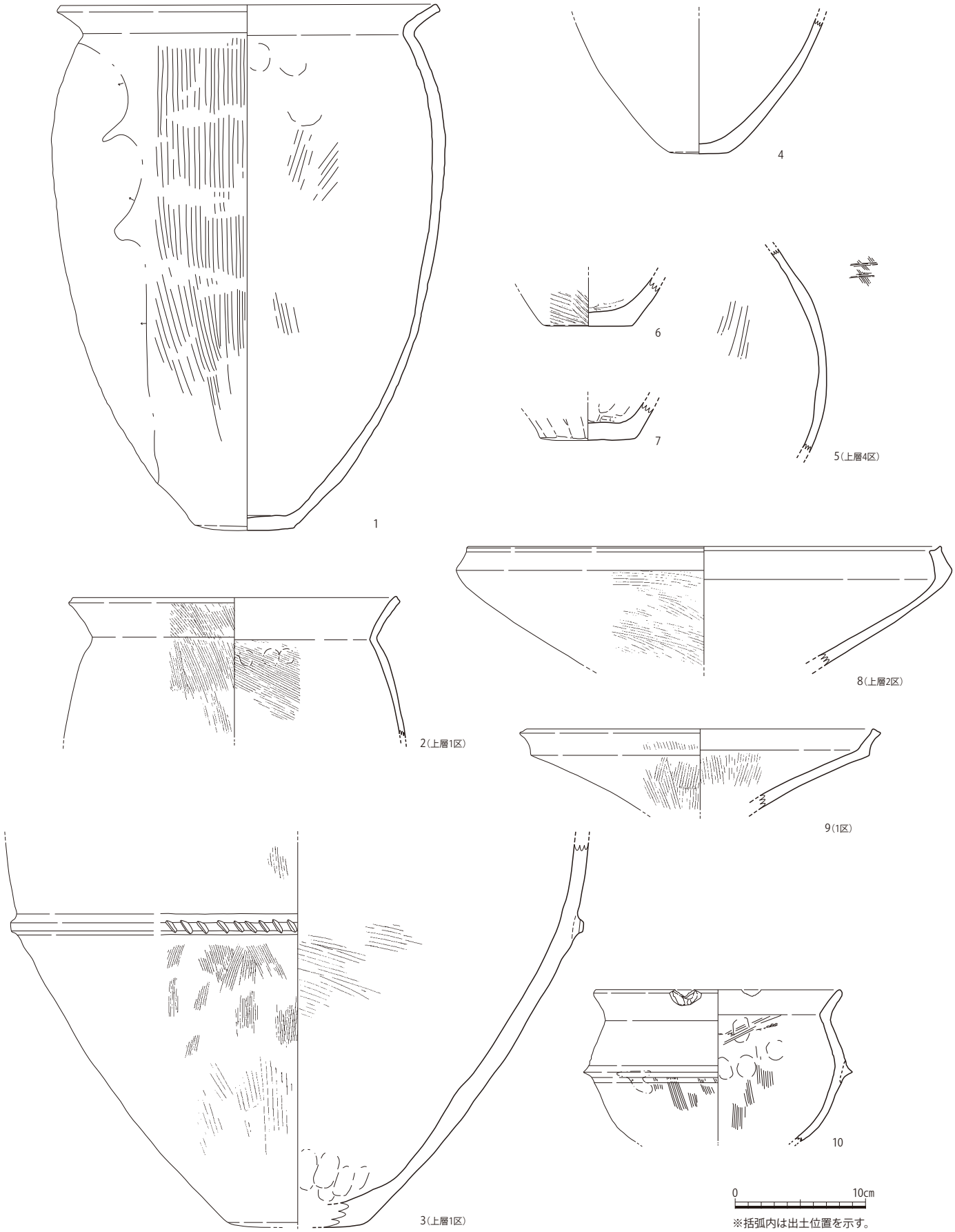
下層から明確に出土した遺物は確認されていない。また、出土位置は上流部と考えられる1～3区までがほとんどで、唯一4区上層から1点出土しているのみである。これらのなかで、はっきりとした時期差は見られなかった。

以下、番号順に説明をおこなう。

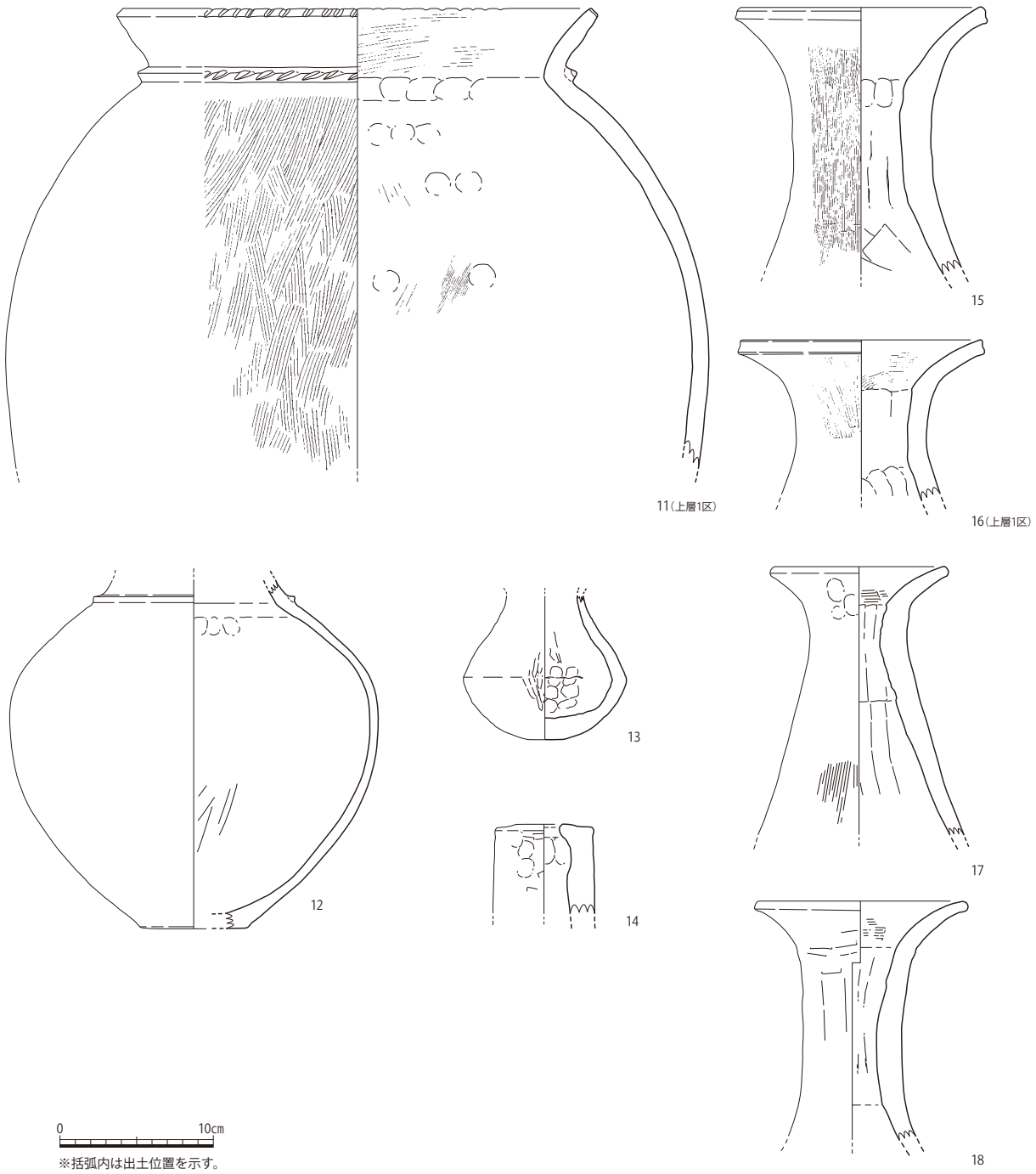
1～7は弥生土器の甕である。1の口縁部は強く外反し短く立ち上がる。所謂くの字状口縁を呈する。肩から胴部にかけて張らずに底部に向かう。また、底部は丸底に近い凸レンズ状の底部を呈する。内外面にはススが付着する。2の口縁部は外反しながら立ち上がる。外面口縁部付近には被熱による赤化がみられる。3・4の底



第５９図　７号溝状遺構実測図・遺物出土状況実測図・土層断面図（1/100・1/20・1/40）

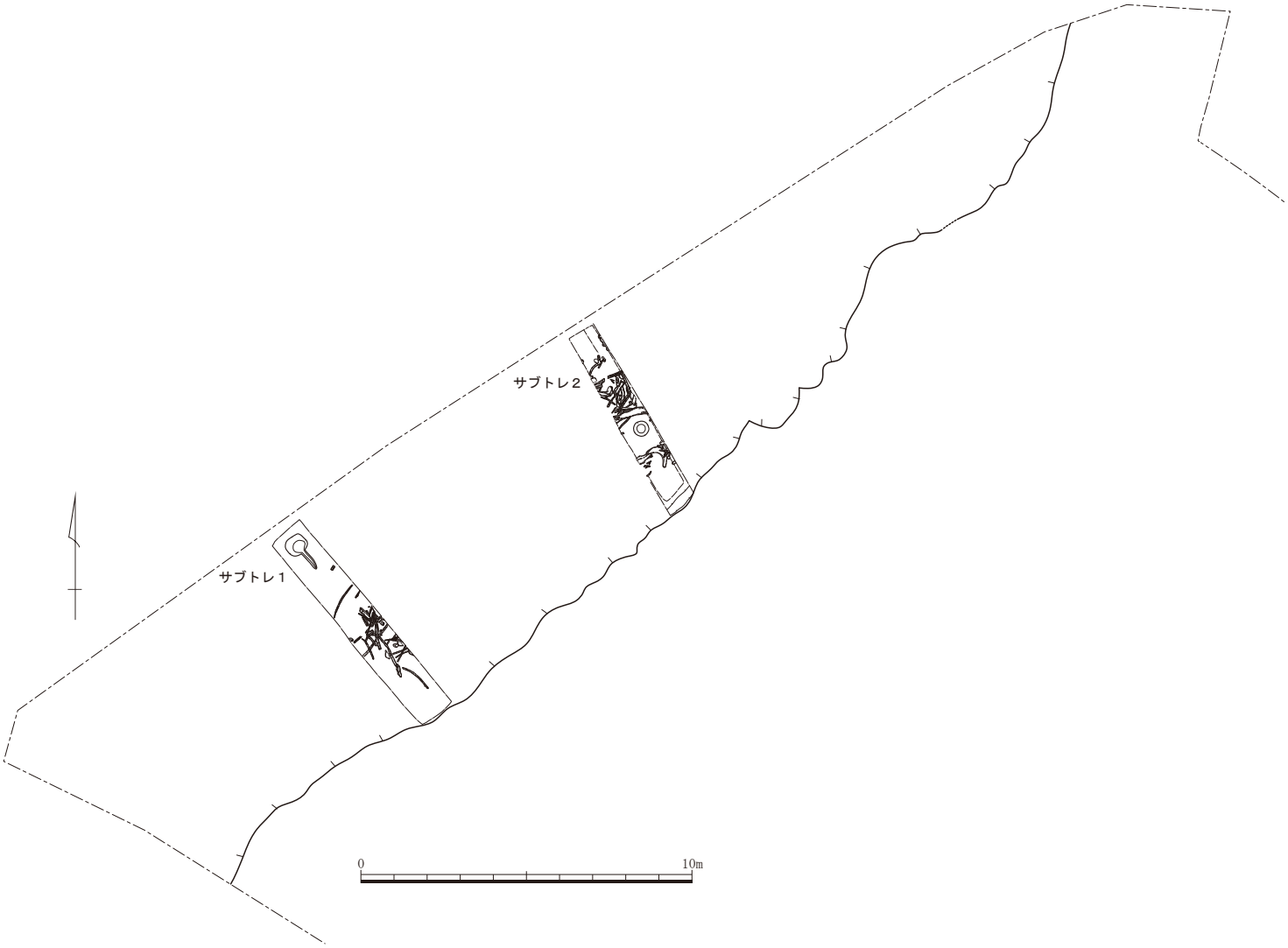


第６０図　７号溝状遺構出土遺物実測図１（1/4）

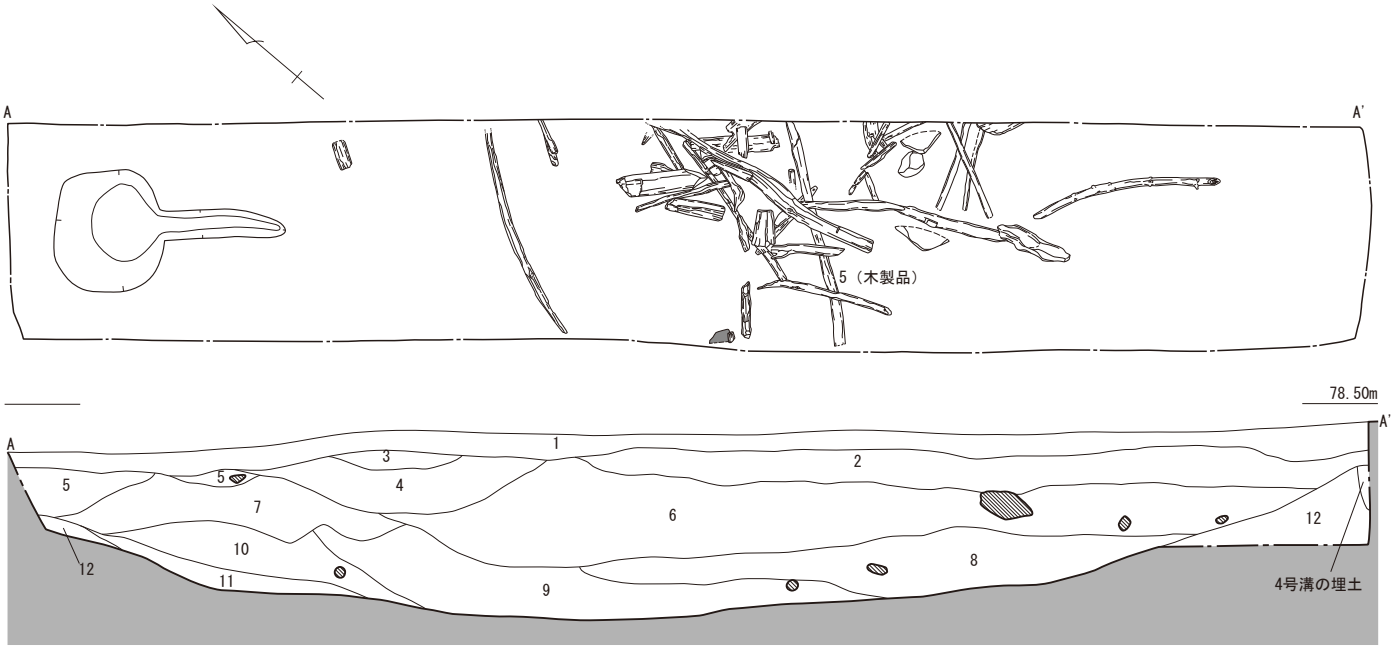


第６１図　７号溝状遺構出土遺物実測図２（1/4）

部は平底を呈する。3 の外面胴部には刻み目突帯が付される。また、底部内面には指頭圧痕が残る。5 は胴部で内外面にハケ目が施される。6・7 の底部は平底である。8・9 は弥生土器の高坏である。8 の口縁部は内湾し短く立ち上がる。また、端部は方形を呈し、頂部を窪ませる。9 の口縁部は外反しながら短く立ち上がる。口縁端部は方形を呈し、頂部を窪ませる。外面口縁部に被熱による赤化がみられる。10 は弥生土器の鉢と考えられる。口縁部は緩やかに外反し立ち上がる。また、一部に打ち欠きがみられる。胴部には突帯が貼り付けられる。11 ～ 13 は弥生土器の壷である。11 の口縁部は外反しながら立ち上がり、所謂くの字状口縁を呈する。口縁端部には刻み目文が、頸部には刻み目突帯が付される。12 の頸部には突帯が付される。内面頸部付近には指オサエが施される。底部は平底を呈する。13 の胴部最大径が中位よりも下段に来る。内外面は被熱による黒化がみられる。底部は丸底に近い。外面はミガキが、内面は指オサエが施される。14 は弥生土器の支脚である。内外面

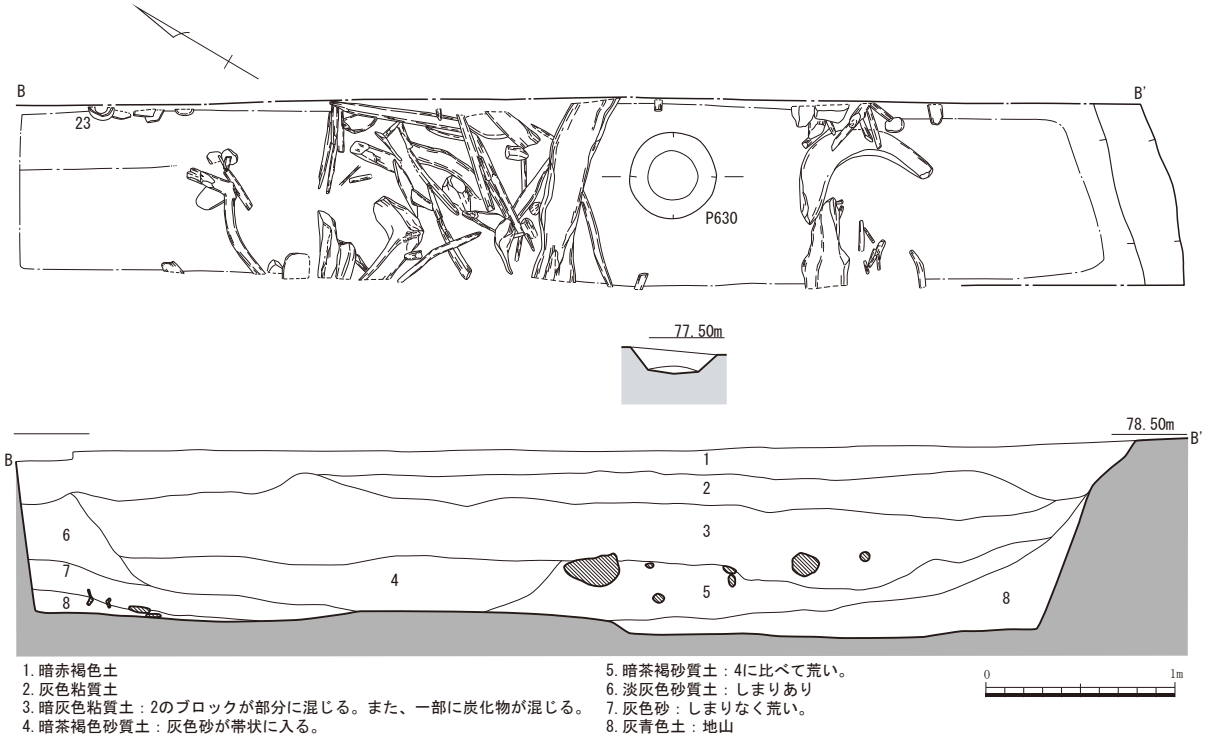


第６２図　８号溝状遺構実測図（1/200）



1. 暗赤褐色土
2. 灰色粘質土
3. 暗灰色粘質土
4. 暗褐色土
5. 灰色砂質土：しまりあり、赤褐色の沈着物が全体に見られる。
6. 暗灰褐色粘質土
7. 灰色砂質土：よくしまる
8. 暗灰褐色砂質土：部分的に淡褐色砂が混じる。
9. 暗茶褐色土：有機物・炭化物が多量に含まれる。
10. 暗茶褐色土
11. 灰色砂
12. 灰青色土：地山

第６３図　８号溝状遺構（サブトレンチ１）実測図及び土層断面図（1/40）



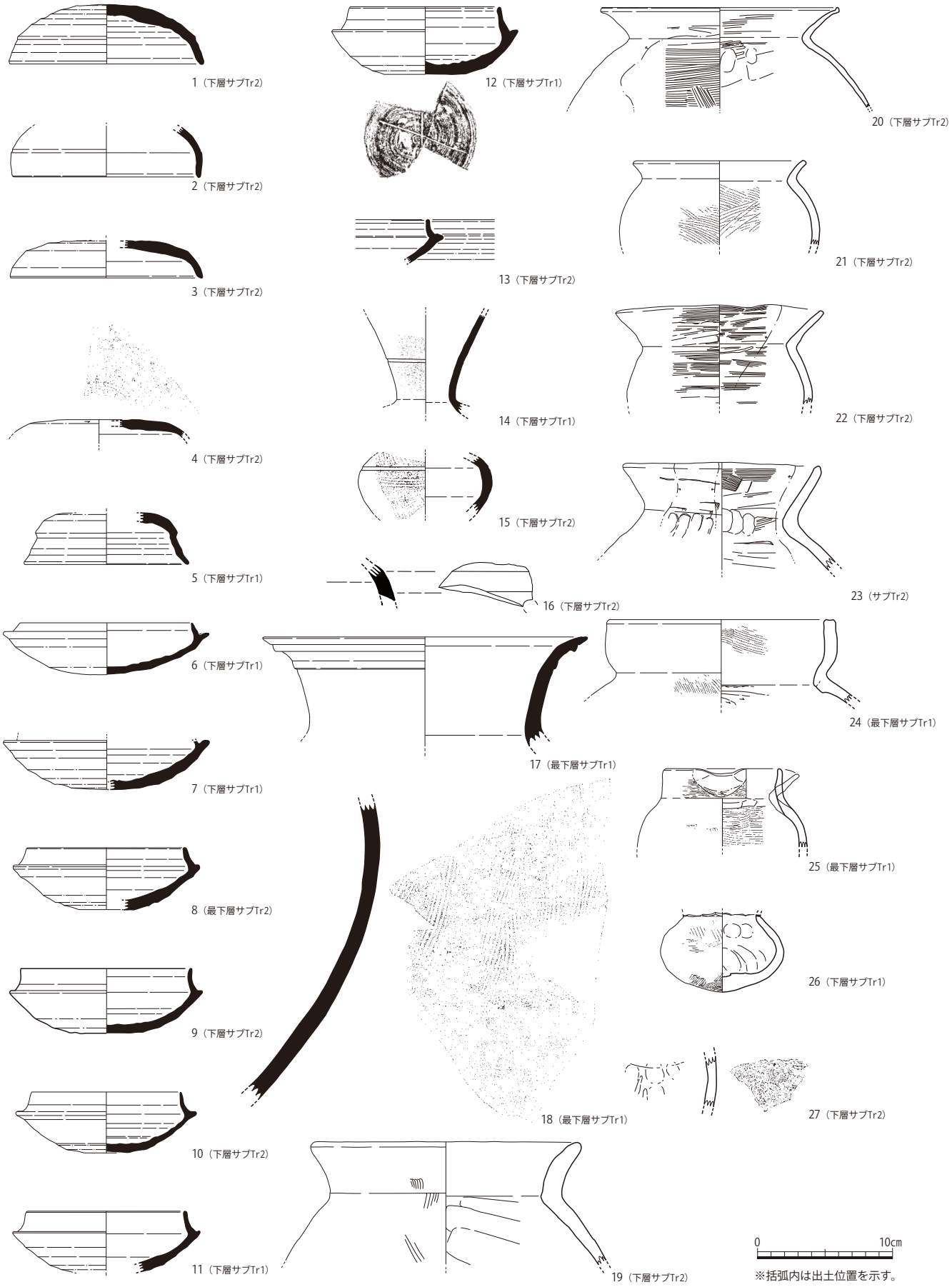
第６４図　８号溝状遺構（サブトレンチ２）実測図及び土層断面図（1/40）

に指オサエが施され、頂部に穿孔が確認される。15 ～ 18 は弥生土器の器台である。15・18 の内面には絞り痕が残る。17 の外面には被熱による赤化がみられる。いずれの器台もくびれの位置が中段よりもやや上位にある。

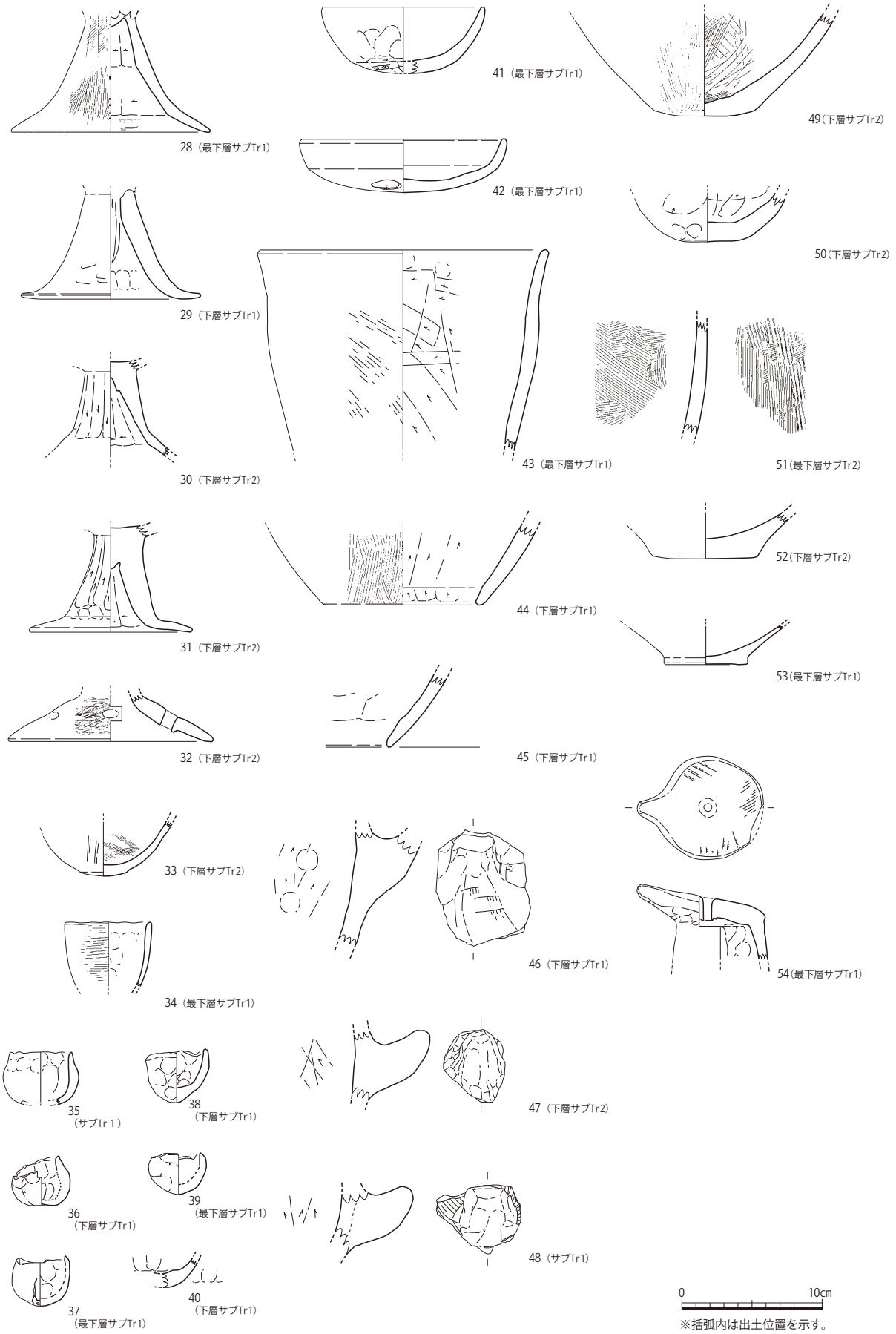
８号溝状遺構（第６２～６４図、写真図版１０～１２）

調査区の最も北側で検出され、調査区を北東から南西に向かって流れる溝である。工事によって遺構が損なわれることがなかった為遺構検出に留め、２ヶ所にトレンチを設定して規模などの確認を行った。サブトレンチ 1 は長さ約 7 m で幅は 1.2m、深さは最も深いところで 1m を測る。サブトレンチ 2 は長さ 6 m で幅 1.2m、深さは最も深いところで約 90cm を測る。これらのトレンチから 8 号溝状遺構の規模は、長さは 38 m + α で幅は最も広いところで約 7.0 m、深さは 1m 前後を測り、北東から南東に向かって流れていたと考えられる。また、サブトレンチ 1 の土層断面から、下層に灰色砂 (12 層）や暗茶褐色土 (9・10 層) が堆積しており、中段に暗灰褐色の粘質土 (6 層) が検出れていることなどから、水の流れがあり、時間をかけて埋没をしていったものと考えられる。また、４号溝状遺構を切っていた。サブトレンチ２の土層からはサブトレンチ１と同様に下層から暗茶褐色砂質土（４・５層）が確認されており、ある程度水の流れがあったものと考えられる。この遺構から出土した木製品などは主に、サブトレンチ１の８・９層とサブトレンチ２の４・５層で多く出土している。

溝の方向と調査区北側を流れる二串川が近いことから、この遺構は二串川から水を引くための溝であったと考えられる。また、トレンチ２底部からは種実が大量に出土したピット（P630）が検出されている。この種実は第 4 章自然化学分析によって弥生時代後期という結果が出ている。このピットは検出段階で上部のほとんど削平されているものと考えられ、断面形状は半円形を呈している。出土遺物は、土器などの他に木製品、木材や自然木が多量に出土しており、今回確認できなかったが、近辺には、井堰などの水を溜めておく施設があった可能性が考えられる。主な時期は、出土遺物から古墳時代後期と考えられる。また、一部に弥生土器が出土しているが、これは前述したピット (P630) が削平されたことによる混入の可能性が考えられる。



第６５図　８号溝状遺構出土遺物実測図１（1/4）



第６６図　８号溝状遺構出土遺物実測図２（1/4）

出土遺物（第６５・６６図、写真図版３０～３３）

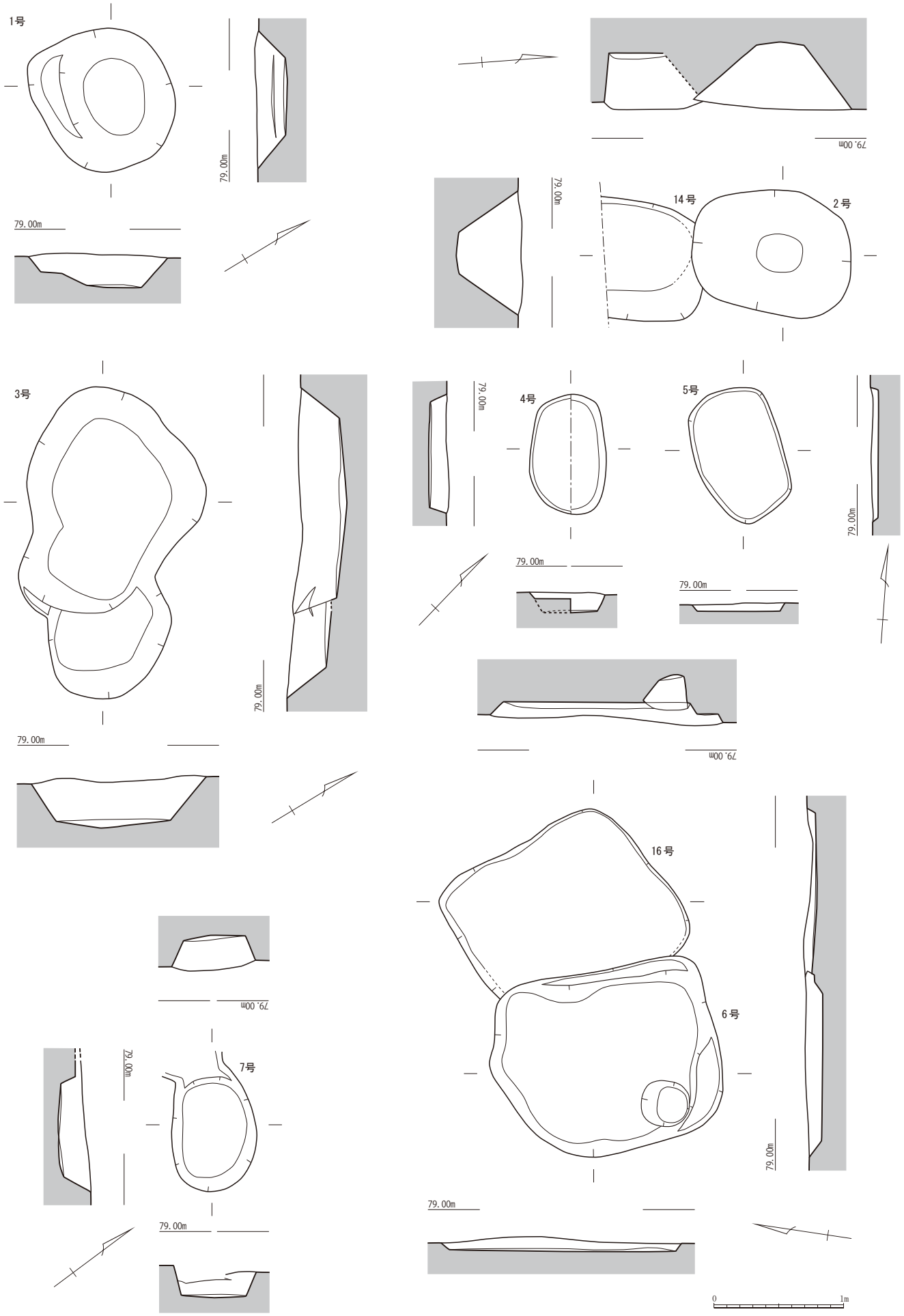
出土位置について、上層・下層・最下層とに分けて説明を行う。ここでの分層は、層序ごとに定めたものではなく、遺構検出面から底部までを大きく２分割し、更に底部付近（サブトレンチ１では８・９・11、サブトレンチ２では４・５・７・８周辺）から出土した遺物に関して最下層として分類している。

上層からは 35 のミニチュア土器、48 の土師器甑が出土している。

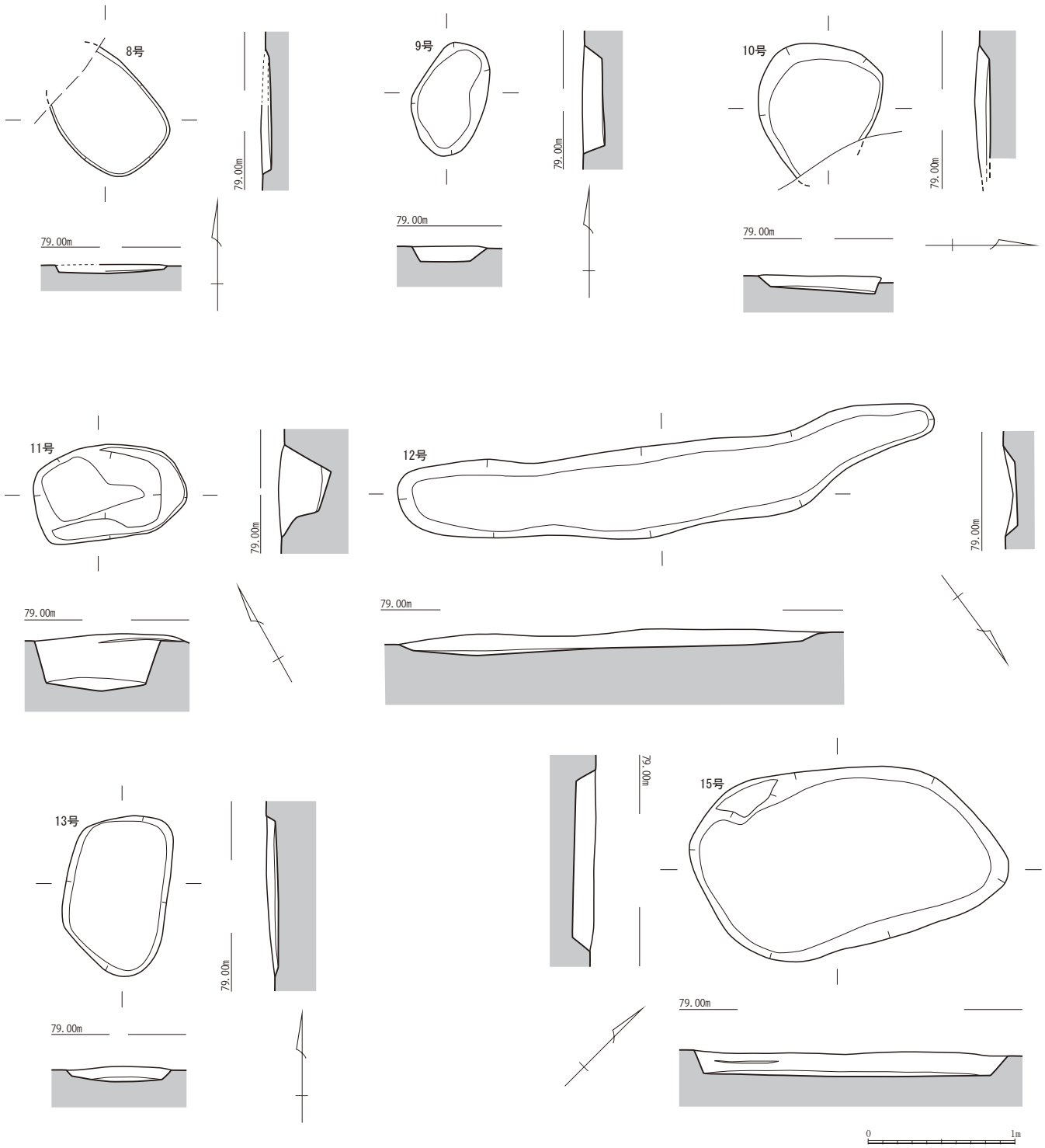
下層からは主に１～５の須恵器坏蓋、6･7 などの須恵器坏身、19 などの土師器甕、26 の小型丸底壷、29 などの高坏、36 などのミニチュア土器や 49 の弥生土器甕と考えられる底部などが出土している。

最下層からは８の須恵器坏身、17･18 の須恵器甕、24 などの土師器壷、28 の土師器高坏や 41 の坏、54 の支脚などが出土している。上層からの出土はほとんどなく、主に下層・最下層からの出土がほとんどであった。また、一部に縄文・弥生土器が出土しているものの、ほとんどが古墳時代後期で収まるものと考えられることから、長期間使用されたような溝ではなかったと想定される。

１～５は須恵器の坏蓋である。1 は外面ヘラ削りが施され、細かく稜が形成される。また、天井部と口縁部の境に明確な段を持ち、内面には付着物がある。2 は内外面とも調整不明瞭であるが、天井部と口縁部の境には明瞭な段を持ち、口縁端部には稜が形成される。3 は外面ヘラ削りが施され、口縁端部には段が形成される。4 は外面ヘラ削りが施され、自然釉がかかる。このほか外面にはヘラ記号が施される。5 は外面ヘラ削りが施され、細かく稜が形成される。屈曲部で段を形成し、外傾しながら広がる。口縁端部には摘み調整がほどこされる。6～13 は須恵器の坏身である。6・8 は立ち上がり部が内傾し、直線的に立ち上がる。6 の外面はヘラ削りが施され、稜が形成される。8 の口縁端部には摘み調整が施され、外面にはヘラ削りが施される。7 の外面はヘラ削りが施され、細かく稜が形成される。9～13 の立ち上がり部は口縁端部に向かって一度屈曲した後に、垂直に立ち上がる。9・10・12・13 の屈曲部には稜が形成される。11・12 の端部は摘み調整が施される。また、12 の外面底部にはヘラ記号が施される。13 の外面はヘラ削り施され、細かく稜が形成される。14～16 は須恵器の甕である。14 は口縁部から頸部にかけての破片で中段付近に線刻がある。また､頸部付近には波状文が施される。15 は胴部片で外面はハケメが施される。16 は胴部片であると考えられる。穿孔の一部が残存しており、内面には被熱による焼き膨れによる割れが確認できる。17・18 は須恵器の甕である。17 の口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部で大きく外反する。また、端部には断面三角形の突帯が２条施される。（内、１条はほとんど三角を呈していない。）18 は胴部で外面全体にハケメが施される。19～23 は土師器の甕である。19 の口縁は外反しながら立ち上がる。また、口縁部は厚みがあり、外面にはススが付着する。内面は被熱による剥離が見られる。20 の口縁部は強く外反しながら立ち上がる。また、口縁端部は摘み上げられ、全体的に器壁は薄い。外面にはススが付着する。21 の口縁部は外反ながら短く立ち上がる。外面にはススが付着する。22 の口縁部は外反しながら立ち上がる。また、歪みがみられる。内外面共に工具ナデが施される。このほか、外面は被熱による黒化がみられる。23 の口縁部は若干内湾しながら外傾しながら立ち上がる。内面外面共に頸部付近で指オサエが施される。24～27 は土師器の壷である。24 の口縁部は内湾しながら垂直に立ち上がる。口縁断面は方形を呈する。25 の口縁部は垂直に立ち上がり、注口がつく。26 の口縁部は打ち欠かかれている。内面底部には指ナデが施される。また底部にはヒビ割れがみられる。27 は胴部と考えられ、外面には線刻が施される。28～32 は土師器の高坏である。28～30 の脚部は端部に向かってなだらかに開く。28 の外面は全体にハケ目が施される。内面は工具ナデが施される。29 は脚部端部で若干外反する。内面には絞り痕が残る。外面には工具痕が施される。30 は内外面共にケズリが施される。31 は脚部端部付近で大きく外反して外に開く。内外面にケズリおよび横ナデが施される。32 は短脚で端部に向かって大きく開く。穿孔が２個確認されている。33～40 は土師器の鉢である。これらはいずれもミニチュア土器である。34～36・38・40 は内外面に指オサエが施される。41・

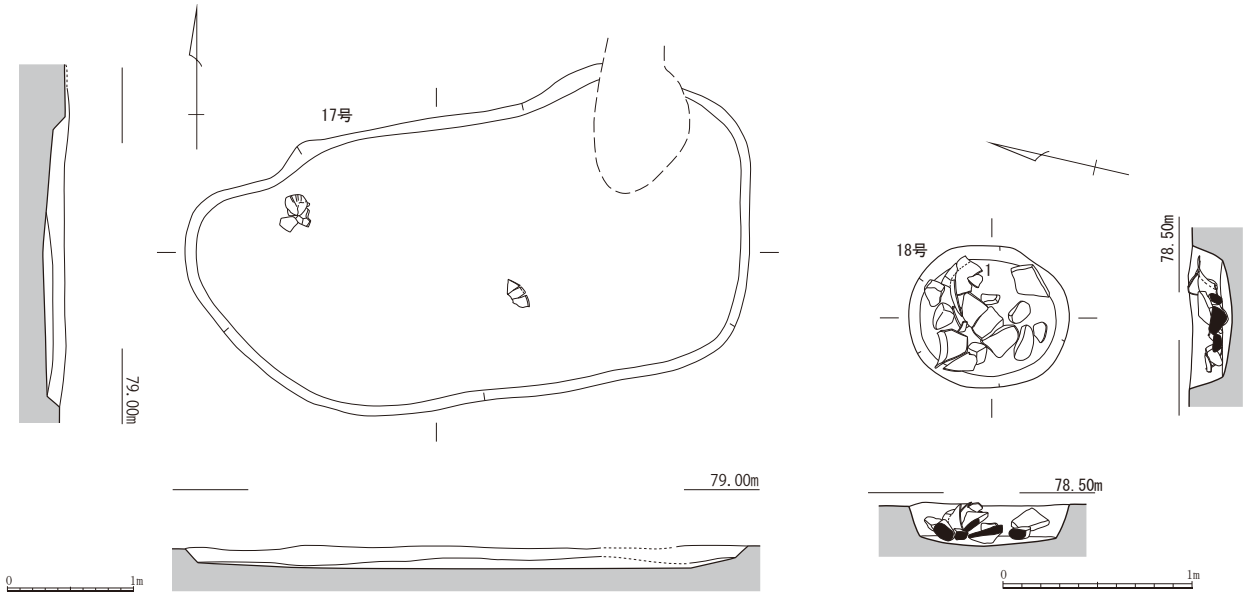


第６７図　土坑実測図１（1/40）



第６８図　土坑実測図２（1/40）

42 は土師器の坏である。41 の口縁部は直口縁でほぼ垂直に立ち上がる。外面に指ナデが施される。このほか 1 ～ 3㎜程度の赤色粒子が多く含まれる。42 は浅い坏である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。外面にはススが付着する。また外面底部付近には剥落がみられる。43 ～ 49 は土師器の甑である。43・44 は単孔の甑で、43 の内面にケズリが施され、外面はナデが施される。44 は外面ハケ目が施され、内面はケズリが施される。45 は単孔の甑か、内外面に横ナデが施される。46 ～ 48 は取手で 46 は外面に工具痕が残る。47・48 は内面をケズリが施され、外面は指オサエが施される。49 ～ 51 は弥生土器の甕である。49 は平底の底部で内外面にナデが



第６９図　土坑実測図３（1/40・1/60）

施される。外面全体にススが付着している。50 は平底の底部で内外面に指オサエが施される。また、外面底部には布目痕が残る。51 は胴部で内面にハケ目が施され、外面はハケ目後にタタキが施されている。52 は縄文土器鉢の底部と考えられる。磨耗の為に内外面共に調整は不明瞭である。53 は縄文土器の鉢と考えられる。平底である。内外面は磨耗の為、調整は不明瞭である。54 は弥生土器の支脚である。頂部には穿孔がある。外面はタタキが施され、内面には指オサエが施される。

４．土坑（第６７～６９図、写真図版１２・１３）

土坑は調査区全体で確認されており、特に北側で多く見られる。しかし、平面形が不定形のものや深さが異なるものなどが多い。その中には近世以降の撹乱や自然地形の落ち込みと考えられるものが多く見られる。今回は遺物が出土したものや、埋土がその他の遺構に類似したものに関して報告する。なお、出土遺物については全体に少量であった為、この項目の最後にまとめて報告する。

1 号土坑

調査区の北側で検出された。調査区を南東から北西に向かって流れる 4 号溝状遺構を切る形で検出されている。東西、南北ともに約 1.0m で円形を呈し、深さは約 20cm を測る。西端にテラスを持ち、底面はほぼ平坦である。

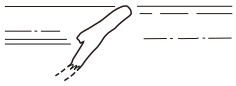
2 号土坑

調査区北側で検出された。平面形は南北 1.2m ×東西 0.9m の楕円形を呈し、深さは約 50cm を測る。底面はほぼ平坦である。後述する１４号土坑を切っている。

3 号土坑

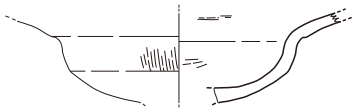
調査区北側で検出された。２号竪穴建物の北西隅を切っている。平面形は南北 2.4m ×東西 1.3m の楕円形で、深さは最も深い所で 34cm を測る。底面は中心が下がりレンズ状を呈する。出土遺物として陶磁器片が出土している。

3号土坑

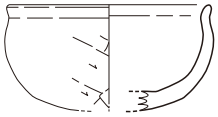


1

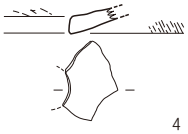
6号土坑



2



3

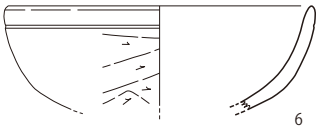


4

8号土坑

5

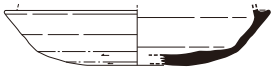
12号土坑



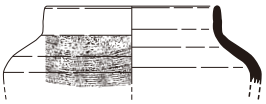
6

17号土坑

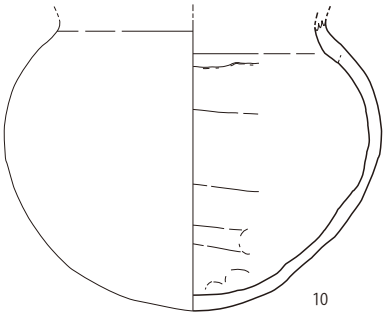
7



8

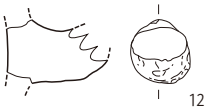


9

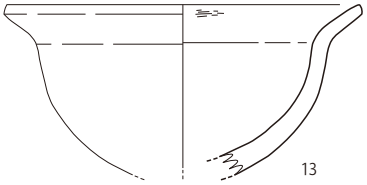


10

11

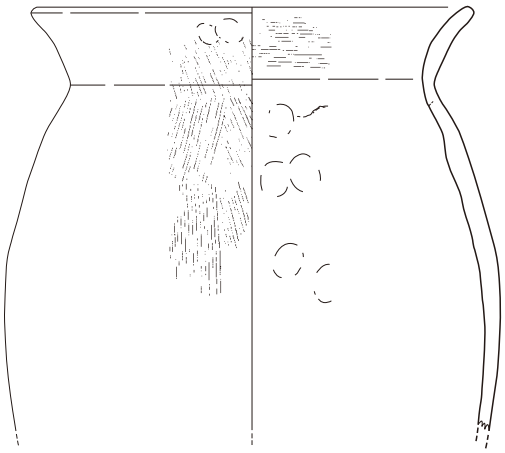


12

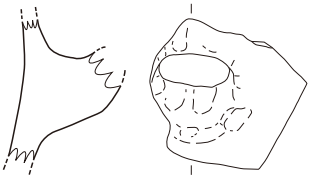


13

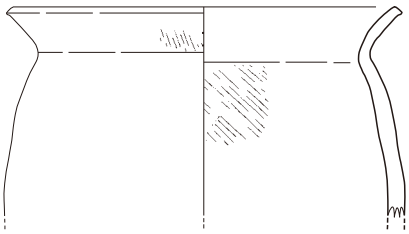
18号土坑



15



14



16

0 10cm

第７０図　土坑出土遺物実測図（1/4）

4 号土坑

調査区北側で検出された。平面形は南北 1.0m ×東西 0.7m の楕円形で、深さは約 20cm で、底面はほぼ平坦である。

5 号土坑

調査区北側、9 号竪穴建物付近で検出された。平面形は南北 1.0m ×東西 0. 7 m の楕円形で、深さは約 6 cm と非常に浅く、底面はほぼ平坦である。

6 号土坑

調査区中央より北側で検出された。平面形は南北約 1.8m ×東西約 1.4 mの楕円形で、深さは最も深い所で検出面から約 14cm と浅い。底面はほぼ平坦で、隣接する 16 号土坑を切っている。出土遺物も少量ながら出土している。

7 号土坑

調査区北側、土坑の中でもは最も北側で 8 号溝状遺構の近くで検出された。平面形は北東 - 南西約 0.6m ×南東 - 北西約 0.9m の楕円形で、深さは最も深い所で検出面から約 24cm を測る。

８号土坑

調査区北側、東寄りの調査区境界付近で北側でも比較的に遺構蜜の低い場所で検出され、東側一部を近世の撹乱で削平を受けている。平面形は南北 0.8m ×東西約 0.8m のやや楕円で、深さは検出面より約 8cm と非常に浅い。

９号土坑

調査区北側、5 号土坑の南側、9 号竪穴建物付近で検出された。平面形は南北約 0.9m ×東西 0.5m の楕円形で、深さは検出面より最も深い所で 16cm を測る。底面はほぼ平坦である。

10 号土坑

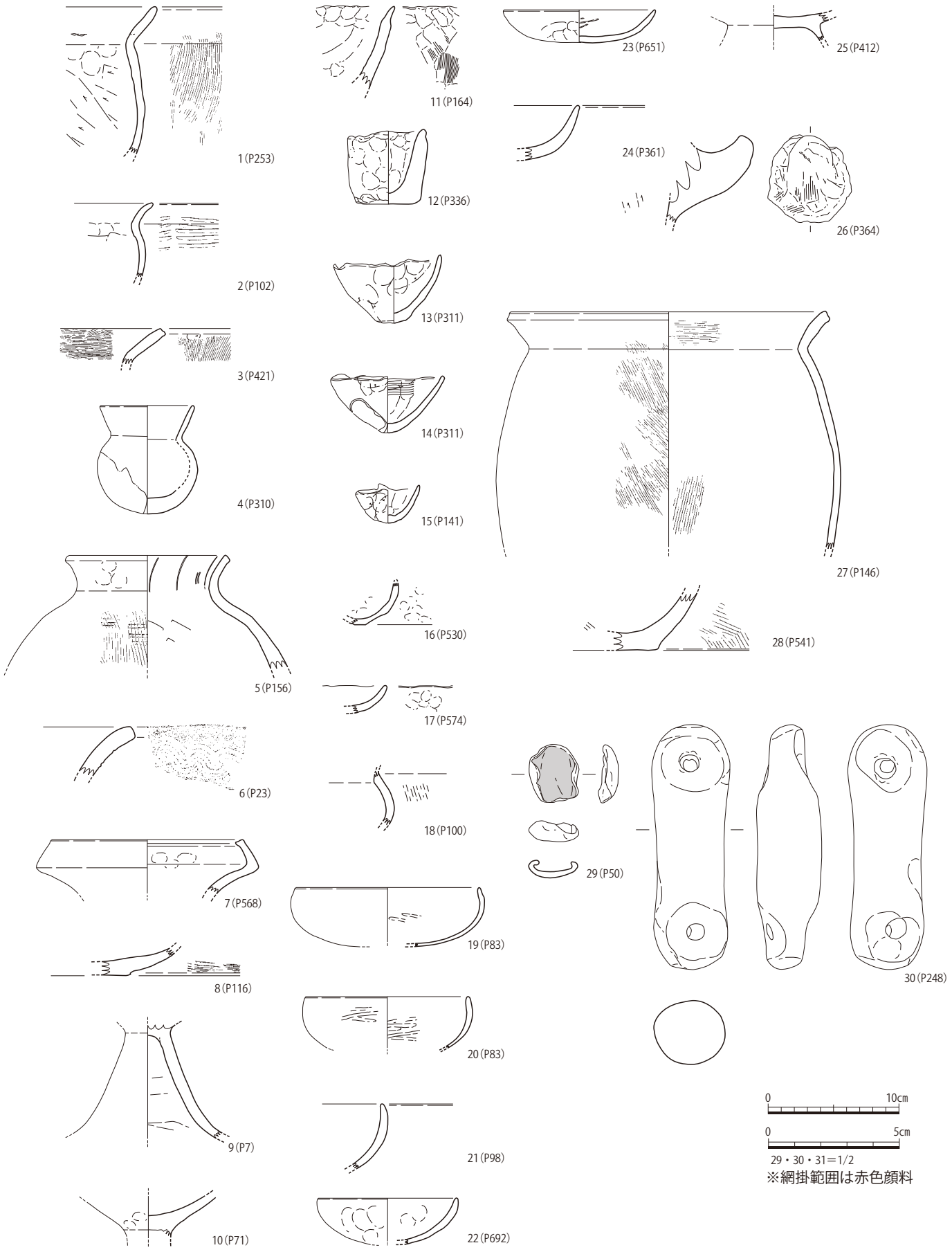
調査区北側で検出され、東側の一部を 3 号溝状遺構に切られている。平面形は南北 0.8m ×東西 0.7（残存部）で楕円形を呈すると考えられる。深さは検出面より最も深い部分で約 12cm を測る。底面は北側に向かって緩やかに下がっており、平坦である。

11 号土坑

調査区北側、検出された。平面形は北東 - 南西約 0.6m ×北西 - 南東 1.0m の楕円形を呈する。深さは検出面より最も深い所で 40cm を測る。東側に一部テラスを持つ。底面は中央が下がる。

12 号土坑

調査区北側で検出された。平面形は北東 ‐ 南西 0.6m ×北西 ‐ 南東約 2.9m で非常に長い楕円形を呈する。深さは検出面よりも最も深い所で約 14cm を測る。底面はほぼ平坦である。



第７１図　ピット出土遺物実測図（1/4・29～31は1/2）

13 号土坑

調査区の北側、3 号竪穴の西側で検出された。平面形は南北 1.1m ×東西 0.7m でやや楕円形を呈する。深さは検出面より約 8 cm と非常に浅い。底面はほぼ平坦である。

14 号土坑

調査区北側、２号竪穴建物の南側で 2 号土坑に北側の一部を切られた状態で検出された。南側半分は調査区外に伸びており、全体は確認できなかった。確認できる範囲でその規模は、南北 0.7m+ α ×南北 0.9m で楕円形を呈すると考えられる。深さは検出面より 50cm を測る。底面は中央がやや下がる。

15 号土坑

調査区北側で検出された。平面形は北東 – 南西 2.1m ×南東 - 北西 1.2m の楕円形を呈し、深さは検出面より約 15cm を測る。底面はほぼ平坦である。南東側に一部にテラスが確認できる。

16 号土坑

調査区北側で検出された。西側を 6 号土坑によって切られている。平面形は南北約 1.8m ×東西 1.3m の楕円形を呈する。深さは検出面より約 10cm を測る。平面はほぼ平坦である。

17 号土坑

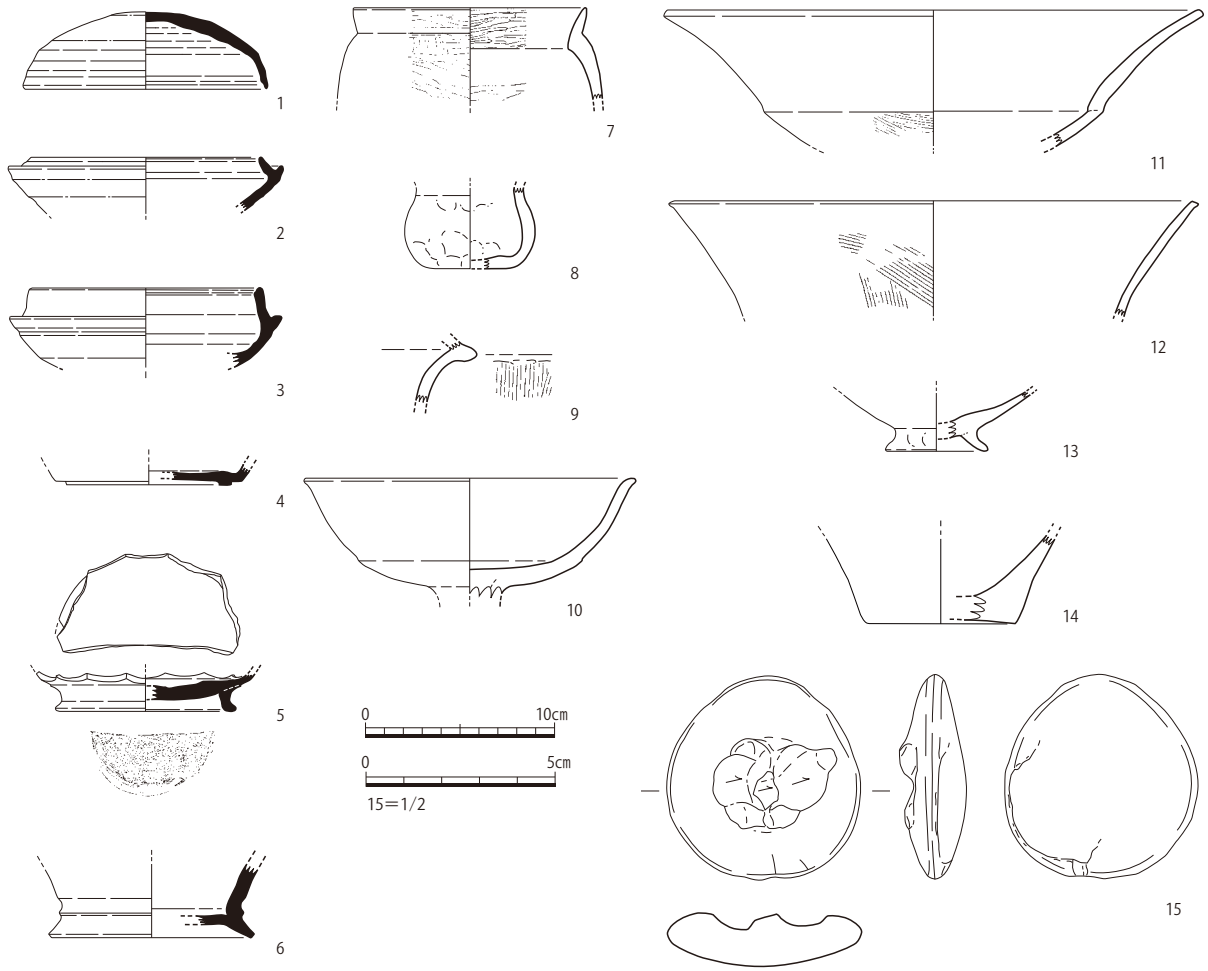
調査区のほぼ中央で検出された。北東の一部を攪乱によって切られている。平面形は南北 2.3m ×東西 4.5m の楕円形を呈し、深さは検出面より約 20cm を測る。今回確認された土坑の中で最も大きい。平面はほぼ平坦である。遺物も比較的多く出土している。

18 号土坑

調査区南側で 1 号溝と 2 号溝の間で検出された。平面形は南北 0.8m ×東西 0.7m でほぼ円形を呈し、深さは検出面より約 20cm を測る。底面は中央が下がりレンズ状を呈する。遺構からは土器以外に礫が多く出土している。その用途は不明だが、廃棄土坑の可能性を考えておきたい。

出土遺物（第７０図、写真図版３３・３４）

1 は 3 号土坑から出土した陶器の皿である。口縁部は肥厚しており、内面には段が付く。内外面には鉄釉が施される。2 ～ 4 は 6 号土坑から出土した遺物である。2 は土師器の高坏で、口縁端部付近で外反し大きく外に開く。内面にはミガキが施される。3 は土師器の坏である。口縁部に向かって内湾しながらほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部で若干外反し外に開く。4 は土師器の甑である。穿孔部分の一部が残存しており、多孔式の甑底部と考えられる。5 は 8 号土坑から出土した弥生土器の甕である。口縁端部付近の破片で刻み目文が施される。6 は 12 号土坑から出土した土師器の坏である。口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。外面口縁端部付近では沈線が巡る。また外面では被熱による赤化が一部にみられる。7 ～ 13 は 17 号土坑より出土した遺物である。7 は須恵器の坏蓋で内外面ともに回転ナデが施される。口縁部に向かって段が形成され、垂直に降りる。端部は摘み上げによる調整が施される。8 は須恵器の坏身で外面は回転ケズリが施される。受け部には若干の窪みがみられる。9 は須恵器の壷と考えられる。口縁部は垂直に短く立ち上がる。外面肩部にはカキ目が施される。10 は土師器の甕で底部は丸底を呈し、外面全体に被熱による赤化がみられる。内面にはススが付着する。11 は土師器の坏である。口縁部に向かって内湾しながら立ち上がる。内外面とも摩耗の為調整が不明瞭である。12 は土



第７２図　検出・撹乱出土遺物実測図（1/4、1/2）

師器の甑把手である。外面には指オサエが施される。13 は弥生土器の鉢である。口縁部に向かって内湾しながら立ち上がり、端部付近で大きく外反する。胎土には 1 ～ 3㎜程度の砂礫が多く含まれる。14 ～ 16 は 18 号土坑より出土した遺物である。14 は土師器の甑把手である。外面は指オサエが施される。15 は弥生土器の甕である。口縁部は外反しながら立ち上がる。外面口縁端部付近で指オサエが施される。頚部から肩部にかけてあまり張らずに胴部に向かう。16 は弥生土器の甕である。口縁部は外傾しながら直線的に立ち上がる。また、端部断面は方形を呈する。内外面ともにハケ目が施されており、胎土には 1 ～ 3㎜程度の砂粒が多く含まれている。

5．ピット

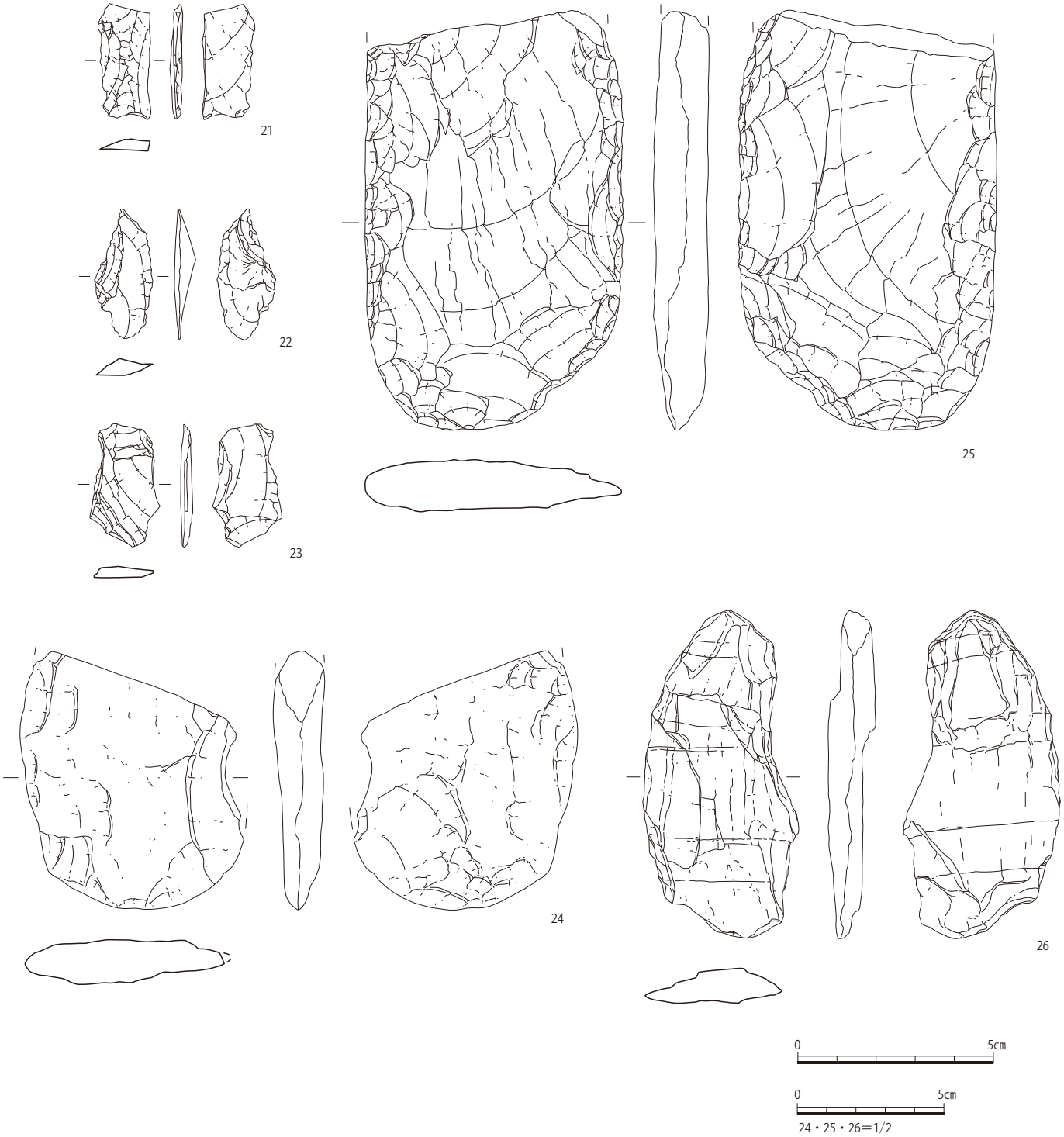
本調査区でピットは約 700 基以上検出している。その他の遺構と同様に多くは北側でその密度が高く、南にいくにしたがって密度が薄くなっていく。特に、5・7 号竪穴建物周辺や、1 ～ 3 号掘立柱建物周辺で多くみられる。この周辺に、他に建物が成立する可能性がある。ここでは、ピットから出土した主な遺物について解説する。

出土遺物（第７１図、写真図版３４・３５）

出土したピットに関しては附図及び第 24・25 表を参考にしていただき、ここでは遺物の器種ごとに説明をおこなう。

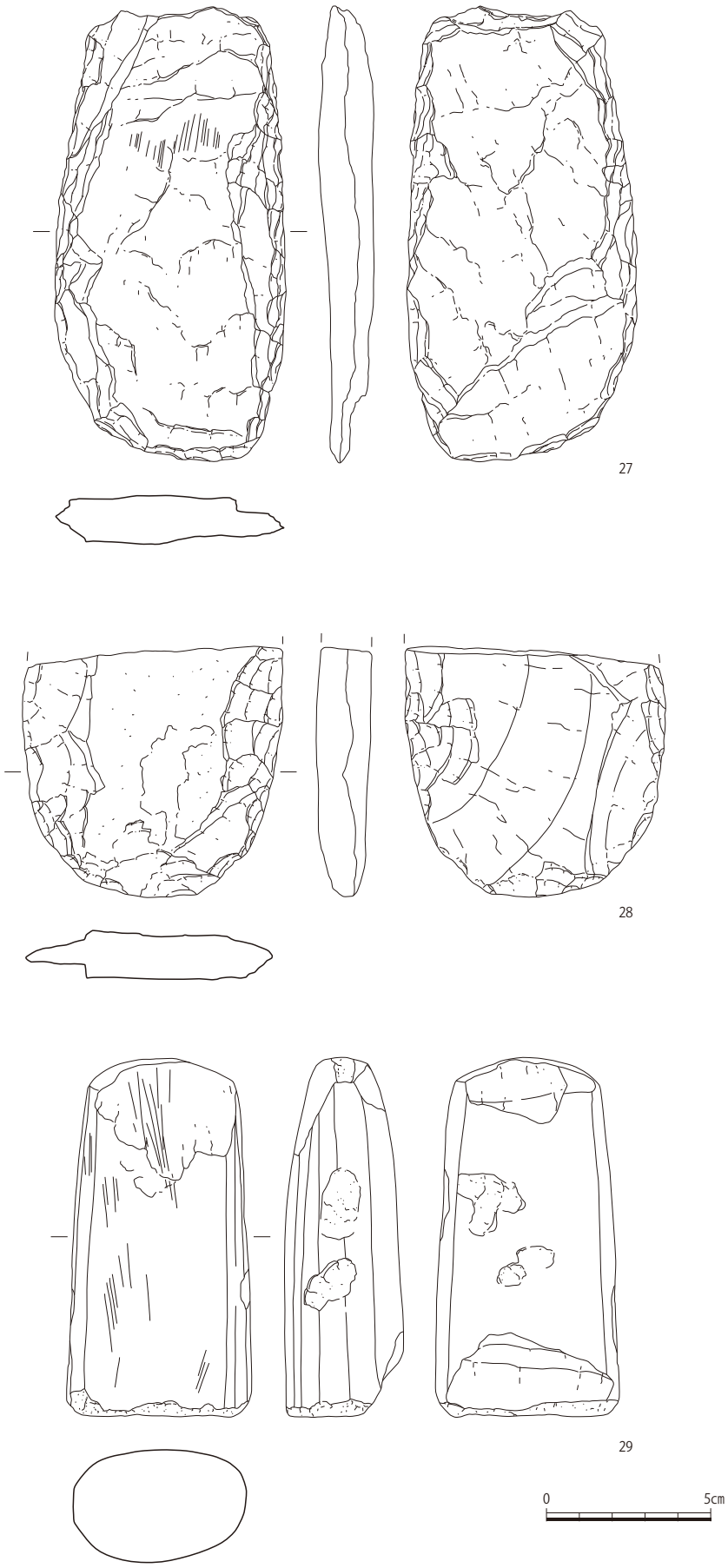
1 ～ 3 は土師器の甕である。1 の口縁部は外傾し、若干内湾しながら立ち上がる。外面はハケメが施され、ススが付着する。内面は頚部付近で指オサエが施される。また、胎土に 6㎜程度の白色粒子が混じる。2 の口縁部は

第７３図　出土石製品実測図１（2/3）

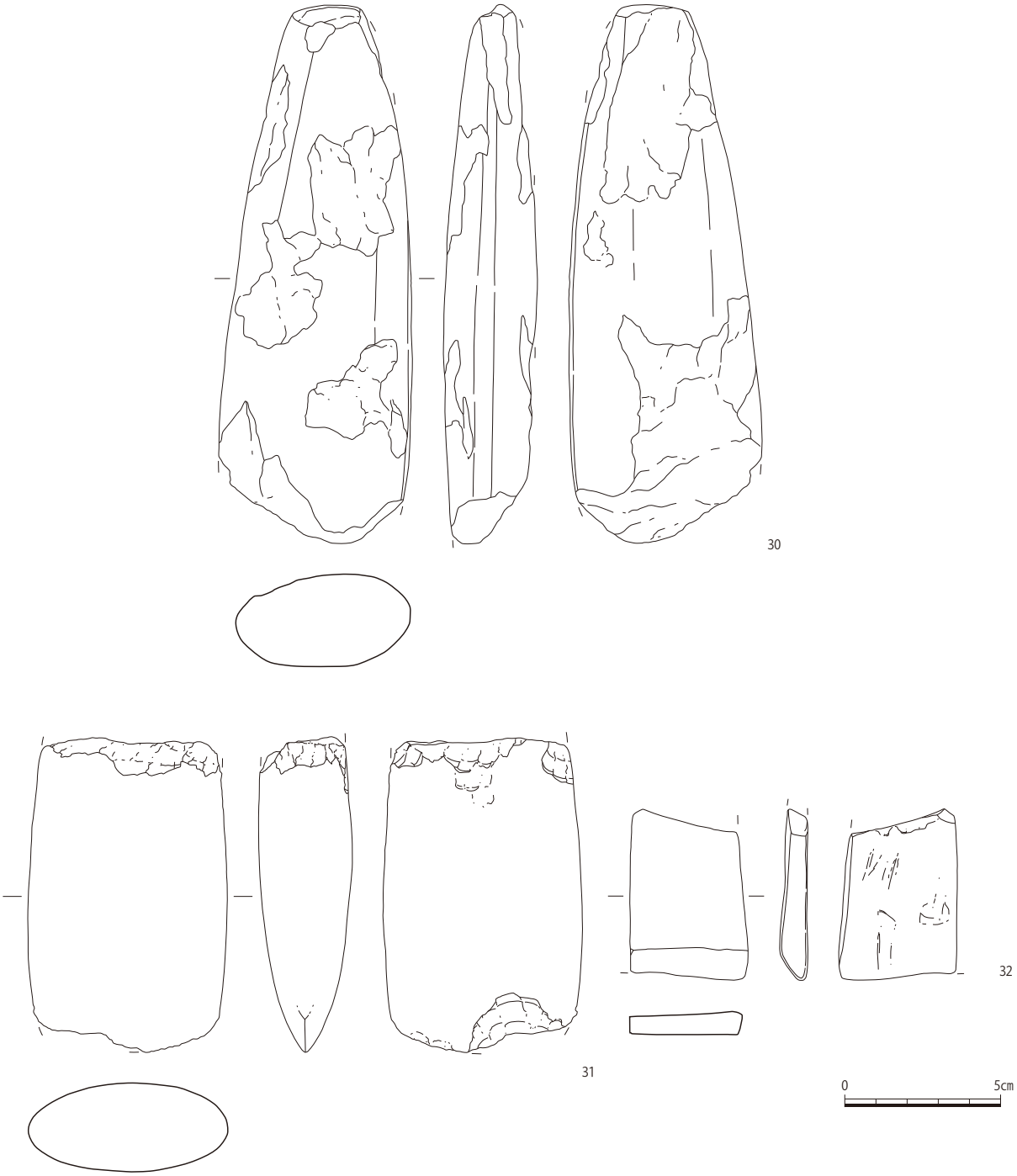


第７４図　出土石製品実測図２（1/4・1/2）

外反しながら立ち上がる。外面はタタキが施される。内面頸部付近は指オサエが施される。3 は外傾し、直線的に大きく外に開きながら立ち上がる。断面形状は方形を呈する。4 ～ 8 は土師器の壷である。4 は小型丸底壷である。口縁部は外傾し直線的に立ち上がる。外面にはススが付着する。5 の口縁部は外反しながら立ち上がる。外面口縁部には指オサエが施され、胴部にはタタキ後にハケメが施される。内面胴部には工具痕が残る。6 の口縁端部は断面形状が方形を呈し、外面には波状文が施される。7 は複合口縁壷で屈曲部から内傾しながら直線的に立ち上がる。内面には指オサエが施される。8 は底部で外面にタタキが施される。9 ～ 10 は高坏で 9 の脚部

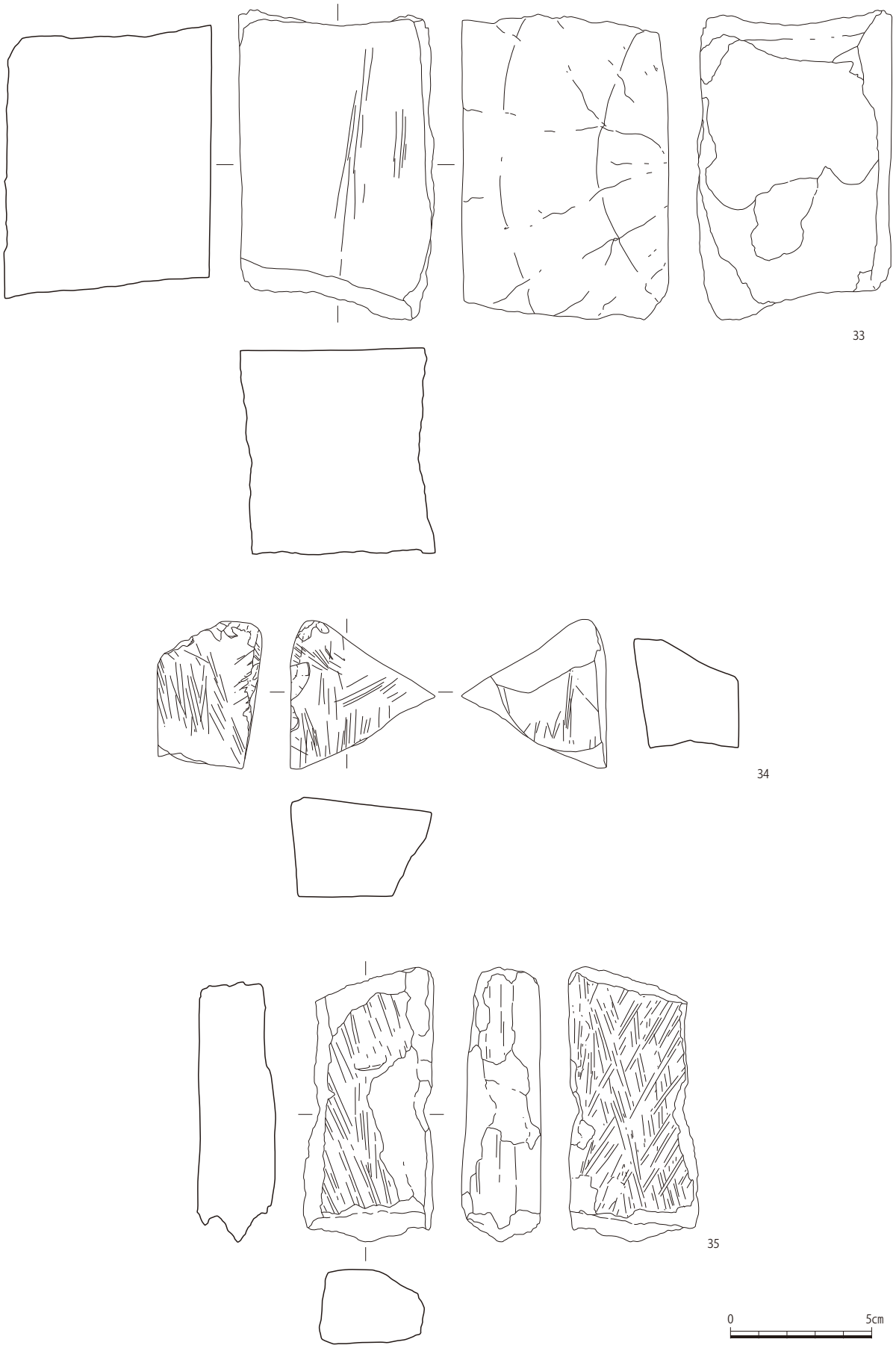


第７５図　出土石製品実測図３（1/4）



第７６図　出土石製品実測図４（1/4）

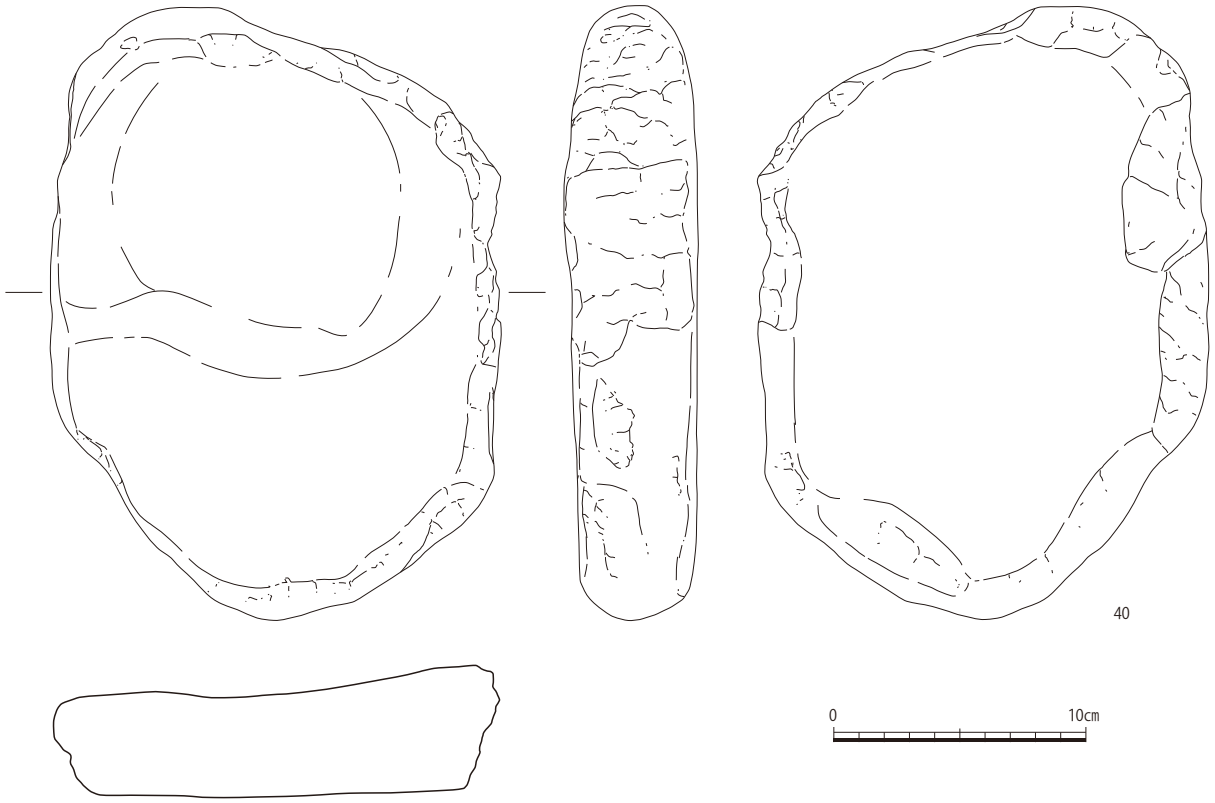
は端部に向かってスカート状に開く。内面にはナデが施される。10 は坏部である。内外面ともに摩耗によって調整は不明瞭である。11 ～ 17 はミニチュア土器の鉢である。いずれも内外面全体に指オサエが施されており、所謂手づくね土器と考えられる。11 の口縁端部は摘みにより調整が施される。12 の底部は平底を呈し、13 ～ 16 は丸底を呈する。また 14 の外面には剥離痕が残る。18 はミニチュア土器の壷で外面帯状に黒斑が巡る。19 ～ 24 は土師器の坏である。19 は口縁部に向かって内湾しながら立ち上がる。内面一部にはミガキが施される。20 ～ 22 の口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。20 は内外面にミガキによる調整が施される。21 は内外面とも摩耗の為調整は不明瞭。22 は内外面に指オサエが施される。23 の口縁部は外傾し直線的に立ち上がる。外面底部付近で指オサエが施され、内面にはススが付着する。深さは浅い。24 は口縁部に向かってほぼ垂直に立ち上がる。内外面とも調整は不明瞭だが、底部付近でススが付着している。25 は土師器の高台付坏と考えられる。26 は土



第７７図　出土石製品実測図５（1/4）

第７８図　出土石製品実測図６　(1/4)

師器の甑把手である。内外面にはケズリによる調整が施される。27･28 は弥生土器の甕である。27 の口縁部は、くの字状口縁を呈し、頸部から肩部にかけて張らずに胴部に向かう。内外面ともにハケメが施され、外面にはススが付着する。28 の底部は平底を呈し、外面にはタタキが施される。29 はミニチュア土器の皿と考えられる。両端を内側に折り込み、内面には赤色顔料が施される。30 は土錘である。双孔棒状土錘と考えられ、管状の土錘とセットで用いられていたものと考えられる。両端を指で摘み形成し、穿孔を施している。一部にススの付着がみられる。



第７９図　出土石製品実測図７（1/4）

６．その他の出土遺物（第７２図、写真図版３５～３６）

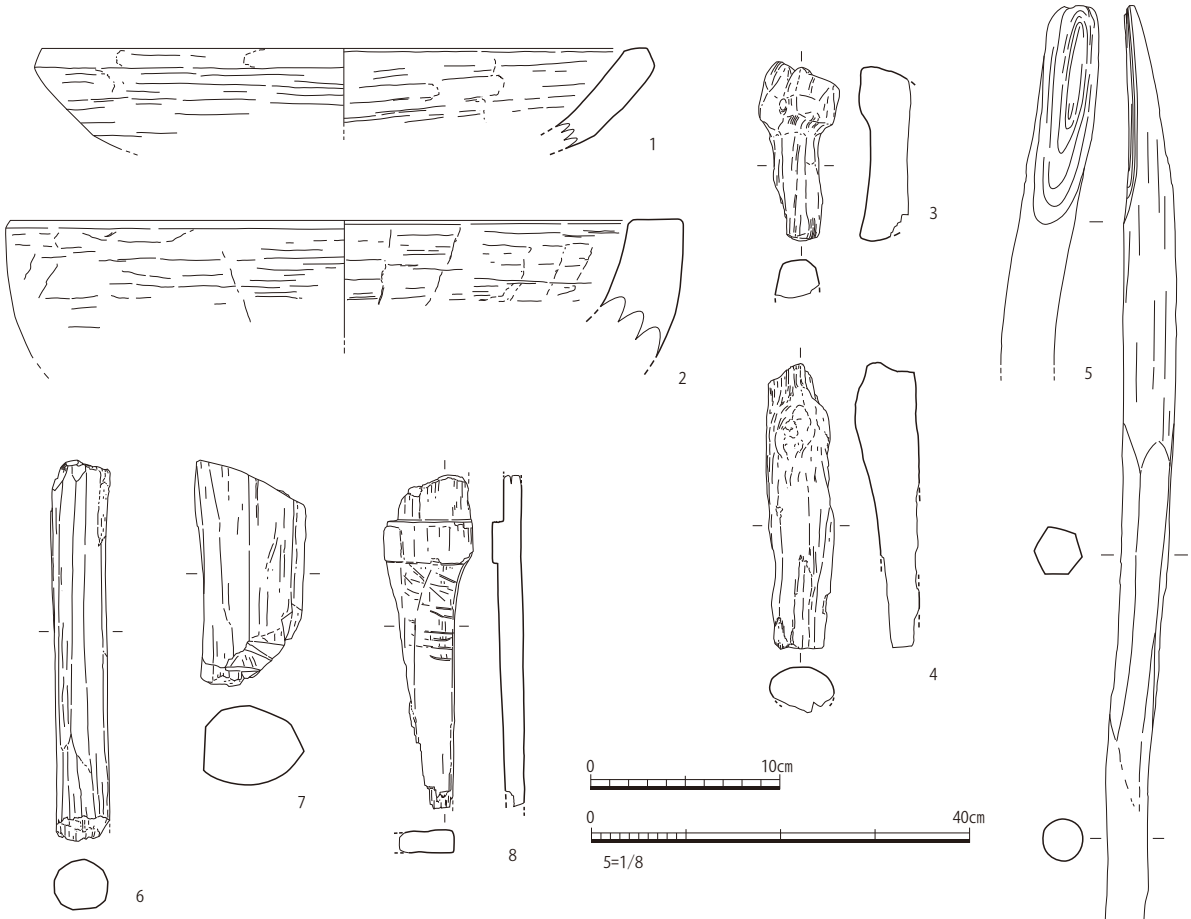
1 ～ 15 は検出時および廃土より出土した遺物である。遺跡の時期や性格を考える上で必要と考えられる遺物を以下で解説する。

1 は須恵器の坏蓋である。回転ケズリが施され、細かく稜が形成される。天井部と口縁部の境は不明瞭である。2・3 は須恵器の坏身である。2 の立ち上がり部は内傾し短く立ち上がり、受け部には窪みがみられる。3 の立ち上がり部はほぼ垂直に立ち上がり口縁端部にわずかに段が形成される。4・5 は須恵器の高台付坏である。4 の高台は短く底部外周よりやや内側に付く。5 の高台は底部外周に付され、端部に向かって伸び、端部付近で屈曲する。坏部は打ち欠きが施され、外面底部にはヘラ記号が施される。6 は須恵器の壷である。高台は底部外周から外側に向かって直線的に伸びる。外面には自然釉が残る。7 は土師器の甕である。口縁部はほぼ垂直に短く立ち上がる。内面頸部では明瞭に屈曲し稜が形成される。内外面ともにヘラミガキが施され、内面にはヘラ削りが施される。また、内外面ともにススが付着する。8・9 は土師器の壷である。8 はミニチュア土器の壷で内外面ともに指オサエが施される。底部は平底である。9 は複合口縁で内外面とも摩耗の為、調整は不明瞭である。10 ～ 12 は土師器の高坏である。10 の坏部は屈曲し若干内湾しながら立ち上がり、端部付近で外反する。坏部は深い。11 の坏部は屈曲し外反しながら外に向かって立ち上がる。12 は坏部口縁部と考えられる。13 は土師器の台付鉢である。外面台部には指オサエが施される。14 は弥生土器の甕である。底部は平底で若干上げ底を呈する。15 は土製品の模造鏡である。紐部分は残存していない。鏡面を含め全体にナデが施されている。

石器・石製品（第７３～７９図、写真図版３６・３７）

ここでは、各遺構より出土した石器・石製品をまとめて解説する。

1・2 はサヌカイト製の打製石鏃である。 1 は 2 号竪穴建物より出土している。基部を窪ませており、先端部



第８０図　出土木製品実測図（1/4）

は欠損している。2は6号溝状遺構より出土している。1と同様に基部を窪ませている。3は4号溝状遺構より出土した安山岩製の尖頭器である。全体的に丁寧な調整が施される。4～6は石匙である。4は安山岩製で2号溝状遺構より出土している。両端を欠損しており、つまみ部のみ残る。5はサヌカイト製で1号溝状遺構より出土している。4と同様に両端部を欠損しており、つまみ部のみ残存する。6は安山岩製で1号溝状遺構より出土している。右部分を欠損している。刃部には丁寧な加工が施される。7～10は削器である。7・8はサヌカイト製で1号溝状遺構より出土している。7の刃部は側面に付けられ丁寧に加工されている。8の刃部は側面から端部にかけて付けられ加工されており、一部に鉄分が付着している。9は安山岩製で2号溝状遺構より出土している。刃部は側面に付けられ丁寧に加工されている。10は粘板岩製で4号溝状遺構より出土している。11～23は剥片である。いずれも縦長剥片と考えられる。11は黒曜石製で1号溝状遺構より出土している。12・13は黒曜石製で2号溝状遺構より出土している。13は上部に打面が残る。14は黒曜石製で2号竪穴建物より出土している。15は9号竪穴建物より出土している。16は黒曜石製で11号竪穴建物より出土している。17は黒曜石製で4号竪穴建物より出土している。上部には打瘤が残る。18・19は黒曜石製でピットから出土している。18の上面には打面が残る。20は黒曜石製で5号竪穴建物より出土している。表面には自然面が残る。21は安山岩製で1号溝状遺構より出土している。22はサヌカイト製で6号竪穴建物より出土している。23は片岩製で7号竪穴建物より出土している。24～28は打製石斧である。24・25は安山岩製で1号溝状遺構より出土している。24は全面摩耗のため調整面が不明瞭である。25は側面全体に加工を施している。26～28はピットから出土している。26・27は片岩製で

28 は砂岩製である。27・28 は側面全体に加工が施されている。特に 27 は丁寧な加工が見られる。29 ～ 32 は磨製石斧である。29 は安山岩製で 2 号溝状遺構より出土している。29 の断面は楕円形を呈する。刃部は直刃である。（敲石としての転用された可能性がある。）30 は蛇紋岩製で 8 号溝状遺構より出土している。両側面及び頭部に研磨がみられ、断面は楕円形を呈する。刃部は破損しており形状は不明である。31 は輝緑凝灰岩製で 5 号溝状遺構より出土している。研磨痕は不明瞭である。刃部は一部欠損がみられるが蛤刃と考えられる。断面は楕円形を呈する。30・31 は定角式磨製石斧と考えられる。32 は砂岩製（凝灰岩の可能性あり）で 17 号土坑から出土している。両側面及び頭部に研磨がみられ、刃部は片刃で断面は方形を呈する。扁平片刃石斧と考えられるが、砥石の可能性も考えられる。33 ～ 37 は砥石である。33・34 は 1 号溝状遺構から出土している。33 は安山岩製で使用痕は 2 面で確認される。34 は泥岩製で使用痕は表裏を含め 3 面で確認される。35 は片岩製で 2 号溝状遺構より出土しており、3 面から使用痕が確認される。また、この砥石はその形状と中央部に括れがあることから柱状石斧未成品の転用が考えられる。36 は砂岩製で 8 号溝状遺構より出土している。3 面から使用痕が確認される。37 はピットより出土している。側面に研磨が見られる。全面に使用痕が確認されるが、特に側面の利用が著しい。38 は 8 号溝状遺構から出土した石包丁である。38 は片岩製で約 2 分の 1 残存しており、穿孔が 1 個確認される。39 は 8 号溝状遺構より出土した石包丁か。サヌカイト製で表面に自然面が残る。40 は石皿で 7 号竪穴建物より出土している。安山岩製で表面上部を窪ませて使用していたものと考えられる。

木製品（第８０図、写真図版３７）

溝状遺構からは多くの有機物が出土しており、特に 8 号溝状遺構の下層からは多くの自然木に混じって木製品が出土している。ここでは、出土した木製品の解説をおこなう。

１・2 は 8 号溝状遺構より出土した容器（刳りもの）である。1 は口縁部に向かって外傾しながら直線的に立ち上がり口縁端部で内側に向かって屈曲する。横木取りにより製作されたものと考えられる。木材はコナラ属アカガシ亜族である。2 は口縁部に向かって内湾しながらほぼ垂直に立ち上がる。器壁は厚く断面は方形を呈する。横木取りにより製作されたものと考えられる。木材はサクラ属である。3・4 は 8 号溝状遺構より出土した垂木である。これらは同一個体で 3 が上部になる。木材はサクラ属である。5 は 8 号溝状遺構から出土した構造材で両端を加工しているほか、側面の一部で面取りを行っている。木材はイヌガヤである。6 は 8 号溝状遺構より出土した柄と考えられる。側面は面取りをおこなっている。芯持ち丸太より製作されたものと考えられる。木材はイヌガヤである。7 は 8 号溝状遺構より出土した木製品の残材と考えられる。どのような製品なのかは不明だが、両端を加工している。また、片側には伐採痕と考えられる痕跡が残る。木材はコナラ属アカガシ亜族である。8 は 1 号溝状遺構より出土した未成品である。どの製品として作成されたかは不明である。板目を持つ。木材はモミ属である。

第４章　自然科学分析

（１）出土木材及び炭化材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ

1. はじめに

日田市の二串川左岸の沖積面に所在する花ノ木遺跡１次調査から出土した木材および炭化材について、樹種同定を行った。

2. 試料と方法

花ノ木遺跡１次調査の試料は、古墳時代中期の３号竪穴建物の主柱１・２から出土した柱材、同じく３号竪穴建物から出土した炭化材、８号竪穴建物から出土した自然木？、古墳時代後期の８号溝状遺構から出土した木製品と、加工木、構造材、自然木、古墳時代の遺構９号掘立柱建物のP4と、P298、P500、P606から出土した加工木、古代の１号溝状遺構から出土した加工木と自然木、計42点である。

これらの試料から、剃刀を用いて３断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察･同定し､写真撮影を行った。プレパラートは(株)パレオ・ラボに保管されている。

3. 結果

花ノ木遺跡１次調査では、針葉樹はモミ属とマキ属、イヌガヤの３分類群、広葉樹はクリとツブラジイ、スダジイ、コナラ属アカガシ亜属、コナラ属コナラ節、ムクノキ、ニレ属、クワ属、クスノキ科、ツバキ属、サカキ、イスノキ、ノリウツギ、サクラ属、モチノキ属の15分類群が確認された。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真および走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

第２表　樹種構成

分類群	計
モミ属	1
マキ属	1
イヌガヤ	5
クリ	3
ツブラジイ	2
スダジイ	2
コナラ属アカガシ亜属	3
コナラ属コナラ節	3
ムクノキ	1
ニレ属	2
クワ属	1
クスノキ科	2
ツバキ属	8
サカキ	1
イスノキ	1
ノリウツギ	1
サクラ属	3
モチノキ属	2
計	42

（1）モミ属　Abies　マツ科　図版１　1a-1c（花ノ木No.39）

仮道管および放射組織からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射組織でじゅず状末端壁がみられる。分野壁孔はスギ型で、１分野に１～４個存在する。

モミ属は暖帯から温帯の山地に生育する常緑高木で、ウラジロモミやシラベ、トドマツなど約５種がある。材は柔軟で加工容易であるが、割れや狂いが出やすく、保存性が低い。

（2）マキ属　Podocarpus　マキ科　図版１　2a-2c（花ノ木No.4）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。早材から晩材への移行は緩やかである。樹脂細胞は豊富で、年輪内にほぼ均等に散在する。分野壁孔はヒノキ型で、１分野に１～２個存在する。

マキ属は関東以西の暖帯から亜熱帯に生育する常緑高木で、イヌマキとナギの２種がある。材は耐朽性があり、樹脂が多く、耐水性がある。

（3）イヌガヤ　Cephalotaxus harringtonia（Knight ex Forbes）K. Koch　イヌガヤ科　図版１　3a-3c（花ノ木 No.7）

仮道管、放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。仮道管は薄壁で、晩材部の幅は非常に狭い。仮道管にらせん肥厚がみられる。樹脂細胞は早材と晩材を通じて均等に分布する。放射組織は単列で２～５細胞高、分野壁孔はトウヒ型で１分野に１～２個存在する。

イヌガヤは岩手県以南の暖帯から温帯に生育する、常緑の低木または小高木である。材は堅硬および緻密である。

（4）クリ　Castanea crenata Siebold et Zucc.　ブナ科　図版１　4a-4c（花ノ木 No.36）

大型の道管が年輪のはじめに数列並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、主に単列である。

クリは温帯下部から暖帯に分布する落葉高木である。材は重硬で、耐朽性や耐湿性に優れ、保存性が高い。

（5）ツブラジイ　Castanopsis cuspidata（Thunb.）Schottky　ブナ科　図版１　5a-5c（花ノ木 No.13）

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きいが、接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列同性で、集合放射組織がみられる。

ツブラジイは暖帯に分布する常緑高木である。材はやや重硬で、割裂性や乾燥は中庸だが、耐久性は著しく低い。

（6）スダジイ　Castanopsis sieboldii（Makino）Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba　ブナ科　図版１・２　6a-6c（花ノ木 No.18）

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きいが、接線方向に連続しない。晩材部では、徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。放射組織は単列同性である。

スダジイは福島県・新潟県佐渡以南の暖帯に生育する常緑高木である。材はやや重硬で、割裂性や耐朽性は中庸だが、狂いが出やすい。

（7）コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　図版２　7a-7c（花ノ木 No.27）

円形でやや大型の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、アカガシとハナカガシ、ツクバネガシ、アラカシなど８種がある。イチイガシ以外は木材組織からは識別困難なため、イチイガシを除いたアカガシ亜属とする。材はきわめて堅硬および強靭で、水湿に強い。

（8）コナラ属コナラ節　Quercus sect. Prinus　ブナ科　図版２　8a-8c（花ノ木 No.34）

大型の道管が年輪のはじめに１列程度並び、晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織の２種類がある。

コナラ節は温帯下部および暖帯に分布する落葉高木で、カシワとミズナラ、コナラ、ナラガシワがある。材は全体的に重硬で、加工困難である。

（9）ムクノキ　Aphananthe aspera（Thunb.）Planch.　ニレ科　図版２　9a-9c（花ノ木 No.38）

やや大型で厚壁の道管が、単独ないし２～３個複合し、年輪を通じて均等に分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状～５列幅程度の帯状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は１～４列幅で、方形細胞もしくは直立細胞が上下端に２細胞程度連なる異性である。

ムクノキは関東以西の暖帯、亜熱帯に生育する落葉高木である。材は堅く密で、強靱である。

（10）ニレ属　Ulmus　ニレ科　図版２　10a-10c（花ノ木 No.21）

大型の道管が年輪のはじめに並び、晩材部では小道管が集団をなして接線状から斜めに配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、３～５列幅程度である。

ニレ属は温帯から暖帯に分布する落葉高木で、アキニレとハルニレ、オヒョウの３種がある。ハルニレの材は、中庸からやや重硬でやや粘り気があるが、狂いが出やすく、保存性もよくない。

（11）クワ属　Morus　クワ科　図版２・３　11a-11c（花ノ木 No.29）

大型で丸い道管が年輪のはじめに配列し、晩材部では徐々に径を減じた小道管が単独もしくは数個複合して斜線方向に配列する半環孔材である。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織は周囲状から翼状となる。放射組織は３～５列幅で、上下端の１～２細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。

クワ属は温帯から暖帯、亜熱帯に分布する落葉高木で、ケグワやマグワ、ヤマグワなどがある。材は堅硬で、靱性に富む。

（12）クスノキ科　Lauraceae　図版３　12a-12c（花ノ木 No.15）

やや小型の道管が、単独ないし２～４個複合してまばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、１～３列幅である。

クスノキ科は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木もしくは低木である。クスノキを含むニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属など８属がある。

（13）ツバキ属　Camellia　ツバキ科　図版３　13a-13c（花ノ木 No.40）

小径でほぼ単独の道管が、晩材に向けてやや径を減じながら均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は 10 段程度の階段状である。放射組織は方形もしくは直立細胞が上下に２～４細胞連なる異性で２列幅程度、多列部が単列部と同じ大きさである。

ツバキ属は温帯から暖帯に生育する常緑高木もしくは低木である。ヤブツバキやサザンカ、チャノキなどがある。材は重硬および緻密で、切削加工や割裂は困難であるが、強靱で耐朽性は大きい。

（14）サカキ　Cleyera japonica Thunb.　ツバキ科　図版３　14a-14c（花ノ木 No.42）

小径の道管が、ほぼ単独で均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は 30 段程度の階段状である。放射組織は異性で、ほぼ１列である。

サカキは暖帯から亜熱帯に分布する常緑の小高木である。材は硬く強靱で、割裂は困難である。

（15）イスノキ　Distylium racemosum Siebold et Zucc.　マンサク科　図版３　15a-15c（花ノ木 No.28）

小径の道管が、単独あるいは数個複合して均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は 20 段程度の階段状である。軸方向柔組織は散在もしくは帯状～線状にいびつに配列する。放射組織は１～３列幅の異性で、細胞中に結晶を含む。

イスノキは関東以西の暖帯に分布する常緑高木である。材はきわめて重硬で強度も大きいが、切削加工と割裂は困難である。

（16）ノリウツギ　Hydrangea paniculata Sieb. et Zucc.　ユキノシタ科　図版３　16a-16c（花ノ木 No.8）

小型でやや角張った道管が、単独で分布する散孔材である。道管の穿孔は 40 段程度の階段状である。放射組織は異性で１～２列幅で、単列部と多列部の幅が同じである。

ノリウツギは北海道から九州（屋久島まで）に分布する落葉小高木あるいは低木である。温帯林の先駆樹種で、伐採跡地に最初に出現する種の一つである。材は強靱である。

（17）サクラ属（広義） Prunus s.l.　バラ科　図版 4　17a-17c（花ノ木 No.3）

小型の道管が、単独あるいは斜め方向に数個複合して散在する散孔材である。道管に着色物質を含む場合もある。道管の穿孔は単一である。道管要素にはらせん肥厚がみられる。放射組織は 1 ～ 5 列幅の異性である。

サクラ属は温帯に生育する落葉または常緑の高木または低木である。サクラ属はさらにサクラ亜属やスモモ亜属、モモ亜属、ウワズミザクラ亜属などに分類され、25 種がある。木材組織からはモモとバクチノキ以外は識別困難なため、この 2 種を除いたサクラ属とする。材は比較的重硬および緻密であり、加工性がよい。

（18）ネムノキ属　Albizia　マメ科　図版 4　18a-18c（平田 No.10）

大型で丸い道管が年輪のはじめに数列並び、晩材に移行するに従って徐々に径を減ずる半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状で、晩材部では翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は 1 ～ 3 列幅で、すべて平伏細胞からなる同性である。

ネムノキは暖帯から熱帯に分布する落葉高木である。材はやや軽軟で割裂性は大きく、切削加工は容易であるが、耐朽性や保存性は低い。

（19）キハダ　Phellodendron amurense Pupr.　ミカン科　図版 4　19a-19c（平田 No.6）、20a-20c（平田 No.8）

大型の道管が早材部に配列し、晩材部ではごく小型で薄壁の小道管が集団をなして帯状～斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性で、1 ～ 5 列幅のきれいな紡錘形となる。

キハダは温帯に分布する落葉高木である。材はやや軽軟で加工容易だが、水湿に強い。

（20）モチノキ属　Ilex　モチノキ科　図版 4　21a-21c（花ノ木 No.22）

小型の道管が、放射方向に数個複合して分布する散孔材である。道管の穿孔は 20 段程度の階段状で、道管要素ではらせん肥厚が明瞭である。放射組織は 2 ～ 7 列幅の異性である。

モチノキ属は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木または低木である。日本には 23 種があるが、大きく常緑性のモチノキ亜属と落葉性のウメモドキ亜属に分けられる。材は重硬および強靱である。

4. 考察

花ノ木遺跡 1 次調査から出土した木材の樹種構成を表 3 に示す。古墳時代前期の 3 号竪穴建物では、柱材はクリとニレ属、器種不明の炭化材はサカキであった。6 号竪穴建物の自然木？はイスノキであった。柱材に利用されていたクリとニレ属は、重硬で靱性の材質をもつ樹木であり、柱材として有用である。

古墳時代後期の 8 号溝状遺構では、刳物がアカガシ亜属、刳物の未成品と思われる木材がサクラ属であった。構造材はイヌガヤであった。加工木では針葉樹のマキ属とイヌガヤ、広葉樹のクリとツブラジイ、アカガシ亜属、コナラ節、クスノキ科、ツバキ属、ノリウツギ、サクラ属、モチノキ属が確認された。自然木および自然木？では、イヌガヤとスダジイ、ニレ属、ツバキ属が確認された。器種不明の木材はモチノキ属であった。8 号溝状遺構の加工木はツブラジイとツバキ属、自然木？はムクノキであった。構造材と加工木、自然木および自然木？では、イヌガヤが共通して確認されている。イヌガヤは耐陰性のある陰樹で、適潤な土地に生育する小高木もしくは低木である。イヌガヤとツバキ属は、自然木と加工木の両方で確認されている。その他の加工木で確認されたマキ属とクリ、ツブラジイ、アカガシ亜属、コナラ節、クスノキ科、ノリウツギ、サクラ属、モチノキ属も暖帯から温帯に分布する樹木であるため、遺跡周辺に生育していた樹木が加工に利用されたと考えられる。刳物に利用されていたアカガシ亜属は重硬で加工困難、刳物の未成品と思われるサクラ属は重硬および強靱な材質をもつ。

古墳時代の 9 号掘立柱建物 P4 から出土した加工木がクリ、P298 から出土した加工木がコナラ節、P500 から

出土した加工木？がツバキ属、P606 から出土した加工木がツバキ属であった。いずれも暖帯から温帯に分布する落葉もしくは常緑の広葉樹で、材質は重硬である。

古代の 1 号溝状遺構では、垂木はサクラ属、不明未成品はモミ属、加工木はクワ属、自然木はアカガシ亜属であった。サクラ属とクワ属は比較的重硬な材質をもち、モミ属はやや軽軟で加工容易な材質である。いずれも暖帯から温帯に分布する。

時期的な傾向は、各時期の器種と分析点数が異なるため、把握できなかった。花ノ木遺跡 1 次調査で確認された樹種は、いずれも常緑広葉樹林帯に分布する樹木である。自然木と加工木、木製品間で樹種を比較しても木材利用に顕著な傾向はみられなかったが、遺跡周辺に生育していた樹木が利用されていたと考えられる。

引用文献

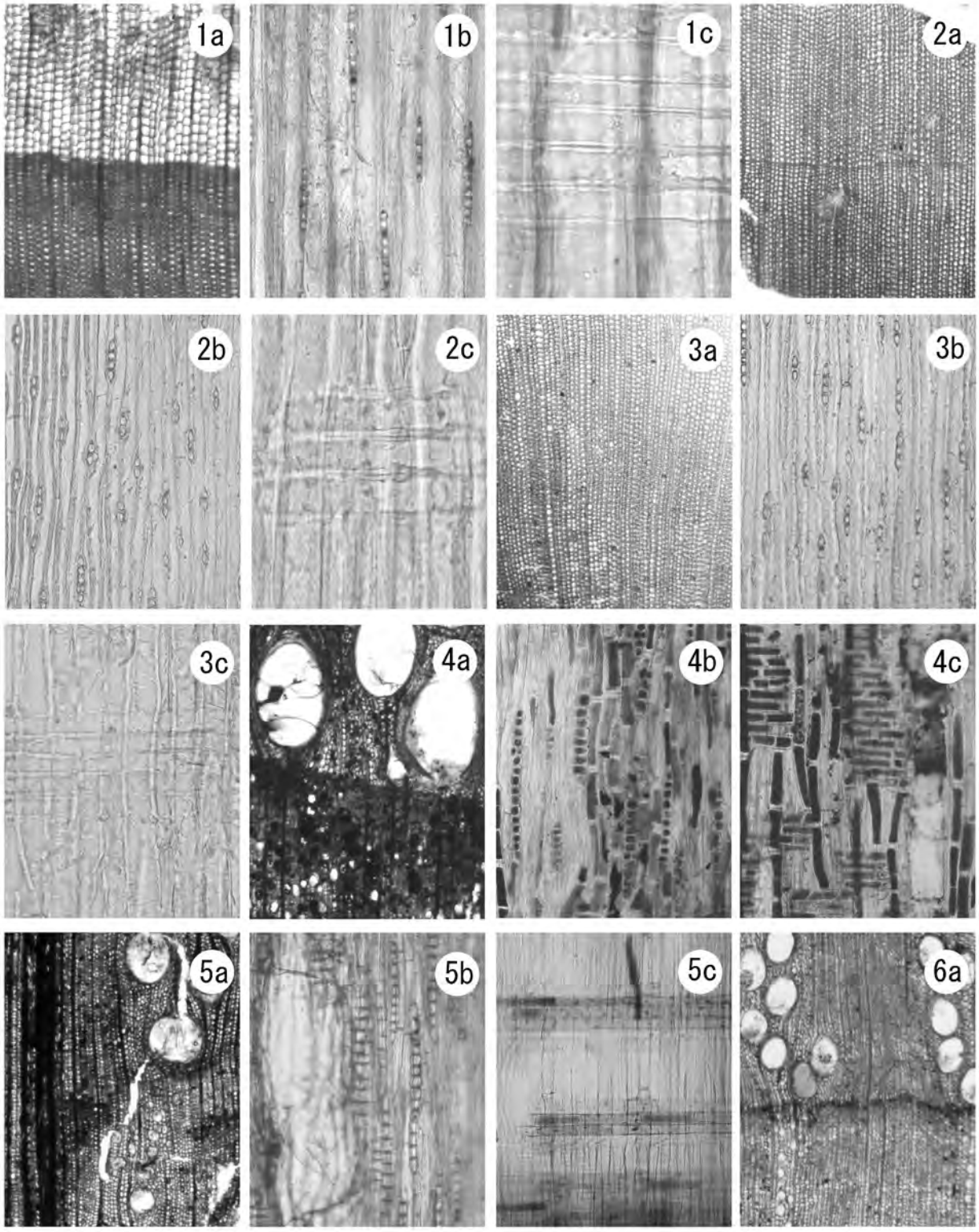
平井信二（1996）木の大百科．394p，朝倉書店．

第 3 表　花ノ木遺跡 1 次調査出土木材の器種別樹種構成

時代	古墳前期			古墳後期										古墳				古代			
遺構	3 竪		6 竪	8 溝										9 掘	P298	P500	P606	1 溝			
分類群 ＼ 器種	柱材	不明（炭化材）	自然木？	刳物	刳物（未成品か）	構造材	加工木	自然木	自然木？	不明	加工木	自然木？	加工木	加工木	加工木？	加工木	垂木	不明未成品	加工木	自然木	計
モミ属																		1			1
マキ属							1														1
イヌガヤ						1	2	1	1												5
クリ	1						1						1								3
ツブラジイ							1				1										2
スダジイ								2													2
コナラ属アカガシ亜属				1			1													1	3
コナラ属コナラ節							2								1						3
ニレ属	1							1													2
ムクノキ												1									1
クワ属																			1		1
クスノキ科							2														2
ツバキ属							4	1			1					1	1				8
サカキ		1																			1
イスノキ			1																		1
ノリウツギ							1														1
サクラ属					1		1										1				3
モチノキ属							1			1											2
計	2	1	1	1	1	1	17	5	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	42

第４表　花ノ木遺跡１次調査の樹種同定結果

№.	遺構番号①	遺構番号②	取り上げ番号等	器種	樹種	木取り	備考	時代
1	３号竪穴建物	主柱１	26	柱材	ニレ属	芯持ち丸木	-	古墳中期
2	３号竪穴建物	主柱２	27	柱材	クリ	芯持ち丸木	現状は芯が抜け	古墳中期
3	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	11	加工木	サクラ属	芯持ち丸木	樹皮付、片側端部加工	古墳後期
4	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	2	加工木	マキ属	芯持ち丸木	両端切断、片側伐採痕有	古墳後期
5	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	21	加工木	ツブラジイ	芯持ち丸木	樹皮付、片側端部加工	古墳後期
6	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	3	加工木	コナラ属コナラ節	芯持ち丸木	現状では割れ、片側端部加工	古墳後期
7	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	20	自然木？	イヌガヤ	芯持ち丸木	劣化	古墳後期
8	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	22	加工木	ノリウツギ	芯持ち丸木	樹皮付、片側端部加工	古墳後期
9	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	7	加工木	イヌガヤ	芯持ち丸木	片側端部加工	古墳後期
10	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	1	加工木	イヌガヤ	芯持ち丸木	両端部加工、片側端部炭化	古墳後期
11	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	23	構造材	イヌガヤ	芯持ち丸木	両端部加工、側面一部面取り	古墳後期
12	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	13	加工木	ツバキ属	芯持ち丸木	片側端部加工	古墳後期
13	８号溝状遺構	サブＴｒ-2	下層	加工木	ツブラジイ	割材	片側伐採、片側切断	古墳後期
14	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	16	自然木	ツバキ属	芯持ち丸木	-	古墳後期
15	８号溝状遺構	サブＴｒ-2	14	加工木	クスノキ科	芯持ち丸木	片側端部加工	古墳後期
16	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	12	加工木	ツバキ属	芯持ち丸木	片側端部加工	古墳後期
17	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	28	加工木	ツバキ属	芯持ち丸木	片側端部加工	古墳後期
18	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	26	自然木	スダジイ	芯持ち丸木	-	古墳後期
19	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	24	加工木	ツバキ属	芯持ち丸木	両端加工	古墳後期
20	８号溝状遺構	サブＴｒ-2	5	-	モチノキ属	割材	表面面取り、両端切断	古墳後期
21	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	29	自然木	ニレ属	芯持ち丸木	両端割れ	古墳後期
22	８号溝状遺構	サブＴｒ-2	18	加工木	モチノキ属	半割	残材	古墳後期
23	８号溝状遺構	サブＴｒ-2	19	自然木	イヌガヤ	芯持ち丸木	-	古墳後期
24	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	14	自然木	スダジイ	芯持ち丸木	樹皮付	古墳後期
25	８号溝状遺構	サブＴｒ-2	9	加工木	クスノキ科	芯持ち丸木	樹皮付、片側端部切断有	古墳後期
26	８号溝状遺構	サブＴｒ-2	13	容器（刳物、未成品か）	サクラ属	横木取り	両側面割れ	古墳後期
27	８号溝状遺構	サブＴｒ-2	15	加工木	コナラ属アカガシ亜属	半割	片側端部加工	古墳後期
28	６号竪穴建物	⑥	1	自然木？	イスノキ	割材	劣化	古墳中期
29	１号溝状遺構	４区	⑨	加工木	クワ属	板目	片側炭化	古代
30	９号掘立柱建物	P4	-	加工木	クリ	板目	片端加工	古墳
31	P298	-	-	加工木	コナラ属コナラ節	板目	-	古墳
32	P500	-	-	加工木？	ツバキ属	割材	劣化	古墳
33	P606	-	-	加工木	ツバキ属	柾目	-	古墳
34	８号溝状遺構	-	-	加工木	コナラ属コナラ節	割材	片側端部炭化	古墳後期
35	８号溝状遺構	サブ Tr	検出③	容器（刳物）	コナラ属アカガシ亜属	横木取り	-	古墳後期
36	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	23	加工木	クリ	割材	片側端部加工、炭化	古墳後期
37	１号溝状遺構	７区	①	自然木	コナラ属アカガシ亜属	芯持ち丸木	乾燥劣化	古代
38	８号溝状遺構	サブＴｒ-1	⑤	自然木？	ムクノキ	割材	-	古墳後期
39	１号溝状遺構	７区	④	不明未成品	モミ属	板目	片側端部炭化、綛かけ？	古代
40	８号溝状遺構	サブＴｒ-2	10	加工木	ツバキ属	芯持ち丸木	樹皮付き	古墳後期
41	１号溝状遺構	サブＴｒ-1	26-1	垂木	サクラ属	芯持ち丸木	-	古代
42	３号竪穴建物	東側床面直上	-	器種不明	サカキ	炭化材	-	古墳中期

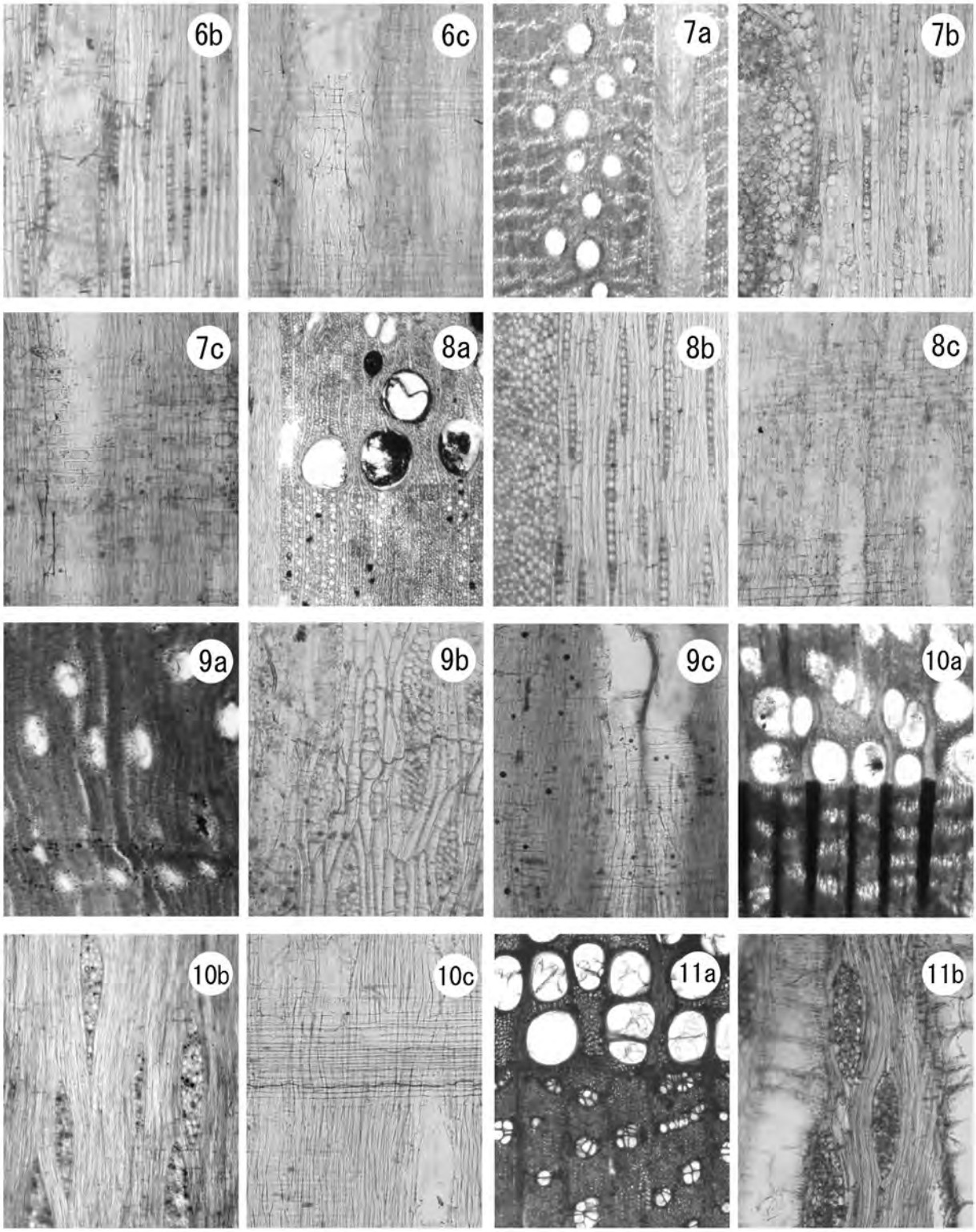


スケール：

図版1　花ノ木遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（1）

1a-1c. モミ属（花ノ木No. 39）、2a-2c. マキ属（花ノ木No. 4）、3a-3c. イヌガヤ（花ノ木No. 7）、4a-4c. クリ（花ノ木No. 36）、5a-5c. ツブラジイ（花ノ木No. 13）、6a. スダジイ（花ノ木No. 18）

a:横断面（スケール=250μm）、b:接線断面（スケール=100μm）、c:放射断面（スケール=1a-1c:25μm、2c-5c:100μm）

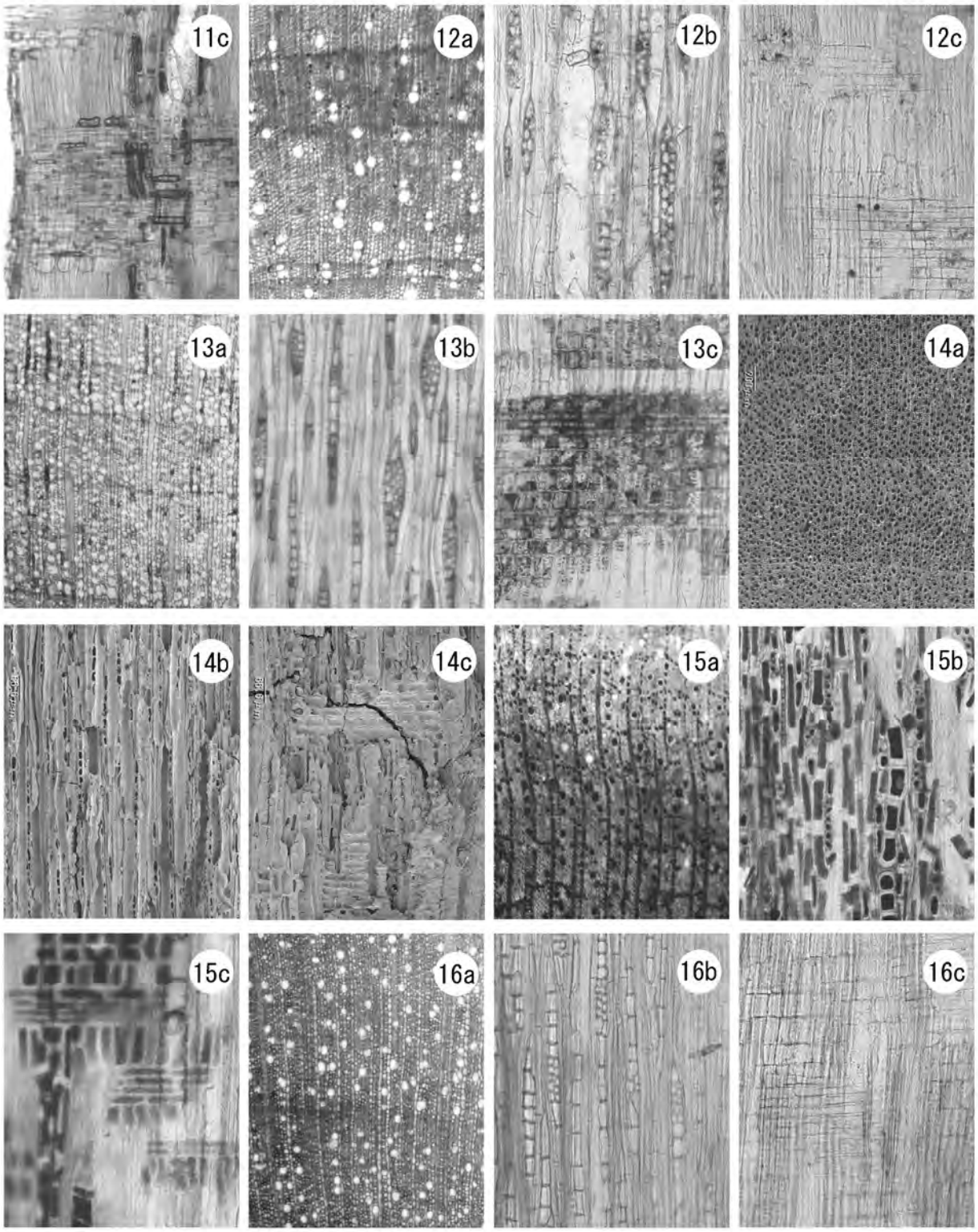


スケール：

図版2　花ノ木遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（2）

6b-6c. スダジイ（花ノ木No. 18）、7a-7c. コナラ属アカガシ亜属（花ノ木No. 27）、8a-8c. コナラ属コナラ節（花ノ木No. 34）、9a-9c. ムクノキ（花ノ木No. 38）、10a-10c. ニレ属（花ノ木No. 21）、11a-11b. クワ属（花ノ木No. 29）

a:横断面（スケール=250μm）、b:接線断面（スケール=100μm）、c:放射断面（スケール=100μm）

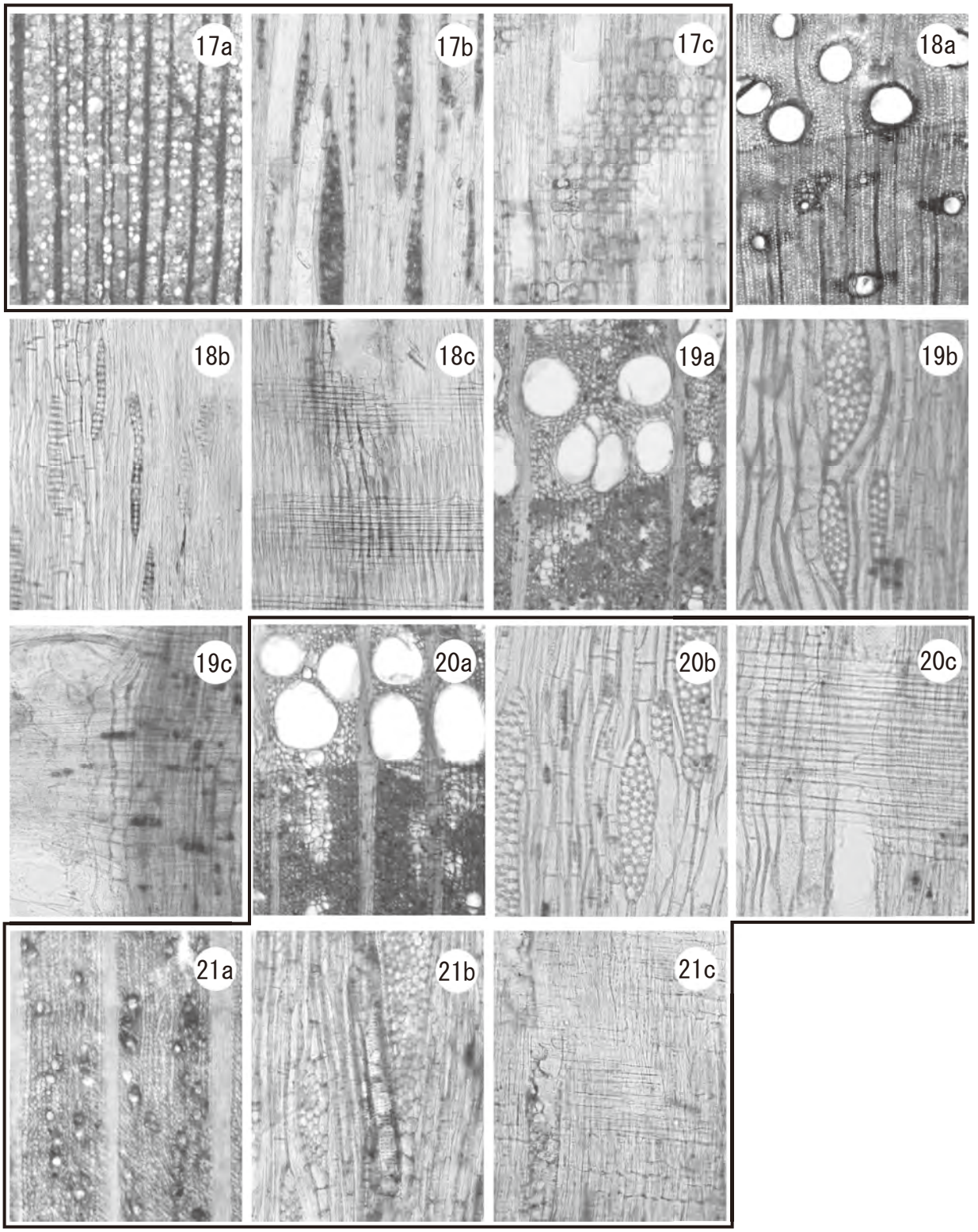


スケール：

図版3　花ノ木遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（3）

11c. クワ属（花ノ木No. 29）、12a-12c. クスノキ科（花ノ木No. 15）、13a-13c. ツバキ属（花ノ木No. 40）、14a-14c. サカキ（花ノ木No. 42）、15a-15c. イスノキ（花ノ木No. 28）、16a-16c. ノリウツギ（花ノ木No. 8）

a：横断面（12a, 13a, 15a, 16a：スケール=250μm）、b：接線断面（12b, 13b, 15b, 16b：スケール=100μm）、c：放射断面（11c, 12c, 13c, 15c, 16c：スケール=100μm）



スケール：

図版4　花ノ木遺跡・平田遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（4）※枠で囲ったものが、花ノ木遺跡の資料

17a-17c.サクラ属（花ノ木No.3）、18a-18c.ネムノキ属（平田No.10）、19a-19c.キハダ（平田No.6）、20a-20c.キハダ（HRT8）、21a-21c.モチノキ属（花ノ木No.22）

a:横断面（スケール=250μm）、b:接線断面（スケール=100μm）、c:放射断面（スケール=100μm）

（2）出土木材の樹種同定

株式会社　パレオ・ラボ

1. はじめに

日田市に所在する花ノ木遺跡で古墳時代後期の溝状遺構から出土した木材 17 点について、樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、溝状遺構から出土した木製品の柄？と加工木、自然木 17 点である。発掘時の所見から、すべて古墳時代後期と推定されている。

樹種同定は、目視で木取りや加工痕を確認した後、剃刀を用いて 3 断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察・同定し、写真撮影を行った。プレパラートは（株）パレオ・ラボに保管されている。

3. 結果

第 5 表　器種別の樹種同定結果

分類群／器種	柄？	加工木	割材	残材	自然木	計
イヌガヤ	1					1
ツブラジイ		1				1
スダジイ					1	1
コナラ属アカガシ亜属				1		1
ムクノキ				1	2	3
エノキ属		1				1
クワ属			1			1
クスノキ			1			1
クスノキ科		2				2
ツバキ属		1			1	2
キハダ					1	1
ムクロジ		1				1
不明				1		1
計	1	6	2	3	5	17

樹種同定の結果、針葉樹はイヌガヤが 1 分類群、広葉樹はツブラジイとスダジイ、コナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属と呼ぶ）、ムクノキ、エノキ属、クワ属、クスノキ、クスノキ科、ツバキ属、キハダ、ムクロジの 11 分類群、その他に分類群不明があり、合計 13 分類群が確認された。

器種別の樹種同定結果を表 1、結果の一覧を付表 1 に示す。柄？はイヌガヤであった。加工木はツブラジイとエノキ属、クスノキ科、ツバキ属、ムクロジであった。割材はクワ属とクスノキであった。残材はアカガシ亜属とムクノキ、分類群不明であった。自然木はスダジイとムクノキ、ツバキ属、キハダであった。木取りは、柄？と自然木はすべて芯持丸木、加工木はムクロジが板目のほかは芯持丸木であった。割材と残材は、割材のムクノキが柾目のほかは割材であった。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真を図版に示す。

（1）イヌガヤ　Cephalotaxus harringtonia (Knight ex Forbes) K. Koch　イヌガヤ科　図版 1　1a-1c（No.13）

仮道管と放射組織、樹脂細胞からなる針葉樹である。仮道管は薄壁で、晩材部の幅は非常に狭い。樹脂細胞は早材と晩材を通じて均等に分布する。放射組織は単列で 2 ～ 5 細胞高、分野壁孔はトウヒ型で 1 分野に 1 ～ 2 個存在する。仮道管にらせん肥厚がある。

イヌガヤは岩手県以南の暖帯から温帯に生育する常緑の低木または小高木である。材はやや堅硬で緻密である。

（2）ツブラジイ　Castanopsis cuspidata (Thunb.) Schottky　ブナ科　図版 1　2a-2c（No.4）

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きいが、接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は単列同性で、集合放射組織がみられる。

ツブラジイは暖帯に分布する常緑高木である。材はやや重硬で、割裂性および乾燥は中庸であり、耐久性は著しく低い。

（3）スダジイ　Castanopsis sieboldii (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba　ブナ科　図版 1　3a-3c（No.9）

環孔性の放射孔材で、年輪のはじめの道管は単独でやや大きいが、接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。放射組織は単列同性である。

スダジイは福島県と新潟県佐渡以南の暖帯に生育する常緑高木である。材はやや重硬で、割裂性や耐朽性は中庸だが、狂いが出やすい。

（4）コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　図版 1　4a-4c（No.16）

円形でやや大型の道管が、単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で、単列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、アカガシやシラカシ、ツクバネガシ、アラカシなど 8 種がある。イチイガシ以外は木材組織からは識別困難なため、イチイガシを除いたアカガシ亜属とする。材は、きわめて堅硬および強靱で、水湿に強い。

（5）ムクノキ　Aphananthe aspera (Thunb.) Planch.　ニレ科　図版 1　5a-5c（No.11）

径が中型で厚壁の道管が、単独ないし 2 ～ 3 個複合して均等に分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状～ 5 列幅程度の帯状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は 1 ～ 6 列幅で、方形細胞もしくは直立細胞が上下端に 2 細胞程度連なる異性である。

ムクノキは関東以西の暖帯から亜熱帯に生育する落葉高木である。材は堅く、密で強靱である。

（6）エノキ属　Celtis　ニレ科　図版 1・2　6a-6c（No.6）

大型の道管が年輪のはじめに配列し、晩材部では径を減じた薄壁の小道管が集団をなして接線から斜めに配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。小道管の内壁にらせん肥厚がみられる。放射組織は 3 ～ 8 列幅の異性で鞘細胞がある。上下縁辺の膨らんだ細胞中に結晶を含む。接線断面において放射組織と軸方向柔組織が層界状に配列する。

エノキ属は温帯から熱帯分布する落葉性の小高木から高木で、エゾエノキやエノキなど 4 種がある。材は比較的硬いが、強度や耐朽性は低く、狂いが出やすい。

（7）クワ属　Morus　クワ科　図版 2　7a-7c（No.15）

大型で丸い道管が年輪のはじめに配列し、晩材では徐々に径を減じた小道管が単独もしくは数個複合して斜線方向に配列する半環孔材である。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織は周囲状から翼状となる。放射組織は 3 ～ 5 列幅で、上下端の 1 ～ 2 細胞が直立もしくは方形細胞である異性である。

クワ属は温帯から暖帯、亜熱帯に分布する落葉高木で、ケグワとマグワ、ヤマグワなどがある。材は堅硬で、靱性に富む。

（8）クスノキ　Cinnamomum camphora (L.) J.Presl　クスノキ科　図版 2　8a-8c（No.2）

やや大型の道管が単独ないし 2 ～ 4 個複合して散在し、晩材部で徐々に径を減じる半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1 ～ 3 細胞幅で大型の油細胞がある。

クスノキは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は、やや軽軟なものから中庸程度まで幅があるが、切削加工は容易で、耐水性や耐朽性、耐虫性は極めて高い。

（9）クスノキ科　Lauraceae　図版 2　9a-9c（No.5）

やや小型の道管が、単独ないし 2 ～ 4 個複合してまばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状～

翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で、1 ～ 3 列幅で油細胞がある。

クスノキ科は熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木もしくは低木である。ニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属など 8 属があるが、クスノキ以外は識別困難なため、クスノキを除いたクスノキ科とする。

（10）ツバキ属　Camellia　ツバキ科　図版 2　10a-10c（No.12）

小径の道管がほぼ単独で密に分布する散孔材で、晩材に向けてやや径を減じる。道管の穿孔は 10 段程度の横棒からなる階段状である。放射組織は方形もしくは直立細胞が上下に 2 ～ 4 細胞連なる異性で、1 ～ 3 列幅程度、多列部が単列部と同じ大きさである。円形に著しくふくれた大型の結晶が単列部に認められる。

ツバキ属は温帯から暖帯に生育する常緑高木もしくは低木である。ヤブツバキやサザンカ、チャノキなどがある。材は重硬および緻密で、切削加工および割裂は困難であるが、強靱で耐朽性は大きい。

（11）キハダ　Phellodendron amurense Pupr.　ミカン科　図版 2・3　11a-11c（No.3）

大型で丸い道管が早材部に配列し、晩材ではごく小型で薄壁の小道管が集団をなして帯状～斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性、1 ～ 6 列幅できれいな紡錘形となる。

キハダは温帯に分布する落葉高木である。材はやや軽軟で加工容易だが、水湿に強い。

（12）ムクロジ　Sapindus mukurossi Gaertn.　ムクロジ科　図版 3　12a-12c（No.17）

大型でやや厚壁の道管が年輪のはじめに配列し、晩材部では小道管が数個放射方向に複合して散在する環孔材である。道管の穿孔は単一で、小道管にはらせん肥厚がある。軸方向柔組織は周囲状～帯状となる。放射組織はすべて平伏細胞からなる同性、3 ～ 5 列幅のややいびつな紡錘形である。

ムクロジは茨城県と新潟県以南の暖帯～亜熱帯に分布する落葉高木である。材はやや重硬から中庸程度である。

（13）不明　Unknwon　図版 3　13a-13b（No.7）

100 μ m 程の孔が軸方向にあき、均等に配列する。炭化しており組織の詳細な観察が行えず、同定は困難であった。木本ではない可能性もある。

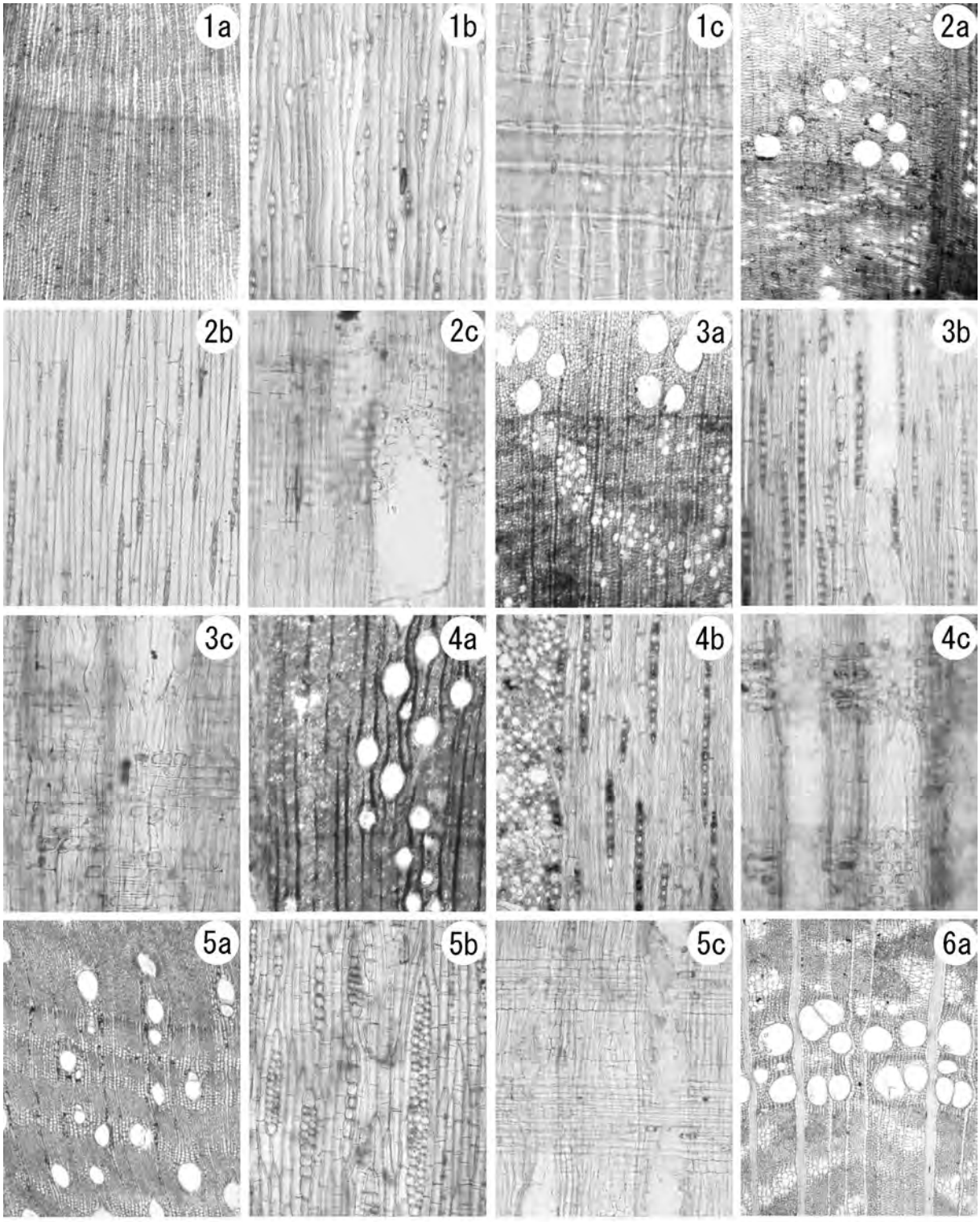
4. 考察

全体では、ムクノキが 3 点、クスノキ科とツバキ属が 2 点で、そのほかの分類群は各 1 点であった。自然木ではスダジイとムクノキ、ツバキ属、キハダが確認された。加工木ではツブラジイとエノキ属、クスノキ科、ツバキ属、ムクロジ、割材ではクワ属とクスノキ、残材ではアカガシ亜属とムクノキ、分類群不明が確認された。加工木と割材、残材で確認されたアカガシ亜属やツブラジイ、クワ属、ツバキ属は重硬、ムクノキやエノキ属、ムクロジは比較的重硬な材である。クスノキは、強度はあまりないが耐朽性や防虫性がある。

木製品の柄？はイヌガヤで、木取りは芯持丸木であるが、面取りの加工が施してあった。イヌガヤは、比較的重硬で緻密な材質で、縄文時代から古墳時代までは全国的に弓としての利用が多く確認されている。柄としては、埼玉県の小敷田遺跡や神奈川県の池子遺跡では弥生時代中期、千葉県の国府関遺跡や鳥取県の青谷上寺地遺跡では弥生時代後期～古墳時代初頭の斧柄として利用が確認されている（伊東・山田，2012）。

木取りが芯持丸木であった自然木や加工木は、ツバキ属、キハダ、ツブラジイ、クスノキ科、エノキ属、スダジイ、ムクノキがあり、いずれも直径が 5cm 以下で小径のため枝材と思われる。なお、イヌガヤも直径 2.7cm であるが、小高木または低木の木本のため、幹材の可能性がある。

日田市の周辺地域は常緑広葉樹林帯に属しており、現在の自然植生では高木層にスダジイやタブノキ、カシ類を主体とした常緑広葉樹、亜高木層にヤブツバキやモチノキ、シロダモ（クスノキ科）などの常緑樹や落葉樹、

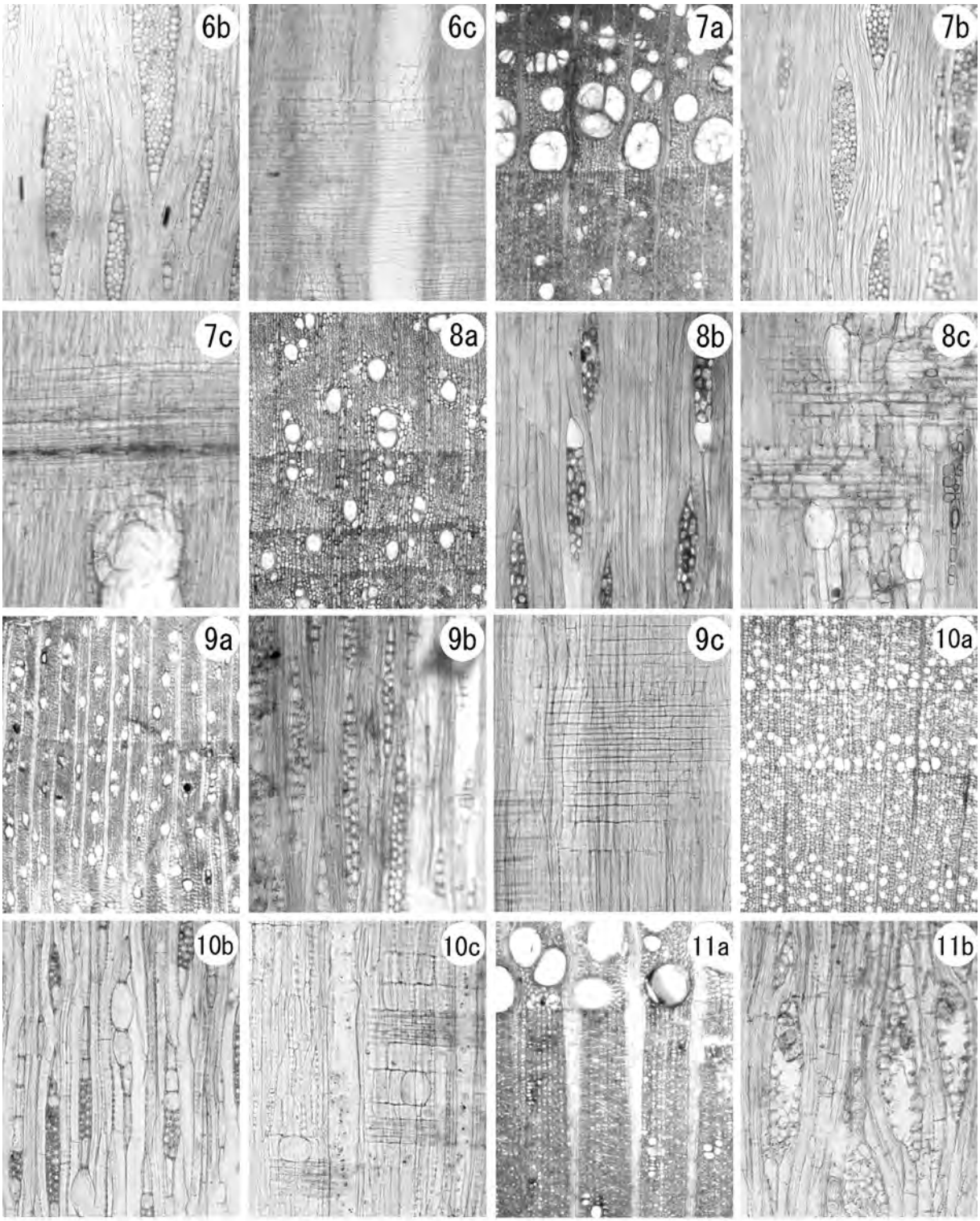


スケール：

図版5　花ノ木遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（1）

1a-1c．イヌガヤ（No.13）、2a-2c．ツブラジイ（No.4）、3a-3c．スダジイ（No.9）、4a-4c．コナラ属アカガシ亜属（No.16）、5a-5c．ムクノキ（No.11）、6a．エノキ属（No.6）

a：横断面（スケール=250μm）、b：接線断面（スケール=100μm）、c：放射断面（スケール=1c:25μm、2c-5c：100μm）

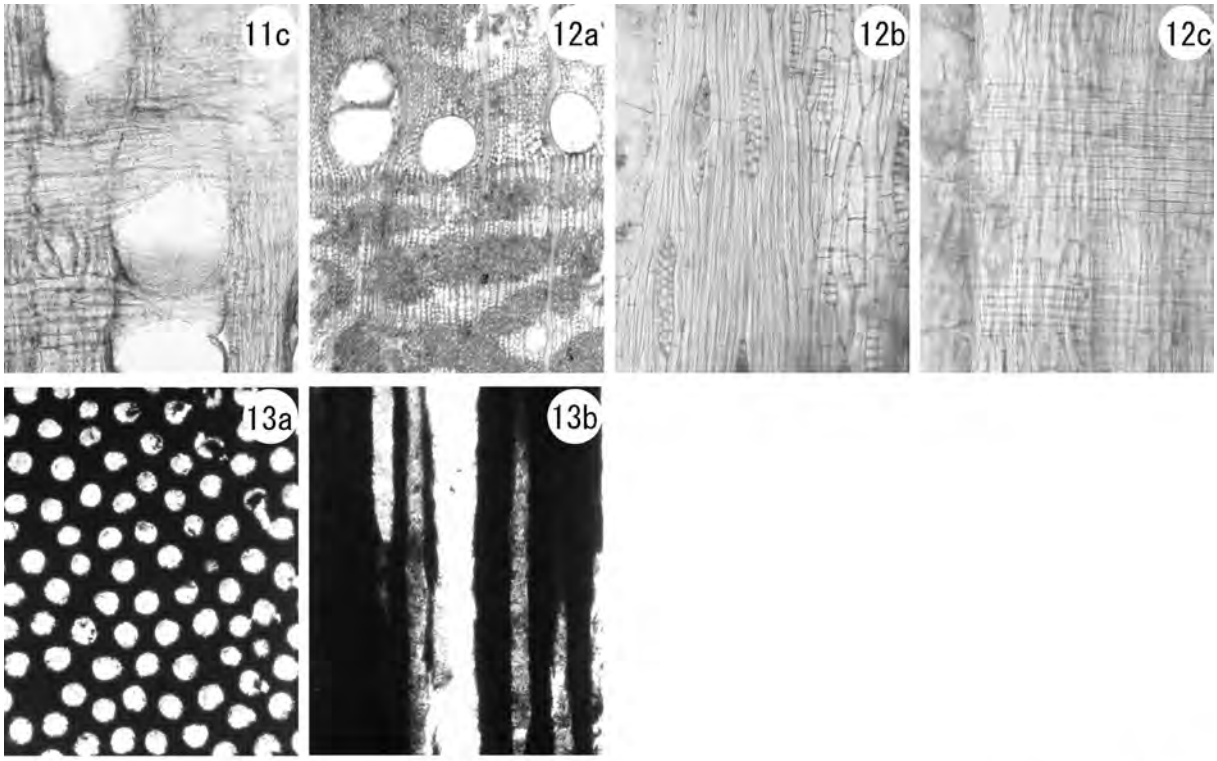


スケール：

図版6　花ノ木遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（2）

6b-6c．エノキ属（No.6）、7a-7c．クワ属（No.15）、8a-8c．クスノキ（No.2）、9a-9c．クスノキ科（No.5）、10a-10c．ツバキ属（No.12）、11a-11b．キハダ（No.3）

a：横断面（スケール=250μm）、b：接線断面（スケール=100μm）、c：放射断面（スケール=100μm）



スケール：

図版7　花ノ木遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（3）

11c．キハダ（No. 3）、12a-12c．ムクロジ（No. 17）、13a-13b．不明（No. 7）

a：横断面（スケール=250μm）、b：接線断面（スケール=100μm）、c：放射断面（スケール=100μm）

低木層にアオキやヒサカキなど耐陰性の常緑低木が生育する（宮脇，1977）。今回の樹種同定結果も常緑広葉樹林帯の自然植生と類似した樹種構成を示しており、遺跡周辺にはスダジイやツブラジイ、アカガシ亜属、クスノキ、ツバキ属などの常緑広葉樹と、ムクノキやエノキ属、キハダ、ムクロジなどの落葉広葉樹が混生していたと考えられる。

引用文献

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学－出土木製品用材データベース－．449p，海青社．

宮脇　昭（1977）日本の植生．535p，学研．

第６表　樹種同定結果一覧表

通し番号	番号	遺構番号１	遺構番号２	P 番号	器種	樹種	木取り	直径	所見	備考
1	40	８号溝状遺構	サブ Tr-2	10	自然木	ツバキ属	芯持丸木	4.3cm	-	樹皮付
2	47	８号溝状遺構	サブ Tr-1	8	割材	クスノキ	割材	-	-	-
3	51	８号溝状遺構	サブ Tr	下層	自然木	キハダ	芯持丸木	-	-	現状はワレ
4	56	８号溝状遺構	サブ Tr-1	下層１	加工木	ツブラジイ	芯持丸木	3.3cm	片側端部斜断	樹皮付
5	57	８号溝状遺構	サブ Tr-2	下層	加工木	クスノキ科	芯持丸木	3.2cm	片側端部斜断	樹皮炭化、切断痕にも加工？有
6	58	８号溝状遺構	サブ Tr-2	11	加工木	エノキ属	芯持丸木	3.8cm	片側端部斜断	-
7	60	８号溝状遺構	サブ Tr-1	17	残材	不明	割材	-	両端伐採材	全体的に炭化
8	64	８号溝状遺構	サブ Tr-2	3	加工木	クスノキ科	芯持丸木	2.5cm	片側端部斜断	樹皮付
9	65	８号溝状遺構	サブ Tr-1	15	自然木	スダジイ	芯持丸木	4.0cm	-	-
10	66	８号溝状遺構	サブ Tr-1	19	自然木	ムクノキ	芯持丸木	3.5cm	加工木の可能性あり	-
11	67	８号溝状遺構	サブ Tr-1	4	自然木	ムクノキ	芯持丸木	4.5cm	-	-
12	68	８号溝状遺構	サブ Tr-2	2	加工木	ツバキ属	芯持丸木	4.8cm	片側端部斜断	-
13	69	８号溝状遺構	サブ Tr	下層	柄？	イヌガヤ	芯持丸木	2.7cm	側面面取り	-
14	69	８号溝状遺構	サブ Tr	下層	残材	ムクノキ	柾目	-	木くず？、両端加工痕	-
15	71	８号溝状遺構	サブ Tr-2	下層	割材	クワ属	割材	-	-	-
16	71	８号溝状遺構	サブ Tr-2	下層	残材	コナラ属アカガシ亜属	割材	-	両端加工、片側伐採痕？	-
17	71	８号溝状遺構	サブ Tr-2	下層	加工木	ムクロジ	板目	-	木くず？	-

（3）大型植物遺体同定

株式会社　パレオ・ラボ

1. はじめに

日田市に位置する花ノ木遺跡は、二串川左岸で標高約 78m の場所に立地する。ここでは溝状遺構などから出土した大型植物遺体の同定を行い、当時の利用植物や植生について検討した。なお、一部の同一個体を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2. 試料と方法

試料は、発掘調査中に目視にて回収された大型植物遺体である。試料の取り上げは、日田市文化財保護課によって行われた。試料は、試料番号が振られた 50 点の種実と、一括で取り上げられた種実である。遺構の時期は、出土土器型式から 1 号溝状遺構は古代、8 号溝状遺構が古墳時代後期、放射性炭素年代測定の結果から 8 号溝状遺構サブトレンチ -2 内の P630 と⑤が弥生時代後期である。

抽出・同定・計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。試料は、日田市文化財保護課に保管されている。

3. 結果

同定の結果、木本植物で針葉樹のイヌガヤ種子の 1 分類群、広葉樹のナラガシワ殻斗と、アカガシ殻斗付果実・果実、イチイガシ果実、ウラジロガシ果実、ツクバネガシ殻斗付果実・果実・未熟果、アカガシ - ツクバネガシ果実、コナラ属アカガシ亜属果実、モモ核の 8 分類群の、計 9 分類群が得られた。同定結果を表 1 に示す。

以下に、出土傾向について遺構別に記載する。

8 号溝状遺構サブトレンチ -2 内、P630：ツクバネガシが 491 点（破片 1 点）と非常に多く、アカガシが 130 点とこれに次ぐ。ほかに、モモが 1 点、ウラジロガシが 8 点、イチイガシが 6 点、アカガシ - ツクバネガシが破片で 9 点、コナラ属アカガシ亜属が破片で 1 点得られた。

8 号溝状遺構サブトレンチ -2 内、⑤：ナラガシワが 1 点得られた。

1 号溝状遺構：イヌガヤが 7 点（破片 2 点）得られた。

8 号溝状遺構：アカガシとイチイガシが各 1 点得られた。

廃土中：モモが 1 点得られた。

第 7 表　花ノ木遺跡 1 次調査から出土した大型植物遺体（括弧内は破片数）

	番号	1	5		-		2	3	4	6	7
	遺構名	8 号溝状遺構サブトレンチ -2 内						1 号溝状遺構		8 号溝状遺構	-
	採取位置		P630				⑤	検出時	下層 3 層	-	廃土中
	時期		弥生時代後期						古墳時代後期		
分類群	試料 No.	1	11 ～ 47		一括		2	3 ～ 6	7 ～ 10	48,49	50
イヌガヤ	種子							4	3 (2)		
ナラガシワ	殻斗						1				
アカガシ	殻斗付果実		1								
	果実		8		121					1	
イチイガシ	果実				6					1	
ウラジロガシ	果実				8						
ツクバネガシ	殻斗付果実		1		2						
	果実		25	(1)	462						
	未熟果				1						
アカガシ－ツクバネガシ	果実			(1)		(8)					
コナラ属アカガシ亜属	果実			(1)							
モモ	核	1									1

次に、産出した代表的な分類群の種実について記載し、図版を掲載して、同定の根拠とする。

(1) イヌガヤ　Cephalotaxus harringtonia (Knight ex Forbes) K.Koch　種子　イヌガヤ科

上面観は両凸レンズ形、側面観は長楕円形。縫合線をもつが稜がない。先端部がわずかに突出する。種皮は硬く、顆粒状の低い隆起が全面にある。長さ 13.8mm、幅 9.4mm、厚さ 8.5mm。

(2) ナラガシワ　Quercus aliena Blume　殻斗　ブナ科

表面は広卵形の燐片で覆われる。鱗片基部はふくらみがある。形状はコナラよりも深く、ミズナラよりは浅い椀状。殻斗の先端が果実に向かって内側を向き、壁は厚い。高さ 12.4mm、幅 21.0mm。

(3) アカガシ　Quercus acuta Thunb.　殻斗付果実・果実　ブナ科

暗褐色で、円柱状楕円体。上部は太く、先端は急に細くなる。臍の幅は果実幅の約 50％以上。果実頂部に輪状紋がみられ、果実から突出し、太い。突出部（首）は伏腕状。臍は膨らむ。殻斗付果実の大きさは、高さ 22.4mm、幅 13.2mm。任意に抽出した 10 点の果実の大きさは、高さ 17.2 ～ 22.1（平均 19.8 ± 1.7）mm、幅 11.5 ～ 13.8（平均 12.4 ± 0.7）mm。

(4) イチイガシ　Quercus gilva Blume　果実　ブナ科

暗褐色で、側面観は楕円形～長楕円形。突出部（首）は円柱状ないし円錐状で輪状紋がある。柱頭は短く横を向く。果実の上部とその付近には毛が密生する。臍は中央部が尖るものが多い。出土した 7 点の果実の大きさは、高さ 14.2 ～ 20.9（平均 17.9 ± 2.9）mm、幅 10.8 ～ 13.6（平均 11.8 ± 0.9）mm。

(5) ウラジロガシ　Quercus salicina Blume f. angustata (Nakai) H.Ohba　果実　ブナ科

卵形体で、堅果上部で幅は徐々に狭くなる。柱頭は細長い。臍の幅は果実幅の約 30% と狭い。出土した 8 点の果実の大きさは、高さ 17.1 ～ 18.5（平均 17.8 ± 0.6）mm、幅 11.1 ～ 12.5（平均 11.8 ± 0.5）mm。

(6) ツクバネガシ　Quercus sessilifolia Blume　殻斗付果実・果実・未熟果　ブナ科

暗褐色で、円柱状楕円体。堅果上部は太い。臍の幅は果実幅の約 50％以上。突出部（首）はなだらかな円錐状。臍は膨らまない。殻斗付果実の大きさは、高さ 22.0mm、幅 14.4mm。任意に抽出した 10 点の果実の大きさは、高さ 19.3 ～ 23.7（平均 20.9 ± 1.4）mm、幅 13.3 ～ 17.2（平均 14.7 ± 1.1）mm。未熟果の大きさは、高さ 14.1mm、幅 10.1mm。破片等でアカガシとの区別がしにくい一群はアカガシ - ツクバネガシとした。また、輪状紋が残存するが、全体の形状が不明のものはコナラ属アカガシ亜属とした。

(7) モモ　Amygdalus persica L.　核　バラ科

黄褐色～茶褐色で、上面観は両凸レンズ形、側面観は楕円形で先端が尖る。下端の着点は凹む。表面全体に不規則で深い溝状の凹孔がある。片側側面には縫合線をもつ稜がある。大きさは、長さ 25.1mm、幅 20.2mm、厚さ 16.1mm。

4. 考察

8 号溝状遺構サブトレンチ 2 内から検出された P630 からは、ドングリ類を主体として栽培植物のモモも得られた。ピットである P630 からは常緑性のアカガシとツクバネガシを主体として、イチイガシとウラジロガシが少量得られた。このうちアカガシとツクバネガシは殻斗付きの果実も得られ、ツクバネガシは未熟果も混ざる。殻斗付果実や未熟果は採取時に混ざった可能性もあるが、溝付近に生育していた樹木から落下して堆積した可能性も考えられる。これらの 4 種のドングリ類は結実時期がやや異なるため、同時にピット内に保存されていたかどうかについては検討が必要であろう。さらに、縄文時代にはイチイガシが選択されて貯蔵穴に保管されていた例が明らかになっているが（小畑，2011）、弥生時代後期のドングリ類の利用についてはほとんど事例がない。日田市佐寺原遺跡では弥生時代中期後葉の土坑が検出され、炭化したイチイガシを主体として、オニグルミやイ

ネ、キビ、アワなどが得られている（佐々木，2011）。8 号溝状遺構サブトレンチ 2 内⑤からは、落葉性のドングリ類であるナラガシワが 1 点得られた。

1 号溝状遺構からは、イヌガヤのみが得られた。イヌガヤは山地や平地の林内に生育する常緑の小高木である。果肉は食用にならないが、種子内部の胚乳は油を絞ると灯明などに利用可能であり、少なくとも利用は平安時代中期まで遡ることができる（長沢，2012）。出土したイヌガヤは完形個体が多く、利用の痕跡は不明であった。

引用文献

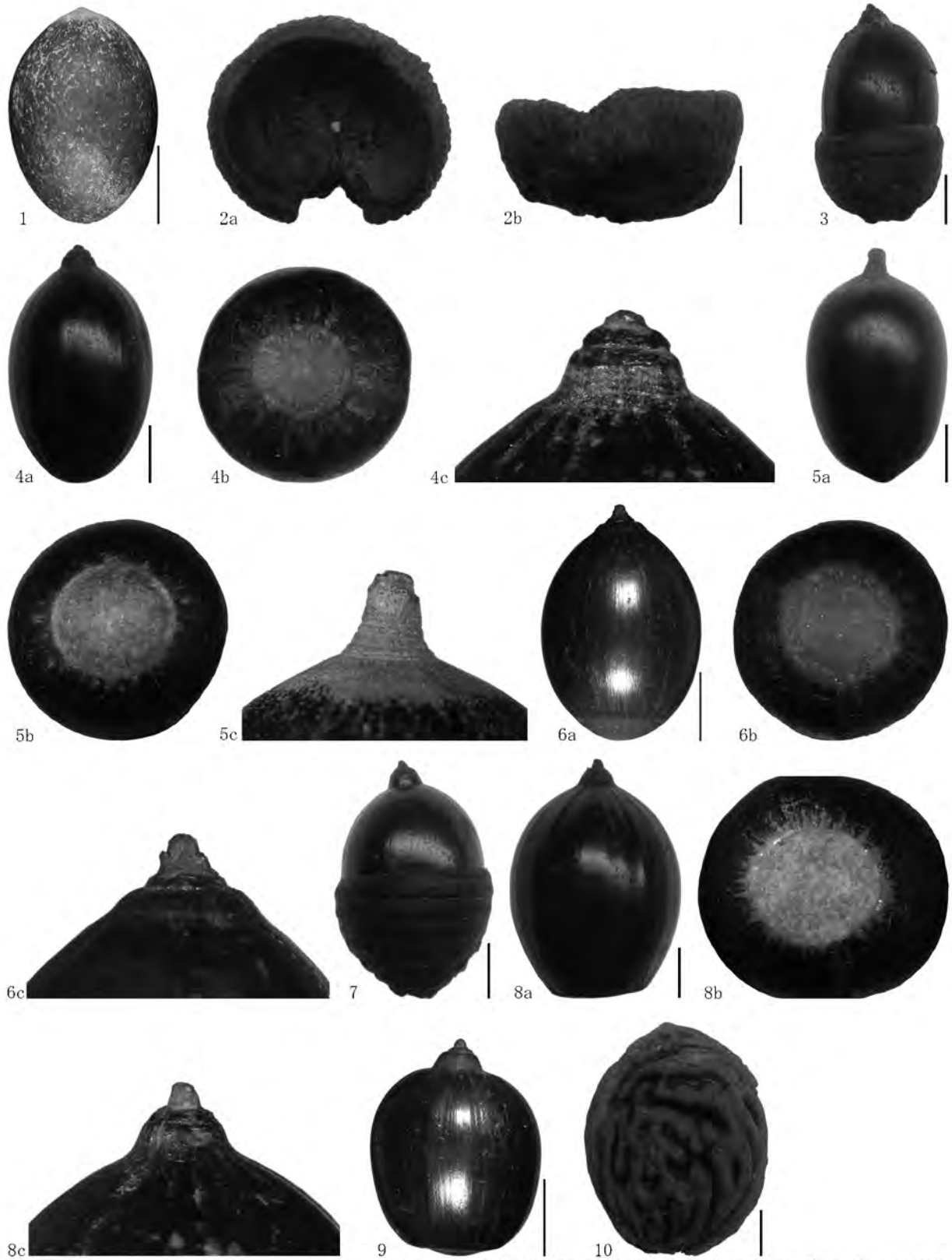
長沢　武（2012）野外植物民俗事苑．443，ほおずき書籍．

小畑弘己（2011）東北アジア古民族植物学と縄文農耕．320p，同成社．

佐々木由香（2011）佐寺原遺跡の植物遺体からみた弥生時代の植物利用．日田市教育庁文化財保護課編「佐寺原遺跡－２・３次調査－」：102-106，日田市教育委員会．

第８表　花ノ木遺跡１次調査から出土した大型植物遺体（括弧内は破片数）

試　料 No.	番号	遺構名	分類群	部位	産出数		年代測定番号
1	1	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630(別袋)	モモ	核	1		
2	2	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　⑤	ナラガシワ	殻斗	1		
3	3	1 号溝状遺構　検出時	イヌガヤ	種子	1		
4	3	1 号溝状遺構　検出時	イヌガヤ	種子	1		
5	3	1 号溝状遺構　検出時	イヌガヤ	種子	1		
6	3	1 号溝状遺構　検出時	イヌガヤ	種子	1		
7	4	1 号溝状遺構　下層 3 層	イヌガヤ	種子	1		
8	4	1 号溝状遺構　下層 3 層	イヌガヤ	種子		(1)	
9	4	1 号溝状遺構　下層 3 層	イヌガヤ	種子	1		
10	4	1 号溝状遺構　下層 3 層	イヌガヤ	種子	1	(1)	
11	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
12	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
13	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
14	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	コナラ属アカガシ亜属	果実		(1)	
8	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
16	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	アカガシ	果実	1		
17	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
18	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	アカガシ	果実	1		
19	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
20	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
21	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実		(1)	
22	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
23	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
24	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
25	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	アカガシ	果実	1		
26	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
27	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
28	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	アカガシ	果実	1		
29	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	アカガシ	果実	1		
30	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
31	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
32	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	アカガシ	果実	1		
33	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
34	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
35	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
36	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
37	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
38	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	アカガシ－ツクバネガシ	果実		(1)	
39	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
40	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	アカガシ	果実	1		
41	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
42	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	アカガシ	殻斗付果実	1		PLD-27530
43	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	殻斗付果実	1		
44	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	アカガシ	果実	1		
45	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
46	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
47	5	8 号溝状遺構　サブトレンチ -2　P630（タッパー内）	ツクバネガシ	果実	1		
48	6	8 号溝状遺構	アカガシ	果実	1		
49	6	8 号溝状遺構	イチイガシ	果実	1		
50	7	廃土中 (2011.12・01)	モモ	核	1		



スケール 1-3, 4a, 5a, 6a, 8a, 9, 10:5mm, 4b-c, 5b-c, 6b-c, 8b-c は任意

図版８　花ノ木遺跡から出土した大型植物遺体

1. イヌガヤ種子（1溝、検出時、No.3）、2. ナラガシワ殻斗（8溝サブトレンチ-2、⑤、No.2）、3. アカガシ殻斗付果実（8溝サブトレンチ-2、P630、No.42、PLD-27530）、4. アカガシ果実（8溝サブトレンチ-2、P630、一括）、5. イチイガシ果実（8溝サブトレンチ-2、P630、一括、PLD-27532）、6. ウラジロガシ果実（8溝サブトレンチ-2、P630、一括）、7. ツクバネガシ殻斗付果実（8溝サブトレンチ-2、P630、一括）、8. ツクバネガシ果実（8溝サブトレンチ-2、P630、一括、PLD-27531）、9. ツクバネガシ未熟果（8溝サブトレンチ-2、P630、一括）、10. モモ核（8溝サブトレンチ-2、P630（別袋）、No.1）

（4）出土種実年代測定

株式会社　パレオ・ラボ

1. はじめに

花ノ木遺跡から出土した種実試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて大型植物遺体も行われている（大型植物遺体同定の報告参照）。

2. 試料と方法

試料は、8 号溝状遺構サブトレンチ -2 の下に位置するピット P630 から出土した種実 3 点である。アカガシ殻斗付果実が 1 点（No.42：PLD-27530）と、ツクバネガシ果実が 1 点（一括試料：PLD-27531）、イチイガシ果実が 1 点（一括試料：PLD-27532）である。考古学的な所見では、遺構の時期は古墳時代後期である。

測定試料の情報、調製データは表 9 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS:NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた 14C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C 年代、暦年代を算出した。

第 9 表　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-27530	遺構：8 号溝状遺構サブトレンチ -2 位置：P630 試料 No.42	種類：生試料・種実（アカガシ殻斗付果実） 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)
PLD-27531	遺構：8 号溝状遺構サブトレンチ -2 位置：P630 試料 No. 一括	種類：生試料・種実（ツクバネガシ果実） 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)
PLD-27532	遺構：8 号溝状遺構サブトレンチ -2 位置：P630 試料 No. 一括	種類：生試料・種実（イチイガシ果実） 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸 :1.2N, 水酸化ナトリウム :1.0N, 塩酸 :1.2N)

3. 結果

表１０に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ 13C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した 14C 年代を、図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

14C 年代は AD1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。14C 年代（yrBP）の算出には、14C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した 14C 年代誤差（± 1 σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の 14C 年代がその 14C 年代誤差内に入る確率が 68.2％であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された 14C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、および半減期の違い（14C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C 年代の暦年較正には OxCal4.1（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、1 σ暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された 14C 年代誤差に相当する 68.2％信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 σ暦年代範囲は 95.4％信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は 14C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第１０表　放射性炭素年代測定及び歴年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	14C 年代 (yrBP ± 1 σ)	14C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-27530	-25.86 ± 0.14	1825 ± 19	1825 ± 20	140AD(50.5%)197AD 207AD(17.7%)226AD	132AD(95.4%)238AD
PLD-27531	-25.31 ± 0.16	1863 ± 19	1865 ± 20	89AD(10.8%)102AD 122AD(42.9%)173AD 193AD(14.4%)211AD	84AD(95.4%)219AD
PLD-27532	-24.18 ± 0.15	1851 ± 19	1850 ± 20	129AD(46.5%)177AD 190AD(21.7%)212AD	87AD(5.4%)106AD 121AD(90.0%)232AD

4. 考察

8 号溝状遺構サブトレンチ -2 の下に位置するピット P630 から出土した種実試料 3 点について、同位体分別効果の補正および暦年較正を行った。以下、各試料の暦年較正結果のうち 2 σ暦年代範囲（確率 95.4%）に着目して、結果を整理する。弥生時代の土器編年と暦年代の対応関係については藤尾（2009）を参照した。

アカガシ殻斗付果実（No.42：PLD-27530）は、132-238 cal AD(95.4%) であった。これは 2 世紀前半～ 3 世紀前半で、弥生時代後期に相当する。

ツクバネガシ果実（一括試料：PLD-27531）は、84-219 cal AD(95.4%) であった。これは 1 世紀後半～ 3 世紀前半で、弥生時代後期に相当する。

イチイガシ果実（一括試料：PLD-27532）は、87-106 cal AD(5.4%) および 121-232 cal AD(90.0%) であった。これは 1 世紀後半～ 3 世紀前半で、弥生時代後期に相当する。

今回の試料はいずれも種実であり、測定結果は種実の結実年代を示している。

考古学的な所見では、8 号溝状遺構は古墳時代後期の遺構である。しかし溝の下に位置するピット P630 から出土した種実試料は、弥生時代後期の暦年代範囲を示しているため、弥生時代後期のピットを切って溝が構築された可能性がある。

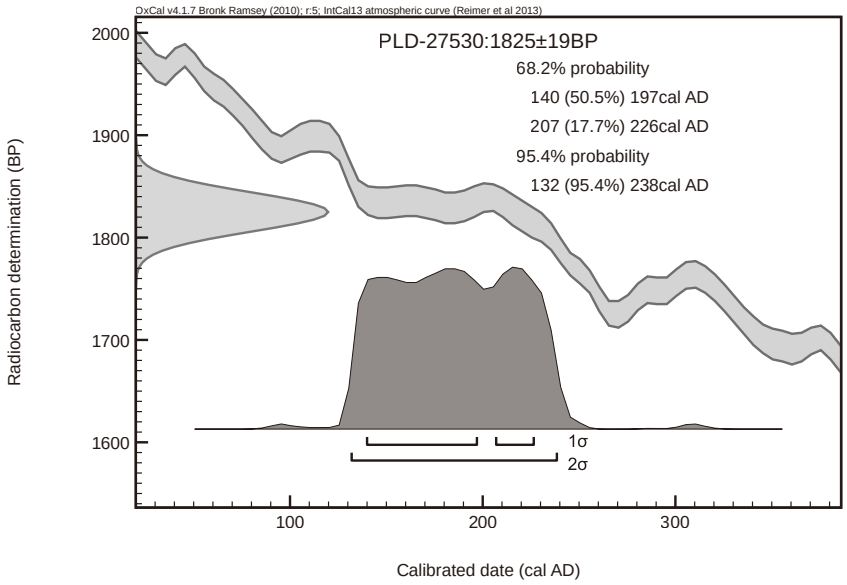
引用・参考文献

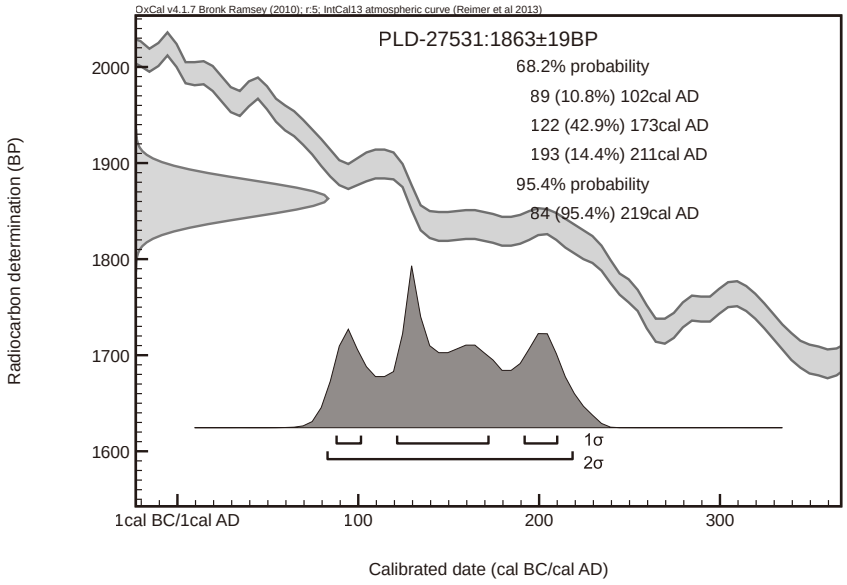
Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

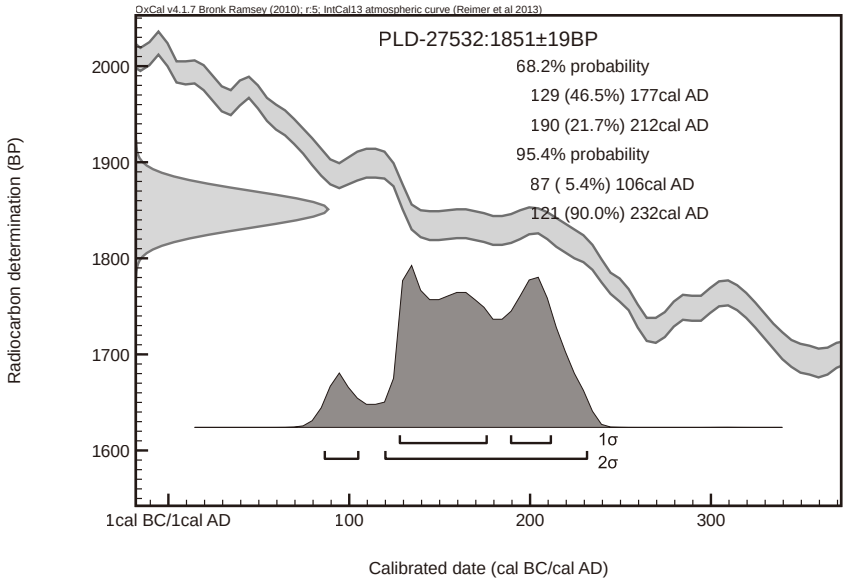
藤尾慎一郎（2009）弥生時代の実年代．西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第 4 巻　弥生農耕のはじまりとその年代」：9-54，雄山閣.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の 14C 年代編集委員会編「日本先史時代の 14C 年代」：3-20，日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.


OxCal v4.1.7 Bronk Ramsey (2010); r:5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)
PLD-27530:1825±19BP
68.2% probability
140 (50.5%) 197cal AD
207 (17.7%) 226cal AD
95.4% probability
132 (95.4%) 238cal AD
Radiocarbon determination (BP)
2000
1900
1800
1700
1600
1σ
2σ
100
200
300
Calibrated date (cal AD)


OxCal v4.1.7 Bronk Ramsey (2010); r:5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)
PLD-27531:1863±19BP
68.2% probability
89 (10.8%) 102cal AD
122 (42.9%) 173cal AD
193 (14.4%) 211cal AD
95.4% probability
84 (95.4%) 219cal AD
Radiocarbon determination (BP)
2000
1900
1800
1700
1600
1σ
2σ
1cal BC/1cal AD
100
200
300
Calibrated date (cal BC/cal AD)


OxCal v4.1.7 Bronk Ramsey (2010); r:5; IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)
PLD-27532:1851±19BP
68.2% probability
129 (46.5%) 177cal AD
190 (21.7%) 212cal AD
95.4% probability
87 (5.4%) 106cal AD
121 (90.0%) 232cal AD
Radiocarbon determination (BP)
2000
1900
1800
1700
1600
1σ
2σ
1cal BC/1cal AD
100
200
300
Calibrated date (cal BC/cal AD)

第８１図　暦年較正結果

第５章　総括

花ノ木遺跡１次調査について

ここまで、花ノ木遺跡 1 次の調査で確認された遺物・遺構および自然科学分析の内容について述べてきた。本章では、前章までの調査内容を踏まえて、遺構の時期・性格について検討していく。また、本遺跡を含む周辺谷部の状況について考えておきたい。

各遺構の時期・性格について

花ノ木遺跡 1 次調査では、竪穴建物 11 軒、掘立柱建物 9 棟、溝状遺構 8 条、土坑 18 基、ピットが数百基検出されている。ここでは、各遺構の時期や性格を主な出土遺物や遺構の特徴から各時期区分を設定して個別に検討を行う。各時期区分について、弥生時代は渡邉隆行氏によって検討された弥生土器編年を参考にした註 1)。土師器は、重藤輝行氏によって検討された筑前・筑後地域の土師器編年註 2) を主に用い、須恵器に関しては中村浩氏による須恵器編年註 3) を参考にし、第１１表の時期区分を設定した。

【旧石器～弥生時代中期頃】

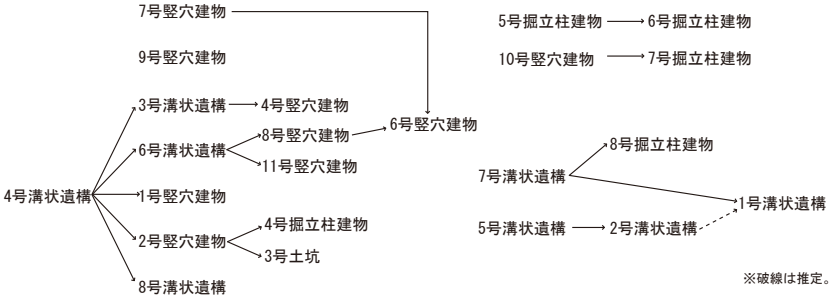
この間の遺構は、当調査地では明確に検出されていないが、石鏃・剥片石器や石包丁などの遺物が出土していることから、 人々が調査地周辺で活動をおこなっていたと考えられる。

【弥生時代後期】

当調査地では、この時期から遺構が展開をはじめる。この時期に該当する遺構としては、7・9 号竪穴建物、3 ～ 7 号溝状遺構が挙げられる。

7 号竪穴建物は、第 19 図 5 の甕の口縁部の立ち上がりや 9 ～ 11 の甕底部が丸底に変化しつつある状況などから吹上後期 4 期頃の時期が想定される。一部に古墳時代初頭と考えられる坏が出土しているが、主な時期を弥生時代後期後半頃に比定して問題ないと考えられる。9 号竪穴建物は、第 23 図 1 の甕底部の特徴から吹上後期 4 期に収まるものと考えられる。第 23 図 2 の高坏は、金田遺跡 17 号竪穴建物出土の高坏と同系統のもの註 4) と考えられること、西側にベッド状遺構、南壁に屋内土坑を有していることなどから、7 号竪穴建物と同時期の遺構と考えられる。

3 号溝状遺構は遺構全体から出土した遺物の量は少ないが、一部でまとまって出土しており、第 51 図 1 の甕外面のタタキ調整や 5 ～ 7 の甕底部の特徴から、吹上後期 4 期頃の範囲で収まる時期の遺構と考えられる。6 号溝状遺構は、第 58 図 5･6 の甕底部の特徴や 7･8 の複合口縁壷の内傾しながら立ち上がる口縁部の特徴などから、吹上後期 4 期頃が想定される。また、前述した 3 号溝状遺構と接する可能性があり、遺物の時期もほぼ同時期



第８２図　切り合い関係

であること、断面の形状も比較的に近いことなどから、７号竪穴建物を巡る一連の排水施設の可能性を考えておきたい。遺構の時期は弥生時代後期後半頃と考えられる。４号溝状遺構より出土した遺物は出土量が少なく、これだけで時期を判断するのは難しい。また、前述した３号溝状遺構に切られていることから、弥生時代後期後半以前の時期を想定しておきたい。

５号溝状遺構は、時期を示す明確な遺物は出土しておらず、遺構から時期を比定することは難しいが、後述する２号溝状遺構に切られている点や７号溝状遺構に並行して検出されていることなどから７号溝状遺構と同時期の可能性を考えておきたい。７号溝状遺構は３号溝状遺構と同様に、全体の遺物出土量は多くないが、一部にまとまって出土している。第 60 図１の甕は長胴で底部がレンズ状を呈していることから、吹上後期４期の特徴を持つ。また、８・９の高坏や 15 の器台のくびれの位置のなどから弥生時代後期後半頃の遺構と考えられる。

４・５・７号溝状遺構について、これらには張り出し部が付くことや５・７号溝状遺構が平行して検出されていることなどから水田に伴う区画溝、または用水路の可能性を考えておきたい。また一括遺物に関しては、集落内で行われた祭祀で使用した土器を廃棄した可能性を考えることができる註 5)。この他に、８号溝状遺構サブトレンチ２の底部より出土した P630 から多量の種実 (ドングリ) が出土しており、その年代測定を行った結果、P630 出土の種実は弥生時代後期という測定結果が出ている註 6)。８号溝状遺構からは弥生土器の出土が少量ではあるが見られ、これらはピットを削平した際の混入による可能性が考えられる。

【古墳時代前期】

この時期の遺構は１・２号竪穴建物が挙げられる。前の時期に比べると遺跡の規模が若干縮小する時期である。１号竪穴建物は遺物の出土量が少なく、明確な時期比定は出来ないが、４本柱で中央に炉跡、南端に屋内土坑を持ち、壁周溝が巡ることなどから、当該期の遺構であると想定している。２号竪穴建物は第６図６の甕外面のタタキ調整や９・10 の高坏脚部の特徴から重藤Ⅰ・Ⅱ期頃と考えられる。また、１号竪穴建物に隣接し、４本柱で南端に屋内土坑を有する点や土坑など１号竪穴建物に類似する特徴を持つことから、１・２号竪穴建物ともに、古墳時代前期頃の遺構であると考えられる。

【古墳時代中期】

この時期に該当する遺構は、３～６・10 号竪穴建物と２・５号溝状遺構である。前段の時期と違い花ノ木遺跡で遺構が大きく展開する時期になる。

３号竪穴建物は、第８図１の甕の特徴や９の高坏坏部が深く、接合部分に粘土充填が用いられていることなどから、重藤Ⅲ期頃と考えられる。また、この建物は方形の４本柱で南端に屋内土坑を有し、中央に炉跡を持っており、遺物の時期と大きな差はないと考えられる。以上の点から、古墳時代中期前半～中葉頃の遺構と考えられる。当遺構では、これ以外にも東側の主柱穴に木材が残っており、柱穴の近くからミニチュア土器が出土している。また、南東隅に炭化物が集中すること、口縁部を打ち欠いた甑や土製模造鏡など出土することから、建物廃棄時に祭祀が行われた可能性が想定される。４号竪穴建物も、第 11 図１・２の甕の口縁部、小型丸底壷の 11 の口縁部や、第 12 図 32 の坏部などの特徴から重藤Ⅲ頃に該当すると考えられ、古墳時代中期前半～中葉の範囲に収まると考えられる。また、この遺構は他の竪穴建物と離れた位置で検出されていること、主柱穴が検出されておらず、また屋内土坑や炉跡など生活の痕跡を示す遺構が見つかっていないことから、住居以外の用途、祭祀に関連した建物であると考えている。２号溝状遺構は、第 46 図の小型丸底壷や第 47・48 図の高坏の特徴からその他の建物と同様に重藤Ⅲ期頃の遺構と考えられ、非常に多くの小型丸底壷と高坏が出土している。また、同時期の遺構群から離れた位置にあって、水口などの施設は確認されなかったものの、土層断面からＵ字状に堆積する炭化物が確認されたことから、水樋状遺構を伴い水を引いていた可能性が考えられる。このほかに、建物と離れた位置で検出され、溝全体から高坏・小型丸底壷やミニチュア土器 (鉢・甑) など祭祀に伴う土器が多

量に出土していることから、この遺構で祭祀がおこなわれたか、集落内でおこなわれた祭祀後の土器を廃棄した可能性も想定される。

5 号竪穴建物は、第 15 図 1 の甕の口縁部、6 の鉢などから重藤Ⅳ期頃と考えられる。また、この遺構は全体に焼土及び炭化物が検出されることから、廃棄時に燃やしたか火事などで焼失してしまった可能性がある。遺構の時期は出土遺物から古墳時代中期中葉に比定される。6 号竪穴建物は、カマドを伴わないものの多孔式の甑が出土していることから重藤Ⅳ期以降、古墳時代中期中葉以降に比定される。10 号竪穴建物は、2 次調査時に重藤Ⅳ期、中村Ⅰ－2、3 期の遺物が出土している註 7)。また、花ノ木 1 次調査で唯一カマドが検出されており、4 本柱で北西にカマドが付される。出土遺物とこれらの特徴から古墳時代中期中葉の時期に比定されている。

【古墳時代後期～古代 (8 世紀前半) 以降】

この時期に該当する遺構は、1 ～ 9 号掘立柱建物、1・8 号溝状遺構が挙げられる。掘立柱建物については、規則的な配置を確認することはできなかった。4 号掘立柱建物は、第 32 図 1 の坏蓋の特徴から中村編年Ⅱ－3 期頃と考えられ、古墳時代後期中葉頃に比定される。4 号掘立柱建物以外は遺物が少量しか出土しておらず、明確に時期を比定することは難しい。建物の軸などから大きく 2 時期に分けられそうであるが、可能性にとどめておき、掘立柱建物群は 4 号掘立柱建物の時期前後の時期に収まる遺構であると考えておきたい。

1 号溝状遺構は、第 40 図 9 など中村編年Ⅰ－5 期頃と考えられる古墳時代中期頃の遺物や第 40 図 1 の坏蓋端部の特徴や 13 の坏身、16 の底部特徴から中村編年Ⅳ－1 期頃の遺物も出土している。このことから、使用時期は最終的には 8 世紀前半頃まで下ると考えられる。この遺構からは、約 3 ヶ所から水口と考えられる張り出し部が検出されていることから水田に水を引く為の水路であったと考えられる。一部に弥生や古墳時代中期頃の遺物が出土しており、2・7 号溝状遺構からの流れ込みであると考えられる。8 号溝状遺構は、第 65 図 19・20 の甕や第 66 図 28 や 32 などの高坏の特徴から重藤Ⅰ・Ⅱ期頃と第 65 図 5 の坏蓋、6・8 ～ 10 の坏身の特徴から中村編年Ⅱ-3 ～ 5 期頃の 2 時期（古墳時代前期と古墳時後期中葉～後半）が使用時期として想定される。この遺構からは土器の他に、多くの自然木に混じって椀や構造材などの木製品などが出土している。

この時期以降、当調査地で遺構は減少していくが、中世の遺物も少なからず出土していることから、人々の活動は引き続いておこなわれていたものと考えられる。

第１１表　花ノ木遺跡 1 次遺構時期変遷表

時期区分		弥生	古墳								古代		中世以降
		後期～終末	前期		中期			後期			飛鳥	奈良	
			前半	後半	前半	中葉	後半	前半	中葉	後半			
弥生土器編年	渡邉編年	吹上後期 Ⅳ・Ⅴ期											
土師器編年	重藤編年		Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅳ期	Ⅴ期	Ⅵ期	Ⅵ・Ⅶ期	Ⅶ期			
須恵器編年	中村編年				Ⅰ－1 期	Ⅰ－2・3 期	Ⅰ－4・5 期	Ⅱ－1 期	Ⅱ-2・3 期	Ⅱ-4 ～ 6 期	Ⅲ-1 ～ 3 期	Ⅳ-1 ～ 2 期以降	
4 号溝状遺構													
11 号竪穴建物													
18 号土坑													
7・9 号竪穴建物													
3・5・6・7 号溝状遺構													
8 号竪穴建物													
1・2 号竪穴建物													
6 号土坑													
3・4 号竪穴建物													
2 号溝状遺構													
5・6・10 号竪穴建物													
17 号土坑													
8 号溝状遺構													
1 ～ 9 号掘立柱建物													
1 号溝状遺構													
3 号土坑													

※表中で濃く表現している部分はある程度時期比定が出来る期間を示し、薄い部分に関しては時期の想定が可能な期間を示す。

花ノ木遺跡の特徴

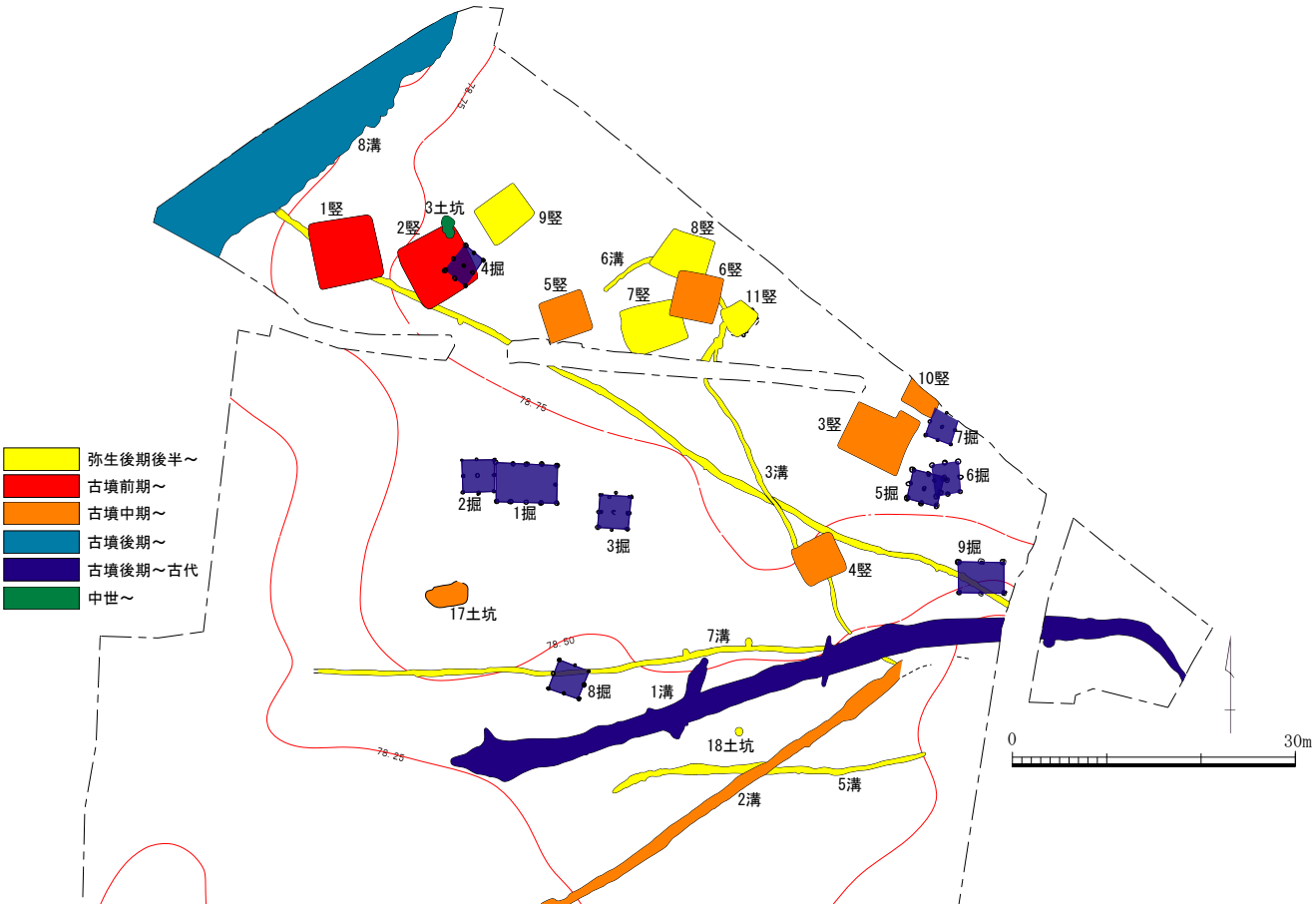
前項では各遺構の時期と特徴をまとめてきた。ここでは、以上を踏まえ本遺跡の変遷を整理し、その特徴を考えてみたい。

本遺跡で最初に人々の痕跡が見られるのは旧石器から縄文時代と想定される。その後の弥生時代前期から中期にかけても遺物が出土していることから人々は当地域で活動を行っていたものと考えられる。しかし、建物などの遺構は確認されておらず、集落などを形成し定住していたものとは考えづらい。

弥生時代後期後半以前に調査区を横断する４号溝状遺構がつくられた後、弥生時代後期後半になると７・９号竪穴建物や７号竪穴建物の排水施設と考えられる３・６号溝状遺構が確認されるほか、２ヶ所の張り出しを持ち水口の可能性が考えられる７号溝状遺構とそれに平行する５号溝状遺構が確認される。前述したようにこの頃には建物が確認されることから、集落が営まれ始めたと考えられる。また、５・７号溝状遺構の存在からこの時期には水田も同時におこなわれていた可能性も考えられる。

古墳時代前期頃には１・２号竪穴建物が確認され、断続的に集落が営まれていたものと考えられる。

古墳時代中期になるとミニチュア土器が多く出土し、祭祀施設の可能性のある４号竪穴建物が確認される。ミニチュア土器が大量に出土している事例は市内では、西有田赤ハゲ遺跡の土坑註８）や荻鶴遺跡の溝状遺構註９）などに続く発見で、新たな資料として注目できる。この他に、カマド導入期と考えられるカマドを敷設した10号建物が確認される。日田地域にカマドが導入されたと考えられる５世紀中頃と同時期である事から、従来の調査成果を追認することが出来た。



第８３図　時期別遺構図

その後、古墳時代後期になると竪穴建物は見られなくなり、代わりに掘立柱建物が確認されるようになる。古墳時代後期の遺物が少量出土するものの、これらの明確な時期は不明である。掘立柱建物群は軸の方向から２時期に分けることが出来ると考えられ、隣接する平田遺跡では７～８世紀代の掘立柱建物群が見つかっていることから、同時期ないし前後に営まれた住居又は倉庫群の可能性を想定しておきたい。1・8 号溝状遺構からは古墳時代後期の遺物が多く出土していることから、周辺に同時期の集落が断続的に営まれていた可能性も想定される。この他、２～３ヶ所の水口を持つ１号溝状遺構や大量の自然木に混じって木製品が出土する８号溝状遺構が確認される。木材については第４章の成果から､周辺にある木材が利用されていたことや､利用する目的によって材を選定していたことなど、当時の自然環境や木材の利用状況を知る上で新たな成果が挙がったといえる。またこの時期、当遺跡では引き続き水田が営まれていたものと考えられる。

上記を踏まえて、谷部周辺の遺跡との関係を整理すると、弥生時代後期～古墳時代前期頃にかけて本遺跡を含め平田遺跡や台地裾部に位置する尾部田遺跡などで建物や土坑が確認されるようになり、人々の生活範囲が吹上遺跡や朝日宮ノ原遺跡などの台地上から尾部田遺跡などの台地裾部を経て本遺跡の所在する谷部へと徐々に広がっていったものと想定される。古墳時代中期になると、本遺跡の集落は規模が最も拡大する。現在、この時期に谷部で建物が確認されているのは花ノ木遺跡と隣接する平田遺跡の谷部西側の遺跡のみであるが、今後の調査件数の増加が待って、この時期に集落が存在するのが谷部西側の部分的なものか、谷部全体に広がるものか検討していく必要がある。そのほか、古墳時代後期に入ると当遺跡を含め周辺では住居は確認されないが、代わりに谷部奥または東側の本村遺跡周辺では住居が多く見られる。さらに、水田に水を引くための水路や二串川から水を引くための溝など水田は引き続き営まれていたと考えられ、こうした水田域が周辺まで広がるかなどの検討も今後の谷部及び台地裾部の調査件数の増加を待って検討していく必要がある。

以上のように、花ノ木遺跡１次調査では、二串川の左岸また、小迫谷部の西の入り口に弥生時代後期から古墳時代中期頃にかけて水田を営む集落がつくられたこと。そして、古墳時代後期になっても断続的に水田を営む集落が存在したこと。日田のカマド導入期の時期を追認できたこと。集落内に大量のミニチュア土器が出土し祭祀がおこなわれていたや住居の柱木に使用する木材については周辺の樹木を選別して利用していたことなど多くの成果が得られた。今後は、先に挙げた課題も含め台地周辺の遺跡との関係について検討を行っていく必要がある。

註１　渡邉隆行 編『吹上Ⅳ－自然科学分析の記録・調査の総括－』日田市埋蔵文化財調査報告書第 112 集　日田市教育委員会　2014

註２　重藤輝行 「古墳時代中期・後期の筑前・筑後地域の土師器」『佐田茂先生佐賀大学退任記念論文集』2009

註３　中村浩 『和泉陶邑窯の研究 － 須恵器生産の基礎的研究 － 』 柏書房　1981

註４　若杉竜太『求来里遺跡Ⅱ　金田遺跡の調査』 日田市埋蔵文化財調査報告書第 89 集　日田市教育委員会　2009

註５　別府大学の下村先生に現地を来訪していただい際にご教授いただいた。

註６　本書第４章より

註７　上原翔平 『花ノ木遺跡２次』 日田市埋蔵文化財調査報告書第 106 集　日田市教育委員会　2012

註８　行時志郎 『西有田赤ハゲ遺跡』 日田市埋蔵文化財調査報告書第７集　日田市教育委員会　1992

註９　行時志郎 『荻鶴遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第９集　日田市教育委員会　1995

第１２表　出土土器観察表１

図版番号	№	出土遺構	種別	器種	法量（cm）				調整		胎土	焼成	色調				備考
					口径	器高	底径	胴部径	内面	外面			内面（裏）	Hue	外面（表）	Hue	
第３図	1	１竪	土師器	甕	(13.8)	(13.3)	-	(19.8)	ヨコナデ・ケズリ後指オサエ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ後指オサエ・ナデ	A・D・H	良	浅黄橙色 黄橙色	10YR8/4 10YR8/6	浅黄橙色 黄橙色	10YR8/4 10YR8/6	
第６図	1	２竪	土師器	甕	18.5	28.8	-	27.1	ヨコナデ・ナデ・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・指オサエ・ハケ目・ナデ	A・C・D・E・H	良	にぶい黄橙色 明黄褐色	10YR7/4 10YR7/6	明黄褐色 黄橙色	10YR7/6 10YR7/8	内外面に黒斑あり 外面にスス付着 内外面に鉄分付着
第６図	2	２竪	土師器	甕	(14.9)	20.5	2.0	(17.8)	ヨコナデ・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・C・D・E	良	浅黄橙色 橙色	7.5YR8/6 7.5YR7/6	黄橙色	7.5YR 8/8 ～ 7/8	内外面に黒斑あり 内外面にスス付着
第６図	3	２竪	土師器	甕	(14.8)	(16.3)	-	(16.6)	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ	A・C・E	良	明黄褐色 黒褐色	10YR7/6 10YR3/1	橙色 橙色	5YR6/8 7.5YR6/6	内外面に黒斑あり スス付着
第６図	4	２竪	土師器	甕	(15.0)	(9.5)	-	-	ヨコナデ？・指オサエ・ナデ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・C・H	良	橙色	7.5YR 6/6 ～ 6/8	黄橙色	10YR 8/8 ～ 7/8	
第６図	5	２竪	土師器	甕	(15.4)	(5.6)	-	-	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・平行タタキ後ナデ	A・D・E	良	浅黄橙色	10YR8/3	浅黄橙色	10YR8/3	外面口縁部にスス？付着
第６図	6	２竪	土師器	甕	(9.6)	20.1	-	(15.5)	ヨコナデ・指オサエ・ハケ目・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ・タタキ後ハケ目	A・C・D・E・H	良	褐灰色 にぶい黄橙色	10YR6/1 10YR6/3	にぶい黄橙色 明黄褐色	10YR6/4 10YR6/6	内外面に黒斑あり 外面底部にスス付着
第６図	7	２竪	土師器	壺	-	(7.6)	-	(12.6)	ナデ・指オサエ	ミガキ？ナデ？	A・C・D・E	良	暗赤褐色	5YR 3/3 ～ 3/4	赤色 暗赤色	7.5R4/8 7.5R3/6	内外面にスス付着 内外面に黒斑あり 外面に赤色塗彩？
第６図	8	２竪	土師器	高坏	11.7	(5.6)	-	-	ナデ	ナデ	A・C・D・E	良	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/4 10YR7/4	黄橙色 明黄褐色	10YR8/6 10YR7/6	
第６図	9	２竪	土師器	高坏	-	(6.1)	(17.4)	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	C・D・E・G・H	良	浅黄橙色	10YR 8/4 ～ 8/6	浅黄橙色	10YR 8/3 ～ 8/4	内面に被熱によるスス付着 穿孔４個
第６図	10	２竪	土師器	高坏	-	(6.2)	(9.0)	-	ナデ	ナデ	A・C・E・H	良	黄橙色 明黄褐色	10YR8/6 10YR7/6	黄橙色 明黄褐色	10YR8/6 10YR7/6	穿孔３個
第６図	11	２竪	土師器	高坏	-	(6.1)	7.4	-	ナデ	ナデ	A・C・D・E	良	黄橙色	10YR 8/8 ～ 7/8	黄橙色 明黄褐色	10YR8/6 10YR7/6	
第６図	12	２竪	土師器	支脚	(3.8)	(6.1)	-	-	ナデ	ナデ・指オサエ	A・C・D・E	良	にぶい橙色 橙色	7.5YR7/4 10YR7/6	にぶい橙色 橙色	7.5YR7/4 10YR7/6	穿孔３個
第６図	13	２竪	土師器	鉢	11.5	7.5	3.6	-	ハケ目・ナデ・ケズリ後ナデ	ナデ・ハケ目	A・C・D・E	良	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/4 10YR7/4	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/4 10YR7/4	内面底部に黒斑あり 歪みあり
第６図	14	２竪	土師器	鉢	-	(7.8)	3.6	-	ケズリ後指オサエ・ナデ	工具ナデ？・ナデ	A・B・C・H	良	明黄褐色	10YR7/6	にぶい黄橙色 明黄褐色 赤色	10YR6/4 10YR6/6 10R5/8	外面に黒斑あり 外面にスス付着 外面に被熱による赤化あり
第６図	15	２竪	土師器	壺	(8.4)	7.1	1.8	(8.5)	ヨコナデ・ケズリ・ナデ・ミガキ	ヨコナデ・ケズリ後ナデ	A・C・D・E	良	黄橙色 明黄褐色	10YR7/8 10YR6/8	明黄褐色 灰黄褐色	10YR 7/6 ～ 6/6 10YR5/2	外面に黒斑あり
第６図	16	２竪	土師器	坏	11.0	4.1	-	-	ナデ	ナデ・ケズリ後ナデ	A・C・D・E	良	にぶい黄橙色 黒褐色	10YR 7/2 ～ 7/3 2.5Y3/1	にぶい黄橙色 黒色	10YR 7/2 ～ 7/4 10YR2/1	内外面に黒斑あり
第６図	17	２竪	土師器	坏	9.2	2.9	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・D・E	良	にぶい橙色 にぶい褐色	7.5YR7/4 7.5YR6/3	橙色 明褐灰色	7.5YR6/6 7.5YR7/2	
第６図	18	２竪	土師器	甑	-	(6.7)	-	-	ケズリ後ナデ？	ケズリ後ナデ？	A・B・C・D・H	良	明黄褐色 黄橙色	10YR7/6 10YR7/8	明黄褐色 黄橙色	10YR7/6 10YR7/8	単孔
第８図	1	３竪	土師器	甕	(19.2)	(20.7)	-	-	ヨコナデ・指オサエ・ナデ・ハケ目・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・C・E	良	灰白色 明褐灰色	7.5YR8/2 7.5YR7/2	浅黄橙色	7.5YR 8/4 ～ 8/6	外面に黒斑あり 外面にスス付着
第８図	2	３竪	土師器	甕	(16.2)	(10.7)	-	-	ナデ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・C・D・E・H	良	橙色 明褐色	7.5YR6/6 7.5YR5/6	橙色 黒色	7.5YR6/8 7.5YR2/1	外面に黒斑あり 外面にスス付着
第８図	3	３竪	土師器	壺	(11.5)	15.0	-	(13.2)	ヨコナデ・ケズリ・ナデ	ヨコナデ・ハケ目	A・D・E・H	良	橙色	5YR 7/8 ～ 6/8	橙色	5YR6/8	
第８図	4	３竪	土師器	壺	(7.3)	10.3	-	10.2	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	ハケ目・ナデ	C・D・E	良	橙色 浅黄橙色	7.5YR7/6 7.5YR8/6	黄橙色	7.5YR 7/8 ～ 8/8	内外面にスス付着
第８図	5	３竪	土師器	壺	-	(13.2)	-	(15.5)	ナデ・ケズリ後ナデ・指オサエ？	ナデ・ハケ目	A・B・C・D・E	良	橙色	2.5YR6/8	橙色	2.5YR7/8 5YR7/8	外面に黒斑あり
第８図	6	３竪	土師器	壺	-	(9.9)	-	(11.0)	ヨコナデ・ケズリ・ナデ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・C・E	良	橙色 黄橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/8	橙色 黄橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/8	外面に黒斑あり
第８図	7	３竪	土師器	壺	-	(12.8)	-	-	ナデ・ヨコナデ・工具ナデ	指オサエ・ナデ	A・B・D	良	橙色	5YR 7/6 ～ 6/6	橙色 にぶい橙色 灰白色	5YR7/8 5YR7/4 5YR8/2	
第８図	8	３竪	土師器	壺	5.8	7.2	-	7.4	ヨコナデ・指オサエ後ナデ	ヨコナデ・指オサエ後ナデ・ハケ目	A・B・D・E	良	橙色	5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	外面に剥離（打ち欠き？）あり
第８図	9	３竪	土師器	高坏	(19.6)	14.7	(12.8)	-	ナデ・ケズリ後ナデ	ナデ・摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	浅黄橙色 赤橙色	7.5YR8/6 10R6/8	浅黄橙色	7.5YR8/6	外面赤色顔料？
第８図	10	３竪	土師器	高坏	(17.4)	(6.9)	-	-	ヨコナデ	ハケ目・ナデ？	A・B・C・E	良	赤色 赤黒色	10R 5/8 ～ 4/8 10R2/1	赤色 赤黒色	10R 5/8 ～ 4/8 10R2/1	口縁部にスス付着
第８図	11	３竪	土師器	高坏	18.2	(5.8)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	B・D・G	良	橙色	7.5YR 6/6 ～ 6/8	橙色	7.5YR 6/6 ～ 6/8	円盤充填あり
第８図	12	３竪	土師器	高坏	-	(5.7)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	にぶい橙色	7.5YR 7/3 ～ 7/4	黄橙色 橙色	7.5YR7/8 7.5YR6/8	
第８図	13	３竪	土師器	高坏	(17.0)	(5.5)	-	-	ハケ目・ナデ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・C・E	良	黒色	10YR2/1	赤色 黒色	10R4/8 10YR2/1	内外面にスス付着
第８図	14	３竪	土師器	高坏	-	(1.9)	-	-	ナデ	ナデ	A・C・E	良	にぶい橙色	7.5YR 7/4 ～ 6/4	浅黄橙色	7.5YR 8/4 ～ 8/6	内外面に黒斑あり
第８図	15	３竪	土師器	高坏	-	(7.5)	(12.4)	-	ケズリ後ナデ・ナデ	ナデ	A・C・E・H	良	にぶい橙色 にぶい褐色	7.5YR6/4 7.5YR5/4	にぶい橙色 にぶい褐色	7.5YR6/4 7.5YR5/4	２次被熱あり
第８図	16	３竪	土師器	高坏	-	(9.3)	(12.9)	-	ナデ・ケズリ	ナデ	A・C・E	良	橙色 明赤褐色	2.5YR6/8 2.5YR5/8	橙色 明赤褐色	2.5YR6/8 2.5YR5/8	円盤充填あり
第８図	17	３竪	土師器	高坏	-	(10.4)	(15.5)	-	ケズリ後ナデ・ナデ	ナデ	A・C・D・E	良	浅黄橙色 橙色	7.5YR8/6 7.5YR7/6	浅黄橙色 にぶい橙色	7.5YR8/4 7.5YR7/4	内面に黒斑あり
第８図	18	３竪	土師器	高坏	-	(8.7)	(15.2)	-	ナデ？・ケズリ後ナデ・摩耗のため調整不明	ナデ？摩耗のため調整不明	A・C・D	良	橙色	5YR6/6	橙色	5YR 6/8 ～ 7/8	

第１３表　出土土器観察表２

図版番号	№	出土遺構	種別	器種	法量（cm）				調整		胎土	焼成	色調				備考
					口径	器高	底径	胴部径	内面	外面			内面（裏）	Hue	外面（表）	Hue	
第９図	19	３堅	土師器	高坏	-	(8.0)	(12.0)	-	ケズリ・ナデ	ヨコナデ	A・C・D・E	良	黄橙色	7.5YR 8/8 ～ 7/8	黄橙色 橙色	7.5YR7/8 7.5YR6/8	
第９図	20	３堅	土師器	高坏	-	(8.6)	16.0	-	ケズリ後ナデ・ナデ	ナデ？	B・C・D・E	良	橙色	5YR7/8	橙色	5YR6/8	
第９図	21	３堅	土師器	高坏	-	(8.1)	(13.0)	-	ナデ・ヨコナデ	指オサエ後ナデ	A・C・E	良	橙色	5YR7/6	橙色	5YR6/8	
第９図	22	３堅	土師器	高坏	-	(8.4)	(12.0)	-	ナデ・ケズリ後ナデ	ナデ	A・C・D・H	良	橙色	5YR 6/6 ～ 6/8	にぶい橙色 褐色	7.5YR7/4 7.5YR7/6	外面に黒斑あり
第９図	23	３堅	土師器	高坏	-	(5.0)	-	-	ケズリ・ナデ	ナデ	A・C・D・E	良	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/4 10YR7/4	にぶい黄橙色 明黄褐色	10YR7/4 10YR7/6	内面に黒斑あり
第９図	24	３堅	土師器	高坏	-	(5.6)	-	-	ケズリ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	A・C・D・E	良	橙色	5YR6/8	橙色	5YR 6/6 ～ 6/8	
第９図	25	３堅	土師器	高坏	-	(6.8)	-	-	ナデ？摩耗のため調整不明	ナデ？摩耗のため調整不明	A・C・D	良	灰白色 にぶい黄橙色	10YR7/1 10YR7/2	浅黄橙色	10YR 8/3 ～ 8/4	
第９図	26	３堅	土師器	高坏	-	(12.0)	-	-	ケズリ後ナデ・ナデ	ナデ？摩耗のため調整不明	A・C・E・H	やや良	黄灰色	2.5Y 6/1 ～ 5/1	灰白色 灰黄色	2.5Y7/1 2.5Y7/2	
第９図	27	３堅	土師器	鉢	15.3	8.2	-	-	ナデ・ケズリ	ナデ・ハケ目・ケズリ後ナデ	A・B・C・E	やや良	浅黄橙色 黒褐色	10YR8/3 10YR3/1	浅黄橙色 黒褐色	10YR8/3 10YR3/1	内外面にスス付着 内外面に黒斑あり
第９図	28	３堅	土師器	鉢	(16.0)	8.3	-	-	ハケ目・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ハケ目	A・D・E・H	良	橙色	7.5YR 7/6 ～ 6/6	にぶい褐色 明褐色	7.5YR7/4 7.5YR7/8	内外面に黒斑あり
第９図	29	３堅	土師器	鉢	13.8	7.8	-	-	ヨコナデ・ナデ・指オサエ後ナデ	ヨコナデ・ナデ	A・B・C・D	良	橙色	7.5YR 6/6 ～ 6/8	橙色 明赤褐色	7.5YR6/6 2.5YR5/8	外面にスス付着
第９図	30	３堅	土師器	鉢	(13.7)	5.3	-	-	摩耗のため摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・B・C・D・E・F	良	にぶい橙色 黒色	7.5YR7/4 7.5YR2/1	橙色 黒色	7.5YR7.5 7.5YR2/1	口縁部黒斑あり
第９図	31	３堅	土師器	坏	(12.8)	4.1	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・D・E	良	明赤褐色 赤褐色	2.5YR5/8 2.5YR4/8	橙色	5YR 7/8 ～ 6/8	
第９図	32	３堅	土師器	坏	14.5	5.0	-	-	ナデ・指オサエ後ナデ	ナデ後ハケ目	A・C・D	良	明褐灰色 にぶい橙色	7.5YR7/2 7.5YR7/4	明褐灰色 にぶい橙色	7.5YR7/2 7.5YR7/4	歪みあり
第９図	33	３堅	土師器	壺	-	(5.1)	4.1	(6.2)	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	A・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	ミニチュア
第９図	34	３堅	土師器	鉢	(4.0)	3.9	1.5	-	ケズリ後ナデ・指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・E・H	良	浅黄橙色 黄橙色	10YR8/4 10YR8/6	浅黄橙色	10YR 8/3 ～ 8/4	外面下半に黒斑あり 内面に土付着 ミニチュア
第９図	35	３堅	土師器	鉢	3.1	3.6	-	-	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	A・C	良	黄橙色 黒褐色	7.5YR7/8 7.5YR2/2	黄橙色 黒褐色	7.5YR7/8 7.5YR2/2	内外面にスス付着 ミニチュア
第９図	36	３堅	土師器	鉢	4.1	3.9	-	-	指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ	A・B・C・D・E	良	褐灰色	10YR5/1	褐灰色	10YR6/1	ミニチュア
第９図	37	３堅	土師器	鉢	-	(3.6)	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	ミニチュア
第９図	38	３堅	土師器	甕	5.3	8.9	-	10.7	ナデ・ケズリ後ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ・ナデ	A・C・D・E	良	黒褐色	5YR2/1	橙色 黒褐色	5YR 7/6 ～ 7/8 5YR2/1	内外面にスス付着 口縁部に打ち欠き 胴部穿孔１個
第１１図	1	４堅	土師器	甕	17.7	27.8	-	25.4	ナデ・指オサエ・ケズリ	ナデ・ハケ目	A・C・E・H	良	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/4 10YR7/2	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/4 10YR7/2	外面に黒斑あり 外面にスス付着 外面に剥離あり
第１１図	2	４堅	土師器	甕	15.6	27.2	-	22.0	ナデ・ケズリ後ナデ	ナデ・ハケ目・ミガキ	A・C・E・H	良	にぶい黄橙色 橙色	10YR7/3 7.5YR6/8	にぶい黄橙色 黒色	10YR 7/3 ～ 7/4 10YR2/1	内外面に黒斑あり 内外面にスス付着 内面にモミ痕？あり 外面に鉄分付着
第１１図	3	４堅	土師器	甕	12.2	(14.0)	-	16.6	ナデ・指オサエ・ケズリ	ナデ・ハケ目	A・C・E	良	灰黄褐色	10YR5/2	浅黄橙色	7.5YR8/4	鉄分付着
第１１図	4	４堅	土師器	甕	17.0	(12.6)	-	-	ナデ・指オサエ・ケズリ後ナデ	ナデ？摩耗のため調整不明	A・C・D・E・H	良	浅黄橙色	7.5YR 8/4 ～ 8/6	浅黄橙色 黄橙色	7.5YR8/6 7.5YR8/8	内外面に黒斑あり 内外面にスス付着
第１１図	5	４堅	土師器	甕	-	(7.7)	-	-	指オサエ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ハケ目	A・C・E	良	灰黄色	2.5Y7/2	灰黄褐色	10YR6/2	外面にスス付着 外面に黒斑あり
第１１図	6	４堅	土師器	甕	-	(13.8)	-	(27.2)	ケズリ・摩耗のため調整不明	ハケ目？・摩耗のため調整不明	A・C・E・H	良	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい黄橙色	10YR7/4	内面にスス付着
第１１図	7	４堅	土師器	甕	18.6	(11.6)	-	-	ヨコナデ・指オサエ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	A・C・E	良	明赤灰色 浅黄橙色	2.5YR7/2 7.5YR8/3	灰白色	10YR8/2	外面に線刻あり
第１１図	8	４堅	土師器	壷	10.3	12.3	-	12.5	ナデ	ナデ・工具ナデ	A・B・C・D	良	浅黄橙色	10YR8/4	灰白色	7.5YR8/2	外面に黒斑あり
第１１図	9	４堅	土師器	壷	(11.6)	15.2	-	12.5	ヨコナデ・指オサエ・工具ナデ	ヨコナデ・摩耗のため調整不明	A・C・E	良	黄灰色	2.5Y4/1	灰白色	2.5Y8/2	外面に黒斑あり
第１１図	10	４堅	土師器	壷	(14.6)	(15.1)	-	14.0	ナデ・ケズリ・指オサエ	ナデ・摩耗のため調整不明	A・B・C・E	良	浅黄橙色	10YR8/3	明褐灰色	7.5YR7/2	外部に黒斑あり ２次被熱あり
第１１図	11	４堅	土師器	壺	12.6	9.1	-	11.6	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ	A・C・E	良	浅黄橙色	10YR8/3	灰白色 灰黄褐色	10YR8/2 10YR5/2	外面にスス付着 鉄分付着
第１１図	12	４堅	土師器	壺	(9.2)	(7.6)	-	(8.6)	ナデ・指オサエ	ナデ？・摩耗のため調整不明	A・C・D・E・H	良	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	10YR6/4	外面に黒斑あり
第１１図	13	４堅	土師器	壺	9.6	(8.7)	-	10.4	ヨコナデ？・摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	灰白色	7.5YR8/2	浅黄橙色	7.5YR8/3	口縁部に黒斑あり
第１１図	14	４堅	土師器	壺	11.5	14.8	-	14.3	ナデ・ケズリ	ナデ	A・C・E・F・H	良	黄橙色	10YR8/6	明黄褐色	10YR7/6	外面に黒斑あり
第１１図	15	４堅	土師器	壺	(10.0)	12.2	-	12.5	ヨコナデ・指オサエ・ナデ	ヨコナデ・ハケ目	A・B・C・E	良	褐灰色	10YR5/1	にぶい黄橙色 灰黄褐色	10YR7/2 10YR5/2	外面に黒斑あり 内面に鉄分付着
第１１図	16	４堅	土師器	壺	(9.6)	(10.9)	-	9.9	ナデ・指オサエ	ナデ・摩耗のため調整不明	A・B・C・D	良	にぶい橙色	5YR6/3	にぶい橙色	7.5YR7/4	
第１１図	17	４堅	土師器	壺	8.4	10.8	-	9.4	ナデ・指ナデ	ナデ・ハケ目	A・B・C・D	良	浅黄橙色	10YR8/3	浅黄橙色	7.5YR8/6	外面に黒斑あり
第１２図	18	４堅	土師器	壺	(9.3)	9.6	-	9.5	ナデ・指ナデ	摩耗のため調整不明	A・B・C・D・E	良	浅黄橙色 褐灰色	7.5YR8/3 5YR6/1	灰白色 浅黄橙色	5YR8/1 10YR8/3	外面に黒斑あり 鉄分付着
第１２図	19	４堅	土師器	壺	(9.2)	12.5	-	(11.0)	ナデ・指オサエ・ケズリ	ナデ	A・C・D・E	良	浅黄橙色 黒褐色	7.5YR8/6 7.5YR3/1	浅黄橙色 黒褐色	7.5YR8/6 7.5YR3/1	内外面に黒斑あり 内面底部充填
第１２図	20	４堅	土師器	壺	9.0	10.7	-	10.4	工具ナデ・指オサエ・ナデ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ・摩耗のため調整不明	A・B・C・E	良	浅黄橙色	10YR8/4	浅黄橙色 明褐灰色	7.5YR8/6 7.5YR7/2	外面に黒斑あり 外面に鉄分付着
第１２図	21	４堅	土師器	壺	9.6	10.7	-	9.5	ヨコナデ・工具ナデ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ？・摩耗のため調整不明	A・C・E	良	褐灰色	7.5YR5/1	浅黄橙色	10YR8/3	外面に黒斑あり 鉄分付着

第１４表　出土土器観察表３

図版番号	№	出土遺構	種別	器種	法量（cm）				調整		胎土	焼成	色調				備考
					口径	器高	底径	胴部径	内面	外面			内面（裏）	Hue	外面（表）	Hue	
第１２図	22	４堅	土師器	壺	10.1	11.1	-	10.8	工具ナデ・ナデ	ヨコナデ？・ハケ目	A・C・E	良	灰色	N4/	浅黄色	2.5Y7/3	外面に黒斑あり
第１２図	23	４堅	土師器	壺	6.3	8.6	-	8.0	ナデ・指オサエ・摩耗のため調整不明	ナデ・工具ナデ？・摩耗のため調整不明	A・B・C・E	良	灰白色	10YR8/2	灰白色	10YR8/2	口縁部にススト付着
第１２図	24	４堅	土師器	壺	8.8	(9.0)	-	9.7	ハケ目後ナデ・ナデ	ナデ・摩耗のため調整不明	A・B・C・D	良	浅黄橙色	10YR8/3	明褐灰色	5YR7/2	外面に黒斑あり
第１２図	25	４堅	土師器	壺	-	(12.9)	-	13.0	指オサエ・ナデ・指ナデ	ナデ？・指オサエ・摩耗のため調整不明	A・B・C・E	良	浅黄橙色	7.5YR8/3	淡橙色	5YR8/3	外面に黒斑あり
第１２図	26	４堅	土師器	壺	-	(11.4)	3.6	13.4	指オサエ・工具ナデ	ハケ目・ナデ？・摩耗のため調整不明	A・C・E	良	灰黄色	2.5Y7/2	浅黄色	2.5Y8/3	
第１２図	27	４堅	土師器	壺	-	(6.4)	-	9.3	指オサエ・工具ナデ	摩耗のため調整不明	A・C・E	良	浅黄橙色	7.5YR8/4	浅黄橙色	10YR8/3	
第１２図	28	４堅	土師器	壺	-	(4.7)	(3.0)	-	ナデ	ナデ	A・C・D	良	浅黄橙色	10YR8/3	浅黄橙色	10YR8/3	外面に黒斑あり
第１２図	29	４堅	土師器	壺	-	(2.5)	-	-	ナデ	ハケ目後ナデ	A・C	良	灰白色	10YR7/1	橙色	7.5YR7/6	ミニチュア？
第１２図	30	４堅	土師器	壺	-	(5.6)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C	良	灰白色	2.5Y7/1	黄灰色	2.5Y5/1	穿孔１個残存
第１２図	31	４堅	土師器	壺	-	(5.6)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・D・E	良	灰白色	10YR8/2	灰白色	10YR8/2	ミニチュア
第１２図	32	４堅	土師器	高坏	(20.4)	15.1	(13.6)	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・B・C・E・F・H	良	浅黄橙色 黄橙色 黒色	7.5YR8/6 7.5YR7/8 7.5YR7/1	浅黄橙色 明褐色	7.5YR8/6 7.5YR5/8	内面に黒斑あり 外面脚部に鉄分付着
第１２図	33	４堅	土師器	高坏	-	(9.6)	13.7	-	ナデ？・ヨコナデ	摩耗のため調整不明	A・B・C・D・E	良	浅黄橙色	10YR8/6	浅黄橙色	7.5YR8/3	穿孔１個
第１２図	34	４堅	土師器	高坏	-	(9.2)	(13.8)	-	ナデ・ヨコナデ・摩耗のため調整不明	ナデ・摩耗のため調整不明	A・B・C・D	良	明赤灰色	2.5YR7/2	淡橙色	5YR8/3	穿孔２個
第１２図	35	４堅	土師器	高坏	-	(8.5)	13.2	-	ケズリ・ナデ	ナデ？・摩耗のため調整不明	A・B・C・E	良	灰白色	10YR8/2	灰白色 赤橙色	10YR8/2 10R6/6	２次被熱あり
第１２図	36	４堅	土師器	高坏	-	(6.3)	10.0	-	指オサエ・ナデ・ハケ目後ナデ	ハケ目	A・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/2	褐灰色	7.5YR5/2	
第１２図	37	４堅	土師器	高坏	-	(5.5)	-	-	工具ナデ	ナデ	A・C・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	
第１２図	38	４堅	土師器	高坏	-	(9.3)	-	-	ヘラケズリ・ナデ	工具ナデ・ナデ・ハケ目	A・C・D・E	良	にぶい橙色	5YR7/4	橙色	2.5YR7/6	外面に被熱による赤化あり
第１２図	39	４堅	土師器	高坏	-	(7.6)	-	-	ヘラケズリ・ナデ？	ナデ？・ハケ目	A・C・E・H	良	灰白色	2.5Y7/1	にぶい黄橙色	10YR7/2	
第１２図	40	４堅	土師器	台付鉢	10.8	(6.9)	-	-	ハケ目後ナデ	ナデ・摩耗のため調整不明	A・B・C・D	良	淡橙色	5YR8/3	浅黄橙色	7.5YR8/3	
第１２図	41	４堅	土師器	台付鉢	-	(3.0)	10.4	-	ハケ目・ナデ・摩耗のため調整不明	ハケ目・指オサエ・摩耗のため調整不明	C・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/2	にぶい黄橙色	10YR7/2	
第１２図	42	４堅	土師器	台付鉢	-	(2.8)	-	-	ナデ	摩耗のため調整不明	A・C・E・H	良	橙色	7.5YR6/6	灰白色	10YR8/2	
第１２図	43	４堅	土師器	甕	(4.8)	6.7	5.8	-	ナデ	ナデ	A・B・C・D	良	浅黄橙色	7.5YR8/6	にぶい黄橙色	10YR7/3	外面に黒斑あり ミニチュア
第１２図	44	４堅	土師器	甕	(3.8)	6.0	(5.8)	-	指オサエ・ナデ	摩耗のため調整不明	A・C・E	良	灰白色	2.5Y8/2	灰白色	2.5Y8/2	ミニチュア
第１２図	45	４堅	土師器	甕	4.2	5.2	4.9	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・摩耗のため調整不明	A・C・E	良	灰黄色	2.5Y7/2	灰白色	10YR8/2	外面に黒斑あり ミニチュア
第１２図	46	４堅	土師器	甕	6.5	6.2	-	7.1	指オサエ	指オサエ	A・C・E	良	褐灰色 灰白色	7.5YR5/1 10YR8/2	灰黄色	2.5Y7/2	ミニチュア
第１２図	47	４堅	土師器	甕	5.7	4.8	-	5.4	指オサエ	指オサエ・ナデ	A・B・C・E	良	明赤褐色	5YR5/6	橙色	2.5YR6/8	外面に黒斑あり ミニチュア
第１２図	48	４堅	土師器	甕	6.0	4.0	-	-	指オサエ	指オサエ・ナデ	A・B・C	良	淡黄色	2.5Y8/3	灰白色	2.5Y8/2	口縁部に黒斑あり ミニチュア
第１２図	49	４堅	土師器	甕	5.3	4.2	-	-	指オサエ	指オサエ・摩耗のため調整不明	A・C・E	良	淡黄色	2.5Y8/3	灰白色	2.5YR8/2	ミニチュア
第１２図	50	４堅	土師器	甕	3.6	3.1	-	-	指オサエ	指オサエ	A・B・C	良	灰黄色	2.5Y7/2	灰黄色	2.5Y6/2	ミニチュア
第１２図	51	４堅	土師器	甕	4.0	2.8	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・B・C・D	良	淡黄色	2.5Y8/3	淡黄色	2.5Y8/3	内外面に黒斑あり ミニチュア
第１３図	52	４堅	土師器	甕	4.6	3.2	-	-	指オサエ	指オサエ・ナデ	A・B・C・D	良	にぶい黄橙色	10YR7/2	淡黄色	2.5Y8/3	外面に黒斑あり ミニチュア
第１３図	53	４堅	土師器	鉢	4.2	4.1	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ	A・C・E	良	橙色	7.5YR6/6	灰黄色	2.5Y7/2	外面に黒斑あり ミニチュア
第１３図	54	４堅	土師器	鉢	3.8	3.8	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ	A・C・E	良	灰白色	10YR8/2	灰白色	2.5Y8/2	外面に黒斑あり ミニチュア
第１３図	55	４堅	土師器	鉢	5.0	4.0	-	-	指オサエ	指オサエ・ナデ・摩耗のため調整不明	A・B・C・E	良	浅黄橙色	10YR8/4	浅黄橙色	7.5YR8/3	内面に鉄分付着 ミニチュア
第１３図	56	４堅	土師器	鉢	4.3	3.2	-	-	指オサエ・ナデ	ナデ	A・B・C・E	良	灰白色	10YR8/2	淡黄色	2.5Y8/3	外面に黒斑あり ミニチュア
第１３図	57	４堅	土師器	鉢	(4.6)	3.1	(2.0)	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・D・E	良	橙色	7.5YR6/6	にぶい黄橙色	10YR7/3	ミニチュア
第１３図	58	４堅	土師器	鉢	(3.9)	2.6	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	灰白色	10YR8/2	ミニチュア
第１３図	59	４堅	土師器	鉢	3.5	2.3	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・E	良	浅黄橙色	10YR8/3	浅黄橙色	10YR8/3	外面に黒斑あり ミニチュア
第１３図	60	４堅	土師器	鉢	-	(3.6)	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C	良	明黄褐色	10YR6/6	明黄褐色	10YR6/6	外面に黒斑あり ミニチュア
第１３図	61	４堅	土師器	鉢	-	(2.3)	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C	良	明黄褐色	10YR7/6	にぶい黄橙色	10YR7/3	黒曜石混入 ミニチュア
第１３図	62	４堅	弥生土器	甕	-	(3.7)	(6.9)	-	工具ナデ	ナデ	A・C・E	良	褐灰色	10YR4/1	にぶい黄橙色	10YR7/2	外面底部に黒斑あり
第１３図	58	４堅	土師器	鉢	(3.9)	2.6	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	灰白色	10YR8/2	ミニチュア
第１３図	59	４堅	土師器	鉢	3.5	2.3	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・E	良	浅黄橙色	10YR8/3	浅黄橙色	10YR8/3	外面に黒斑あり ミニチュア
第１３図	60	４堅	土師器	鉢	-	(3.6)	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C	良	明黄褐色	10YR6/6	明黄褐色	10YR6/6	外面に黒斑あり ミニチュア

第１５表　出土土器観察表４

図版番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量（cm）				調整		胎土	焼成	色調				備考
					口径	器高	底径	胴部径	内面	外面			内面（裏）	Hue	外面（表）	Hue	
第１３図	61	４竪	土師器	鉢	-	(2.3)	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C	良	明黄褐色	10YR7/6	にぶい黄橙色	10YR7/3	黒曜石混入 ミニチュア
第１３図	62	４竪	弥生土器	甕	-	(3.7)	(6.9)	-	工具ナデ	ナデ	A・C・E	良	褐灰色	10YR4/1	にぶい黄橙色	10YR7/2	外面底部に黒斑あり
第１３図	58	４竪	土師器	鉢	(3.9)	2.6	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	灰白色	10YR8/2	ミニチュア
第１３図	59	４竪	土師器	鉢	3.5	2.3	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・E	良	浅黄橙色	10YR8/3	浅黄橙色	10YR8/3	外面に黒斑あり ミニチュア
第１３図	60	４竪	土師器	鉢	-	(3.6)	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C	良	明黄褐色	10YR6/6	明黄褐色	10YR6/6	外面に黒斑あり ミニチュア
第１３図	61	４竪	土師器	鉢	-	(2.3)	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C	良	明黄褐色	10YR7/6	にぶい黄橙色	10YR7/3	黒曜石混入 ミニチュア
第１３図	62	４竪	弥生土器	甕	-	(3.7)	(6.9)	-	工具ナデ	ナデ	A・C・E	良	褐灰色	10YR4/1	にぶい黄橙色	10YR7/2	外面底部に黒斑あり
第１３図	58	４竪	土師器	鉢	(3.9)	2.6	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	灰白色	10YR8/2	ミニチュア
第１３図	59	４竪	土師器	鉢	3.5	2.3	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・E	良	浅黄橙色	10YR8/3	浅黄橙色	10YR8/3	外面に黒斑あり ミニチュア
第１３図	60	４竪	土師器	鉢	-	(3.6)	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C	良	明黄褐色	10YR6/6	明黄褐色	10YR6/6	外面に黒斑あり ミニチュア
第１３図	61	４竪	土師器	鉢	-	(2.3)	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C	良	明黄褐色	10YR7/6	にぶい黄橙色	10YR7/3	黒曜石混入 ミニチュア
第１３図	62	４竪	弥生土器	甕	-	(3.7)	(6.9)	-	工具ナデ	ナデ	A・C・E	良	褐灰色	10YR4/1	にぶい黄橙色	10YR7/2	外面底部に黒斑あり
第１３図	63	４竪	弥生土器	壺	-	(3.4)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・B・C・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	刻み目突帯あり
第１３図	64	４竪	弥生土器	壺	-	3.3	5.7	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・D・E	良	灰白色	10YR8/2	灰白色	10YR8/2	外面に黒斑あり
第１３図	65	４竪	弥生土器	器台	(13.4)	(9.7)	-	-	ハケ目後ナデ・工具痕	ハケ目後ナデ？・摩耗のため調整不明	A・C・D・E・H	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	刻み目文
第１５図	1	５竪	土師器	甕	15.7	(13.7)	-	-	ヨコナデ・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ハケ目・ミガキ・ナデ	A・B・C・E	良	にぶい褐色 浅黄橙色	7.5YR5/4 7.5YR8/4	にぶい褐色 黒色	7.5YR 5/3 ～ 5/4 7.5YR2/1	内外面に黒斑あり スス付着
第１５図	2	５竪	土師器	壺	-	(15.2)	-	(26.4)	ケズリ・ナデ・指オサエ	ハケ目・ナデ・ミガキ？	A・C・E・H	良	明赤褐色	5YR 5/6 ～ 5/8	赤褐色 暗赤褐色	5YR4/6 5YR3/6	外面底部にスス付着
第１５図	3	５竪	土師器	高坏	(18.5)	(7.1)	-	-	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	A・B・D	良	橙色	5YR6/8	橙色 明赤褐色	5YR6/8 5YR5/8	
第１５図	4	５竪	土師器	高坏	(18.4)	(5.0)	-	-	ナデ？摩耗のため調整不明	ナデ・ハケ目・摩耗のため調整不明	A・D・G	良	橙色 橙色	5YR7/8 2.5YR6/8	橙色	5YR6/8	
第１５図	5	５竪	土師器	鉢	21.1	12.3	5.8	-	ナデ・ハケ目・指オサエ・ケズリ	ナデ・ハケ目	A・B・C・E・H	良	明赤褐色	2.5YR5/8	明赤褐色	2.5YR5/8	内面に帯状に黒斑あり 外面にスス付着
第１５図	6	５竪	弥生土器	台付鉢	-	(2.8)	5.2	-	ナデ・指オサエ	指オサエ・指ナデ	A・B・C・D	良	黄橙色 橙色	7.5YR7/8 7.5YR6/8	明黄褐色 橙色	10YR6/6 7.5YR6/8	
第１５図	7	５竪	土師器	坏	12.4	6.2	-	-	ケズリ後ナデ	ナデ・ケズリ後ナデ	A・C・E	良	にぶい橙色 橙色	5YR6/4 5YR6/6	橙色	5YR 7/6 ～ 7/8	外面にスス付着 内面に被熱による赤化あり？
第１５図	8	５竪	土師器	坏	14.5	5.2	-	-	ナデ？・摩耗のため調整不明	ヨコナデ・ケズリ・摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	灰白色	7.5YR8/2	橙色	5YR 6/8 ～ 7/8	
第１５図	9	５竪	土師器	坏	-	(5.9)	-	-	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ハケ目	A・C	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	黒褐色	10YR3/1	内外面に黒斑あり
第１５図	10	５竪	弥生土器	器台	-	(13.6)	-	-	ナデ・指オサエ	ハケ目	A・B・C・E	良	にぶい褐色	7.5YR 6/3 ～ 5/3	にぶい橙色 明褐色	7.5YR6/4 7.5YR5/6	外面に黒斑あり 内外面に被熱によるススあり
第１７図	1	６竪	土師器	甕	(22.0)	(16.0)	-	(24.8)	ナデ・ハケ目・指オサエ	ヨコナデ・ナデ？	A・C・D・E	良	浅黄橙色 褐灰色	7.5YR 8/4 ～ 8/6 7.5YR4/1	橙色 淡橙色	5YR6/6 5YR8/4	外面に被熱による剥離あり
第１７図	2	６竪	土師器	甕	(16.0)	(10.2)	-	-	ヨコナデ・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・B・C・H	良	明赤褐色	5YR 5/6 ～ 5/8	明赤褐色	5YR 5/6 ～ 5/8	
第１７図	3	６竪	土師器	甕	-	(18.6)	-	-	ハケ目	ヨコナデ・ハケ目	A・C・D・H	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	内外面に黒斑あり
第１７図	4	６竪	土師器	高坏	(22.0)	(6.8)	-	-	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	A・C・D・E・H	良	橙色	5YR 7/6 ～ 6/8	淡橙色 橙色	5YR8/4 5YR7/6	
第１７図	5	６竪	土師器	坏	(15.7)	5.3	-	-	指オサエ・ナデ	ナデ・工具ナデ	A・C・E・H	良	明赤褐色	5YR5/8	橙色 明赤褐色	2.5YR6/8 2.5YR5/8	外面に黒斑あり
第１７図	6	６竪	土師器	坏	13.6	4.6	-	-	ナデ	ハケ目・ナデ	D・G	良	橙色 明赤褐色	5YR6/8 5YR5/8	にぶい橙色 褐色	7.5YR7/4 7.5YR6/8	
第１７図	7	６竪	土師器	甑	21.4	19.6	-	-	ナデ・ケズリ後ナデ	ナデ・ハケ目・ナデ	A・C・D・E	良	橙色	7.5YR 7/6 ～ 6/6	にぶい橙色 橙色	7.5YR7/4 7.5YR6/6	内面に黒斑あり 外面にスス付着 多孔（穿孔５個）
第１７図	8	６竪	弥生土器	甕	-	(3.0)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	黒褐色	10YR3/1	灰白色	10YR8/2	内外面に黒斑あり 刻み目文
第１７図	9	６竪	弥生土器	高坏	(16.3)	(9.5)	-	-	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	A・C・D・H	良	浅黄橙色 黄橙色	10YR8/4 10YR8/6	浅黄橙色 黄橙色	7.5YR8/6 7.5YR7/8	脚付無頸壺？
第１９図	1	７竪	土師器	鉢	(21.2)	(10.2)	-	-	ヨコナデ・ハケ目・ナデ？	ヨコナデ・ナデ？	A・C・D・E	良	灰白色 淡橙色	5YR8/2 5YR8/3	明褐色 にぶい橙色	5YR7/2 5YR7/3	外面に黒斑あり 外面にスス付着
第１９図	2	７竪	土師器	鉢	11.6	5.4	2.5	-	ヨコナデ・ハケ目・摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D	良	浅黄橙色 にぶい橙色	7.5R8/3 7.5R7/3	灰白色 浅黄橙色	7.5R8/2 7.5R8/3	外面底部にスス付着
第１９図	3	７竪	土師器	鉢	(20.6)	7.6	6.4	-	指オサエ・ナデ・ハケ目	ヨコナデ・ケズリ後ハケ目・ナデ	A・B・C・D・E	良	にぶい橙色 橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/6	橙色 黄橙色	7.5YR7/6 7.5TR7/8	外面底部に黒斑あり
第１９図	4	７竪	土師器	鉢	(19.2)	7.8	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・B・C・E	良	浅黄橙色 黄橙色	10YR8/4 10YR8/6	黄橙色 明黄褐色	10YR8/6 10YR7/6	外面にスス付着
第１９図	5	７竪	弥生土器	甕	(26.0)	(17.9)	-	-	ヨコナデ・ナデ・ケズリ・指オサエ・ハケ目	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・D・H	良	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/4 10YR7/4	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/4 10YR7/4	外面に黒斑あり 頸部に刻み目突帯あり
第１９図	6	７竪	弥生土器	甕	(30.6)	(7.4)	-	-	ヨコナデ・ケズリ後ナデ	ヨコナデ	A・C・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR 7/3 ～ 7/4	浅黄橙色 黄橙色	10YR8/4 10YR8/6	内面に黒斑あり 刻み目突帯あり
第１９図	7	７竪	土師器	甕	-	(13.3)	6.5	-	ナデ・指オサエ	ハケ目・ナデ	A・B・C・D・E	良	黄橙色 橙色	7.5YR7/8 7.5YR6/8	浅黄橙色 黄橙色	10YR8/4 10YR8/6	穿孔１個残存 外面にスス付着 外面に剥離あり

第１６表　出土土器観察表５

図版番号	№	出土遺構	種別	器種	法量（cm）				調整		胎土	焼成	色調				備考
					口径	器高	底径	胴部径	内面	外面			内面（裏）	Hue	外面（表）	Hue	
第１９図	8	７堅	土師器	甕	-	(16.8)	7.0	-	ナデ？・ミガキ？	ナデ？・ミガキ？	A・B・C・D・E	良	淡橙色	5YR8/4	赤色 赤褐色	10R4/8 2.5YR4/8	外面に被熱による赤化あり 剥離あり
第１９図	9	７堅	弥生土器	甕	-	(8.4)	(7.7)	-	ナデ	ナデ	A・C・D・H	良	浅黄橙色	10YR 8/3 ～ 8/4	橙色	5YR 7/8 ～ 6/8	内外面に黒斑あり 被熱による剥落あり
第１９図	10	７堅	弥生土器	甕	-	(8.2)	8.5	-	ケズリ後ナデ	ナデ・ハケ目	A・C・D・E・H	良	灰白色 浅黄橙色	10YR8/2 10YR8/3	黄橙色 明黄褐色	10YR8/6 10YR7/6	
第１９図	11	７堅	弥生土器	甕	-	(6.7)	5.9	-	ナデ	ハケ目・ナデ	A・D・E・H	良	浅黄橙色	7.5YR 8/4 ～ 8/6	黄橙色	7.5YR 8/8 ～ 7/8	外面に黒斑あり
第１９図	12	７堅	土師器	高坏	-	(12.2)	-	-	ナデ	ナデ?	B・C・E・H	良	橙色	5YR 7/8 ～ 6/8	橙色	5YR6/8	穿孔３個
第１９図	13	７堅	弥生土器	器台	(12.0)	20.1	(15.7)	-	ハケ目・ケズリ後ナデ	タタキ後ハケ目・ナデ	A・B・C・D・E	良	浅黄橙色 橙色	7.5YR8/4 5YR6/8	浅黄橙色 橙色	7.5YR8/4 5YR6/8	内外面に黒斑あり 外面に被熱による赤化あり
第２１図	1	８竪	土師器	甕	-	(5.5)	(6.4)	-	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ	A・C・D	良	にぶい橙色	7.5YR7/4	橙色	5YR7/4	外面底部にスス付着
第２１図	2	８堅	土師器	高坏	-	(5.8)	-	-	ナデ	ヨコナデ	A・E	良	赤褐色 黒褐色	5YR4/8 5YR3/1	橙色	5YR 6/6 ～ 6/8	内面にスス付着
第２３図	1	９堅	土師器	甕	-	(32.6)	9.8	-	ハケ目・ナデ	タタキ後ハケ目・ナデ	A・B・C・E・G・H	良	浅黄橙色 にぶい黄橙色 褐灰色 黒褐色	10YR8/ 3 10YR7/ 3 10YR4/1 10YR3/1	浅黄橙色 にぶい黄橙色 褐灰色 黒褐色	10YR8/ 3 10YR7/ 3 10YR4/1 10YR3/1	内外面に黒斑あり スス付着 内面に被熱による剥離あり
第２３図	2	９堅	土師器	高坏	-	(6.6)	-	-	ナデ？・ハケ目	ナデ・ハケ目	A・C・D・E・H	良	橙色	5YR6/8	橙色	5YR6/8	外面にスス付着
第２６図	1	11 竪	弥生土器	甕	-	(15.0)	-	-	ハケ目後ナデ・ナデ	ハケ目	A・C・D	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	外面に剥落あり
第３２図	1	４掘	須恵器	坏蓋	(12.2)	(3.6)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	C・F	良	明紫灰色	7/1	明青灰色	7/1	
第３２図	2	４掘	須恵器	坏身	-	(2.9)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	C・E	良	灰白色 にぶい黄橙色	10YR7/1 10YR7/2	灰白色 褐灰色	10YR7/1 10YR6/1	
第４０図	1	１溝	須恵器	坏蓋	16.1	2.8	-	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ケズリ	E	良	灰色	N5/	灰色	N5/	つまみ径 3.1cm
第４０図	2	１溝	須恵器	坏蓋	(13.5)	(3.1)	-	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ケズリ	F	良	灰白色	N7/	暗灰色	N3/	内面にヘラ記号あり 口縁部にスミ付着？
第４０図	3	１溝	須恵器	坏蓋	-	(3.3)	-	-	回転ナデ	回転ケズリ後回転ナデ・回転ナデ	B	良	灰色	N5/	灰色	N5/	
第４０図	4	１溝	須恵器	坏蓋	-	(2.1)	-	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ケズリ	E	やや不良	灰白色	N7/	灰白色	N7/	内面にヘラ記号あり
第４０図	5	１溝	須恵器	坏蓋	-	(3.8)	-	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ケズリ	E	良	灰色	N4/	灰色	N4/	
第４０図	6	１溝	須恵器	坏蓋	-	(1.3)	-	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ケズリ	E	良	灰色	N5/	灰色	N5/	外面にヘラ記号あり
第４０図	7	１溝	須恵器	坏蓋	-	(0.7)	-	-	-	回転ナデ	E	良	灰色	N5/	灰色	N5/	つまみ部のみ
第４０図	8	１溝	須恵器	坏身	(13.0)	4.9	-	-	回転ナデ・当て具痕	回転ナデ・回転ケズリ	E	良	灰色	N5/	灰色	N5/	外面底部にヘラ記号あり 受け部径 (15.2cm)
第４０図	9	１溝	須恵器	坏身	(12.2)	(4.5)	-	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ケズリ	E・F	良	灰色	N6/	灰色	N6/	受け部径 (15.0cm)
第４０図	10	１溝	須恵器	坏身	(10.2)	(3.9)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	C・E	良	灰色	N4/	灰色	N4/	Ⅰ型式５段階（中村編年）
第４０図	11	１溝	須恵器	坏身	-	(3.7)	-	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ヘラケズリ	E	良	灰白色	N7/	灰色	N6/	受け部径 (15.2cm)
第４０図	12	１溝	須恵器	坏身	-	(3.6)	-	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ケズリ	E	良	灰白色	N7/	灰色	N5/	内面にヘラ記号 受け部径 (13.6cm)
第４０図	13	１溝	須恵器	坏身	8.0	2.9	4.7	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	A・B	良	灰黄褐色	10YR4/2	灰色 灰褐色	5Y5/1 5YR5/2	外面底部にヘラ記号あり
第４０図	14	１溝	須恵器	坏身	-	(1.8)	-	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ヘラ切り後ナデ	E	良	灰色	N6/	灰色	N6/	
第４０図	15	１溝	須恵器	坏身	-	(2.9)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	E	良	灰白色	N7/	灰色	N5/	
第４０図	16	１溝	須恵器	坏	(14.0)	3.8	(10.6)	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・ヘラ切り後ナデ	E	良	灰白色	N7/	灰白色	N7/	
第４０図	17	１溝	須恵器	高坏	-	(7.8)	-	-	回転ナデ・工具痕？	カキ目・回転ナデ	C・E・F	良	灰白色	N7/	灰白色	N7/	
第４０図	18	１溝	須恵器	壺	(8.2)	(3.8)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	E	良	灰色	N4/	灰色	N4/	
第４０図	19	１溝	須恵器	壺	-	(6.5)	-	-	回転ナデ	回転ナデ・カキ目	E	良	灰白色	N7/	にぶい赤褐色	5YR5/3	波状文
第４０図	20	１溝	須恵器	壺	8.2	(8.9)	-	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	E	良	暗灰色	N3/	暗灰色	N3/	長頸壺
第４０図	21	１溝	須恵器	壺	-	(10.7)	-	(21.2)	回転ナデ・当て具痕	カキ目・ナデ・格子目タタキ	E	良	灰色	N6/	灰色	N6/	外面に付着物あり 長頸壺
第４０図	22	１溝	須恵器	ハソウ	-	(1.2)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	E	良	にぶい赤褐色	2.5YR5/3	にぶい赤褐色	2.5YR5/3	波状文
第４０図	23	１溝	須恵器	平瓶	5.4	9.6	(6.2)	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・カキ目・ヘラケズリ	E・F	良	灰色 暗灰色	N6/ N3/	灰色 暗灰色	N6/ N3/	
第４０図	24	１溝	須恵器	提瓶	-	(4.2)	(12.0)	-	回転ナデ・ナデ	カキ目・ケズリ後ナデ・ナデ	E・F	良	灰色	N6/	灰色	N6/	
第４０図	25	１溝	須恵器	甕	(23.0)	(5.3)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	E	良	黄灰色	2.5Y6/2	灰白色	N7/	内外面に自然釉
第４０図	26	１溝	須恵器	甕	-	(5.8)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	E	良	灰色	N5/	灰色	N5/	内外面に自然釉
第４０図	27	１溝	須恵器	甕	-	(6.4)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	E・F	良	黄灰色	2.5Y5/1	黄灰色	2.5Y5/1	内外面に自然釉
第４０図	28	１溝	須恵器	甕	-	(2.3)	-	-	-	-	F	やや不良	にぶい黄色	2.5Y6/3	にぶい黄色	2.5Y6/3	
第４２図	29	１溝	須恵器	甕	(19.6)	(17.7)	-	-	回転ナデ・当て具痕	回転ナデ・格子目タタキ後ナデ	E	良	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい褐色 灰色	7.5YR6/2 N4/	
第４１図	30	１溝	須恵器	甕	-	(32.6)	-	(48.4)	当て具痕	格子目タタキ後ナデ	E	良	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい橙色	5YR6/4	
第４１図	31	１溝	須恵器	甕	-	(17.6)	-	-	当て具痕後ナデ	平行タタキ・ナデ	B	良	灰色	N6/	灰色	N4/	
第４１図	32	１溝	須恵器	甕	-	(10.8)	-	-	ナデ・充填後指オサエ	ナデ	B・E	良	灰色	N5/	灰色	N5/	底部に充填痕あり
第４２図	33	１溝	須恵器	甕	-	(29.7)	-	(42.8)	同心円状当て具痕	平行タタキ後カキ目	E	良	灰色	N6/	灰色	N6/	内面に自然釉
第４２図	34	１溝	須恵器	甕	-	(8.1)	-	-	回転ナデ・当て具痕	回転ナデ・平行タタキ	E	良	灰白色	N7/	灰色	N6/	外面に自然釉
第４２図	35	１溝	須恵器	甕	-	(13.4)	-	-	当て具痕	格子目タタキ後ナデ	E	良	にぶい褐色	7.5YR5/3	灰色	N6/	

第１７表　出土土器観察表６

図版番号	№	出土遺構	種別	器種	法量（cm）				調整		胎土	焼成	色調				備考
					口径	器高	底径	胴部径	内面	外面			内面（裏）	Hue	外面（表）	Hue	
第４２図	36	１溝	須恵器	甕	-	(19.1)	-	-	当て具痕	格子目タタキ後ナデ	E	良	にぶい褐色	7.5YR5/4	にぶい黄橙色	10YR7/3	
第４２図	37	１溝	須恵器	甕	-	(6.7)	-	-	当て具痕	平行タタキ後ナデ	F	良	灰色	N6/	灰色	N6/	外面に自然釉
第４２図	38	１溝	須恵器	甕	-	(9.0)	-	-	同心円状当て具痕	格子目タタキ後カキ目	E	やや不良	にぶい黄橙色	10YR7/3	灰白色	N7/	
第４２図	39	１溝	須恵器	甕	-	(12.6)	-	-	当て具痕	格子目タタキ	F	良	灰白色	2.5Y7/1	黄灰色	2.5Y6/1	内外面にわずかに自然釉
第４２図	40	１溝	須恵器	甕	-	(7.2)	-	-	ナデ	平行タタキ	E・F	良	灰色	N6/	暗灰色	N3/	
第４３図	41	１溝	土師器	甕	(17.6)	(9.3)	-	-	ナデ？摩耗のため調整不明	ナデ？摩耗のため調整不明	A・C・D・H	良	橙色	5YR 7/8 ～ 6/8	黄橙色	7.5YR 8/8 ～ 7/8	
第４３図	42	１溝	土師器	甕	(17.4)	(7.2)	-	-	ハケ目	ヨコナデ・指オサエ・タタキ・ハケ目	A・C・D・E	良	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい褐色 黒色	7.5YR5/4 7.5YR2/1	
第４３図	43	１溝	土師器	甕	(13.3)	(6.5)	-	-	摩耗のため調整不明	ヨコナデ・ハケ目・摩耗のため調整不明	A・C・D	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	浅黄橙色	7.5YR8/3	外面に黒斑あり
第４３図	44	１溝	土師器	壺	-	(5.1)	-	-	ナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目・摩耗のため調整不明	A・C・D	良	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	
第４３図	45	１溝	土師器	壺	-	(4.1)	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ	A・C・E	良	灰黄褐色	10YR6/2	灰黄褐色	10YR6/2	外面に線刻あり
第４３図	46	１溝	土師器	壺	-	(7.5)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/2	にぶい黄橙色	10YR7/2	
第４３図	47	１溝	土師器	高坏	(20.6)	(11.4)	-	-	摩耗のため調整不明・表面剥落	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	にぶい橙色	7.5YR7/3	にぶい橙色	7.5YR7/3	" 内外面に被熱による赤化あり 穿孔１個残存 "
第４３図	48	１溝	土師器	高坏	(19.1)	(5.2)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	
第４３図	49	１溝	土師器	高坏	-	(4.1)	-	-	指ナデ・ナデ	ヨコナデ	A・C・D	良	灰黄色	2.5Y7/2	灰黄色	2.5Y7/2	
第４３図	50	１溝	土師器	高坏	-	(4.6)	-	-	ハケ目	摩耗のため調整不明	A・C	良	浅黄橙色	10YR8/3	浅黄橙色	10YR8/3	穿孔４個
第４３図	51	１溝	土師器	碗	(15.5)	5.0	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明・工具ナデ	A・C・D・E	良	橙色	5YR7/6	橙色	5YR7/6	
第４３図	52	１溝	土師器	皿	(17.3)	(3.1)	(16.6)	-	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・工具ナデ	C・D	良	浅黄橙色	7.5YR8/6	浅黄橙色	7.5YR8/6	
第４３図	53	１溝	土師器	皿	(15.8)	2.3	(15.0)	-	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ・ケズリ	C・D	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい橙色	7.5YR7/3	
第４３図	54	１溝	土師器	鉢	6.4	6.1	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・D・E・H	良	にぶい橙色 にぶい褐色	7.5YR6/4 7.5YR5/4	にぶい褐色	7.5YR 6/3 ～ 5/3	外面に黒斑あり ミニチュア
第４３図	55	１溝	土師器	鉢	(3.0)	4.0	(2.0)	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	C・E	良	黒褐色	2.5Y3/1	灰黄色 浅黄色	2.5Y7/2 2.5Y7/3	外面に黒斑あり 内面黒化あり ミニチュア
第４３図	56	１溝	土師器	鉢	(3.6)	2.7	1.4	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・E	良	にぶい黄橙色 明黄褐色	10YR7/4 10YR7/6	褐灰色	10YR4/1	被熱による黒化あり 内面に鉄分付着 ミニチュア
第４３図	57	１溝	土師器	鉢	(2.9)	3.6	-	-	ケズリ後ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・E	良	にぶい黄橙色 黒色	10YR7/4 10YR2/1	にぶい黄橙色 黒色	10YR7/4 10YR2/1	内外面に黒斑あり ミニチュア
第４３図	58	１溝	土師器	鉢	-	(2.2)	0.8	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C	良	橙色	5YR 7/8 ～ 6/8	浅黄橙色 黄橙色	7.5YR8/6 7.5YR8/8	外面底部に板状圧痕？あり ミニチュア
第４３図	59	１溝	土師器	鉢	2.5	2.3	-	-	ケズリ・ナデ	ナデ	C・E	良	浅黄橙色 黄橙色	10YR8/4 10YR7/8	黄橙色	10YR 8/8 ～ 7/8	ミニチュア
第４３図	60	１溝	弥生土器	甕	-	(15.4)	(4.8)	-	ケズリ・ナデ？・摩耗のため調整不明	ナデ？・摩耗のため調整不明	A・B・C・E・H	良	黒褐色	5YR 3/1 ～ 2/1	橙色	5YR 7/8 ～ 6/8	外面に黒斑あり 内面黒化あり
第４３図	61	１溝	弥生土器	甕？	-	(3.7)	6.0	-	ナデ	摩耗のため調整不明	B・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい橙色	5YR7/4	
第４３図	62	１溝	弥生土器	甕？	-	(3.9)	(8.4)	-	指オサエ・ナデ・摩耗のため調整不明	ハケ目・ナデ・摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/2	橙色	5YR7/8	
第４３図	63	１溝	弥生土器	壺	-	(8.7)	5.2	-	ハケ目	工具ナデ・ナデ	A・C・D	良	灰白色	2.5Y8/2	灰白色 黒色	2.5Y8/2 2.5Y2/1	外面に黒斑あり
第４３図	64	１溝	弥生土器	壺	(16.4)	(5.9)	-	-	ヨコナデ・ハケ目	ハケ目後ナデ	A・C・E・H	良	橙色	7.5YR 7/6 ～ 6/6	橙色	7.5YR 7/6 ～ 6/6	
第４５図	1	２溝	土師器	甕	18.0	(16.6)	-	(24.9)	ヨコナデ・工具ナデ・摩耗のため調整不明	ヨコナデ・ハケ目	A・B・D・E	良	灰白色 にぶい褐色	7.5YR8/2 7.5YR5/4	明褐灰色 にぶい橙色 黒色	7.5YR7/1 7.5YR6/4 7.5YR1/1	内外面スス付着
第４５図	2	２溝	土師器	甕	(19.9)	(20.5)	-	(25.4)	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明・ハケ目	B・E・H	良	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	
第４５図	3	２溝	土師器	甕	(18.8)	(13.4)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明・ハケ目	B・E・H	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい橙色	7.5YR7/4	内外面に被熱による赤化あり
第４５図	4	２溝	土師器	甕	(17.8)	(6.4)	-	-	ヨコナデ・指オサエ後ナデ？・摩耗のため調整不明	ヨコナデ？・ナデ？・摩耗のため調整不明	A・E・G・H	良	にぶい黄橙色 明黄褐色	10YR7/4 10YR7/6	にぶい褐色 褐色	10YR5/4 10YR4/4	口縁部にスス付着
第４５図	5	２溝	土師器	甕	(17.4)	(10.0)	-	-	ナデ・ケズリ後ナデ	ナデ・ハケ目	A・C・D・E	良	黄橙色 橙色	7.5YR7/8 7.5YR6/8	にぶい橙色	7.5YR 7/3 ～ 7/4	内面に鉄分付着
第４５図	6	２溝	土師器	甕	(15.4)	6.9	-	-	ヨコナデ・指オサエ後指ナデ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ？・摩耗のため調整不明	A・C・D・E・H	良	橙色 明褐色	7.5YR7/6 7.5YR5/6	橙色 明褐色	7.5YR7/6 7.5YR5/6	
第４５図	7	２溝	土師器	甕	(11.8)	(10.3)	-	(16.5)	ナデ？・指オサエ・ケズリ後ナデ？	ナデ？	A・C・D・E	良	浅黄橙色 にぶい橙色	7.5YR8/4 7.5YR7/4	浅黄橙色 にぶい橙色	7.5YR8/4 7.5YR7/4	
第４５図	8	２溝	土師器	甕	(18.1)	(12.6)	-	-	ヨコナデ・指オサエ後ナデ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ	A・B・C・E・H	良	橙色 明褐色	7.5YR6/8 7.5YR5/8	橙色	7.5YR 7/6 ～ 6/8	
第４５図	9	２溝	土師器	甕	15.5	(10.0)	-	-	ヨコナデ・ケズリ後ナデ・摩耗のため調整不明	ヨコナデ・摩耗のため調整不明	A・D・E・H	良	橙色 黄橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/8	浅黄橙色 橙色	7.5YR8/3 7.5YR7/6	外面にスス付着
第４５図	10	２溝	土師器	甕	(16.4)	(7.5)	-	-	ヨコナデ・指オサエ・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	黄橙色 橙色	7.5YR7/8 7.5YR6/8	にぶい橙色	7.5YR 7/4 ～ 6/4	
第４５図	11	２溝	土師器	甕	(13.2)	(8.0)	-	(13.2)	ナデ？・ケズリ後ナデ・摩耗のため調整不明	ナデ？摩耗のため調整不明	A・E・H	良	浅黄橙色	10YR 8/3 ～ 8/4	にぶい黄橙色	10YR 7/3 ～ 7/4	
第４５図	12	２溝	土師器	甕	(20.2)	(18.3)	-	-	ナデ・指オサエ・摩耗のため調整不明	ナデ・摩耗のため調整不明	A・C・E	良	黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/6 10YR7/4	明黄褐色 にぶい黄橙色	10YR7/6 10YR7/4	外面に黒斑あり 外面に鉄分付着 外面肩部に粘土付着

第１８表　出土土器観察表７

図版番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量（cm）				調整		胎土	焼成	色調				備考
					口径	器高	底径	胴部径	内面	外面			内面（裏）	Hue	外面（表）	Hue	
第４６図	13	２溝	土師器	甕	-	(11.5)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	B・E・H	良	にぶい橙色	7.5YR7/3	にぶい橙色	7.5YR7/3	外面にスス付着
第４６図	14	２溝	土師器	甕	-	(16.0)	-	(19.1)	ケズリ後ナデ？・摩耗のため調整不明	ハケ目後ナデ？・摩耗のため調整不明	A・C・E	良	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR 7/4 ～ 6/4	内面に黒斑あり 外面にスス・鉄分付着
第４６図	15	２溝	土師器	壺	9.4	14.0	-	13.5	摩耗のため調整不明	ハケ目	A・C・D・E	良	橙色	5YR7/6	浅黄橙色	7.5YR8/4	外面に黒斑あり 底部に被熱による赤化あり
第４６図	16	２溝	土師器	壺	11.5	17.4	-	14.2	指オサエ・ケズリ後ナデ・摩耗のため調整不明	ナデ・摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	橙色	5YR 7/8 ～ 6/8	橙色	5YR6/8	外面に黒斑あり
第４６図	17	２溝	土師器	壺	7.9	10.0	-	9.4	ハケ目	指オサエ後ナデ・摩耗のため調整不明	A・C・E	良	橙色	5YR 7/6 ～ 6/6	にぶい橙色 橙色	5YR7/4 5YR7/6	２次被熱あり
第４６図	18	２溝	土師器	壺	(7.1)	9.5	-	9.4	ハケ目・指オサエ	ハケ目・摩耗のため調整不明	A・C・D・E	やや不良	にぶい褐色	7.5YR6/3	浅黄橙色	10YR8/4	外面に黒斑あり
第４６図	19	２溝	土師器	壺	(6.9)	8.6	-	9.6	摩耗のため調整不明・指オサエ	ハケ目・摩耗のため調整不明	A・D・E・G	良	にぶい橙色	7.5YR7/3	浅黄橙色	7.5YR8/3	外面に黒斑あり 被熱による剥離あり？
第４６図	20	２溝	土師器	壺	6.0	8.0	-	7.3	ヨコナデ・指オサエ後ナデ	ハケ目・摩耗のため調整不明	A・B・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	浅黄色	2.5Y8/4	外面にスス付着 ３～５mmの小礫を含む
第４６図	21	２溝	土師器	壺	6.6	8.5	-	7.5	工具痕・摩耗のため調整不明	指オサエ・摩耗のため調整不明	A・C・E	良	浅黄色	2.5Y8/3	灰白色	2.5Y8/2	
第４６図	22	２溝	土師器	壺	(5.7)	9.4	-	9.2	ヨコナデ・指オサエ後ナデ・指ナデ	摩耗のため調整不明	A・C・E	良	明褐灰色	7.5YR 7/1 ～ 7/2	明褐灰色 褐灰色	7.5YR7/1 7.5YR6/1	
第４６図	23	２溝	土師器	壺	(5.8)	8.3	-	(8.0)	指オサエ？・ナデ？・摩耗のため調整不明	ナデ？・摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/4 10YR7/3	明黄褐色	10YR7/6	
第４６図	24	２溝	土師器	壺	(5.9)	8.1	-	7.1	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・摩耗のため調整不明	A・C・E	良	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/3 10YR7/3	灰白色 にぶい黄橙色	10YR8/2 10YR7/2	
第４６図	25	２溝	土師器	壺	(6.2)	6.3	-	(7.4)	ナデ	ナデ・指オサエ	A・C・E・H	良	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/4 10YR7/4	明黄褐色	10YR7/6	外面に黒斑あり
第４６図	26	２溝	土師器	壺	(5.4)	6.8	3.6	(7.2)	ハケ目？・指オサエ・ケズリ？・ナデ？	ハケ目・ナデ	A・C・D・E	良	赤褐色	2.5YR4/8	赤褐色 赤黒色	2.5YR4/8 2.5YR2/1	外面にスス付着 被熱による剥離あり
第４６図	27	２溝	土師器	壺	(6.0)	6.2	-	(6.0)	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・D・E	良	にぶい橙色 明褐色	7.5YR7/4 7.5YR5/6	にぶい黄橙色	10YR 7/3 ～ 6/4	ミニチュア
第４６図	28	２溝	土師器	壺	(8.7)	5.6	-	-	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	A・C・D	良	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/4 10YR7/4	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/4 10YR7/4	外面底部に丸くスス付着
第４６図	29	２溝	土師器	壺	(11.8)	9.6	-	(10.3)	ヨコナデ・指オサエ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	A・C・H	良	明褐灰色 にぶい褐色	7.5YR7/2 7.5YR6/3	明褐色 赤褐色	7.5YR5/6 5YR4/6	外面にスス付着
第４６図	30	２溝	土師器	壺	(15.4)	7.1	-	(10.4)	ナデ？・摩耗のため調整不明	ナデ？・摩耗のため調整不明	A・C・E	良	橙色 黄橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/8	明褐色	7.5YR5/6	外面にスス付着 内面に鉄分付着
第４６図	31	２溝	土師器	壺	-	(6.2)	-	7.3	ナデ・指オサエ・摩耗のため調整不明	指オサエ後ナデ・摩耗のため調整不明	A・B・C・E	良	浅黄橙色	7.5YR8/3	明褐灰色	7.5YR7/2	
第４６図	32	２溝	土師器	壺	-	5.3	-	7.4	指オサエ後ナデ	ハケ目・摩耗のため調整不明	A・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	褐灰色	10YR6/1	外面に黒斑あり
第４６図	33	２溝	土師器	壺	-	(6.1)	-	(10.1)	ナデ？摩耗のため調整不明	ナデ？摩耗のため調整不明	A・D	良	灰白色 淡橙色	5YR8/2 5YR8/3	にぶい橙色	5YR 7/4 ～ 7/3	
第４６図	34	２溝	土師器	壺	-	(7.0)	-	(9.6)	指オサエ後ナデ・指ナデ	摩耗のため調整不明	A・D	良	橙色 にぶい橙色	5YR6/8 7.5YR7/4	橙色 にぶい橙色	5YR7/6 5YR7/4	
第４６図	35	２溝	土師器	壺	-	(7.0)	-	(9.2)	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・D・E	良	淡橙色 橙色	5YR8/4 5YR7/6	淡橙色 橙色	5YR8/3 5YR7/6	
第４６図	36	２溝	土師器	壺	-	(7.6)	-	(9.4)	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・E・H	良	明褐灰色 灰白色 黒色	7.5YR7/1 7.5YR8/2 7.5YR2/1	浅黄橙色 明褐灰色	7.5YR8/3 7.5YR7/1	
第４６図	37	２溝	土師器	壺？	-	(5.7)	-	-	ナデ・指オサエ・回転ケズリ	ナデ	A・C・D・E・H	良	橙色 黄橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/8	橙色 黄橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/8	
第４６図	38	２溝	土師器	壺	-	(7.1)	-	(10.5)	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR 7/3 ～ 6/3	にぶい赤褐色 明赤褐色	2.5YR5/4 2.5YR5/6	内面環状にスス付着 外面に被熱による赤化・黒化あり
第４６図	39	２溝	土師器	壺	-	(6.9)	-	-	ナデ・ケズリ後ナデ	ナデ	A・C・E	良	灰白色	10YR 8/2 ～ 7/1	黄橙色 明黄褐色	10YR8/6 10YR7/6	内外面に黒斑あり
第４７図	40	２溝	土師器	高坏	(17.4)	14.6	(11.1)	-	ケズリ後ナデ・摩耗のため調整不明	ナデ？・摩耗のため調整不明	A・C・E・H	良	橙色	5YR 7/6 ～ 6/6	橙色	2.5YR 6/6 ～ 6/8	
第４７図	41	２溝	土師器	高坏	22.3	(9.5)	-	-	ヨコナデ・ナデ？摩耗のため調整不明	ヨコナデ・ナデ？摩耗のため調整不明	A・B・E	良	橙色 にぶい橙色 褐灰色	5YR7/6 5YR7/4 5YR4/1	灰褐色 橙色 暗赤褐色	5YR6/2 5YR7/6 5YR3/3	
第４７図	42	２溝	土師器	高坏	(16.6)	(6.0)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・B・C・E・H	良	赤色 赤黒色	10YR5/8 10R1.7/1	赤色	10YR 5/8 ～ 4/8	内面に黒斑あり 内外面に被熱による赤化あり
第４７図	43	２溝	土師器	高坏	(18.8)	(6.0)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・E・H	良	にぶい黄橙色 明黄褐色	10YR7/4 10YR7/6	黄橙色 明黄褐色 褐灰色	10YR8/6 10YR7/6 10YR5/1	外面に黒斑あり 外面にスス付着
第４７図	44	２溝	土師器	高坏	18.2	(5.6)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・B・C・D・E	良	橙色	5YR 7/8 ～ 6/8	橙色 黄橙色 黒褐色	7.5YR6/8 7.5YR7/8 7.5YR3/1	外面に黒斑あり 内外面に鉄分付着
第４７図	45	２溝	土師器	高坏	(21.3)	(7.0)	-	-	ナデ？摩耗のため調整不明	ナデ？摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	橙色 橙色	5YR6/8 7.5YR7/6	橙色 橙色	5YR6/8 7.5YR6/8	内外面に黒斑あり
第４７図	46	２溝	土師器	高坏	18.8	(7.3)	-	-	ナデ？・摩耗のため調整不明	ナデ？・摩耗のため調整不明	A・C・D・E・H	良	にぶい黄橙色 黄橙色	10YR7/4 10YR7/8	赤色 明赤褐色 赤褐色	10YR4/8 5YR5/6 5YR4/8	内外面に黒斑あり 内面にスス付着 外面に被熱による赤化あり
第４７図	47	２溝	土師器	高坏	(18.4)	(6.0)	-	-	ナデ？摩耗のため調整不明	ナデ？摩耗のため調整不明	A・C・D・E・H	良	赤色 橙色	10R5/8 2.5YR6/8	赤色 橙色	10R5/8 2.5YR6/8	内外面に被熱による赤化あり
第４７図	48	２溝	土師器	高坏	(19.4)	(5.8)	-	-	ナデ？摩耗のため調整不明	ナデ？摩耗のため調整不明	D・E・H	良	浅黄橙色	7.5YR 8/4 ～ 8/6	浅黄橙色 橙色	7.5YR8/6 7.5YR7/6	内外面に黒斑あり
第４７図	49	２溝	土師器	高坏	(19.2)	(4.9)	-	-	ヨコナデ	ヨコナデ・回転ナデ	A・C・D・E・H	良	赤褐色 褐灰色	5YR4/8 5YR4/1	明赤褐色 赤褐色	5YR5/8 5YR4/8	内面に黒斑あり

第１９表　出土土器観察表８

図版番号	№	出土遺構	種別	器種	法量（cm）				調整		胎土	焼成	色調				備考
					口径	器高	底径	胴部径	内面	外面			内面（裏）	Hue	外面（表）	Hue	
第４７図	50	２溝	土師器	高坏	20.6	(6.6)	-	-	ナデ？・摩耗のため調整不明	ナデ？・摩耗のため調整不明	A・B・C・E	良	橙色	2.5YR6/8	明赤褐色	2.5YR5/8	外面に黒斑あり 内外面に被熱による赤化あり 外面に鉄分付着
第４７図	51	２溝	土師器	高坏	18.8	(6.3)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・B・C・D	良	にぶい橙色	7.5YR 7/4 ～ 6/4	にぶい橙色 橙色	7.5YR 7/3 ～ 6/4 7.5YR6/6	外面に被熱による赤化あり
第４７図	52	２溝	土師器	高坏	(18.4)	(5.7)	-	-	ナデ？摩耗のため調整不明	ナデ？摩耗のため調整不明	A・D・E・H	良	にぶい橙色 明褐灰色	7.5YR7/3 7.5YR7/2	明褐灰色 褐色 黒色	7.5YR7/2 7.5YR4/4 2.5Y2/1	外面に黒斑あり
第４７図	53	２溝	土師器	高坏	(16.2)	(6.0)	-	-	ナデ？摩耗のため調整不明	ナデ？摩耗のため調整不明	A・C・D・E・H	良	黄橙色 橙色	7.5YR7/8 7.5YR6/8	黄橙色 橙色	7.5YR7/8 7.5YR7/6	外面口縁部に黒斑あり
第４７図	54	２溝	土師器	高坏	-	(5.4)	-	-	ナデ？	ナデ？	A・C・E・H	良	赤色 黄橙色	10R5/8 7.5YR7/8	黒色	7.5YR2/1	内面に黒斑あり 外面に被熱による赤化あり
第４７図	55	２溝	土師器	高坏	-	(3.0)	-	-	ナデ？・摩耗のため調整不明	ナデ？・摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	灰白色 褐灰色	10YR7/1 10YR6/1	浅黄橙色 黄橙色	10YR8/4 10YR8/6	
第４７図	56	２溝	土師器	高坏	-	(11.7)	-	-	ケズリ？・ナデ？	ヨコナデ・ナデ？	A・C・E・H	良	黄橙色	10YR 8/8 ～ 7/6	黄橙色 橙色	7.5YR7/8 7.5YR6/8	
第４７図	57	２溝	土師器	高坏	-	(11.8)	(14.7)	-	ナデ・ケズリ・摩耗のため調整不明	ナデ？・摩耗のため調整不明	A・B・C・D・H	良	黄橙色 橙色	7.5YR7/8 7.5YR6/8	橙色 淡橙色	5YR7/8 5YR8/4	内面に鉄分付着
第４７図	58	２溝	土師器	高坏	-	(7.7)	(12.0)	-	ケズリ・ナデ	ナデ	A・C・D・H	良	淡橙色 橙色	5YR8/4 5YR6/8	淡橙色	5YR8/4	外面にスス付着
第４７図	59	２溝	土師器	高坏	-	(8.4)	(12.0)	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・E	良	橙色	5YR6/8	橙色	5YR7/8	内外面に黒斑あり 内外面に被熱による剥離あり
第４７図	60	２溝	土師器	高坏	-	(8.5)	14.4	-	ナデ？・摩耗のため調整不明	指オサエ・ケズリ・ナデ？・摩耗のため調整不明	A・C・D・E・H	良	にぶい橙色 橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/6	黄橙色	7.5YR7/8	外面にスス付着
第４７図	61	２溝	土師器	高坏	-	(8.8)	(13.7)	-	ナデ？・ケズリ後ナデ	ヨコナデ・ナデ・摩耗のため調整不明	A・C・D	良	橙色	5YR7/6	淡橙色	5YR8/4	
第４７図	62	２溝	土師器	高坏	-	(8.5)	(13.6)	-	シボリ痕・摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	橙色 灰白色	2.5YR7/6 7.5YR8/2	橙色 灰赤色	2.5YR6/6 2.5YR6/2	
第４７図	63	２溝	土師器	高坏	-	(7.8)	(11.9)	-	シボリ痕・ナデ？	摩耗のため調整不明・指オサエ	A・D・H	良	灰白色 淡橙色	5YR8/1 5YR8/3	灰白色 淡橙色	5YR8/2 5YR8/4	
第４８図	64	２溝	土師器	高坏	-	(7.4)	-	-	シボリ痕・ヨコナデ	摩耗のため調整不明	B・D・G	良	褐灰色	7.5YR6/1	にぶい橙色	7.5YR 6/4 ～ 7/4	
第４８図	65	２溝	土師器	高坏	-	(8.8)	(12.0)	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	浅黄橙色	7.5YR8/3	灰白色	7.5YR8/2	
第４８図	66	２溝	土師器	高坏	-	(7.7)	(14.4)	-	ケズリ後ナデ？・ナデ	ナデ？	A・C・E・H	良	にぶい黄橙色	10YR 7/3 ～ 7/2	明黄褐色 にぶい黄橙色	10YR6/6 10YR7/2	
第４８図	67	２溝	土師器	高坏	-	(5.2)	8.2	-	ケズリ後ナデ	ナデ	A・D・E	良	黄橙色	10YR7/8	浅黄橙色	10YR8/4	接合部分にスス付着（廃棄後被熱？）
第４８図	68	２溝	土師器	高坏	-	(9.0)	13.6	-	シボリ痕・摩耗のため調整不明	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・B・C・E・G	良	橙色	5YR 7/6 ～ 6/6	にぶい橙色 橙色	5YR7/4 5YR7/6	
第４８図	69	２溝	土師器	高坏	-	(8.6)	-	-	ナデ・ヨコナデ・摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	灰白色 にぶい橙色	7.5YR8/2 7.5YR7/3	浅黄橙色	7.5YR8/3	
第４８図	70	２溝	土師器	高坏	-	(8.1)	-	-	ケズリ・ナデ	ナデ	A・C・E	良	橙色 明褐色	7.5YR6/8 7.5YR5/8	橙色 黄橙色 橙色 明赤褐色	7.5YR7/6 7.5YR7/8 2.5YR6/8 2.5YR5/8	内面にスス付着 外面に被熱による赤化あり
第４８図	71	２溝	土師器	高坏	-	(9.5)	-	-	シボリ痕・ナデ	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	にぶい橙色 灰白色	5YR7/3 5YR8/2	橙色 にぶい橙色 褐灰色	5YR7/6 5YR7/4 5YR6/1	接合部粘土充填
第４８図	72	２溝	土師器	高坏	-	(8.8)	-	-	ケズリ後ナデ・ナデ	ナデ？	A・C・D・E・H	良	にぶい橙色 橙色	7.5YR7/4 7.5YR7/6	浅黄橙色 にぶい橙色	7.5YR8/4 7.5YR7/4	内外面に被熱による赤化あり？
第４８図	73	２溝	土師器	高坏	-	(6.0)	-	-	指オサエ・ケズリ・摩耗のため調整不明	ヨコナデ・摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	浅黄橙色	7.5YR8/4	浅黄橙色	10YR8/4	
第４８図	74	２溝	土師器	高坏	-	(6.0)	-	-	シボリ痕・ナデ	摩耗のため調整不明	A・C・D・H	良	浅黄橙色 橙色	7.5YR8/4 7.5YR7/6	浅黄橙色	7.5YR 8/4 ～ 8/3	
第４８図	75	２溝	土師器	高坏	-	(6.9)	-	-	ケズリ後ナデ？・ナデ	ナデ？	A・C・D・E・H	良	浅黄橙色 黄橙色	10YR8/4 10YR8/6	浅黄橙色 黄橙色	10YR8/4 10YR8/6	
第４８図	76	２溝	土師器	高坏	-	(8.3)	-	-	シボリ痕・指オサエ・ナデ	摩耗のため調整不明	A・B・E	良	浅黄橙色 にぶい橙色	7.5YR8/3 7.5YR7/4	浅黄橙色 明褐灰色	7.5YR8/4 7.5YR7/1	
第４８図	77	２溝	土師器	高坏	-	(8.2)	-	-	シボリ痕・ナデ	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	浅橙色	5YR8/4	浅橙色	5YR8/3	
第４８図	78	２溝	土師器	高坏	-	(9.2)	-	-	ケズリ後ナデ・ナデ	ナデ？・摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	灰白色 浅黄橙色	10YR8/2 10YR8/3	灰白色 浅黄橙色	10YR8/2 10YR8/3	
第４８図	79	２溝	土師器	高坏	-	(9.2)	-	-	ナデ・ケズリ	指オサエ後工具ナデ？	A・C・E	良	灰白色	7.5YR8/2	浅黄橙色	7.5YR8/3	
第４８図	80	２溝	土師器	高坏	-	(9.1)	-	-	ケズリ後ナデ・ナデ	ナデ？・摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/4 10YR7/4	にぶい黄橙色 明黄褐色	10YR7/4 10YR7/6	外面に黒斑あり 鉄分付着
第４８図	81	２溝	土師器	高坏	-	9.4	-	-	シボリ痕・ヨコナデ	ハケ目・摩耗のため調整不明	C・D・H	良	にぶい赤橙色 赤灰色	10R6/4 10R6/2	赤橙色 明赤灰色	10R6/6 7.5R7/1	
第４８図	82	２溝	土師器	高坏	-	(5.7)	-	-	シボリ痕・ナデ	摩耗のため調整不明	B・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/2	浅黄橙色 灰白色	7.5YR8/3 7.5R8/2	
第４８図	83	２溝	土師器	高坏	-	(9.8)	-	-	ヨコナデ	ハケ目・摩耗のため調整不明	A・E	良	にぶい橙色 明褐色	7.5YR7/4 7.5YR7/2	明褐色 にぶい橙色	7.5YR7/2 7.5YR7/3	
第４８図	84	２溝	土師器	高坏	-	(6.9)	-	-	ナデ？摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	E・H	良	にぶい赤橙色	10R6/3	にぶい赤橙色 明赤灰色	10R6/4 10R7/1	二次被熱あり
第４８図	85	２溝	土師器	高坏	-	(5.2)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・E	良	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/4 10YR7/4	浅黄橙色	10YR8/3	
第４８図	86	２溝	土師器	高坏	-	(4.5)	-	-	ナデ？摩耗のため調整不明	ナデ？摩耗のため調整不明	A・B・E	良	にぶい橙色 褐色	7.5YR7/3 7.5YR4/3	橙色 褐灰色	7.5YR6/8 7.5YR5/1	

第２０表　出土土器観察表９

図版番号	№	出土遺構	種別	器種	法量（cm）				調整		胎土	焼成	色調				備考
					口径	器高	底径	胴部径	内面	外面			内面（裏）	Hue	外面（表）	Hue	
第４８図	87	２溝	土師器	台付鉢	(11.9)	7.1	(7.8)	-	ナデ？・摩耗のため調整不明	ナデ？・摩耗のため調整不明	A・C・D・E・H	良	黄橙色 浅黄橙色	7.5YR8/8 7.5YR8/6	浅黄橙色	7.5YR8/6	
第４８図	88	２溝	土師器	鉢	15.0	6.1	-	-	ヨコナデ・指オサエ後ナデ	ヨコナデ・ハケ目	A・C・D・E	良	浅黄橙色	7.5YR8/6	橙色	7.5YR7/6	
第４８図	89	２溝	土師器	碗	(18.0)	7.1	-	-	指オサエ後ナデ・摩耗のため調整不明	指オサエ後ナデ・摩耗のため調整不明	A・D・E・H	良	橙色	7.5YR 7/6 ～ 6/6	黄橙色 橙色	7.5YR7/8 7.5YR6/8	
第４８図	90	２溝	土師器	碗	(13.6)	4.4	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・B・C・D・E	良	橙色 明赤褐色	2.5YR6/8 2.5YR5/8	明赤褐色 にぶい赤褐色 淡橙色 にぶい橙色	2.5YR5/6 2.5YR5/4 5YR8/3 2.5YR7/3	
第４８図	91	２溝	土師器	碗	(15.7)	4.0	-	-	ナデ？・摩耗のため調整不明	ナデ？・摩耗のため調整不明	A・C・D・E・H	良	灰黄褐色	10YR6/2	明黄褐色	10YR 6/6 ～ 6/8	
第４８図	92	２溝	土師器	碗・皿	12.8	3.6	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	にぶい黄橙色 明黄褐色	10YR7/2 10YR6/6	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/3 10YR7/2	
第４８図	93	２溝	土師器	碗・皿	(14.9)	5.5	-	-	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	A・C・E・H	良	橙色 明赤褐色	5YR6/8 5YR5/8	明赤褐色	5YR 5/6 ～ 5/8	
第４９図	94	２溝	土師器	坏	(15.6)	5.4	-	-	ナデ？摩耗のため調整不明	ナデ？摩耗のため調整不明	A・C・H	良	橙色 黄橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/8	橙色 黄橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/8	内面下半にスス付着 外面口縁部にスス付着
第４９図	95	２溝	土師器	坏	(16.9)	5.8	-	-	ナデ？摩耗のため調整不明	ナデ？摩耗のため調整不明	A・C・D・E・H	良	にぶい赤褐色 にぶい橙色 橙色	2.5YR5/4 7.5YR7/4 7.5YR7/6	赤色 にぶい橙色	10R5/8 7.5YR 7/4 ～ 6/4	内外面に黒斑あり 鉄分付着 内外面に被熱による赤化あり
第４９図	96	２溝	土師器	坏	14.2	5.7	-	-	工具ナデ・ナデ	ナデ？・摩耗のため調整不明	A・D・E	良	橙色 にぶい橙色	5YR6/6 5YR7/3	橙色 にぶい橙色 黒色	5YR7/6 5YR7/3 5YR2/1	外面にスス付着
第４９図	97	２溝	土師器	坏？碗	(14.1)	(6.2)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	やや不良	橙色 にぶい赤褐色	5YR6/6 5YR5/4	橙色 明赤褐色	5YR6/6 5YR5/6	
第４９図	98	２溝	土師器	鉢	3.8	3.8	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・B・C・E	良	橙色 明褐色	7.5YR6/8 7.5YR5/8	橙色 明褐色	7.5YR6/8 7.5YR5/8	ミニチュア
第４９図	99	２溝	土師器	鉢	4.0	3.6	-	-	ケズリ後ナデ・指オサエ	指オサエ・ナデ	C・D	良	黄橙色 橙色	7.5YR7/8 7.5YR7/6	黄橙色 橙色	7.5YR7/8 7.5YR7/6	土付着 ミニチュア
第４９図	100	２溝	土師器	鉢	3.2	2.7	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	D	良	橙色	5YR 7/8 ～ 6/8	浅黄橙色 橙色	7.5YR8/6 7.5YR7/6	鉄分付着 ミニチュア
第４９図	101	２溝	土師器	甑	-	(3.8)	-	-	ナデ・指オサエ	摩耗のため調整不明・ハケ目	A・C	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	外面スス付着 ミニチュア 単孔
第４９図	102	２溝	土師器	甑	16.1	12.1	-	-	ナデ・ケズリ	ナデ？・摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	橙色	5YR 6/8 ～ 7/8	淡橙色 橙色	5YR8/4 5YR6/8	内面に黒斑あり 外面底部にスス付着 外面に剥離（打ち欠き）あり 単孔
第４９図	103	２溝	土師器	甑	18.0	10.1	-	-	ナデ？・摩耗のため調整不明	ナデ？・摩耗のため調整不明	A・B・C・E	良	黄橙色 橙色	7.5YR7/7 7.5YR6/8	にぶい黄橙色 明黄褐色	10YR7/4 10YR7/6	内外面にスス・鉄分付着 単孔 被熱あり？
第４９図	104	２溝	土師器	甑	-	(5.8)	(2.4)	-	ナデ	ナデ	A・C・E	良	褐灰色	10YR6/1	褐灰色	10YR6/1	外面に黒斑あり
第４９図	105	２溝	土師器	甑	(33.8)	(15.3)	-	-	ナデ・ケズリ	ナデ	A・C・E・H	良	にぶい黄褐色	10YR 5/3 ～ 5/4	にぶい黄橙色	10YR 7/3 ～ 6/3	内面スス付着
第４９図	106	２溝	弥生土器	壺	-	(3.0)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・E	良	にぶい黄褐色	10YR5/3	にぶい黄橙色	10YR7/4	刻み目文
第５１図	1	３溝	弥生土器	甕	18.4	19.9	4.1	-	ナデ・ハケ目・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・B・C・D・E	良	黄橙色 明黄褐色	10YR8/6 10YR7/6	赤橙色 にぶい橙色	10YR6/8 5YR6/8	内外面に黒斑あり 内外面にスス付着 被熱による黒化あり
第５１図	2	３溝	弥生土器	甕	(14.6)	13.7	(4.8)	(14.8)	指オサエ・ナデ	ハケ目・ナデ	A・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	外面に黒斑あり
第５１図	3	３溝	弥生土器	甕	(20.4)	(16.1)	-	-	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・タタキ	A・C・D・E	良	明赤褐色	2.5YR5/6	橙色	5YR6/6	内面に赤色顔料？ No.510 と同一個体？
第５１図	4	３溝	弥生土器	甕	-	(15.6)	5.2	-	ハケ目・工具ナデ	工具ナデ	A・C	良	橙色	5YR6/6	にぶい黄橙色	10YR7/3	外面に黒斑あり 内面に赤色顔料？ 胴部打ち欠き穿孔あり No.511 と同一個体？
第５１図	5	３溝	弥生土器	甕	-	(8.8)	(7.4)	-	工具ナデ・指オサエ	ナデ	A・C・D・F	良	浅黄橙色	10YR8/3	にぶい橙色	7.5YR7/4	内外面にスス付着 外面に黒斑あり 外面に被熱による赤化あり
第５１図	6	３溝	弥生土器	甕	-	(2.1)	(5.2)	-	工具ナデ・ナデ	工具ナデ？・ナデ	A・C・E	良	灰白色	2.5Y7/1	灰白色	2.5Y8/1	外面底部に黒斑あり？
第５１図	7	３溝	弥生土器	甕	-	(4.7)	(6.4)	-	表面剥落・ハケ目	表面剥落・工具ナデ	A・C・E・F	良	にぶい黄褐色	10YR5/3	にぶい赤褐色	2.5YR5/4	外面に被熱による赤化あり
第５１図	8	３溝	弥生土器	壺	(16.0)	31.6	(7.4)	(30.9)	ヨコナデ・指オサエ・ナデ・工具痕	ヨコナデ・工具ナデ	A・C・D・E	良	明赤褐色	2.5YR5/6	明赤褐色	5YR5/6	外面に黒斑あり 内面全面が被熱のため赤化
第５１図	9	３溝	弥生土器	壺	(13.8)	(8.1)	-	(18.0)	ヨコナデ・指オサエ・工具痕	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・C・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/2	にぶい黄橙色	10YR7/2	
第５１図	10	３溝	弥生土器	壺	-	(9.8)	7.7	-	ハケ目・指オサエ	ハケ目後ナデ・ナデ	A・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	浅黄橙色	10YR8/3	内面に黒斑あり 外面一部赤色顔料？
第５１図	11	３溝	弥生土器	壺	-	(2.7)	4.5	-	指ナデ・指オサエ	工具ナデ	A・C・E・H	良	灰黄色	2.5Y7/2	灰黄褐色	10YR6/2	外面スス付着
第５２図	12	３溝	弥生土器	高坏	(32.4)	(4.9)	-	-	ナデ	ナデ	A・C・D・F	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	外面口縁部にスス付着
第５２図	13	３溝	弥生土器	高坏	-	(14.9)	17.4	-	シボリ痕・摩耗のため調整不明	工具ナデ・摩耗のため調整不明	A・B・C・E	良	灰黄色	2.5Y7/2	灰黄色	2.5Y7/2	外面に黒斑あり
第５２図	14	３溝	弥生土器	高坏	-	(16.0)	-	-	シボリ痕・ハケ目	ハケ目	C・D・E・H	良	灰白色	10YR8/2	灰白色	10YR8/2	外面にスス付着
第５２図	15	３溝	弥生土器	鉢	(12.6)	6.4	4.4	-	指オサエ・工具ナデ	指オサエ・工具痕	A・D・E	良	橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	全体に被熱による赤化あり
第５２図	16	３溝	弥生土器	鉢	(18.3)	(13.5)	-	(19.8)	ナデ	タタキ・ナデ	C・D・E・F・H	良	灰黄色	2.5Y7/2	灰黄色	2.5Y7/2	外面に黒斑あり

第２Ｉ表　出土土器観察表 10

図版番号	№	出土遺構	種別	器種	法量（cm）				調整		胎土	焼成	色調				備考
					口径	器高	底径	胴部径	内面	外面			内面（裏）	Hue	外面（表）	Hue	
第５２図	17	３溝	弥生土器	器台	(12.3)	18.6	(13.8)	-	ハケ目後ナデ・指オサエ後工具痕・シボリ痕	工具ナデ・ナデ	A・C・D・E	良	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	外面に黒斑あり
第５２図	18	３溝	弥生土器	器台	(12.4)	(16.7)	-	-	ハケ目・工具ナデ・ナデ	ナデ・ハケ目	A・C・D・E・H	良	にぶい黄橙色	10YR7/2	にぶい橙色	7.5YR7/4	
第５２図	19	３溝	弥生土器	器台	-	(16.1)	(20.6)	-	ナデ・ハケ目・工具痕	ハケ目	A・C・D・E	良	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	刻み目文？
第５４図	1	４溝	須恵器	碗	-	(3.2)	(7.4)	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り離し	E・F	良	灰色	N6/	灰色	N6/	
第５４図	2	４溝	土師器	器台	-	(4.6)	10.3	-	ナデ？・摩耗のため調整不明	ナデ？・摩耗のため調整不明	C・F・G・H	良	浅黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/3 10YR7/3	灰白色	10YR 8/1 ～ 8/2	
第５８図	1	６溝	土師器	甕	(26.2)	(36.2)	-	(26.3)	ヨコナデ・ナデ？	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・B・C・D・E・H	良	黄橙色 明黄褐色	10YR8/6 10YR7/6	黄橙色 明黄褐色	10YR8/6 10YR7/6	内外面に黒斑あり スス付着 内面に剥離あり
第５８図	2	６溝	土師器	甕	(18.8)	(8.2)	-	-	ヨコナデ	ハケ目・ハケ目後ナデ	A・B・C・D・H	良	灰白色 浅黄橙色	10YR8/2 10YR8/5	灰白色 浅黄橙色	10YR8/2 10YR8/5	
第５８図	3	６溝	土師器	鉢	17.8	12.2	3.2	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・E・F	良	浅黄橙色	10YR 8/3 ～ 8/4	浅黄橙色	10YR 8/3 ～ 8/4	外面にスス付着 口縁部に赤色塗彩？
第５８図	4	６溝	土師器	甑	-	(2.7)	1.2	-	ハケ目・ナデ	ハケ目	A・D	良	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	単孔
第５８図	5	６溝	弥生土器	甕	-	(7.8)	7.6	-	ハケ目・指オサエ・ナデ	ハケ目・ナデ	A・B・C・D・E	良	黒色 黒褐色	7.5YR2/1 7.5YR3/1	黄橙色 橙色	7.5YR7/8 7.5YR6/8	外面にスス付着 内面に被熱による黒化あり
第５８図	6	６溝	弥生土器	甕	-	(12.3)	7.2	-	工具ナデ・指オサエ・ナデ	ナデ	A・C・D・H	良	灰黄褐色	10YR 6/2 ～ 5/2	黄橙色 にぶい黄橙色	10YR8/6 10YR6/4	内面に黒斑あり 外面にスス付着
第５８図	7	６溝	弥生土器	壺	(16.2)	(5.0)	-	-	ヨコナデ・ナデ	ハケ目・ヨコナデ	A・C・E	良	橙色 黄橙色	7.5YR7/6 7.5YR7/8	黄橙色	7.5YR7/8	８と同一個体
第５８図	8	６溝	弥生土器	壺	-	(9.0)	-	-	ヨコナデ・ハケ目・指オサエ	ハケ目	A・C・D・E・F	良	橙色	5YR6/8	橙色	5YR6/8	７と同一個体
第５８図	9	６溝	弥生土器	支脚	8.5	11.8	11.2	-	指オサエ・シボリ痕・ナデ	ナデ・タタキ	A・C・D・E	良	灰白色 明褐灰色	7.5YR8/2 7.5YR7/4	浅黄橙色 橙色	7.5YR8/6 7.5YR6/8	外面に被熱による黒化あり 穿孔１個 歪みあり
第６０図	1	７溝	弥生土器	甕	(29.4)	40.3	7.4	(30.2)	ヨコナデ・指オサエ・ハケ目・ナデ？	ヨコナデ・ハケ目・ナデ？	A・B・C・E・H	良	黄橙色 橙色 黒褐色	7.5YR7/8 7.5YR6/8 7.5YR3/1	橙色 暗赤褐色 黒褐色	5YR6/8 5YR5/8 5YR 3/1 ～ 2/1	内外面に黒斑あり 内外面にスス付着
第６０図	2	７溝	土師器	甕	(24.8)	(10.8)	-	-	ヨコナデ・指オサエ後ハケ目	ヨコナデ・ハケ目	B・D・E・G	良	にぶい橙色	7.5YR7/3	にぶい橙色	7.5YR7/3	外面口縁部に被熱による赤化あり
第６０図	3	７溝	弥生土器	甕	-	(29.5)	(10.6)	-	ハケ目・ナデ・指ナデ	ハケ目・ヨコナデ・ナデ	A・C・D・E	良	褐灰色	10YR5/1	にぶい黄橙色	10YR7/3	外面に黒斑あり 内面剥落あり 刻み目突帯あり
第６０図	4	７溝	土師器	甕	-	(10.4)	(4.6)	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	橙色	2.5YR6/6	
第６０図	5	７溝	土師器	甕	-	(15.7)	-	-	ハケ目・摩耗のため調整不明	ハケ目後ミガキ・摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	明黄褐色	10YR7/6	明黄褐色	10YR7/6	外面に黒斑あり
第６０図	6	７溝	土師器	甕	-	(3.7)	6.8	-	ナデ・工具痕	タタキ・ナデ	A・C・D・E	良	褐灰色	5YR5/1	褐色 にぶい黄橙色	2.5YR6/6 10YR7/3	
第６０図	7	７溝	土師器	甕？	-	(2.9)	7.3	-	指オサエ・ナデ	工具ナデ・ナデ	A・C・E	良	灰褐色	7.5YR6/2	にぶい褐色	7.5YR6/3	
第６０図	8	７溝	弥生土器	高坏	(36.2)	(9.1)	-	-	ヨコナデ・摩耗のため調整不明	ヨコナデ・ハケ目	A・C・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/2	にぶい黄橙色	10YR7/2	外面に黒斑あり
第６０図	9	７溝	土師器	高坏	(26.6)	(6.2)	-	-	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	ヨコナデ・ハケ目	A・C・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	外面口縁部に被熱による赤化あり
第６０図	10	７溝	土師器	甕？ 鉢？	(19.0)	(11.4)	-	-	ナデ・指オサエ・ナデ後ハケ目	ナデ・ハケ目	A・C・D・E・H	良	黄橙色 明黄褐色	10YR8/6 10YR7/6	明黄褐色 黄橙色	10YR7/6 10YR7/8	外面に黒斑あり 外面に鉄分付着 突帯あり 口縁部に打ち欠きあり
第６１図	11	７溝	弥生土器	壺	(30.6)	(30.0)	-	(45.8)	ハケ目・指オサエ後ナデ	ヨコナデ・ハケ目	A・C・D・E・H	良	褐灰色	10YR6/1	にぶい黄橙色	10YR7/2	内外面に黒斑あり 刻み目突帯あり 口縁部に刻み目文あり
第６１図	12	７溝	弥生土器	壺	-	(22.7)	(7.1)	(24.0)	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	内面に黒斑あり
第６１図	13	７溝	弥生土器	壺	-	(9.4)	-	(10.6)	ナデ・ケズリ後指オサエ	ナデ・ミガキ？	A・C・E・H	良	橙色 黄橙色 黒色 黒褐色	7.5YR7/6 7.5YR7/8 7.5YR2/1 7.5YR3/1	黒色 黒褐色	7.5YR2/1 7.5YR2/2	内外面に被熱による黒化あり 内面鉄分付着
第６１図	14	７溝	弥生土器	支脚	6.2	(5.8)	-	-	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ・工具痕	A・C・D・E	良	橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	
第６１図	15	７溝	弥生土器	器台	15.6	(17.5)	-	-	ヨコナデ・指オサエ・シボリ痕・ナデ	ヨコナデ・ハケ目	A・C・E	良	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	
第６１図	16	７溝	弥生土器	器台	(15.5)	(10.5)	-	-	ヨコナデ・ハケ目・工具ナデ・指ナデ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・C・D・E	良	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	
第６１図	17	７溝	弥生土器	器台	(11.0)	(17.5)	-	-	ヨコナデ・ハケ目・工具ナデ・指ナデ	ヨコナデ・指オサエ・ナデ・ハケ目	A・C・E	良	橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	外面に被熱による赤化あり
第６１図	18	７溝	弥生土器	器台	13.3	(15.6)	-	-	ヨコナデ・ハケ目・シボリ痕	ヨコナデ・ナデ・工具痕	A・C・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/2	にぶい黄橙色	10YR7/2	外面に黒斑あり
第６５図	1	８溝	須恵器	坏蓋	(14.4)	4.4	(4.5)	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	A・B・C・E	良	灰色 黒褐色	5Y6/1 10YR3/1	灰色	N5/	内面に付着物あり Ⅱ型式３段階（中村編年）
第６５図	2	８溝	須恵器	坏蓋	(13.8)	(3.7)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	B・C・F	良	黄灰色	2.5Y 5/1 ～ 4/1	灰色	N6/1	
第６５図	3	８溝	須恵器	坏蓋	(14.2)	(2.8)	(6.4)	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	A・B・C	良	黄灰色	2.5Y5/1	暗灰色 灰色	N3/ N6/	
第６５図	4	８溝	須恵器	坏蓋	-	(1.3)	-	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ケズリ	E	良	黄灰色	2.5Y5/	黄灰色	2.5Y5/	外面に自然釉 外面にヘラ記号あり
第６５図	5	８溝	須恵器	坏蓋	(12.0)	(3.8)	-	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	C・E	良	灰色	N 6/1 ～ 4/1	灰色 暗灰色	N4/1 N3/1	Ⅱ型式５段階（中村編年）
第６５図	6	８溝	須恵器	坏身	12.7	3.8	3.3	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	C・H	良	黄灰色 黒褐色	2.5Y4/1 2.5Y3/2	褐灰色	10YR4/1	Ⅱ型式４段階（中村編年）

第２２表　出土土器観察表 11

図版番号	No.	出土遺構	種別	器種	法量（cm）				調整		胎土	焼成	色調				備考
					口径	器高	底径	胴部径	内面	外面			内面（裏）	Hue	外面（表）	Hue	
第６５図	7	８溝	須恵器	坏身	(15.0)	(3.6)	(5.2)	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	A・C・E	良	灰色 黒褐色	N5/1 7.5YR2/2	青灰色	5PB5/1	
第６５図	8	８溝	須恵器	坏身	(11.6)	4.6	(4.0)	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	C・E	良	黄灰色	2.5Y4/1	黄灰色	2.5Y5/1	Ⅱ型式３段階（中村編年）
第６５図	9	８溝	須恵器	坏身	(12.6)	4.8	3.7	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	C	良	灰白色	10YR7/1	灰白色 褐灰色	10YR8/1 10YR6/1	Ⅱ型式３段階（中村編年）
第６５図	10	８溝	須恵器	坏身	(10.8)	(4.5)	(3.0)	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ケズリ	C・E	良	灰白色	N7/	灰色 灰白色	N5/ N7/	Ⅱ型式３段階（中村編年）
第６５図	11	８溝	須恵器	坏身	(11.8)	(4.5)	-	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	B・F	良	灰色	5Y 5/1 ～ 4/1	灰色 灰色	10Y5/1 7.5Y4/1	
第６５図	12	８溝	須恵器	坏身	(11.0)	5.0	6.0	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	A・C・E	良	灰白色	5Y7/1	灰白色 灰色	5Y7/1 N6/1	Ⅱ型式２段階（中村編年）
第６５図	13	８溝	須恵器	坏身	-	(3.2)	-	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	C・E	良	褐灰色	5YR5/1	黄灰色	2.5Y4/1	Ⅱ型式３段階（中村編年）
第６５図	14	８溝	須恵器	甕	-	(7.4)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	E	良	褐灰色	5YR4/1	にぶい赤褐色	5YR5/4	波状文
第６５図	15	８溝	須恵器	甕	-	(4.3)	-	-	回転ナデ	回転ナデ・ハケ目	E	良	褐色	7.5YR4/3	にぶい赤褐色	2.5Y5/3	
第６５図	16	８溝	須恵器	甕	-	(2.6)	-	-	回転ナデ	回転ケズリ	E・F	良	灰色	5Y5/1	灰色	5Y5/1	内面一部に焼き膨れによる割れあり
第６５図	17	８溝	須恵器	甕	(24.0)	(8.1)	-	-	回転ナデ・ケズリ後ナデ	回転ナデ	E	良	暗灰色	N3/	暗灰色	N3/	
第６５図	18	８溝	須恵器	甕	-	(22.0)	-	-	ナデ	ハケ目・ナデ	E・F	良	灰色	N6/	灰色	N4/	
第６５図	19	８溝	土師器	甕	(20.0)	(8.8)	-	-	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ	A・C・H	良	にぶい黄褐色	10YR 6/3 ～ 6/4	にぶい黄褐色	10YR 6/3 ～ 6/4	外面にスス付着 内面に被熱による剥離あり
第６５図	20	８溝	土師器	甕	(17.6)	(7.3)	-	-	ヨコナデ・ケズリ後ナデ・ミガキ？	ヨコナデ・ハケ目	E・G	良	にぶい黄褐色	10YR5/4	灰黄褐色	10YR 6/2 ～ 5/2	外面にスス付着
第６５図	21	８溝	土師器	甕	(12.3)	(6.3)	-	-	ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ハケ目	A・C	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	外面にスス付着 内面に黒斑あり
第６５図	22	８溝	土師器	甕	(15.4)	(7.3)	-	-	工具ナデ	工具ナデ	A・C・D・H	良	明黄褐色 にぶい黄橙色	10YR7/6 10YR6/4	黒色	10YR2/1	内面に黒斑あり 外面黒化あり 口縁歪みあり
第６５図	23	８溝	土師器	甕	14.7	(8.0)	-	-	ハケ目・指オサエ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ・指オサエ・ナデ	A・C・E	良	明黄褐色 灰黄褐色	10YR6/6 10YR6/2	明黄褐色	10YR 7/6 ～ 6/6	内外面に黒斑あり
第６５図	24	８溝	土師器	壺	(16.6)	(6.2)	-	-	ハケ目・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目	A	良	橙色	7.5YR6/6	明褐色	7.5YR5/6	
第６５図	25	８溝	土師器	壺	(8.4)	(5.7)	-	-	ナデ・ケズリ・ハケ目	ナデ・ハケ目	A・C	良	灰白色	2.5Y7/1	浅黄色	2.5Y7/3	注口あり
第６５図	26	８溝	土師器	壺	-	(5.8)	-	(9.1)	指オサエ・ナデ・指ナデ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・C	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	外面に黒斑あり 口縁部打ち欠き 底部にひび割れあり
第６５図	27	８溝	土師器	壺？	-	(3.8)	-	-	指オサエ・ナデ・ミガキ	ナデ	A・D	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	外面にヘラ記号？
第６６図	28	８溝	土師器	高坏	-	(8.3)	(14.2)	-	ケズリ・ハケ目後ナデ	工具ナデ・ハケ目・ヨコナデ	A・C	良	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/3	
第６６図	29	８溝	土師器	高坏	-	(7.8)	(12.8)	-	シボリ痕・ナデ・工具痕・指オサエ	ヨコナデ・ナデ・工具痕	A・C	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	
第６６図	30	８溝	土師器	高坏	-	(6.9)	-	-	ケズリ・ヨコナデ	ケズリ・ナデ	C・E	良	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	
第６６図	31	８溝	土師器	高坏	-	(7.6)	(11.4)	-	ケズリ・ヨコナデ	ケズリ・指オサエ・ナデ・ヨコナデ	C・E	良	浅黄橙色	10YR8/4	浅黄橙色	10YR8/4	
第６６図	32	８溝	土師器	高坏	-	(3.3)	(14.4)	-	ナデ	ミガキ	A	良	浅黄色	2.5Y7/3	浅黄色	2.5Y7/3	穿孔２個残存
第６６図	33	８溝	土師器	鉢	-	(3.9)	3.4	-	ハケ目後ナデ	ナデ・工具痕	A・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	外面に黒斑あり
第６６図	34	８溝	土師器	鉢	(6.0)	(4.6)	-	-	ナデ・指オサエ	ハケ目	C	良	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	ミニチュア
第６６図	35	８溝	土師器	鉢	(4.4)	(3.8)	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C	良	黒色	2.5Y2/1	灰黄色	2.5Y7/2	内外面に黒斑あり ミニチュア
第６６図	36	８溝	土師器	鉢	3.4	3.5	1.8	-	ケズリ？・指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・H	良	にぶい黄橙色 明黄褐色	10YR7/4 10YR7/6	にぶい黄橙色 明黄褐色	10YR7/4 10YR7/6	外面に黒斑あり ミニチュア
第６６図	37	８溝	土師器	鉢	3.3	3.6	-	-	ナデ	ナデ	A・C・E	良	黄橙色 明黄褐色	10YR7/8 10YR6/8	黄橙色	10YR 8/6 ～ 8/8	ミニチュア
第６６図	38	８溝	土師器	鉢	3.7	3.8	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C	良	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	ミニチュア
第６６図	39	８溝	土師器	鉢	3.4	2.9	-	-	ナデ	ナデ	A・C	良	明黄褐色 黒色	10YR 7/6 ～ 6/6 10YR2/1	明黄褐色 黒色	10YR 7/6 ～ 6/6 10YR2/1	内外面に黒斑あり ミニチュア
第６６図	40	８溝	土師器	鉢	-	(2.1)	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・D	良	灰黄褐色	10YR6/2	にぶい橙色	7.5YR7/3	ミニチュア
第６６図	41	８溝	土師器	坏	(11.4)	(4.8)	-	-	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・指ナデ・ケズリ	A・C・D	良	橙色	7.5YR7/6	にぶい橙色	7.5YR6/4	赤色粒子 (1 ～ 3mm) で目立つ
第６６図	42	８溝	土師器	坏	(14.4)	3.8	-	-	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ後ナデ	A・C	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	外面にスス付着 外面一部剥落（？）あり
第６６図	43	８溝	土師器	甑	(20.4)	(14.3)	-	-	指オサエ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ	A・D・E	良	橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	単孔
第６６図	44	８溝	土師器	甑	-	(5.7)	(10.8)	-	ケズリ・ヨコナデ	ハケ目・ヨコナデ	A・C・D・E	良	褐灰色	10YR4/1	灰黄褐色	10YR6/2	単孔
第６６図	45	８溝	土師器	甑	-	(5.2)	-	-	ケズリ？・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	A・C	良	黄灰色	2.5Y4/1	にぶい黄色	2.5Y6/3	単孔？
第６６図	46	８溝	土師器	甑	-	(8.3)	-	-	指オサエ後ケズリ	指オサエ・ナデ・工具痕・ハケ目	A・C	良	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	把手のみ
第６６図	47	８溝	土師器	甑	-	(5.2)	-	-	ケズリ	ナデ・指オサエ	A	良	灰黄褐色	10YR5/2	にぶい黄橙色	10YR6/3	把手のみ
第６６図	48	８溝	土師器	甑	-	(4.9)	-	-	ケズリ	ハケ目・指オサエ・ナデ	A・C	良	暗灰色	N3/	褐灰色	10YR6/1	把手のみ
第６６図	49	８溝	弥生土器	甕	-	(7.3)	(7.0)	-	ハケ目	ハケ目	A・C	良	灰黄褐色	10YR4/2	黒褐色	10YR3/1	外面全面にスス付着
第６６図	50	８溝	弥生土器	甕	-	(3.5)	4.5	-	指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ	B・C・E・G	良	橙色	5YR 6/6 ～ 6/8	橙色	5YR 7/8 ～ 6/8	内外面に黒斑あり 外面底部に布目痕あり
第６６図	51	８溝	弥生土器	甕？	-	(8.1)	-	-	ハケ目	ハケ目後タタキ	A・C	良	黒褐色	10YR3/1	にぶい黄橙色	10YR7/3	内面に黒斑あり
第６６図	52	８溝	縄文土器	鉢	-	(3.3)	7.4	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・E	良	褐灰色	7.5YR4/1	にぶい橙色	7.5YR6/4	

第２３表　出土土器観察表 12

図版番号	№	出土遺構	種別	器種	法量（cm）				調整		胎土	焼成	色調				備考
					口径	器高	底径	胴部径	内面	外面			内面（裏）	Hue	外面（表）	Hue	
第６６図	53	８溝	縄文土器	鉢	-	(2.8)	6.0	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・E	良	褐灰色	10YR4/1	灰黄褐色	10YR6/2	
第６６図	54	８溝	弥生土器	支脚	(9.0)	(5.6)	-	-	ナデ・指オサエ	ハケ目・平行タタキ後ナデ	A・D	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	外面に黒斑あり
第７０図	1	３土坑	陶器	皿	-	(2.6)	-	-	ロクロ	ロクロ	-	-	-	-	-	-	鉄釉
第７０図	2	６土坑	土師器	高坏	-	(4.8)	-	-	ミガキ？	ナデ・ヨコナデ・ハケ目	A・C	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	
第７０図	3	６土坑	土師器	坏	(10.6)	(5.6)	-	-	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ	A・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	外面に黒斑あり
第７０図	4	６土坑	土師器	甑	-	(1.3)	-	-	ケズリ・ナデ	ハケ目	A・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	多孔
第７０図	5	８土坑	土師器	甕	-	(1.6)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A	良	灰黄色	2.5Y7/2	灰色	5Y4/1	刻み目文
第７０図	6	12 土坑	土師器	坏	(16.0)	(5.5)	-	-	ナデ	ヨコナデ・ケズリ	A・C	良	にぶい橙色	7.5YR6/4	橙色	2.5YR6/6	内面に黒斑あり 外面一部赤化あり
第７０図	7	17 土坑	須恵器	坏蓋	(12.7)	(3.3)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	E	良	灰色	N5/	暗灰色	N3/	
第７０図	8	17 土坑	須恵器	坏身	-	(2.9)	-	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ケズリ	F	良	灰色	N6/	灰色	N6/	受け部径 (14.0cm)
第７０図	9	17 土坑	須恵器	短頸壺	(9.0)	(4.1)	-	-	回転ナデ	回転ナデ・カキ目	E・F	良	灰色	N6/	灰色	N6/	
第７０図	10	17 土坑	土師器	甕	-	(15.4)	-	(20.0)	ナデ・指オサエ	摩耗のため調整不明	A・C・E	良	にぶい橙色	5YR7/4	明赤褐色	2.5YR5/6	内面にスス付着 外面全体的に被熱により赤化
第７０図	11	17 土坑	土師器	坏	(11.5)	(4.5)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	B・C	やや不良	にぶい黄橙色	10YR7/4	灰黄色	2.5Y7/2	外面に黒斑あり
第７０図	12	17 土坑	土師器	甑	-	(3.5)	-	-	ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	外面に黒斑あり 把手のみ
第７０図	13	17 土坑	弥生土器	鉢	(18.7)	(9.0)	-	-	ハケ目・摩耗のため調整不明	ヨコナデ・摩耗のため調整不明	B・D・F	やや不良	灰白色	10YR8/2	灰白色	10YR8/2	1 ～ 3mm の砂礫を多く含む
第７０図	14	18 土坑	土師器	甕	(22.8)	(22.4)	-	(26.2)	ハケ目・指オサエ・ナデ	ヨコナデ・指オサエ・ハケ目	A・C・D・E・H	良	にぶい黄橙色	10YR7/2	灰黄褐色	10YR5/2	
第７０図	15	18 土坑	土師器	甑	-	(7.9)	-	-	ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・E	良	灰黄色	2.5Y7/2	浅黄橙色	10YR8/3	把手のみ
第７０図	16	18 土坑	弥生土器	甕	(20.2)	(11.0)	-	-	ナデ・ハケ目	ハケ目後ヨコナデ・摩耗のため調整不明	A・D・H	やや不良	浅黄橙色	10YR8/3	にぶい黄橙色	10YR7/2	1 ～ 3mm の砂礫を多く含む
第７１図	1	P253	土師器	甕	-	(11.2)	-	-	ナデ・指オサエ・ケズリ	ナデ・ハケ目	A・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/2	灰黄褐色	10YR6/2	外面にスス付着 外面に黒斑あり 白色粒子大 (6mm)
第７１図	2	P102	土師器	甕	-	(5.6)	-	-	ナデ・指オサエ・ケズリ？	ナデ・平行タタキ	A・C・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/2	にぶい黄橙色	10YR7/2	
第７１図	3	P421	土師器	甕	-	(2.6)	-	-	ハケ目	ヨコナデ・指オサエ・ハケ目	A・D	良	褐灰色	7.5YR5/1	浅黄橙色	7.5YR8/4	
第７１図	4	P310	土師器	壺	7.2	8.3	-	7.6	ヨコナデ・ナデ	摩耗のため調整不明	A・C・E	良	淡橙色	5YR8/4	浅黄橙色	7.5YR8/4	外面にスス付着
第７１図	5	P156	土師器	壺	(12.0)	(8.6)	-	-	ヨコナデ・ナデ・工具痕	ヨコナデ・指オサエ・タタキ後ハケ目	A・D・E	良	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	
第７１図	6	P23	土師器	壺	-	(3.8)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・E	良	灰黄褐色	10YR6/2	灰白色	10YR7/1	内面に黒斑あり 波状文
第７１図	7	P568	土師器	壺	(14.6)	(4.1)	-	-	ヨコナデ・指オサエ	ヨコナデ・ナデ	A・C・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
第７１図	8	P116	土師器	壺	-	(2.1)	-	-	ナデ	平行タタキ・ナデ	A・C・E	良	黒褐色	10YR3/1	黒褐色	10YR3/1	外面底部付近に黒斑あり
第７１図	9	P7	土師器	高坏	-	(8.7)	-	-	ナデ	摩耗のため調整不明	C・D	良	橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	
第７１図	10	P71	土師器	高坏	-	(3.2)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・D・E	良	浅黄橙色	10YR8/3	浅黄橙色	10YR8/3	
第７１図	11	P164	土師器	鉢	-	(6.4)	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ハケ目	A・C・D	良	浅黄橙色	10YR8/4	浅黄橙色	10YR8/4	外面に黒斑あり
第７１図	12	P336	土師器	鉢	5.6	5.6	5.0		指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・B・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	内外面に黒斑あり
第７１図	13	P311	土師器	鉢	8.2	5.2	2.2	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・D・H	良	橙色	5YR7/8	にぶい橙色	5YR7/4	内外面に黒斑あり ミニチュア
第７１図	14	P311	土師器	鉢	8.5	4.5	-	-	指オサエ後ハケ目・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・H	良	黄橙色 橙色	7.5YR7/8 7.5YR6/8	明黄褐色	10YR7/6	口縁部に黒斑あり 外面に把手剥離痕あり ミニチュア
第７１図	15	P141	土師器	鉢	4.7	3.0	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・D	良	黄橙色	10YR 8/6 ～ 8/8	黄橙色 明黄褐色	10YR8/6 10YR7/6	外面に黒斑あり ミニチュア
第７１図	16	P530	土師器	鉢	-	(3.2)	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・D	良	浅黄橙色	10YR8/4	浅黄橙色	10YR8/4	ミニチュア
第７１図	17	P574	土師器	鉢	-	(2.1)	-	-	ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・D	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	ミニチュア
第７１図	18	P100	土師器	壺	-	(4.1)	-	-	ナデ	ハケ目	A・C・E	良	灰白色	10YR8/2	灰白色	10YR8/2	外面帯状に黒斑あり ミニチュア
第７１図	19	P83	土師器	坏	(14.0)	(4.6)	-	-	ミガキ・摩耗のため調整不明	ナデ・摩耗のため調整不明	C・D	良	橙色	5YR7/6	橙色	5YR7/6	
第７１図	20	P83	土師器	坏	(12.4)	(4.0)	-	-	ミガキ・摩耗のため調整不明	ミガキ・摩耗のため調整不明	C	良	にぶい橙色	7.5YR6/4	にぶい橙色	7.5YR6/4	外面底部付近に黒斑あり
第７１図	21	P98	土師器	坏	-	(5.0)	-	-	ナデ・摩耗のため調整不明	ナデ・摩耗のため調整不明	C・D・E	良	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	
第７１図	22	P692	土師器	坏	(10.6)	(3.6)	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ・ナデ	A・C・D・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/2	にぶい黄橙色	10YR7/2	外面底部付近に黒斑あり
第７１図	23	P651	土師器	坏	(11.5)	2.5	-	-	ヨコナデ・ナデ・ミガキ	ヨコナデ・指オサエ・ナデ	A・C	良	浅黄橙色	10YR8/3	浅黄橙色	10YR8/3	内面にスス付着 内面口縁～外面胴部まで黒斑あり
第７１図	24	P361	土師器	坏	-	(4.1)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	C・D	良	灰黄褐色	10YR5/2	褐灰色	10YR4/1	外面底部にスス付着
第７１図	25	P412	土師器	台付坏	-	(2.1)	-	-	ナデ	ヨコナデ	A・C・E	良	黒色	10YR2/1	黒色	10YR2/1	

第２４表　出土土器観察表 13

図版番号	№	出土遺構	種別	器種	法量（cm）				調整		胎土	焼成	色調				備考
					口径	器高	底径	胴部径	内面	外面			内面（裏）	Hue	外面（表）	Hue	
第７１図	26	P364	土師器	甑	-	(6.7)	-		ケズリ	ナデ・ケズリ・ハケ目	A・C・E	良	灰黄色	2.5Y6/2	浅黄橙色	10YR8/3	把手のみ
第７１図	27	P146	弥生土器	甕	(24.0)	(18.0)	-	(26.3)	ハケ目・ナデ	ヨコナデ・ハケ目	A・D・E・G	良	灰白色	10YR8/2	にぶい黄橙色	10YR7/2	外面にスス付着
第７１図	28	P541	弥生土器	壺	-	(4.4)	-	-	ハケ目後ナデ	タタキ・ナデ	A・D・E	良	褐灰色	10YR5/1	灰白色	10YR7/1	
第７１図	29	P50	土師器	皿	2.20	1.90	0.70	-			A	良	にぶい橙色	Hue .5YR7/4	にぶい橙色	Hue 5YR7/4	内面赤色顔料 ミニチュア
第７２図	1	検出	須恵器	坏蓋	12.8	4.1	3.7	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ケズリ	A・B・C・E	良	青灰色	5B 5/1 ～ 6/1	灰色 灰白色	N6/ N7/	Ⅱ型式２段階（中村編年）
第７２図	2	検出	須恵器	坏身	(12.2)	(2.9)	-	-	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラケズリ	C・E	良	灰白色	N7/	灰白色	N7/	
第７２図	3	検出	須恵器	坏身	(12.0)	(4.2)	-	-	回転ナデ	回転ナデ	C・E	良	青灰色	5PB 5/1 ～ 6/1	明青灰色 青灰色	5PB7/1 5PB6/1	Ⅱ型式２段階？（中村編年）
第７２図	4	検出	須恵器	高台付碗	-	(1.1)	(8.6)	-	回転ナデ	回転ナデ	E・H	良	灰色	5Y5/1	灰色	5Y5/1	
第７２図	5	検出	須恵器	台付鉢	-	(9.6)	(2.0)	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	E・F	良	灰色	N6/	灰色	N6/	外面底部にヘラ記号あり 打ち欠き
第７２図	6	検出	須恵器	壺	-	(3.9)	(10.4)	-	回転ナデ・ナデ	回転ナデ	F	良	灰色	N6/	灰色	7.5Y5/1	外面に自然釉
第７２図	7	検出	土師器	甕	(12.2)	(4.9)	-	-	ヘラミガキ・工具ナデ（ヘラケズリ）	ヘラミガキ・ハケ目	A・C・E	良	黒色	7.5YR2/1	黒色	7.5YR2/1	内外面にスス付着
第７２図	8	検出	土師器	壺	-	(4.3)	(4.9)	(6.9)	ナデ・指オサエ	ナデ・指オサエ	A・C・E	良	浅黄色	2.5Y7/3	にぶい黄橙色	10YR6/4	外面に黒斑あり ミニチュア
第７２図	9	検出	土師器	壺	-	(3.2)	-	-	ナデ	ナデ・指オサエ・ハケ目	A・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
第７２図	10	検出	土師器	高坏	(17.4)	(6.1)	-	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明	A・C・D	やや不良	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	
第７２図	11	検出	土師器	高坏	(28.2)	(7.2)	-	-	摩耗のため調整不明	ヨコナデ・ハケ目	A・C・D	良	にぶい橙色	7.5YR7/3	橙色	5YR6/6	
第７２図	12	検出	土師器	高坏	(27.3)	(6.1)	-	-	摩耗のため調整不明	ヨコナデ・ハケ目	A・C・D・E	良	にぶい橙色	5YR7/3	にぶい橙色	5YR7/4	
第７２図	13	検出	土師器	台付鉢	-	(3.1)	(5.2)	-	摩耗のため調整不明・ナデ	摩耗のため調整不明・指オサエ	A・B・D	良	浅黄橙色	10YR8/4	浅黄橙色	10YR8/4	
第７２図	14	検出	弥生土器	壺	-	(4.5)	(7.6)	-	摩耗のため調整不明	摩耗のため調整不明・ナデ	A・B・E	良	灰白色	5Y7/1	橙色	7.5YR7/6	

法量の単位はｃｍ、（　）は残存と復元を表す
※胎土：A 角閃石、B 石英、C 長石、D 赤色粒子、E 白色粒子、F 黒色粒子、G 雲母、H 砂粒

第２５表　出土土製品・瓦観察表

図版番号	№	出土遺構	器種	法量（ｃｍ）			重さ（ｇ）	材質	備　考
				最大長	最大幅	最大厚			
第８図	39	３堅	模造鏡	7.20	7.70	3.00	-	A・D・E	黒斑あり 調整　指オサエ・ナデ 色調　灰白色　Hue 7.5YR8/2
第１３図	66	４堅	土玉	3.40	3.80	3.80	39.93	A・C	黒斑あり 調整　ナデ 色調　淡黄色　Hue 2.5Y8/3
第１９図	14	７堅	鉄鏃	(3.20)	(3.00)	(0.90)	-	-	
第２８図	1	１掘	土玉	1.70	-	1.50	4.08	B・C・D	両端より穿孔 孔径　0.1 ～ 0.3cm 色調　にぶい黄橙色　Hue 10YR7/3
第４４図	65	１溝	平瓦	3.90	2.80	1.60	-	A・C・E	色調　灰色　Hue N5/　（割れ口色調　灰色　Hue 5Y6/1）
第４９図	107	２溝	土玉？	4.10	1.35	1.00	4.85	A・C	調整　指オサエ・ナデ 色調　黒褐色　Hue 7.5YR3/1
第４９図	108	２溝	紡錘車	(6.30)	7.50	1.10	-	A・D・E・H	黒斑あり 調整　指オサエ・ナデ 色調　浅黄橙色　Hue 10YR8/3
第５６図	1	５溝	小玉	(1.30)	(1.80)	-	(2.91)	硬玉	両端より穿孔 孔径 (0.4 ～ 0.8cm)
第２８図	2	１堀	土製勾玉	5.50	2.80	1.50	15.82	A・C・D	黒斑あり 調整　シボリ痕・ナデ 色調　浅黄橙色　Hue 10YR8/3
第７１図	30	P248	土錘	9.40	3.00	2.50	68.70	A・C・D・E	一部スス付着 黒斑あり 調整　ナデ 色調　灰白色　Hue 10YR8/2
第７２図	15	撹乱	模造鏡	5.40	5.10	1.80	-	A・C・E	調整　ナデ・ケズリ 色調　橙色　Hue 5YR6/6

法量の単位はｃｍ、（　）は残存、もしくは復元を表す
※胎土：A 角閃石、B 石英、C 長石、D 赤色粒子、E 白色粒子、F 黒色粒子、G 雲母、H 砂粒

第２６表　出土石製品観察表

図版番号	№.	出土遺構	器種	法量（ｃｍ）			重さ（ｇ）	材質	備　考
				最大長	最大幅	最大厚			
第７３図	1	２堅	石鏃	(2.45)	(1.50)	0.40	(1.33)	サヌカイト	
第７３図	2	６溝	石鏃	1.80	(1.55)	0.30	(0.74)	サヌカイト	
第７３図	3	４溝	尖頭器	(4.50)	(1.85)	0.85	(6.72)	安山岩	
第７３図	4	２溝	石匙	3.75	2.45	0.80	6.83	安山岩	
第７３図	5	１溝	石匙	(2.55)	(1.60)	0.60	(1.50)	サヌカイト	
第７３図	6	１溝	石匙	2.90	(3.70)	0.60	6.11	安山岩	
第７３図	7	１溝	削器	2.40	4.05	0.85	8.25	サヌカイト	
第７３図	8	１溝	削器	7.75	4.75	1.05	40.70	サヌカイト	鉄分付着
第７３図	9	２溝	削器	2.85	3.20	0.85	7.06	安山岩	
第７３図	10	４溝	削器	(4.10)	(2.10)	0.45	(3.10)	粘板岩	
第７３図	11	１溝	剥片	2.35	1.55	0.60	1.68	黒曜石	縦長剥片
第７３図	12	２溝	剥片	2.80	0.95	0.40	1.14	黒曜石	縦長剥片
第７３図	13	２溝	剥片	1.75	1.00	0.20	0.26	黒曜石	縦長剥片
第７３図	14	２堅	剥片	2.25	0.85	0.40	0.56	黒曜石	縦長剥片
第７３図	15	９堅	剥片	2.35	1.25	0.45	1.17	黒曜石	縦長剥片
第７３図	16	11 堅	剥片	2.85	1.65	0.90	2.86	黒曜石	縦長剥片
第７３図	17	４堅	剥片	2.45	1.55	0.40	1.05	黒曜石	
第７３図	18	P181	剥片	2.40	1.35	0.35	1.05	黒曜石	縦長剥片
第７３図	19	P533	剥片	2.85	1.35	0.65	1.64	黒曜石	縦長剥片
第７３図	20	５堅	剥片	3.45	1.25	0.75	2.75	黒曜石	縦長剥片
第７４図	21	１溝	剥片	2.95	1.35	0.30	1.55	安山岩	縦長剥片
第７４図	22	６堅	剥片	3.35	1.50	0.60	1.84	サヌカイト	縦長剥片
第７４図	23	７堅	剥片	3.15	1.80	0.30	20.30	片岩？	
第７４図	24	１溝	打製石斧	(8.80)	(7.65)	(1.75)	(126.60)	安山岩	全面摩耗のため剥離不明瞭
第７４図	25	１溝	打製石斧	(14.35)	8.80	1.90	(353.50)	安山岩	
第７４図	26	P244	打製石斧	11.20	5.30	1.60	104.70	片岩	
第７５図	27	P613	打製石斧	13.85	7.05	1.70	230.00	片岩	
第７５図	28	P349	打製石斧	(7.60)	7.95	1.70	(141.40)	砂岩	
第７５図	29	２溝	磨製石斧	10.95	5.60	3.60	414.90	安山岩	敲石に転用
第７６図	30	８溝	磨製石斧	(17.30)	(6.20)	3.00	(470.00)	蛇紋岩	
第７６図	31	５溝	磨製石斧	(10.10)	6.40	3.00	(344.20)	輝緑凝灰岩？	磨痕不明
第７６図	32	17 土坑	磨製石斧	(5.50)	(3.80)	0.90	(20.10)	砂岩？	扁平片刃石斧　凝灰岩の可能性あり
第７７図	33	１溝	砥石	11.00	6.90	7.30	1111.00	安山岩	
第７７図	34	１溝	砥石	(5.25)	(5.10)	3.70	(75.10)	泥岩	
第７７図	35	２溝	砥石	9.70	4.60	2.80	206.80	片岩	石斧未製品転用か
第７８図	36	８溝	砥石	9.15	5.10	2.70	101.10	砂岩	
第７８図	37	P267	砥石	11.05	6.10	2.70	260.90	片岩	
第７８図	38	８溝	石包丁	(4.80)	(7.05)	0.85	(39.00)	片岩	
第７８図	39	８溝	石包丁？	5.40	6.55	0.90	30.70	サヌカイト	
第７９図	40	７堅	石皿	24.30	17.90	5.40	3580.00	安山岩	

法量の単位はｃｍ、（　）は残存、もしくは復元を表す

第２７表　出土木製品観察表

図版番号	№.	出土遺構	器種	法量（ｃｍ）			重さ（ｇ）	材質	備　考
				最大長	最大幅	最大厚			
第８０図	1	８溝	容器（刳りもの）	(32.00)	(5.30)	-	-	-	コナラ属　アカガシ亜族 横木取り
第８０図	2	８溝	容器（刳りもの）	(35.40)	(7.20)	-	-	-	サクラ属 横木取り
第８０図	3	８溝	垂木	(9.50)	(4.30)	(2.80)	-	-	サクラ属 004 と同一個体
第８０図	4	８溝	垂木	(15.10)	(3.60)	(3.40)	-	-	サクラ属 003 と同一個体
第８０図	5	８溝	構造材	199.60	3.6 ～ 5.8	-	-	-	イヌガヤ 側面一部面取り 両端加工
第８０図	6	８溝	柄？	(20.20)	(3.20)	(2.70)	-	-	イヌガヤ 芯持ち丸木 側面面取り
第８０図	7	８溝	残材	12.00	5.90	4.20	-	-	コナラ属　アカガシ亜族 両端加工 片側伐採痕？
第８０図	8	１溝	不明未製品	(17.70)	(4.70)	(1.50)	-	-	モミ属 板目

法量の単位はｃｍ、（　）は残存、もしくは復元を表す

調査区空中写真（東から）

調査区空中写真（南から）

奥が平田遺跡

調査区全景（上が北）

調査区北側発掘状況（東から）

調査区中央発掘状況（西から）

調査区北側発掘状況（西から）

写真図版４

①　1 号竪穴建物発掘状況（南から）

②　2 号竪穴建物発掘状況（南から）

③　3 号竪穴建物発掘状況（南から）

④　3 号竪穴建物土製模造鏡出土状況

⑤　3 号竪穴建物柱木出土状況

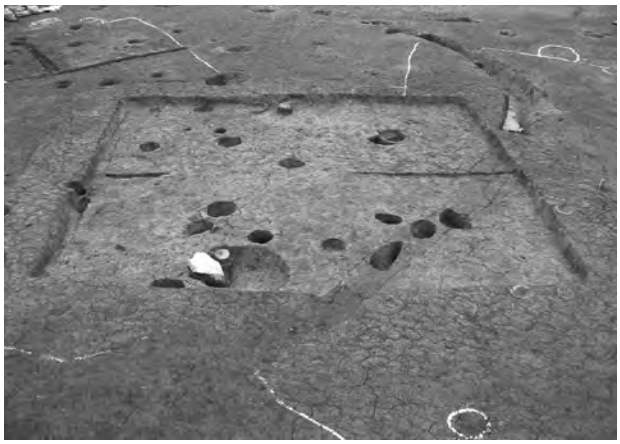
⑥　5 号竪穴建物発掘状況（南から）

⑦　5 号竪穴建物遺物出土状況

⑧　5 号竪穴建物炭化物出土状況

① ４号竪穴建物遺物出土状況（南から）

② ４号竪穴建物遺物出土状況



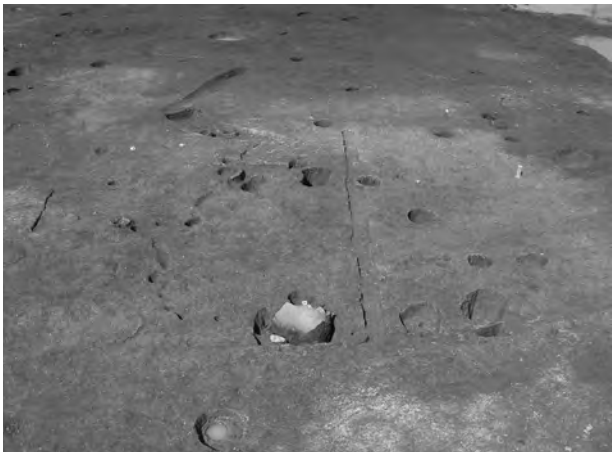
③ ６号竪穴建物発掘状況（東から）

④ ６号竪穴建物発掘状況（北から）

①　７号竪穴建物発掘状況（西から）

②　７号竪穴建物中央炉跡発掘状況（南から）

③　８号竪穴建物発掘状況（南から）



④　９号竪穴建物発掘状況（南から）

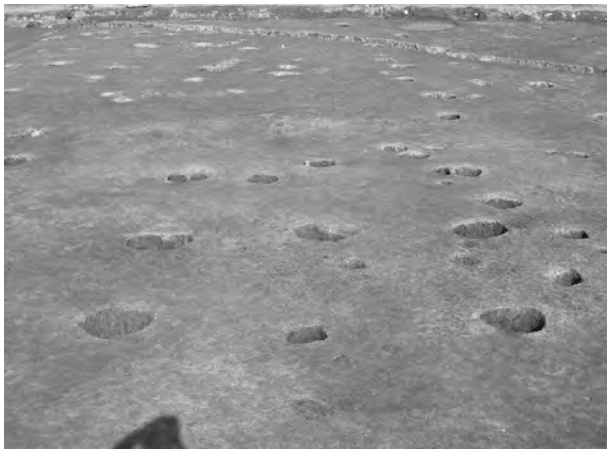
⑤　10 号竪穴建物発掘状況（南から）

⑥　10 号竪穴建物カマド発掘状況（西から）

⑦　11 号竪穴建物発掘状況（南から）

⑧　１号掘立柱建物発掘状況（南から）

① 2 号掘立柱建物発掘状況（南から）



② 3 号掘立柱建物発掘状況（南から）

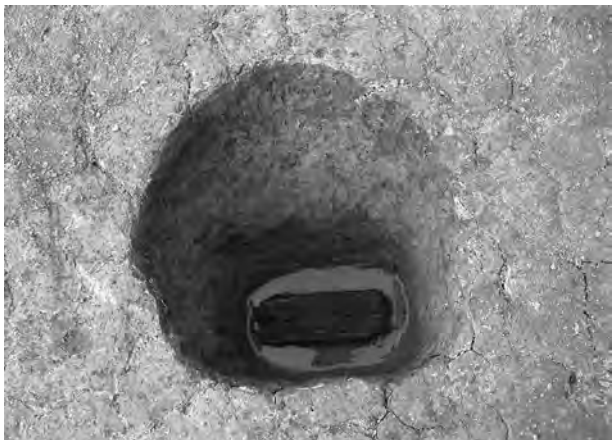
③ 4 号掘立柱建物発掘状況（西から）

④ 5 号掘立柱建物発掘状況（南から）

⑤ 6 号掘立柱建物発掘状況（南から）

⑥ 7 号掘立柱建物発掘状況（南から）

⑦ 8 号掘立柱建物発掘状況（南から）



⑧ 9 号掘立柱建物木板発掘状況

写真図版８

① １号溝状遺構土層断面Ａ（東から）

② １号溝状遺構土層断面Ｂ（東から）

③ １号溝状遺構土層断面Ｃ（南から）

④ １号溝状遺構土層断面Ｃ（近景）

⑤ １号溝状遺構土層断面Ｄ（西から）

⑥ １号溝状遺構土層断面Ｅ（西から）

⑦ １号溝状遺構７区出土遺物発掘状況

⑧ ２号溝状遺構遺物出土状況

①　２号溝状遺構土層断面Ａ（東から）

②　２号溝状遺構土層断面Ｂ（東から）

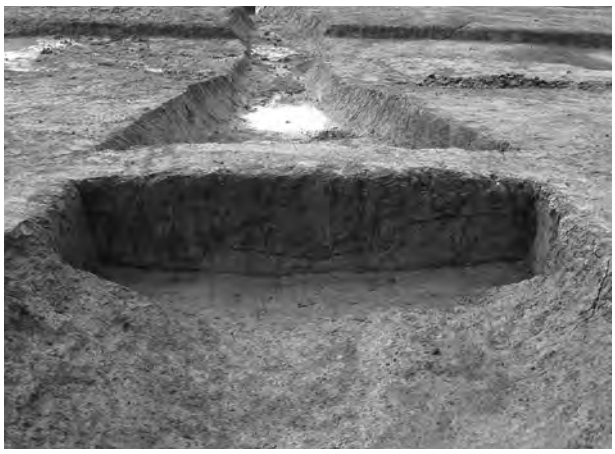
③　３号溝状遺構土層断面（西から）

④　３号溝状遺構遺物出土状況１

⑤　３号溝状遺構遺物出土状況２

⑥　４号溝状遺構土層断面Ａ（西から）

⑦　４号溝状遺構土層断面Ｃ（東から）



⑧　５号溝状遺構土層断面（東から）

①　６号溝状遺構土層断面（東から）

②　７号溝状遺構土層断面（東から）

③　７号溝状遺構遺物出土状況
（東から）

④　８号溝状遺構サブトレンチ１
周辺発掘状況（北から）

① 8 号溝状遺構サブトレンチ 2
遺物出土状況（北から）

② 8 号溝状遺構サブトレンチ 1
遺物出土状況（北から）

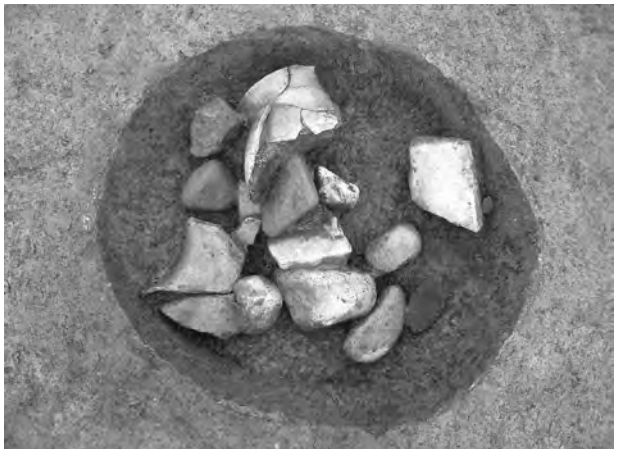
③ 8 号溝状遺構サブトレンチ 2
遺物出土状況（南から）

① ８号溝状遺構サブトレンチ２
遺物出土状況（近景）

③ ８号溝状遺構サブトレンチ１
土層断面（南から）

② ８号溝状遺構サブトレンチ２
土層断面（南から）

① 1 号土坑発掘状況（東から）



② 18 号土坑発掘状況

③ P7 遺物出土状況

④ P146 遺物出土状況

⑤ P310 遺物出土状況

⑥ P630 完掘状況

5-1

7-5

7-10

7-1

7-6

7-11

7-2

7-12

7-7

7-13

7-3

7-8

7-14

7-4

7-9

7-15

7-16

9-4

9-11

7-17

9-5

9-15

7-18 上

9-7

9-16

7-18

9-8

9-17

9-1

9-9

10-19

9-3

9-10

10-21

10-25

10-32

10-39 表

10-26

10-33

10-39 裏

10-27

10-35

12-1

10-28

10-36

12-2

10-29

10-37

10-30

10-38

12-3

12-4

12-12

13-19

12-5

12-13

13-20

12-6

12-14

13-21

12-7

12-15

13-22

12-10

12-17

13-23

12-11

13-18

13-24

13-25

13-35

14-67 上

13-26

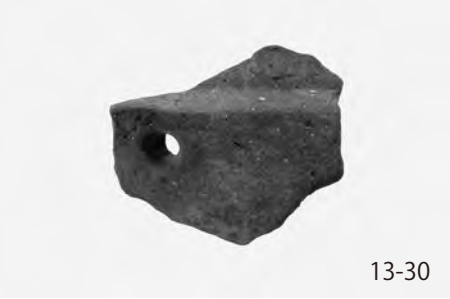
13-36

14-67

13-27

13-38

16-1


13-30

13-39

16-2

13-32

13-41

16-3

13-34

13-64

16-4

16-5

19-1

19-7 上

16-6

19-2

19-7

16-7

19-3

19-8

16-8

19-4

19-9

16-9

19-5

20-1

16-10

19-6

20-2

20-3

20-9

22-2

20-4

20-10

24-1

20-5

20-11

24-2

20-6

20-12

26-1

20-7

20-13

29-1

20-8

22-1

29-2

33-1

33-2

41-8

41-13

41-1

41-8 下

41-16

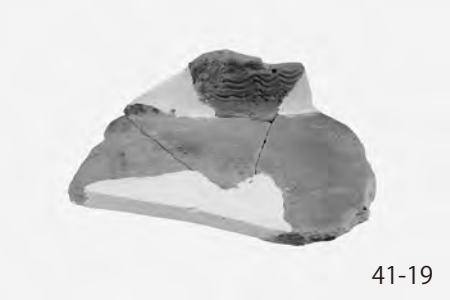
41-2

41-9

41-17

41-3

41-10


41-19

41-4

41-11

41-20

41-6

41-12

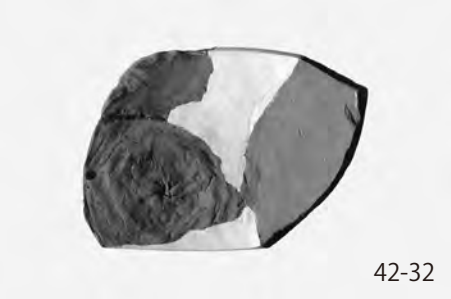
41-21

41-22

42-31

43-39

41-23


42-32

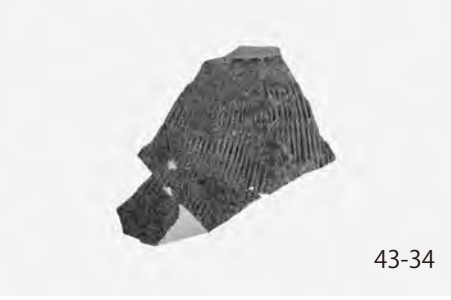
44-41

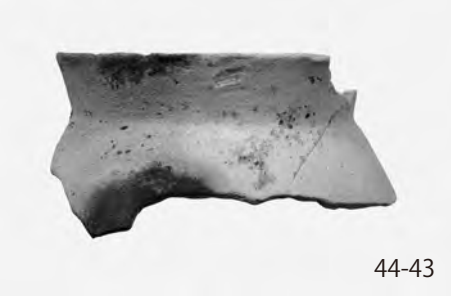
41-24

43-33

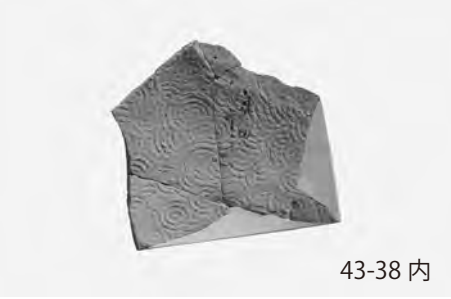
44-42

41-28


43-34

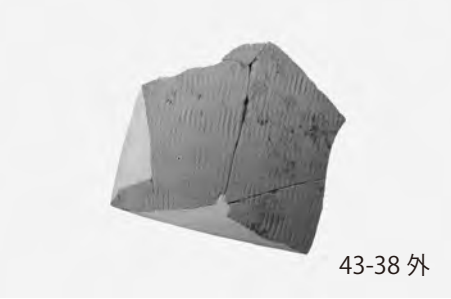

44-43

42-29


43-38 内

44-44

42-30


43-38 外

44-46

44-47

44-53

44-63

44-48

44-54

44-64

44-49

44-60

46-1

44-50

46-2

44-51

44-61

44-52

44-62

46-3

46-4

46-11

47-17

46-5

46-12

47-18

46-6

47-13

47-19

46-7

47-14

47-20

46-8

47-15

47-21

46-10

47-16

47-22

47-23

47-29

47-35

47-24

47-30

47-37

47-25

47-31

47-38

47-26

47-32

47-39

47-27

47-33

47-40

47-28

47-34

47-42

47-43

47-51

47-60

47-44

47-52

47-61

47-45

47-56

47-62

47-46

47-57

47-63

47-48

47-58

49-65

47-50

47-59

49-66

49-67

49-88

50-95

49-68

49-89

50-97

49-69

49-90

50-101

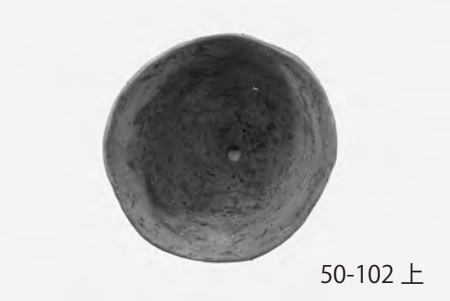
49-71

49-91

50-101 下

49-79

49-92


50-102 上

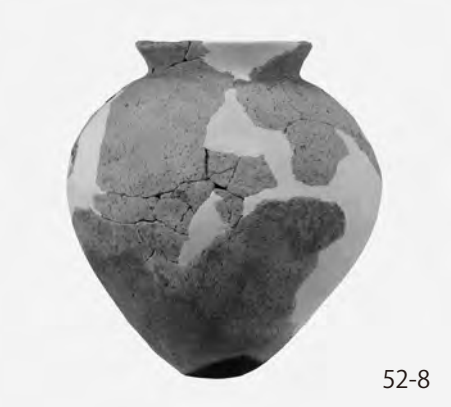
49-87

49-93

50-102

50-103

50-108


52-8

50-104 内

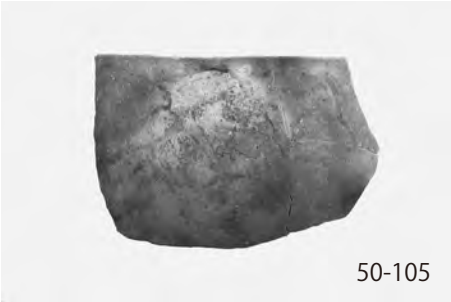
52-1

52-9

50-104 外

52-2

52-10


50-105

52-4

53-12

50-106

52-5

53-13

50-107

52-6

53-14

53-15

53-16

53-17

53-18

53-19

55-2

57-1

59-1

59-2

59-3

59-4

59-4 下

59-5

59-6

59-7

59-8

59-9

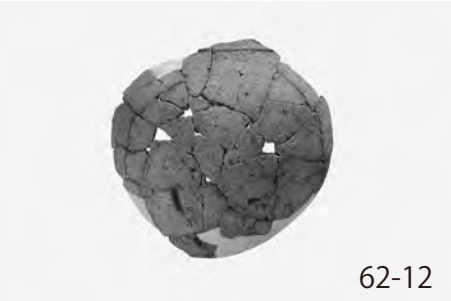
61-1

61-2

62-11

62-17

61-3


62-12

62-18

61-6

62-13

66-1

61-7

62-14

66-2

61-9

62-15

66-3

61-10

62-16

66-4

66-5

66-11

66-18

66-6

66-12

66-7

66-13

66-19

66-8

66-14

66-20

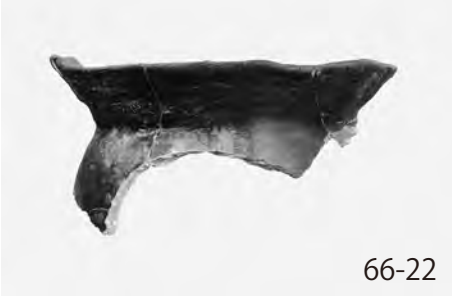
66-9

66-15

66-21

66-10

66-17


66-22

66-23

67-30

67-42

66-24

67-31

67-43

66-25

67-32

67-44

66-26

67-33

67-45

67-28

67-40

67-46

67-29

67-41

67-47

67-48

71-2

71-10

67-50

71-3

71-11

67-50 下

71-6

71-12

67-52

71-7

71-13

67-53

71-8

71-14

67-54

71-9

71-15

72-5

72-12

71-16

72-6

72-13

72-1

72-7

72-14

72-2

72-8

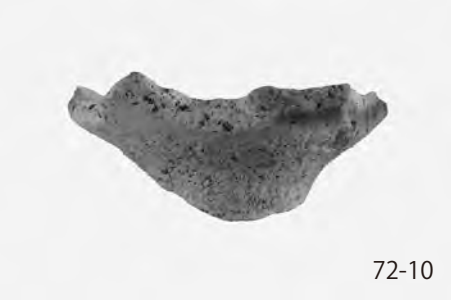
72-16

72-3

72-9

72-17

72-4


72-10

72-19

72-20

72-28

73-5

72-21

72-29

73-5 下

72-23

72-30

73-6

72-24

73-1

73-8

72-25

73-2

73-9

72-27

73-3

73-10

73-11

73-12

73-13

73-15 表

73-15 裏

74-1

74-3

74-4

74-8

75-24

76-27

76-29

77-30

77-31

77-34

79-36

79-37

79-38

81-1

81-2

81-3

81-4

81-5

81-6

81-7

81-8

附編　「朝日の遺跡」の自然科学分析

今回報告する自然科学分析は、平成 24・25 年度に報告した「朝日の遺跡Ⅰ・Ⅱ」の追加報告である。諸般の事情で当該遺跡の報告書に掲載できなかった為、今回まとめて報告する。報告する遺跡の概要は以下のとおりである。詳細については、各報告書を参考にしていただきたい。

【平田遺跡】

平成 23 年度に調査が行われた。調査面積は 2,749㎡で二串川右岸、標高約 80m の沖積地に所在する。調査では、弥生時代後期、古墳時代中期の竪穴建物がそれぞれ 2 軒前後検出されており、小規模であるが集落の存在が確認されている。また、7 世紀から 8 世紀代の掘立柱建物が 5 棟検出され、これらは軸方向をそろえて配置されており、当該期の建物構成を考える上で重要な資料と考えられる。このほかに市内での出土例が少ない 10 世紀代の遺物が出土している。今回報告する自然科学分析は、この掘立柱建物より出土した柱材を対象としている。

【本村遺跡 5 次調査】

平成 24 年度に調査が行われた。調査面積は 2,498㎡で吹上原台地と辻原台地の裾部から谷部にかけての標高約 80 mの沖積地に所在する。調査では、古墳時代後期の竪穴建物が 4 軒検出されている。このほか、竪穴建物を切る形で古代の溝状遺構が検出されている。水田に伴う水路と考えられ、古墳時代の集落を古代に入って水田として活用する土地利用の変遷を追うことが出来、当時の土地利用を考える上で一つの成果が挙がったといえる。今回の報告対象は、竪穴建物に残存していた柱材である。

（1）平田遺跡出土木材の樹種同定

株式会社　パレオ・ラボ

1. はじめに

日田市の二串川右岸の沖積面に所在する平田遺跡から出土した木材および炭化材について、樹種同定を行った。

2. 試料と方法

平田遺跡の試料は、奈良時代の 2 号掘立柱建物から出土した柱材 10 点である。

これらの試料から、剃刀を用いて 3 断面（横断面・接線断面・放射断面）の切片を採取し、ガムクロラールで封入してプレパラートを作製した。これを光学顕微鏡で観察･同定し､写真撮影を行った。プレパラートは(株)パレオ・ラボに保管されている。

3. 結果

平田遺跡では、広葉樹のネムノキとキハダの 2 分類群が確認された。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、光学顕微鏡写真および走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

第２８表　樹種構成

分類群	計
ネムノキ属	1
キハダ	9
計	10

(1) ネムノキ属　Albizia　マメ科　図版 4　18a-18c（平田 No.10）

大型で丸い道管が年輪のはじめに数列並び、晩材に移行するに従って

徐々に径を減ずる半環孔材である。軸方向柔組織は周囲状で、晩材部では翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は１～３列幅で、すべて平伏細胞からなる同性である。

ネムノキは暖帯から熱帯に分布する落葉高木ある。材はやや軽軟で割裂性は大きく、切削加工は容易であるが、耐朽性や保存性は低い。

（2）キハダ　Phellodendron amurense Pupr.　ミカン科　図版４　19a-19c（平田 No.6）、20a-20c（平田 No.8）

大型の道管が早材部に配列し、晩材部ではごく小型で薄壁の小道管が集団をなして帯状～斜線状に配列する環孔材である。道管の穿孔は単一である。放射組織はほぼ同性で、１～５列幅のきれいな紡錘形となる。

キハダは温帯に分布する落葉高木である。材はやや軽軟で加工容易だが、水湿に強い。

4. 考察

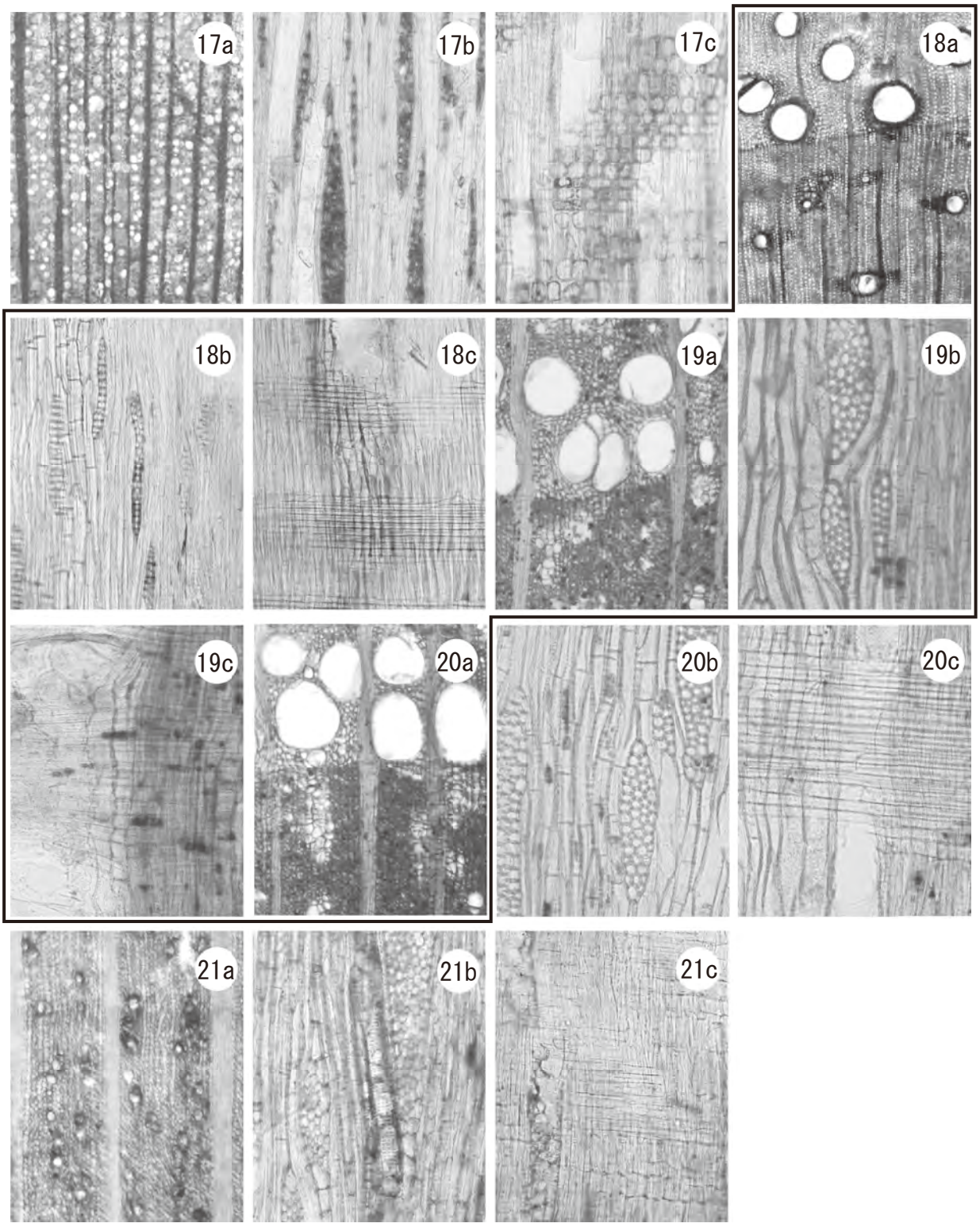
平田遺跡の試料は、すべて２号掘立柱建物から出土した柱材である。P3 と P5、P7、P11、P12、P13、P14 から出土した割材および半割材はキハダ、一括の割材はネムノキ属であった。キハダの材質は、やや軽軟であまり強くないが、水湿に対する抵抗力があるため、近現代でも建築材の土台などに利用される（平井，1996）。ネムノキ属の材質は、やや軽軟で耐朽性や保存性は低い。用途は一般に器具材や薪炭材である。対馬では屋根材に利用されていたという記録があるが（平井，1996）、あまり建築材に利用される樹種ではない。一括で出土したネムノキ属以外は、すべてキハダが用いられており、柱材に使用する樹種を統一していた可能性がある。

引用文献

平井信二（1996）木の大百科．394p，朝倉書店.

第２９表　平田遺跡の樹種同定結果

No.	遺構番号①	遺構番号②	樹種	木取り	備考
1	２号掘立柱建物	P3	キハダ	割材	劣化
2	２号掘立柱建物	P5 ①	キハダ	割材	劣化
3	２号掘立柱建物	P5 ②	キハダ	割材	細かい破片
4	２号掘立柱建物	P7	キハダ	芯なし、みかん割り	劣化
5	２号掘立柱建物	P11	キハダ	割材	劣化（芯なしのみかん割りか）
6	２号掘立柱建物	P12 ①	キハダ	割材	劣化
7	２号掘立柱建物	P12 ②	キハダ	割材	劣化
8	２号掘立柱建物	P13	キハダ	割材	劣化（芯なしのみかん割り）
9	２号掘立柱建物	P14	キハダ	半割	劣化、底部に一部加工痕残る
10	２号掘立柱建物	一括	ネムノキ属	割材	劣化



図版9　平田遺跡出土木材の光学顕微鏡写真（1）※枠で囲ったものが平田遺跡の資料

17a-17c.サクラ属（花ノ木No.3）、18a-18c.ネムノキ属（平田No.10）、19a-19c.キハダ（平田No.6）、20a-20c.キハダ（HRT8）、21a-21c.モチノキ属（花ノ木No.22）

a:横断面（スケール=250μm）、b:接線断面（スケール=100μm）、c:放射断面（スケール=100μm）

（2）本村遺跡５次調査出土木材の樹種同定及び年代測定

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．樹種同定

１．はじめに

木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

本報告では、本村遺跡第５次発掘調査より出土した木材に対して、木材解剖学的手法を用いて樹種同定を行い、当時の木材利用と森林植生について検討する。

２．試料と方法

試料は、本村遺跡第５次調査で出土した１号竪穴建物より採取された木材片２点である。試料の詳細は結果表に記す。

方法は次のとおりである。まず、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって 40 ～ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

３．結果

表１４に結果を示し、各断面の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

第３０表　本村遺跡５次調査における樹種同定結果

試料	結果（学名／和名）	
１号竪穴建物　Ｐ１	Cleyera japonica Thunb.	サカキ
１号竪穴建物　Ｐ２	Cleyera japonica Thunb.	サカキ

・サカキ　Cleyera japonica Thunb.　ツバキ科　写真１・２

横断面：小型の道管が、単独ないし２個複合して、密に散在する散孔材であるが単独のものが多い。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く 40 を超える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ８～ 10 m、径 20 ～ 30cm である。材は強靭、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

４．考察

同定の結果、本村遺跡第５次調査の木材２点は、いずれもサカキであった。サカキは常緑の高木であり、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の構成要素である。木材としては、強靭、堅硬な材と言える。当時遺跡及び周辺に生育し、もたらされたとみなされよう。

Ⅱ．放射性炭素年代測定

１．はじめに

放射性炭素年代測定は､呼吸作用や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（14 C）の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の 14 C濃度は変動しており、年代値の算出に影響を及ぼしていることから、年輪年代学などの成果を利用した較正曲線により 14 C年代から暦年代に較正する必要がある。

ここでは、本村遺跡第５次発掘調査で出土した１号竪穴建物の構築年代を検討する目的で、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。測定にあたっては、米国の Beta Analytic Inc. , の協力を得た。

２．試料と方法

測定試料は、本村遺跡第５次調査で出土した１号竪穴建物より採取された木材片２点である。

放射性炭素年代測定の手順は以下のとおりである。

まず、試料に二次的に混入した有機物を取り除くために、以下の前処理を行った。

１）蒸留水中で細かく粉砕後、超音波および煮沸により洗浄

２）塩酸（HCl）により炭酸塩を除去後、水酸化ナトリウム（NaOH）により二次的に混入した有機酸を除去

３）再び塩酸（HCl）で洗浄後、アルカリによって中和

４）定温乾燥機内で 80℃で乾燥

前処理後、試料中の炭素を燃焼して二酸化炭素に変え、これを真空ライン内で液体窒素、ドライアイス、メタノール、ｎ-ペンタンを用いて精製し、高純度の二酸化炭素を回収した。こうして得られた二酸化炭素を鉄触媒による水素還元法でグラファイト粉末とし、アルミニウム製のターゲットホルダーに入れてプレス機で圧入しグラファイトターゲットを作製した。これらのターゲットをタンデム加速器質量分析計のイオン源にセットして測定を行った。測定試料と方法を表１５にまとめた。

第３１表　測定試料及び処理

試料名	出土地点・層位	種類	前処理・調整	測定法
№1	1 号竪穴建物 P1	木材（サカキ）	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ
№2	1 号竪穴建物 P2	木材（サカキ）	超音波洗浄，酸－アルカリ－酸処理	ＡＭＳ

※ AMS（Accelerator Mass Spectrometry）は加速器質量分析法

３．結果

年代測定の結果を表１６に示す。

１）14 C年代値

試料の 14 C /12 C比から、単純に現在（AD1950 年）から何年前かを計算した値。14 Cの半減期は国際的慣例により Libby の 5568 年を使用した（実際の半減期は 5730 年）。

２）δ 13 C測定値

試料の測定 14 C /12 C比を補正するための炭素安定同位体比（13 C /12 C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正 14 C年代値

試料の炭素安定同位体比（13 C /12 C）を測定して試料の炭素の同位体分別を知り、14 C /12 Cの測定値

に補正値を加えた上で算出した年代。試料のδ13C値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代である。

なお、δ13C値は加速器質量分析計によって自動的に測定・計算される。

第３２表　測定結果

試料名	測定№	未補正 ^{14}C年代[1]	δ ^{13}C[2]	補正 ^{14}C年代[3]	暦年代（西暦）[4]	
	(Beta-)	(年BP)	(‰)	(年BP)		
№1	367785	1510 ± 30	-27.8	1460 ± 30	交点：cal	AD 600
					1σ：cal	AD 580 ～ 640
					2σ：cal	AD 550 ～ 650
№2	367786	1460 ± 30	-28.3	1410 ± 30	交点：cal	AD 650
					1σ：cal	AD 620 ～ 650
					2σ：cal	AD 600 ～ 660

BP：Before Physics（Present），AD：紀元

４）暦年代 Calendar Age

14C年代値を実際の年代値（暦年代）に近づけるには、過去の宇宙線強度の変動などによる大気中14C濃度の変動および14Cの半減期の違いを較正する必要がある。具体的には、年代既知の樹木年輪の14Cの詳細な測定値、サンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と14C年代の比較、湖の縞状堆積物の年代測定により補正曲線を作成し、暦年代を算出する。14C年代の暦年較正には、Beta Analytic社オリジナルプログラムであるBETACAL09（較正曲線データ：IntCal09）を使用した。暦年代の交点とは、補正14C年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（68％確率）と２σ（95％確率）は、補正14C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点や複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

４．所見

本村遺跡第５次発掘調査で検出された１号竪穴建物の構築年代を明らかにする目的で、出土した木材を対象に加速器質量分析法（AMS法）により放射性炭素年代測定を行った。その結果、試料P1は1460 ± 30年BP（２σの暦年代でAD 550 ～ 650年）、試料P2は1410 ± 30年BP（２σの暦年代でAD 600 ～ 660年）の年代値が得られた。

参考文献Ⅰ

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242.

参考文献Ⅱ

Bronk Ramsey C. (1995)Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy,The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2),425-430.

Bronk Ramsey C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

Heaton TJ, Blackwell PG, Buck CE.(2009) A Bayesian approach to the estimation of radiocarbon calibration curves: the IntCal09 methodology. Radiocarbon, 51(4), 1151-1164.

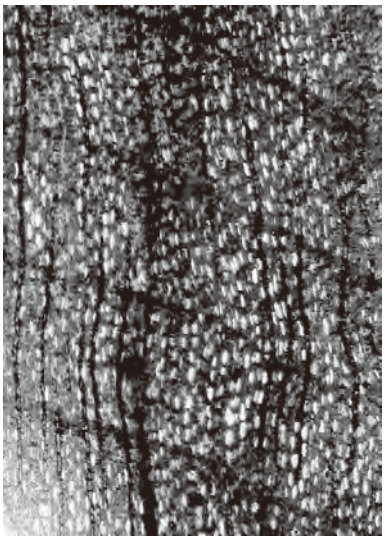
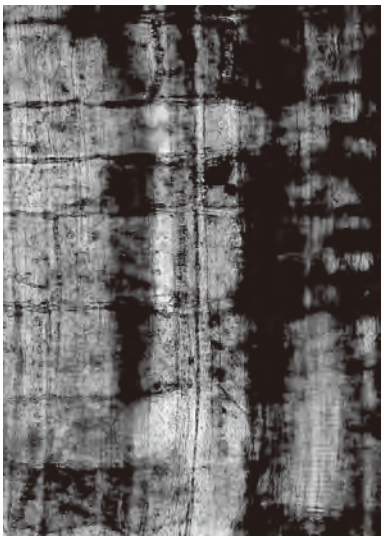
中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1-36.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎 . 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」：3-20, 日本第四紀学会 .

Paula J Reimer et al., (2004) IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

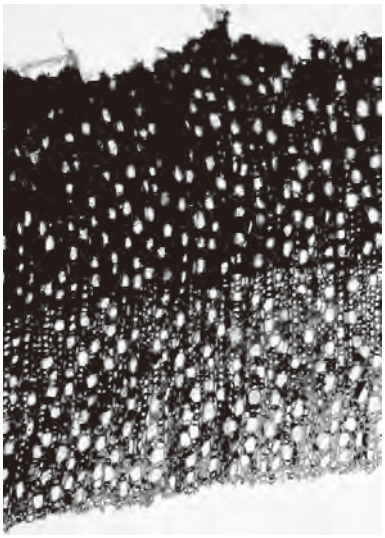
Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1110-1150.

本村遺跡５次調査の木材

横断面 ―――― ： 0.5㎜　放射断面 ―――― ： 0.1㎜　接線断面 ―――― ： 0.2㎜

１．P1　サカキ



横断面 ―――― ： 0.5㎜　放射断面 ―――― ： 0.1㎜　接線断面 ―――― ： 0.2㎜

２．P2　サカキ

報　告　書　抄　録

ふりがな	あさひのいせき3　はなのきいせき1じのちょうさ
書名	朝日の遺跡Ⅲ　花ノ木遺跡1次の調査
副書名	県営経営体育成基盤整備事業朝日地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	（3）
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第116集
編著者名	上原翔平・若杉竜太
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077　大分県日田市南友田町516-1　　0973(24)7171
発行年月日	2015年（平成27年）3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はなきいせき 花ノ木遺跡 じ 1次	おおいたけんひたし 大分県日田市 おおあざおざこ 大字小迫	44204-6	204379	130°54′41″	33°20′29″	2011 0704 ～ 2011 1205	10,723㎡	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
花ノ木遺跡1次	集落	弥生 古墳 古代	竪穴建物11軒 掘立柱建物9棟 溝状遺構7条 土坑18基	弥生土器 土師器・須恵器 石器・木製品	

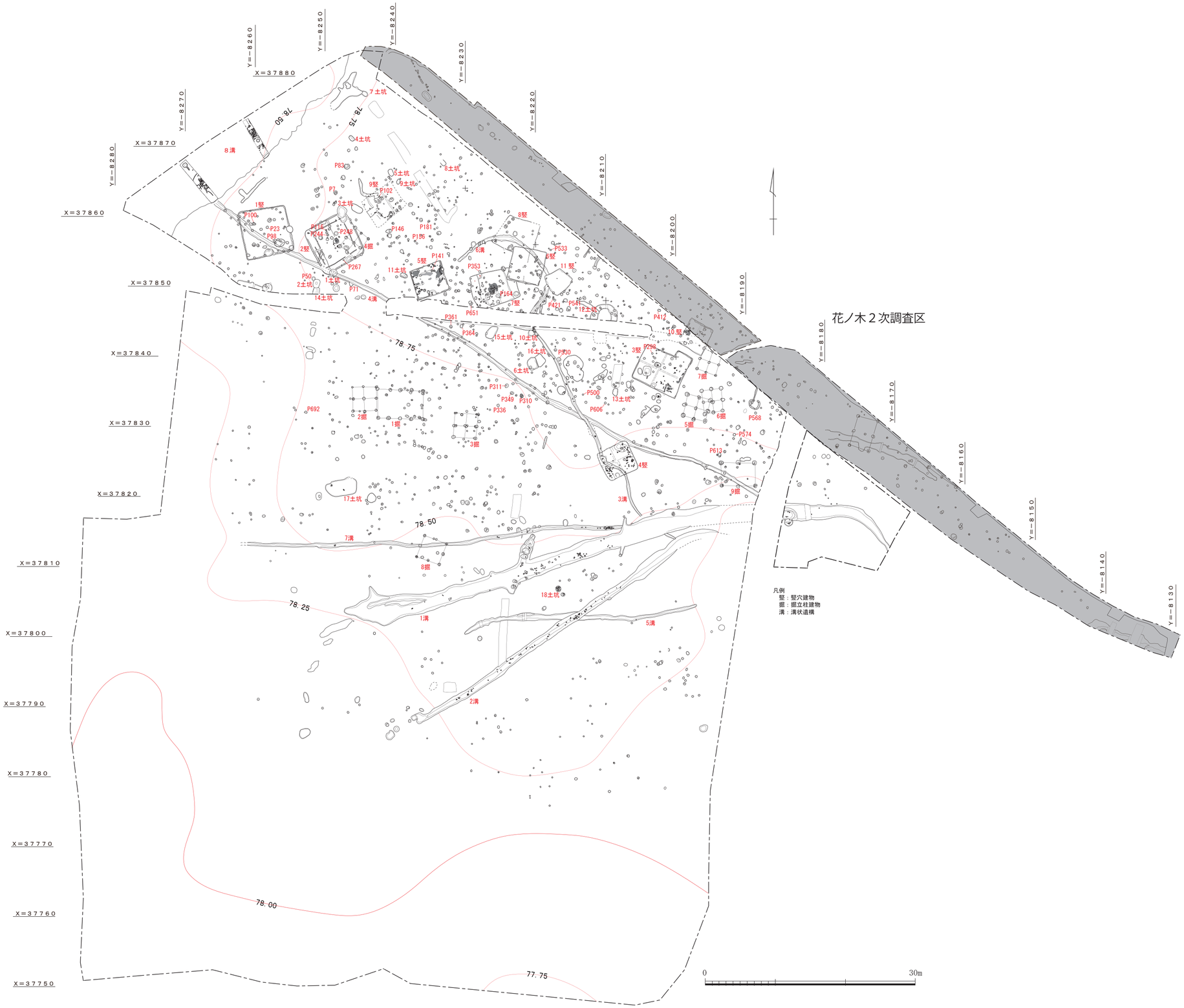
要　約	花ノ木遺跡1次調査地は、日田盆地北部の宮原台地と吹上原台地の谷部、二串川左岸の標高約78mの沖積面に所在する。今回の調査では、谷部の西側入り口に弥生時代後期から古墳時代中期にかけて調査地周辺で水田を営む小規模な集落がつくられていた事がわかった。集落ではミニチュア土器が多量に出土し、祭祀施設の可能性のある竪穴建物が確認されたほか、日田地域のカマド導入期と考えられるカマドが敷設された竪穴建物が確認され、従来の成果を追認することができた。 この他、水口を持つ溝状遺構が複数確認されていることから当集落では水田が営まれていたと想定される。また、明確な時期は不明だが古墳時代後期～古代と想定される掘立柱建物群が確認され、軸の方向から２時期に分けられると考えられる。上記のように、本調査ではこの地域における土地利用やその変遷を考える上で貴重な成果を得ることが出来た。今後は台地周辺との成果とあわせながら検討していく必要がある。

朝日の遺跡Ⅲ

花ノ木遺跡1次の調査

2015年3月31日

編　集　　日田市教育庁文化財保護課
〒877-0077　大分県日田市南友田町516-1
発　行　　日田市教育委員会
〒877-0023　大分県日田市田島2-6-1
印　刷　　山本印刷工業有限会社
〒877-0059　大分県日田市大日町3986-3



附図　花ノ木遺跡調査区遺構配置図（1/400）

日田市